
今 このときを 愛してる

余田史子

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

今 このときを 愛してる

【Nコード】

N1092I

【作者名】

余田史子

【あらすじ】

柴田瑞希33歳OL、独身。代わり映えのない毎日を送っていたが、あるとき、突然の恋に落ちる……。でも、その相手は12歳も年下……。あなたは、愛する人の命があとわずかだと知ったら、どうしますか？愛する人と共に生きることを選択し、今を生き、奇跡を起こす感動ストーリー！。

プロローグ（前書き）

この小説の主人公は、柴田瑞希です。瑞希から見たストーリーになっています。彼氏の圭介から見たストーリーは「愛する君へ」です。良かったら、「愛する君へ」も投稿していますので、同時に楽しんでみてください。

プロローグ

はじめて会ったときから、惹かれていたのかもしれない。

はじめて会ったときから、恋していたのかもしれない。

それとも、運命なのかな？

生まれる前から、会うことを約束してきたんだろうか？

私たちの出会いは、偶然じゃないね。

出会ったことが奇跡って思ったこともあるよ。

でも…

必然だった。当たり前のように出会ったのかもね。

出会うことが、決められていたみたいに…。

今は、そう思う。

だけど、初めて会ったときには、まさか、

こんなにも好きになるなんて、思わなかった。

こんなにも大事な人になるなんて、思わなかったよ。

私の人生を変えちゃった。

私の生き方を変えちゃった。

この世に、こんなにも素晴らしい体験があるってことも、
こんなにも愛しい存在があるってことも教えてくれた人……。

出会えたことに感謝してる。

1 人生の岐路

いきなり、肩をたたかれたのは、1月のお給料日の次の日だった。パソコンにデータを入力していて、夢中だったから、すぐ後ろに部長がいたのも気づかなくて、すごく驚いて、3センチくらいは体が宙に浮いたと思う。

「ひゃっ」

声にならない声を発した。すると部長は小声で、

「あ、驚かせてすまない。ちょっと、あとで時間あるかな？話があるんだけどな」
と言ってきた。

「え？ああ、はい…」

なぜに、部長？課長が声をかけるならわかるけど…。課長の顔を見ると、目が合い、すぐに視線をそらされた。

う…。嫌な予感。

この会社には、もう12年いる。短大を卒業して就職をし、同期はほとんど辞めていき、もう私以外の女性の同期は、総務の桐子しか残っていない。

仲良しグループ6人で会議室で、お弁当を食べていたところが懐かしい。今では、会議室で食べることもできなくなったし、昼は桐子と二人だけで食べているしね…。

今は、女性の新入社員をとらないので、正社員は少ししか残っていない。ほとんどが派遣社員だ。それだけこの会社も、経営難なのか、それが世間でも、当たり前前のようにになっているのか。私が入社したころはまだ、新入社員も多く、活気があったのにな…。

結婚退社していく友達を、何回「おめでとう」と見送ったことが

…。いつか私もって夢見ながらも、とうとう12年になっちゃったよ。もうお局状態で、会社の主になっている。派遣の子達も、私よりも若い子ばかりで、みんなの会話にもついていけないこともあるし…。

5年前の27歳の時、総合職の試験を受けてみないかと、課長に言われたことがある。社内で何人かの女性が、課長などのポジションになり、それなりの成果を挙げ始めたころだ。でも、私は単に、事務職で入っただけのOLで、確かに課長クラスの先輩たちがかつこよくも見えたとし、スーツ姿ではりばり仕事をしている姿が、まぶしくも見えた。

実はそのころ付き合っていた人もいて、総合職なんてなってしまうたら、結婚が遠ざかるのではないかって不安の方が大きかったんだよね。それで、ささと断ってしまった。

その彼とも28歳になって、結婚を焦りだしたら、別れを告げられてしまった。まだまだ、したいことがあつて、結婚は考えられないうて…。2歳年下の彼は、26歳。結婚を考えるには若い年だったのかな…。

ただ、私のことが嫌になったのかな…。そんなこととてもじゃないけど聞けないから、別れようって言葉をそのまま、うのみにして「うん」って答えてしまった。

その後、何日かは呆然としていた。結婚まで考えていたし、だから総合職だってあきらめたし、この人と一緒になるもんだって、疑ってなかったし…。

周りの友達から、
「だから年下はやめなって言ったのに。今度は年上の人にしなよ、ね」

って、言われたっけな。やめろって言われたってさ、付き合ってたさいと言ってきたのは向こうだしさ。3年も付き合ってたし、そりゃ、付き合いだしたころは私も、25歳で、23歳の人と結婚はどうかなって思ったけど…。

でも、彼もあと3年もすれば、結婚考えるんじゃないのかとか、私も30までに結婚できたらいいかなとか、安易だったんだよね…。

29歳になり、30歳までになんとかって、親も焦りだし、見合い話を持ってきた。2回見合いをしたが、2回ともどうにもこうにも、好きになれないというか、生理的に受け付けないというか、だめだったから、丁重にお断りをした。

父の仕事の関係の人だったし、断るのも気が引けたし、もう見合いはやめようって、それから見合いもやめた。

結婚相談所も、どうにも行く気になれず…。変な人紹介されるのも嫌だし、多分そういう場所に偏見持っているのかもしれないけどね。

お見合いパーティみたいなところにも、桐子と一回だけ行ったが、婚期を逃したっていう男性陣がうようよしてただけだった。

「なんで~~~~？いい男っていうのは、どこにいるのよ？」

って、頭にきて、桐子と朝まで飲んで愚痴って終わった。

会社には、なかなかいい男が入社してこない。いい男だとすでに彼女がいたりして、入社してあつという間に結婚してしまう。

同期の男性陣はというと、たったの3人しかなくて、3人ともこれまた、生理的に受け付けない人だったし、取引先はどうかっていうと、おじさんばかりだったし…。

ここ数年、かつこいい人も入ってくるけど、もう年下はこりこりだし、っていうか相手にもされないし…。

昨日は、桐子と夕飯を一緒に食べに行った。給料日だったから、奮発をして。

桐子は、短大卒業と同時に、東京に来た。家は静岡にある。東京に出て働くというのが、長年の夢だったらしいが、夢に見たのと現実の生活は、全然違うよと昨日も嘆いていた。

アパート暮らしなので、家賃やら光熱費を出すと、あまり自由にお金使えないのよと言って、ご飯を食べに行くのは、給料日くらいになっている。そんな貴重な日だったのだ、昨日は…。

「あゝ。ねえ、信じられる？もう32歳よ、私たち。結婚なんて30になるまでしなくていいわよ、って言ってたけど、30過ぎちゃったよ。遊んでから結婚したっていいわよねゝって同期が結婚するたびに言ってたのがさ。どうするよ？瑞希」

「1番に結婚したのは、里枝だったよね。23歳だったつけ。みんなで早すぎだよって言ってたけど、新居遊びに行った後、みんなで羨ましくって、結婚したいゝゝってなったよね」

「で、すぐに赤ちゃんも生まれちゃって、里枝の子供今、何歳？もう小学生よね？」

「桐子と海外旅行に行く度、里枝に羨ましがられたよね。私ももつと遊んでから結婚すればよかったって。あの頃は、そうだよ、そうだよなんて言ってたけど、もうそんなことも言えない年だよ…」

夕飯を食べるときつい、いつも、お酒も一緒に頼んでしまう。

昨日は、焼酎なんて頼んでしまった。飲むと必ず、愚痴を言い合っている。うゝん、この辺からして昔とは違ってるよ…。年齢を感じるなゝゝ。

「瑞希さ、得意先の林さん、どうなってるの？みんなで飲みに行くといつも、駅まで送ってくれたりするんでしょ？」

「林さんねゝゝ。ひとつ上だし、次男らしいし、いいんだけどさ、なんていうのかな、いい人なのよね…ってだけなのよねゝゝ」

「瑞希はね、理想が高すぎるのよ」

「桐子に言われたくないわ。モテモテで、相手ならたくさんいたでしょ？」

「うっ、ん、へんなのにつかまっちゃったからさ。ま、もう、別れたけど」

そう。桐子にはずっと彼がいた。でも相手には妻子がいた。5年以上は付き合ってたんじゃないかな。

「このまんま、ずっとこの会社にいるのかな？転職って年でもないし、ここ辞めたら正社員で雇ってくれるところもないだろうしさ。今さら派遣もね」

「もしかして私たちは、定年までいるんだろうか……」

「やっぱり、結婚考えようか？」

いつも、いつも、こんな話になる。

明日も早いから、そろそろ帰ろうかってことで、9時前にはお店を出た。

飲みすぎると翌日朝起きれないし、辛くなってきた。30歳を過ぎたあたりから、お酒にぐんと弱くなった。それは桐子もだった。

桐子のアパートに泊まりに行つて、朝まで飲むこともあったし、私たちはお酒強かったのに、最近は翌日のことまで考えて、飲むのを控えるようになってきた。年には勝てないな……。

「桐子はさ、いろんな資格持つてるんだから、この会社辞めても、大丈夫なんじゃないの？」

週末じゃないけど、電車の中は混んでいた。

混んでる電車に乗るのも、何年目かな。桐子は新宿から小田急線で下北沢に出る。混んでいたって、すぐにつく。私はその後、何十分も乗る。疲れているときや、お酒を飲んだ日は、帰りの電車が辛い。

こんな思いをいつまで、しなくちゃいけないのかな？

「資格ね…。役に立つかわからないものばかりだよ。お花とか、着付けとかさ。瑞希こそ少しの間、学生るとき留学してたんじゃないの？英語があるじゃない」

「ははは…。一ヶ月だけの留学だよ。全然しゃべれるようにならなかったよ」

「あ、もう着いちゃった。また明日ね。お疲れさん！」

「うん、バイバイ」

桐子は、多彩だ。綺麗だし、彼もすぐに見つかりそうだし、本当に今一人身なのが不思議なくらいだ。

桐子と別れた後、一人で電車に揺られて、窓ガラスに映った自分の顔を眺める。疲れた顔だ。いつの間に目の下にクマができたのかな。しわも増えたし、顔色も悪い。最近は、ファンデーションのりも悪い。

「は～～～」

無意識に、ため息が出る。

重たい気持ちを持ったまま、今日は会社に来た。私の気持ちと同じような曇り空の寒い日、それでも月末はたくさんのデータを入力しなくちゃならなくて、頭空っぽにしてパソコンをうってたんだ。

そんな時にいきなり、声をかけられたから、本当に3センチは浮いたと思う。

部長が声をかけてくることなんて、いまだかつてない。

すぐに、桐子にメールを送った。

<部長が肩をぽんってたたいて、話があるって。これがかの有名な「肩たたき？」>

<瑞希もか。実は私もさっき、部長がきてさ、すぐに応接室で話を

したんだ。今、自主退社したら、退職金が1・5倍になるって。でも、辞めないなら給料も減るし、退職するとき、退職金も半分になっちゃうって。

くやっぱり、そういうことか……。桐子はどうするの？

返事はなかった。

はあ……。気が重いのがいつそう気が重くなった。

そりゃあ、いつまでこの会社にいるんだろうとか、いつそ、辞めちゃおうかとか思ったりもしたけど、こんな形で退社になるとは……。だけど、給料が減ってまでしがみついているのも嫌だ。

かといって、辞めて何をしたらいいというのだろうか。フリーターか。この年で？3月で33歳になるんだよ？

5時半、仕事が終わる時間。部長が私のデスクの横になにげなく立っていた。ああ、話をするんだな……。

「柴田さん、応接室に来てくれるかな？」

「はい」

もう、話の内容はわかっている。ああ、気が重い。胃の奥が、ぎゅって痛む。

応接室のドアを閉め、いすに腰掛けた。

「どう？忙しい？」

いきなり、本題には入りづらいのか……。

「ああ、はい。月末はたくさんのデータを入力しなくちゃならなくて」

「ああ、そうだね。2課は月末で締める取引先が多かったっけね」

私のいる部署は営業2課だ。私は営業の事務をしている。

「もう柴田さん、何年になるの？」

「はい、12年です。今度の4月で、13年目になります」

「そうか、部署も変わらないで、ずっと2課にいるんだっけね？」

「はい」

「じゃあ、柴田さんベテランだ。2課で1番長いんじゃない？2課のことなら何でも知ってるね。そんな柴田さんが辞めたら、2課は大変だとは、思っただけだね」

あ、きたよ。本題だ。

「来期で、大幅に人事異動がある。それに、営業所がなくなるところもある。給料も、夏のボーナスも、かなり下がると思う。この不景気だからね」

「はい…」

「柴田さんも知つてのとおり、今、事務はだいたいが、契約社員だ。それでね。柴田さんは本当にいなくなると惜しい人材だしね、自主退職を他の事務にはお願いしているのだけど、柴田さんは、契約社員ということで、残るって言うのはどうかな？」

「は？」

「つていうのがね、一つの家。これは課長の家だね。課長としては、柴田さんあつての2課だつて思っているようだよ」

「はあ…」

「ただ契約社員になると、まあ、いろいろとね、給料の面、ボーナス、福利厚生とか変わってくるんだけど」

「はあ…」

「僕自身の考えとしては、契約社員でも、このまま正社員として残つたとしても、どちらも似たようなメリット、デメリットがあると思うよ。正社員の方が、安定しているし、少なくなるとはいえ、退職金も出ると思うしね」

「はい」

「ただ、本当のことを言うと、上の考えでは、この辺で、退職してもらいたいってことなんだよ。だから、僕もあまり、正社員に残るのを、大きな声で薦めるわけにはいかないんだ。立場上ね。わかってもらえるかな、そのところ…」

結局はなんだ。何が言いたいんだ。遠回りに辞めてくれってこと？契約社員にもならないでくれと、そういうことを言いたいわけ？首を切ったと思われたくないから、自分はいいい人と思われたいから、こんな遠まわしなことをあれこれ、煮え切らないようなことを言っているのか？

「それでね、柴田さん。本題なんだけど」
「は？」

本題？もう、すっかり本題には入ってるでしょうよ。それとも何か？はつきりと辞めてくれとでも言うんですか？

「柴田さん、結婚の予定とか、その、あるのかな？そういう相手とか…。いや、こんなことを聞くのは、聞きづらいことなんだが…」
「は？は？は？は？は？は？は？は？は？は？」

「もし、いないようなら、どうかな。僕の甥っ子でね、あ、姉のところの長男で今、35歳で独身っていうのがいてね…。医者してるんだよ。小児科で忙しいんだけど、昨年独立してね、まあ、ずっと忙しかったせいもあって、いまだに浮いた話もなくて、姉が誰かい人を紹介してくれないかって…」
「……」

私の顔が、呆けていたんだろう。部長は慌てて、

「あ、返事は今すぐじゃなくてもいいんだよ。それに、もしお付き合っている人がいるなら、遠慮なく断ってくれてかまわない」と付け加えた。

「いえ、あの…。今そういう人はいません」
「そっか…。ああ、課長がね。s社の林氏と付き合っているかもしれないなんて言っていたから、姉には、断られるかもしれないけど、だめもとで聞いてみるよって言ってたんだけどね、ま、もし、会って合わないって思ったら、断ってくれてもいいし、気は使わなくて

も全然いいから」

「はあ…」

「ちよつとね、甥っ子のことをこんなふうに言うのはなんなんだけど、変わったやつでね。あ、いや、仕事で忙しかったからだろうけど、趣味も何にもない、仕事人間でさ。だから彼女もできなかったんだけどね」

「はあ…」

「ま、考えといて。じゃあ、悪かったね、忙しいときに呼び出しちゃって」

そう言つと、部長は部屋を出て行つた。

乗り気は、まったくしない。だいたい、部長もあまりその彼のことをいいように評価していないようだし、そんな相手、会いたいとは思わない。

ああ、失敗したな。付き合っている人いますって断ればよかったでも、待てよ。そんなこと言つたら、相手は林さんだと思われるな。それで、課長に部長は報告するだろう。そして、会社中にうわさが流れるのは、目に見えてる。林さんのところまでうわさがいくのも、あつという間だろうな。

それはとつても困る。その気になられても、困る。いや、悪い人ではないんだけど、でも、結婚をしたいとも、お付き合いをしたいとも思えない相手なのだ。

デスクに戻ると、桐子が待っていた。

「どうだった？」

小声で、聞いてきた。

「えつと…」

どう言つたものやら…。

「私、もう仕事終わったの。瑞希は？」

「まだ、今日は残業」

「そつか、じゃあ、あとでメールするわ」
「うん」

桐子はそのまま、帰っていった。

桐子がどうするのか、答えを聞かずじまいだった。まあ、きっと、桐子も今、頭の中ぐちゃぐちゃなんだろうな〜。

今は、人のことより、自分のことだな。さて、いったいどうしたらいいんだろうか？

パソコンを打ち始めては、手が止まる。会社を辞めたとして、その後どうしたらいいのか。会社を辞めないでいたとして、いつまで勤めるのか。

契約社員になって、契約が切れたりしたら？見合いをして、断れなくなったら？

「はあ〜〜〜」

今日で一番重苦しいため息が出た。それでも、心の中のおも〜い空気は体からは出て行かなかった。

桐子から夜、メールが来たのは11時も過ぎた頃。

明日は休みだ。帰りがけにビールを買い、家でしこたま、飲んだらしい。お酒に酔うと桐子は大胆になる。行動も大胆だが、思考までが大胆になる。

<会社を辞めるわ。

それだけのメールが、突然来た。あ、飲んでるなっていうのが、丸わかりだ。飲んだときのメールは、やけに文章が短い。それに、投げやりだ。いっさい顔文字も、絵文字もはいらない。面倒くさくなるんだろっとな。

<辞めてどうするの？桐子飲んでるでしょ？

<あつたり前でしょ。飲まなきゃやってられない。そりゃ、今の会社なんて未練も何もないわ。こっちからさっさと辞めるつもりでい

たし。でも、会社側から首切りつてあつたまくるわ。

<そんな時代なんだよ。

<まあね、一応、会社に残れる選択もあるんだけどね、でもさ、辞めなかつたら、なんだかしがみついてるみたいで、みつともないじやん。やめたるゝゝ！

<だから、辞めたらどうするの？

<田舎帰るわ。

<は？突然何？

<突然じゃないの。親からも言われてたし、考えてたの。うち、旅館しててね、私長女なのよ。3人姉妹のさ。誰かがつがないとね。

<女将になるの？

<そう。女将にもなれるよう、着付けとか、お花とか、習わされてたわけ。私は絶対に嫌だったの。都会で働きたかつたし、都会で生じたかつたし、ずっと静岡の田舎にはいたくなかつたから。

<旅館、初耳。12年も長く友だちしててさ。

<ごめんね。でも、封印したかつたんだわ。考えなくなかつたし。

あゝあ、婿養子でもとつて女将になる運命なのかな。

どう返事を返していいかわからなかつたけど、実際、羨ましくもあつた。だって、桐子にぴつたりはまる職業だし、桐子の道がそこにはあるんだもの。桐子なら、十分女将が勤まると思うし…。

でも、私には何もないのだ。継ぐべきものもなければ、何も資格も技術も、才能もない。パソコンだって、たいした腕じゃない。いたい、会社を辞めて私は、何ができるというのだろうか？

<部長から、見合いしないかって言われた。

<なに、それ？相手は？

<部長の甥っ子の、小児科医

<え？医者？いいじゃない！

<部長だよ。もし、見合いしたら断りにくいでしょ。

「いいじゃん、会社辞めてれば、もう関係ないって。上司でも部下でもないんだよ。で、いい相手ならもうけもんだし、嫌なら断って、部長ともさよならだよ。」

「で？そのあとは？」

「知らないよ。瑞希が考えな。瑞希の人生だよ。薄情なやつ。」

そう、桐子は、しっかりしている。長女だし、ずっと一人暮らしをしているからか。何でも自分で決める。不倫していたときも、何年も私にも誰にも話さず、一人で悩んで別れる結論を出した。私はこの年でまだ、親と同居だ。何回か一人暮らしを試みたが、風邪で寝込んだり、具合が悪くなると家に帰り、母に、「うちから通つても、遠くないし、うちに帰ってきなさいよ」と言われて、戻る。そんなパターンだ。

見合いか…。母に言ったら喜んで、その話を進めるだろうな。

どうしようか…。もしかしたらこれは、人生を変える、チャンスが来ているのだろうか？

2 決断

私は週末、家で過ごすことが多い。数少ない趣味の一つには料理があり、体を動かすのが得意ではない私が、唯一している運動はヨガだ。あ、でもヨガって運動とは呼べないのかな？

ゆったりと起きて、朝けん昼の食事をとる。かつこよく言うと、ブランチかな。

それから、家から自転車で5分という近さにある、スポーツセンターに行く。スポーツジムとは違い、ここは市のスポーツセンターで、格安でヨガを受けられる。ま、来てる人の大半が、おばあさんなんだけどね。

スポーツセンターのすぐ横には公園があり、子供を連れてくるお母さんたちの溜まり場になっている。

土曜日だというのに、よく出てくるものだって思う。親子3人という家族もいれば、母子どうしでやってきて、子供そっちのだけで、話し込んでるお母さんがたの姿も、たくさんいる。年は多分、私よりも若いんだろうな。20代かもしれない。

横目で見ながら、「ああいう中には、絶対に入れそうもないわ」と思う。

私は人見知りをするので、初めて会う人が苦手だ。

会社に入ったときも、同期の中でなかなか仲いい人ができずにいた。でも、4〜5ヶ月もするうちに、だんだんと気の合う人でご飯を食べるようになり、いつの間にか、グループができてたけどね。

桐子は、実は苦手な部類に入るタイプだった。大人びてて、しっかりしてて、綺麗で、おしゃれで。

はじめは、違うグループにいたのだが、いつの間にか、一緒のグループにいるようになったな。何年か同じグループで行動している

うちに、とても仲良くなっちゃったんだよね。

ヨガには一人、30代で独身の人がある。なんとなく、どちらからともなく話すようになり、今は、ヨガの後、お茶をするようになった。

彼女の名前は「藤子」藤に子と書き、「とうこ」。桐といい、藤といい、私は木の名前に縁があるようだ。

藤子は、保険会社の営業をしている。ノルマもあり、なかなか大変な仕事のようなのだ。

実はバツ一で、子供もいるが、なんと子供はもう中学生だという。土日も部活があるとかで、土曜日、安いヨガの教室に来ているというわけだ。

藤子には、彼氏もいる。4歳年下と言っていた。

あれ？藤子は今、何歳なのかな？1度だけ彼を見たことがあるが、なかなか落ち着いた雰囲気の人で、藤子と同じくらいに見えた。藤子が若く見えるからかな？

子供が、もう少し大きくなってから結婚を考えようかとも言っていたけど、結婚より、恋人の方が楽しんだよね、とも言っていた。子供がいる余裕なのか？

私なんて、子供をこれから生むこと考えただけでも、焦ってしまふ。今から彼を見つけて結婚して、子供生んで、いったいいくつになつてからの、子育てになるんだろうか？

母親も、これ以上年取ったら、孫の面倒見れないからねと脅してくる。だけど、最近、「彼氏は？結婚は？」と聞いてこなくなつた。あきらめたのか、あまり言わず、私がプレッシャーを感じると思つたのか？

「お茶していく時間ある？」

藤子に、昨日の話を聞いてもらいたかった。

「うん、あるよ。大丈夫」

いつものように、二人で自転車をこぎ、ファミレスへと向かう。ランチの時間帯を過ぎてるからか、いつもわりかし、空いている。

窓際の席に座り、二人で、

「は〜。疲れたね〜」

と、言う。ヨガは、激しい運動ではないけど、意外と、疲れるのだ。いつものように、ドリンクバーを頼み、自分の好みのドリンクを持ってきた。藤子は、アイステイーを。私はホットコーヒーを。

「昨日さ、部長からいきなり肩をたたかれてさ」

「え？なに？もしか、首切り？」

「う〜ん。その話もあっただけだね。部長がね。見合いの話を持ってきたんだよ」

「あら！いいじゃない？どんな人なの？」

「35歳。小児科医」

「ええ？いいんじゃない？お医者さんでしょ」

「う〜ん」

「な〜に？、迷ってるの？例の林さんかな？」

「違う違う。論外…」

「じゃ、昔の彼でも、引きずってるかな？」

「昔の？」

ああ、2歳下の…。それはないな。そう。私は、その彼のことを、本当に好きだったのかなって、あとから思ったほどだから。

そう考えてみると、私は本当に誰かを好きになったこと、あったのかな？

「会社を辞めるの？」

「迷ってる。辞めてもすることないしね」

「コーヒーが今日はやけに苦い。」

「じゃ、一緒に働く？保険の仕事、どう？」

「それは辞めとくよ。私には向いてないもの。藤子見てても、きつそうだし」

「そっか、ま〜ね。ノルマとかあるしね。私みたいに、養わなきゃならないのがいたら、簡単には辞められないけどさ」

グサ……。

そうなんだ。私には背負ってるものも何もない。自分ひとりだ。だからこそ、なんだないつも、寂しいような、このままじゃいけないような、ぽかりと胸に穴があいてるような、そんな感じがするんだ。

このままでいいわけないとか、このままでは何も変わらないとか、そんなことばかりを思って、未来が不安でしようがない。

でも、思い切って「えい」って、人生を変える勇気もなかった。

だから転職だつてできなかったんだ。

ただのOLは嫌だと、学生の頃には思っていた。手に職をつけたとか、自分にしかできないような仕事がしたいとか。でも、何も見つからずに事務職をしていた。

留学して英語べらべらになると思ったら、全然だったし。本当は学校卒業しても、留学する予定だったけど、なんだか怖くなってやめちゃったんだ。1ヶ月でも、不安と怖さで、途中体もおかしくなっただけだ。

私の人生ってなんだったのかな。薄っぺらだな。何かをやりとげたこともなければ、特技も何もない。部活動とかもしたことないんだ。夢も何もなかった。

うつん。高校生の頃は、あこがれていた。ツアーコンダクターとか、そういうの。英語べらべらにしゃべって、いろんな国に行ってる……。

だけど、一ヶ月の留学でも、へこんだから、あきらめちゃったん

だよ。私には無理だつて。

そんな薄っぺらな人間なんだよ。あゝあゝあ…。

「藤子は、夢つてあつた？」

「夢？あつたよ」

「何？」

「お母さん」

「え？」

「幸せな結婚して、子供生んで…。平凡でしょ。うち、親が離婚してるから、子供の頃からの夢だったんだ。だから早くに、結婚して、私も離婚しちゃった。ははは。でも、お母さんになる夢は叶ったかな」

そうか…。

結婚は、学生時代、夢見なかったな。かつこよく、仕事している自分を想像してた。

学生の頃には結婚より、大恋愛にあこがれていた。心の底から愛して、愛されてっていう恋愛がしたいって。それも叶ってないのか…。

藤子と別れると自転車で家に帰ってきた。門を開けると、犬のクロが尻尾を振って飛びついてきた。

「クロ！だめ。自転車倒れる！」

クロは、ボーダーコーリだ。真っ黒だから「クロ」。

「お母さん、また、クロ勝手に庭に放してる！」

「あら、いいじゃない。散歩に連れてってあげてよ」

「また私？修二は？」

「修ちゃんなら車でどっか行ったわよ。デートじゃないの？」

修二って言うのは、5歳下の弟だ。もう付き合って5年になる彼

女がいるが、結婚はまだしていない。

弟いわく、姉の私をさしおいて結婚はできないから、早く嫁げというのだが、どうも、まだまだ、結婚する気がないだけのような気がする。

私には兄もいる。兄の名は雄一。結婚して、子供もいるが、去年移動になり仙台にいる。日本各地に支社がある会社に勤め、2、3年ごとに、移動になる。それも大変だわ。

子供は女の子。名前は「緑」ちゃん。2歳。かわいい盛りだが、なかなかうちには来ないので、母が文句たらたらだ。どうやら、お嫁さんの実家には良く行っているらしい。ま、それもしようがないことかなって思ったりもする。私でもそうするか。

修二は、専門学校の講師をしている。彼女はなんとその学生さんだった。学生の頃からの付き合いで、あゝあ、生徒さんに手を出したかつて、兄とよく修二に言って、からかっていたっけ。まさか、5年も付き合うとはね。

体育関係の専門学校で、彼女は今、幼稚園にいき、園児に運動を教えている体操教室の先生だ。元気で明るくて、かわいい。修二にはもったいないくらいだ。たまにうちにも遊びに来るが、いい子なので、父や母のお気に入りだ。兄のお嫁さんとも仲良くしている。私は人見知りがあり、どうも、仲良くなれない。別に嫌ってるわけではないから、彼女が変な風に誤解してなきやいいんだけど…。

そんな感じで、うちの兄弟の中で1番問題あり、将来が安定してないのは私なのだ。だから、父も母も、私のことが1番気がかりだろう。

「は~~~~~」

散歩の途中、ため息がもれた。クロがびっくりして、こっちを見た。

公園のベンチに座るとクロも、ハッハッて息を吐きながら、私の足元にちょこんと座った。

クロは今年でいくつになるっけ？もううちに来て、3年はたったかな。人間でいうと、何歳かな？

ペットショップで買ったのではなくて、修二の友達の愛犬が子供を生んだからつてもらってきたんだよね。だから、もともとは修二の犬なの。なのに、週末散歩に連れていくのは、私なんだよね。そりゃ、暇しているけどさ…。

だけどね、クロはいい子で、大好きだから、この散歩の時間は至福のときだったりする。

前に、2回ほど柴犬を連れてきた、男の人と話をしたことがあって、どうやら20代後半の人で独身のようだった。だけど、名前を聞くのもなんだし、散歩の時間もわからないし、ちよつといい感じの人だったんだけどね。

「出会いつてあるようで、ないよね。クロ」

自分が高校生くらいならさ、そんな出会いも期待するけどさ。

クロの頭をなでていると、

「わんちゃん~~~~~!」

つて、3歳くらいの女の子が寄ってきた。お母さんが慌ててかけてきて、

「だめよ。噛まれたらどうするの?」

つて子供の腕を掴んだ。

「クロは、噛んだりしないですよ。姪っ子の2歳の子にも優しいですし」

と私が言つと、そのお母さんは、

「え?あら、ごめんなさい」

つて、あやまった。

「わんわん！」

女の子がクロの頭をなでた。クロはおとなしくしている。

「かわいいでしょ」

と言うと、女の子が、

「かわいい、わんわん！」

つて、にこつて微笑む。その笑顔もたまらなくかわいい。

「さ、もういきましよう。パパが待ってるわよ」

向こうの方で、赤ちゃんを抱っこしている男の人が、こっちを見ていた。女の子のパパで、この女性の旦那さんだ。ああ、4人家族か…。理想的な家族だな。

「パパ……。わんわんいた〜！」

つて、おたけびをあげながら、女の子は走り去っていった。その後ろからお母さんが、

「走ると危ないわよ」

と、大声でこれまた叫びながら、追いかけていった。

週末の家族連れの風景だ。なんでもない、ありきたりの家族だ。

でも、私にはまぶしすぎるくらいだ。

ヒュ〜〜〜〜〜〜。冷たい風が吹いた。今日は天気も良くて、

外にいてもそんなに冬の寒さを感じない日だったけど、さすがに、ベンチに座っていると、寒さにこたえる。いや、一人身を感じて、心が寒くなっただらうか。

家に帰ると、母があったかいハーブティを淹れてくれた。それを飲んでみると、胸の奥にまであたたかさがしみてきた。

部屋はストーブで暖かく、足を綺麗に母にふいてもらったクロが、擦り寄ってくる。

このまま、このあつたかい家にいちゃいけないんだ…。いつまでも甘えていてはいけないんだ…。いきなりそんなことを思っ

「お母さん、私お見合いしようかな」

と、唐突に言ってしまった。

「え？お見合い？」

すっとんきような声をだし母は、言った後に自分の口を押さえた。どうやら、自分のすっとんきような声に驚いたようだった。

ああ、言っちゃった。でもいいや。もし嫌なら断ればいいんだもん。

その見合いで、私の人生は変わる。一変したのだ…。

そんなこと、そのときには露とも知らず、その先にある出会いも、その先に経験することも、そのときにはなぐの予感もなく、母のすっとんきような声に笑っていた。

「でも、あまり期待はしないでね。お見合いしても結婚するかはわからないから。ただね、仕事は辞めようと思う」

と、母に告げた。すると母が、

「え？辞める？」

って、またすっとんきような声を出した。今度は目もまんまるで、その顔を思い出すといつでも笑えるくらいだった。

母が父にも話したらしく、その日の夜、父が私の部屋をノックした。会社を辞めること、見合いの相手は誰かを、詳しく説明すると納得したようだ。

「部長さんのすすめるお見合いなら、問題ないだろう」

そう言つと、父は部屋を出て行った。

そうだろうか…？部長が、自分で言うのもなんだが、仕事一筋でうんたらつていう部分は省いて父には話したので、私自身は少し不安が残っていた。

まあ、いいや、いいや、気に入んなかったら断ればいいんだもんね。

月曜日、朝1番に部長のところに行き、

「昨日の話ですが、お受けします」

と、小声で言った。部長はいきなりなので慌てて、

「え？何？どの話を？」

と、聞いてきた。…ああ、そっか。契約社員だの、会社を辞めるだの、いろんな話をされたんだっけね。

「お見合いのお話です」

さらに、声のトーンを下げ、周りには聞こえないように部長に言った。

「え？そんなに早く決めていいの？」

「あ、はい」

「そっか、そうか。いや〜、姉も喜ぶよ」

部長も小声でそう言うつと、

「じゃ、その件については、また後ほど。悪いね、柴田さん。これから会議があるから詳しいことは、またにして…」

と、わざとらしく、今度は普通の声で言うつと、席を立てて会議室へと向かっていった。

お見合いを受けようつて思うつと、と昨日桐子には夜、メールをした。

「いいんじゃない？行動行動よ。人生変えたいならね。」

そんな返事が来た。人生を変えたいか…。本当だよな。

前の彼と別れてから、どこか保守的になっていた。自分から何かに飛び込むのも、やめていたかもしれないな。

見合いの話はどんどん決まっていた。部長も周りに話を聞かれないように気を使い、メールでのやりとりをするようになった。部長、メールできるんだ…。で、初めて知った。

桐子はとつと、退職届けを出してしまっていた。3月いっぱい会社を辞めて、4月には静岡に戻り、旅館の仕事をするという。

は、早い…。思い立ったら即行動の人だからな…。

「瑞希もとつと、退職届け出したら？どうせ、結婚が決まったら辞めるでしょ？お見合いうまくいかなくても、居づらいでしょ？」

そのとおりだ。でも、まずは課長に話をしなくっちゃ。課長は部長から聞いているだろうけど、私の口からも言わないとね…。

課長に応接室に来てもらい、お見合いのことと退職のことを話した。やはり、聞いていたようで、驚いた様子はなかった。手続きの仕方は総務の人に聞いてね、とだけ残し、部屋を出て行った。

私もどうせなら、桐子と同じ日に会社を辞めよう。3月いっぱい、辞めることにした。

一歩前に踏み出したら、事が進むのは早い。あっという間に、お見合いの日取りも決まっていた。

相手の写真も見せてくれたが、見た感じは普通の穏やかそうな人だった。公園で見た、まぶしい家族のお父さんのような、アットホーム的な、そんな感じの人に見えたから、仕事人間には見えなかったが…。会ってみないとわからないよね。

私の写真も、渡してもらった。仕事始めに少しおしゃれをして、会社に行った時、桐子と撮り合った写真だった。

本当は2、3年前の若い写真を渡したかったが、修二に、

「そりゃ、詐欺でしょ。だいいち、会ったらばれるから、やめとき」
って、言われた。それもそうか…。

3 出会い

お見合いは3回目だ。毎回緊張する。

前の2回とも洋服だったが、今度は着物を着た。母が作ってくれたうす紫色の訪問着。20代の頃に着たらなんだか、老け込んで見えたが、この年齢になるとしっくりくるものだ。

ホテルの、日本料理屋さんの一室。ときどきしながら両親と待っている、ずっと襖が開いた。

現れたのは、部長と、その後ろから部長よりもかなり年が上だろっという女性と、写真で見た穏やかそうな男性が入ってきた。ああ、お姉さんと甥っ子さんね…。

父が座りなおし、挨拶をした。母も慌てて正座をしながら、両手を畳につけ丁寧にお辞儀をした。

少し遅れて、私もお辞儀をしたが、どのくらい丁寧にしたらいのものか、中途半ばなお辞儀になってしまった。

だが、どうやらそのお辞儀は見られていないようだった。なぜなら、先方も慌てて座り、深々とお辞儀をしていたからだ。とはいえ、甥っ子さんは、立ったままでお辞儀をしている。

テーブルの周りを囲み、少し和んでくると、甥っ子さんの紹介を部長が始めた。

「私の姉の長男の、桜井茂くん」

「はじめまして、桜井茂です。よろしくお願いします」
今度は、深々と頭を下げた。

「あ、はじめまして、柴田瑞希です。よろしくお願いします」
そう言つとしばらく、間が空いてしまった。

「桜井さんは、小児科の先生なんですって？」

いきなり母が切り出した。おいおい、いきなりすぎるだろう。多分、沈黙をどうにかしたかったんだだろうけど…。いや、一番にそこを聞きたかったのかもしれないが…。

「はい。大学病院のほうにいたんですが、今は開業しまして…」

「まあ、すばらしい。どちらに病院はあるんですか？」

「町田です」

「あら、じゃあ、近いわね…」

父は、一言も発しない。まあ、何をしゃべっていいかわからないのだろう。相手のお母様も一言も発しない。しゃべるのは、部長か茂さんだ。

「茂さんのご趣味は？」

母が聞いてしまった。ああ、確か部長が無趣味だと言ってなかったつけ？

「そうですね。音楽鑑賞と、あと、たまにゴルフを…」

え…？

え？って言う顔を、部長とお母さんが同時にしたのを私は、見逃さなかった。どうやら、ほらをふいているのだろう。

「瑞希さんのご趣味は？」

茂さんが聞いてきた。

「お料理と、ヨガを…」

「まあ、お料理が得意なんですか？」

はじめて、お母さんが口を開いた。

「いえ、得意ってほどでもないんですけど、あの、お料理をするのは好きな方です…」

へんな答えだ。私、あがっているんだな…。

食事が運ばれてきたが、着物だし、緊張でのに食べものが通らない。それはどうやら、部長以外のみんながそうだったようで、部

長だけがばくばくと食べていた。

茂さんかというと、私よりも緊張をしているのではないだろうか？お茶ばかりを飲んでいる。

「すみません、ちょっと…」

茂さんは席を立つと、ずっと正座をしていたのか、よろけて、

「あ、すみません…」

と、軽く会釈をして、襖を開けて行ってしまった。

「ごめんなさい。きつと、トイレですわ」

お母さんが慌てて、そう付け加えた。

しゅん。また、沈黙。もくもくと食べた5人。

しばらくして、茂さんが戻ってきた。

「その、正座はくずしてくださいね」

と母が、言った。

「あ、すみません。正座なれていないもので、くずさせてもらいます」

と、茂さん。

「部長さんもくずしてください」

と、母がそう言つと、部長も、

「それでは、お言葉に甘えて」

と、足をくずした。すると父も、ようやくあぐらをかいだ。私は正座をくずすわけにはいかないだろうと、そのまま正座をして、足先の感覚はなくなっていった。

ご飯を食べ終わると、部長が、

「じゃあ、あとは、お二人に任せて、われわれは退散するということとで」

と、言い出した。

「え？」

あとは、若いものに任せてって、ドラマでは見たことがあるが、

過去2回のお見合いではそういうの、なかったんだよね。

一回目は、4人で会った。父は来なかった。母と、相手のお母さんがべらべら話し、じゃあ、次はお二人でお会いしたら？って言われたものの、もう、会った瞬間から生理的に受け付けず、断ったんだ。

2回目の時には、はじめやっぱり4人で会って、次に二人で会う約束までして別れて、二人で会ったものの、やっぱりだめだってお断りしたんだ。

だから、こういうパターンは初めてだ。

「それじゃあ」

父と母と、部長と相手のお母さんは出て行ってしまった。

「あ、」

って言ったきり、3分くらい、茂さんは黙ったままお茶をすする…。やばい、何か話さなくっちゃ…。

「あの……」

「はい？」

私が何か聞いてくるだろうと、顔を上げ、沈黙がやぶれてほつとした表情で私を見たが、何も聞くことがなく、ああ、困ったって顔をしたんだと思う。茂さんの方から、

「ここは出て、ホテルの庭でも散歩しませんか？」

と、言ってきた。

ほ…。外ならほら、花が綺麗ですねとか、なんとか、話題があるだろう…。と安心して、庭に行ってみると、さすが冬だ。花なんてどこにもありゃあしない。

それでも、歩き出しながら、どうにか話題を見つけようとしたが、

「今日は曇ってますね」

「そうですね」

「寒くないですか？」

「はい」

って、そんな会話しかなりたたない。

無理だ。お見合い自体が無理だ。心の中で何度も、

『無理だ~~~~~！』

と、叫びまくる。

「コーヒーでも、飲みますか？」

「はい」

と答えたものの、まだ、一緒にいなくちゃならないの？ってがつくりきた。

ホテルのラウンジに行き、コーヒーを二つ注文してくれた。

こんなとき、桐子ならどんな話をするのだろっ。ああ、仕事人間なら、仕事のことを聞けばいいのかな。

「あの、どうして小児科医になったんですか？」

私の中では、子供が好きだからとか、そういう答えが来ると思ったが、

「小児科医って、今、少ないんです。だからかな」

という返答だった。

「あ、そうなんですか」

…って話が終わってしまった。そこからどう膨らませばいいのか？

「お料理は何が得意ですか？」

「え？得意ってものはないです」

ああ、しまった！また、話を終わらせてしまった。

コーヒーを飲みえ終えた頃、茂さんが話し出した。

「瑞希さん。あの、自分はこういうとき、どんな話をしたらいいのか、わからなくて、見合いも初めてなんです。忙しくて、女性とお付き合いをすることもあまりなくて、二人きりでそれも、初対面の女性と話をするのは、どうも苦手です…。すみません」

「あ、私も苦手です」

「そうみたいです。ははは。そういうところは気が合いますね」
初めて、笑った顔を見た。思わずつられて、笑ってしまった。

「あ…」

茂さんは何か言いかけて、やめてしまった。

「え？なんですか？」

気になって聞くと、

「いえ、あの、笑顔が写真で見た笑顔と同じだなんて思ってた…」
へんに照れくさかった。

「今度は、もつと、楽なところに行きませんか？映画とか、どうですか？」

「ええ、いいですね」

思わずそう答えただけ、なんだか、もう1度会ってもいいなっと思えたんだよね。翌日、会う約束をし、何を観たいか考えておいてくださいと言われて、その日は別れた。

家に着くと、待ってましたとばかりに、聞いてくるかと思いきや、父も母もそっけない感じだった。

いや、わざとらしく、そっけなくしているのは、見え見えだ。私が話してくるまで、聞かないようにしてるみたいで…。

私はなによりも早く着物が脱ぎたくて、自分の部屋へとあがっていった。

着物を全部脱いだときの、開放感はたまらない。

「あ~~~~~！」ってベッドにドスンッて横になる。それから、
「う、寒い」と寒さに震え、手早く洋服を着た。

着物を持って、一階におりていくと、聞いたそうにじれている母が、足早にそばに来て、着物を受け取った。そこへ、修二が帰ってきた。

「ただいま」。あ！姉貴帰ってる？どうだった、どうだった？見合
い」

母は、よくぞ帰ってきた、よくぞ聞いてくれたとばかりに、興味
津々の顔で、リビングに戻ってきた。

父は、新聞を読みながら、自分はそのなに興味ないよ……というそ
ぶりを見せ、でも、耳はダンボになっているようだった。

「次に会う約束をしてきたよ」

「あら、そう……、そう……！」

母は、高い声でそう言っていると、続きを聞きたそうにしていた。

「へ……、次はどこで会うの？」

修二の質問に、これまたよくぞ聞いてくれたって感じで、母は目
を輝かせた。

「映画観る」

「なんの？」

「まだ、決めてない。私が選んでいいんだってさ」

「優しい人じゃない」

「優柔不断なんじゃないの？」

と、母と、修二が同時に言った。そこに父がぼつり。

「いい人そうだけど、もし気に入らないようなら、断ってもいいん
だぞ」

「何言ってるの。もっと、先行きいいこと言つてよ。お父さんは
」

じれったいって感じで、母がくぎをさす。

父にとつては、いくつになっても、娘が嫁に行くのは嫌なようだ。
なんなら、一生うちにいてもいいぞつて、前に冗談半分で言ってい
たこともある。だから、過去2回のお見合いが、父の仕事先の人の
勧めだったのにもかかわらず、断ると、上機嫌になっていたのだ。

母は気が気じゃない様子だったが、無理強いするのはやめようと

思ったのだろう。今回は前回と違い、あれこれ言ってこないもんな…。

部屋に戻り、パソコンで検索をした。今、特に観たい映画はなかったが、アクション、ホラー、恋愛、アニメ、SF、いったい初デートにいい映画ってというのは、どんなものなのか、すごくすごく悩んでしまった。

こんなことなら、茂さんに決めてもらうべきだった。ああ、やっぱり修二が言うように、優柔不断な人なんだろうか？だから、私に決めさせるのか？

性格まではまだ、わからないが、今までの二人と違い、生理的に受け付けない人ではなかった。ちょっと、ほわつてした暖かい感じのする人で、小児科では子供たちに、受けがいいんじゃないのかなとか、お母さんたちにも安心されるんじゃないかなとか、そんな印象があった。

結局、映画は無難に飽きないであろう、アクションものにすることにした。

めずらしくその日、桐子からメールが来なかった。絶対に「どうだった？」って、すぐにメールをよこすだろうと思っていたのに。

「ま、いつか。月曜に会ったとき話そう」

疲れこんだ私は、お風呂に入り、出ると、すぐに寝てしまったようだ。

朝起きたら、髪が爆発していた。

ひょえ~~~~！約束の時間までに、間に合うだろうか？慌てて、髪をぬらしドライヤーをあてる。朝ごはんなんて余裕もない。

化粧をして、服を選ぶ。服、いったい何を着たらいいのか？いきなり、ジーンズは、カジュアルすぎるだろう。でも、ワンピースっ

ていうのも、気取りすぎてないか？だいたい、まだ寒いし…。

クローゼットをあけ、しばらく考え込む。すると、携帯がなった。

「わ、茂さんか？いや、携帯教えてないし…」

「はい？」

慌てて出たら、桐子だった。

「今日、暇？会えない？」

「ごめん。これからすぐに出なくちゃならなくて」

「あ、じゃ、また今度でいいわ。じゃあね」

桐子はすぐに、電話を切った。なんだったんだろう？うっっん。申し訳ないけど、今はそれどころじゃない。

セーターと、ちょっとひざ上のスカートを選び、急いで着替えた。それから、パールのネックレスとピアスをして、コートを着て、ブーツを履いた。

「行ってきますー！」

玄関を出ようとすると、クロが走って飛びつこうとした。

「クロ！だめ」

母が飛んできて、

「クロちゃん、今日は瑞希デートなのよ。お散歩なら、お母さんと行こうね」

と、首輪を持って、飛びつくのを制止してくれた。

「ごねんねクロ。じゃ、行ってきます」

「はい、気をつけてね」

リビングから父がかすかに、行ってらっしゃいと言ったような、言わないような…。

外に出ると、晴れていた。けっこうあたたかい。クシユン。やばい。まさか、花粉か？いや、まだ花粉が飛ぶには早いよね。

約束の時間ぎりぎりに着きそうだ。茂さんは、約束の時間より前に来るタイプか、ぎりぎりなのか？

元彼は、いつも遅れてきたな。それも、平然と遅れてるのに、ゆつくりと歩いてきたつけ。いやいや、元彼のことなど、どうでもいいじゃないか。

緊張でのが渴く。緊張？何に緊張しているのか？久々のデートだからか？

店のウィンドーに映る自分をチェックする。髪は？格好は？変じゃない？電車に乗って窓ガラスに映った自分もチェックする。早めに行つて、トイレにも行きたかったけど、そんな時間ないな…。

約束の場所に着いた。あたりを見渡したが、茂さんの姿はなかった。ちよつと、ほつとする。

ああ、それにしてものが渴いた。ショッピングモールの中にあるスタバに目がいった。映画の前に時間は少しある。

でも、映画を観る前に飲むと、映画の最中トイレに行きたくなるのが嫌で、私は映画の前も、映画の最中も飲み物はとらないようにしている。だけど、今はさすがにのが渴く。

待ち合わせの時刻から、10分がたった。きよろきよろ…。あれ？もしかして、場所を間違えたか？それとも、時間を間違えたか？さらに5分が経過する。映画まで、あと20分しかない。約束を破るような人じゃないだろう。あれ？一週間間違えたかな？

「あの…」

いきなり、知らない人が声をかけてきた。

「？」

何かの勧誘か？それも、トレーナーにスタジャン、ジーンズという、こんな高校生みたいなのがなんで声かけて来るのよ。間違つてもナンパじゃないよね。

私が、怪訝そうな顔を見ると、

「あ、柴田瑞希さんですよ。」

と聞いてきた。

「え？そうだけど。なんで私の名前？」

「あ、すみません。俺、榎本圭介っていいいます」

声が、突然大きくなった。びっくりした。あれ？待てよ？…榎本
って言った？

「桜井茂のいところになります」

「ああ。…ええ？」

「茂にいが、あ、茂にいつていつも呼んで…。今日、来れなくな
ったから代理できました」

「ええ？来れないって？どうしたの？」

病氣？怪我？

「茂にいの患者さんで、喘息の子がいるんですけど、発作が起きて、
2時間前に茂にいの病院に来たらしくって」

「はあ…。患者さんが…」

「はい。それで、吸引したり、いろいろしたらいいんですけど、結
局前にいた大学病院に入院することになって、そのお子さんに連れ
添って、茂にい大学病院に行ってるんです」

「はあ…」

「30分前に茂にいから電話で聞いて、父が、もう柴田さんは約束
の場所いつてははずだし、お前車でひとつぱしりして、代わりに映
画おごってこいって…」

「父って…。まさかと思うけど、榎本部長？」

「ああ、はい」

で……。榎本部長の息子さんがなんで、代わりに映画を観に来
ているのよ？

「茂にいのお見合い相手だから、絶対にそそのないようにつて、
言われてきました。あの、すみません。こんな年下相手に、つまら

ないと思いますけど、俺、精一杯頑張りますので」

な、何を？頑張ると言うのだ？

「……」

開いた口がふさがらないとは、このことか？部長は何を考えてるんだ？わからない……。

「何の映画、観る予定だったんですか？」

「アクションもの……」

「え？奇遇ですね。俺、アクションものの好きです」
観る気満々だ。断れそうも無い……。

「映画まで時間ありますか？急いできたんで、のど渴いちゃって……」

「20分くらいあるよ」

「あ、じゃ、スタバでなんか買ってきますよ。柴田さん、何がいいですか？」

「キャラメルマキアートの、冷たいの……」

「ああ、俺も、あれ好きです。じゃ、行って来ますね。そのベンチで待っててください！」

「……」

なんて、気が利く。というか、なんて行動が早いんだか？茂さんとは大違いだ。若さかな？

それにしても、いくつなんだろう？高校生かな？部長に男の子がいることは聞いたことあるけど。ああ、そうだ。去年あたり、受験生だったとか言っただけじゃあ、大学1年くらいか……。

「あ、それ、弟です」

キャラメルマキアートを飲みながら、その子は答えた。

「え？部長二人も、男の子いるんだ」

「あ、3人です。俺、次男ですよ」

「え？そんなに子供いたんだ……」

「兄が、今、23歳。俺が21歳。弟は19歳だったかな？」
21歳か…。一回り下ね。

「柴田さんの名前、瑞希っていい名前ですね。花みずきからとったんですか？」

「違うと思う。字が違うし」

「ああ、そっか」

「くす…」

「え？なんかおかしかったですか？」

「うっん。圭介君ってさ。かつこいいし、もてるんだろうなと思つて。今日は、いいの？彼女以外の人と映画なんて彼女怒らない？あ、こんなおばさん相手じゃ、怒らないか…」

「彼女いないすよ。さすがにいたら、引き受けてません」

「え？そうなの？もてるでしょうに」

「もてないっすよ。それに…」

「それに？」

「自分で自分のこと、おばさんとか言うの、やめた方がいいっすよ。瑞希さん、自分で思ってるよりずっと魅力的だと思いますよ」

は~~~~~？

12歳も下の子に、何言われてるんだか？それに、12歳も下の子にそんなこと言われて、何をドキッとしてるんだか？おかしいよ、私…。

思わず、ドキッてしたのを、見破られないよう、

「もう行かなくちゃ始まっちゃうね」

と、時計を見た。

「そうですね」

彼は私の顔をチラッと見てから、自分の時計も見た。もしかすると、この子は、女性の扱いになれてるのではないか…。ふと、そんなことを感じ、こんな子供にどぎまぎしてる自分にあきれてしまっ

た。

「いつもこれ、映画を観るとき食べるんです」

映画が始まる前に、圭介くんは1番大きいポップコーンを買ってきた。

「瑞希さんも食べてください」

と、私の方に、差し出す。やばばば。その無邪気さがすごく、かわい。

映画の最中は、手と手が触れそうになり、ほんのかすかに、彼の手の暖かさを感じた。

「わー!」

心でドキッとして、手をひっこめようかなとも思ってたけど、彼の方が先に、ひっこめてしまった。

かすかに、視線に入る彼の横顔が綺麗だった。

それにしても、部長と同じDNAとは思えないほどの、端正な顔立ちをしている。いわゆる「イケメン」ってやつだ。

小顔で、少し色白。鼻が高く、目はきりりとしている。口元は驚くほど真っ白な歯が笑うと見えて、それだけでくらくらとくる。髪は今風の子とは違い、真っ黒でさらさらだ。

きつと、お母さん似だよ、うん…。

結局私は、ずっと隣にいる圭介君が気になってしまい、映画の内容もほとんどわからなかった。

映画館を出ると、昼ごはんの時間を過ぎていた。

「何か、食べてから帰りませんか？」

「あ、うん。いいよ」

「この辺、よくわかんないんですけど、ここ、このイタ飯屋でもいいですか？」

「うん」

お店に入り、窓際に座る。日曜日だけど、ちよつとランチの時間が過ぎてゐるから、すぐにお店に入れた。

注文をして、待っている間、お母さん似でしょ？と聞いてみた。

「いえ、隔世遺伝みたいで、俺、おじいちゃん似なんです」

「へへへ。イケメンのおじいさんなんだ。お父さん似じゃなくて、良かったね」

「あはは、どういふことですか？俺、イケメンっすか？」

「え？自覚ないの？そんなことないよね」

「瑞希さんて面白いすね。もしかして、初対面でもまったく、大丈夫な人ですか？」

「いや、すごい人見知りするよ」

「うそだ〜〜」

本当だ。圭介くんとは、全然、大丈夫だ。逆にはじめて会ったのに、楽しくてしょうがない。やっぱり彼は、女なれしてるんだ。この年でもう…。そうに違いない。

「今、彼女いなくても、前にはいたでしょ？」

「ああ、はい。去年別れました。2年付き合ってた、すごい好きだったんですけど…」

「そうなの？好きなのに、別れちゃったの？なんで？」

「ああ、う〜ん。なんか、すれ違いが多くなつて…。こっちが働いてる時間と、向こうが働いてる時間とか違つてて、会う時間も全然なくて」

「圭介君、働いてるの？」

「ああ、はい。専門学校で去年から。IT関係の仕事なんすけど、けっこう忙しくて。土日は一応休みなんすけど、向こうは、土日仕事だったんですよ。店員さんしてたから」

「そっか。やっぱり会えないと、駄目になっちゃうのかな？」

「あ、茂にいても忙しいですけど、ほら、えっと…。結婚しちゃえば、毎日会えるわけですから大丈夫っすよ」

「あ、ああ、いや、結婚はまだ、わからないよ。付き合ってみてからじゃないと…」

「あ、そうですね。見合いしたからってすぐ結婚するわけじゃないですよ」

茂さんのことをいつからか、忘れていた。映画を観始めたころからかな。

「俺、車で来てるんで、送っていきます」

「え？いいの？」

「いいんです。暇だし。ドライブがてらに」

駐車場にいき、助手席に乗った。こざっぱりと整頓されてる車。

「もしか、部長の車？」

「いえ、兄と共有してる車です。今日は瑞希さん送るからっていうんで、兄よりも俺に、優先権があつて、先に乗ってきちゃいました。あ、シートベルトしめてくださいね」

「うん、あれ？」

「それ、ちよつと硬いんです。あ、俺、ひっぱりますから、じつとしてください」

ドキ！…だから、シートベルトをしめてもらうぐらいで、ドキッとするな、私！

「あ、家どの変すか？カーナビに入れちゃうんで、住所いいですか？聞いても」

住所を教えると、そのへんは行ったことないなって言いながら、カーナビを操作する。それから、音楽を流して、発進をした。

カーステから聞こえるのは、どうやら、オリジナルで作ったMDらしい。今の流行の歌が次々と流れてくる。

「誰の曲聞きますか？いつも」

「うーん、そうだな。ミスチル、コブクロ、ゆず、スピッツも好きだし、そんなところかな」

「俺も、ミスチル好きっすね。カラオケでも歌いますよ」

「へ〜」

「このMDにも、入ってますよ」

「そうなんだ」

「天気いいですね。ドライブしますか？」

「うん、いいね」

そのまんま、いろんな歌を聴きながら、時々、圭介君が熱唱してくれながら、私たちはドライブを楽しんだ。

「圭介君、すごく運転うまいね」

「ああ、はい。よく言われます。運転大好きなんすよね」

「へえ…」

運転してるときの、ハンドルを握る手がすごく綺麗だ。

信号待ちをすると、顔をこっちに向けて、私の顔を見る。ちよつとドキッとする。…だから〜、何度も言ってるでしょ。12歳年下の子にドキッとして、どうするの。

圭介君の横顔の向こうに、夕焼けが見えた。丸い太陽が、沈んでいく。そのときに流れた歌が、ミスチルの「花火」で、私の大好きな歌だから、感動してしまった。

「この曲、好きなんです」

彼が言った。…やばいシチュエーションだな。

…もう、そのとき、私の心の奥は、わかっていたはず、気づいていたはず、この恋に。勝手に何度もときめいて、顔が赤くなって、にやけていた自分に。

この日の夕日も、この歌も、一生忘れることのできない、思い出になることも、もしかして魂は知っていたかもしれない。

たとえ、顕在意識の私が全否定したとしても、私のハートはこのときすでに、恋に落ちていたんだ。

4 切ない恋

家のちよつと前で、車を止めてもらった。なんだか、親に対して悪いような気がして…。

「今日は楽しかった。ありがとう」

「俺も、楽しかったです。あの…」

圭介くんは、何か言いたそうだった。

「…何？」

「いえ…。それじゃあ…」

圭介くんは軽く頭を下げて、車を発進させた。私は、車が角を曲がるまで見送った。

それから、家に入ると、

「ちよつと、何してたのよ？」

と、いきなり、母が聞いてきた。

「え？何って…」

「桜井さんから電話あったわよ。今日行けなくて、すみませんって。まだ帰ってないって言ったら、また電話しますって。桜井さん来ないのに、なんでこんな時間まで帰ってこないのよ？」

「あれ？桜井さんは何も言ってなかったの？」

「何が？」

ちよつと母は、むつとしている。

「今日ね、桜井さんの代理で、部長の息子が来た」

「ええ？他の人とデートしていたの？」

「ちよつと…、デートって言っても相手は一回りも年下だよ。子供だよ、子供。部長がね、私に申し訳ないからってさ、代理人として、行ってこいって、命令されたらしいよ」

「あら、そうなの？まあ、部長の息子さんじゃ、無下に断れないわね。で、今までずっと？」

「え？うつん。映画だけだよ。そのあとはさ、ぶらぶら洋服見たりしてさ。だって、せっかく出かけたのにもったいないじゃん、そのまま帰るの」

「ふうん。あ、桜井さんにはすぐに電話しなさいよね」

「は〜い」

ああ…、なんで私、嘘をついたんだろうか。

茂さんに電話しづらいな。でも、こういうのはすぐにしないと、もつとしづらくなるのよ。

やっと子機を握り、2階にあがって電話をした。茂さんは、平謝りをしてきた。

「本当に、申し訳ない。この埋め合わせは絶対にするから」

「いえ、大丈夫です。それに患者さんだもの、しかたないです。全然気にしてないですから」

「いや、でも、埋め合わせはします。映画、来週こそ観に行きましよう。あ、何にしますか？」

「え？、あの…。今日観ましたよ。代理で来たいとこの、部長の次男さんと…」

「え？圭介？圭介が行ったんですか？代理って？」

ああ、やっぱり知らなかったのか…。

「部長が気を利かして、いえ、気を使ってくれて、息子さんを代理で、来させたいみたいで…」

「じゃあ、今までもしかして、圭介と？」

「いえ、あの、映画観たくらいで…」

「すみません。あいつ、何かそそうしませんでしたか？」

「大丈夫ですよ」

そう言つと、沈黙になつてしまった。ああ、やばい。

「すみません。埋め合わせはもう、あいつがしてくれたんですね」

「……」

なんて言ったらいいんだろうか…。

「じゃあ、今度、食事でも…」

「はい。また、空いてる時間に電話ください。私、週末はたいい家にいますから」

電話を切ると、重いため息が出た。

お風呂に入り、バスタブにつかる。水面を見てみると、浮かんできたミスチルの「花火」のメロディ。目をつぶると浮かんできたのは夕日。圭介君越しの夕日だ。

「もう、会えないんだ…」

ぽつりとつぶやく。その声が、エコーもかかることなく、水面に沈んでいく。

♪ もう一回 もう一回 もう一回 もう一回 何度でも君に会いたい♪

その部分だけが、繰り返す。リピートする。何度も、何度も…。

翌日、もやもやしている重たい心をもてあましながら、会社へと向かった。ため息混じりに席に着くと、部長がずっと横にやってきた。

「昨日は、茂君、急患がいたみたいで…」

「ああ、はい」

「うちの次男坊が、ちょうどどこかに出かけるところだったから、急いで車で行かせたんだけど、ずいぶん待たせてしまったかな？」

「いえ、そんなでもないです」

「すまないね…。他には何もアイデアが浮かばず、でもあとから考えたよ。あんな若そうを行かせるよりも、電話した方が早かったって。映画や食事までつき合わせたんだろう？あいつは暇していたから、別にいいんだが、つまらない思いをかえってさせたんじゃないかな？」

「いいえ、そんなこと…。楽しかったです。あの…、圭介君にはお

礼を言っておいてください」

「ははは。いいんだよ、あいつの方が、よっぽど楽しんでいたみたいだから」

ギクギク…。いったいどんな話を部長にしたんだろうか…。気になった。でも、聞けなかった。

ああ…。圭介君はあくまでも、代理。もう、会うことはないんだな…。

ぼくっとしながら、コピーをとっているところに、桐子が来た。

「おはよ。瑞希」

「あ！」

桐子の顔を見て、昨日電話をくれたことを思い出した。

「昨日は、ごめんね。急いでいたから。何か用だった？」

「ううん。なんでもない」

少し、顔色が悪かった。

「それよりお見合い、どうだった？」

「ううん。今日帰り、時間あるかな？昼でもいいや」

「んん？ゆつくりと話を聞いてほしいってか？」

「うん…」

「了解。じゃあ、昼は隠れ家で食べよう」

隠れ家というのは、たいしたことはない。歩いてほんの数分のところにある、地下の創作料理屋のことだ。地下にあつて、うちの社員があまり行かないので、相談事をするのにそのお店を使っている。桐子が休みの日に、いきなり会えないかと電話してくるのは、めずらしいことだ。何もないわけではない。私の話も聞いてほしかったが、桐子のことも気になっていた。

気丈な彼女が、私に相談事をしてくることはめったにない。元彼と別れたときにだって、別れて一週間もしてから、報告してきたくらいだし。

私はつい、桐子に頼ってしまうところがある。時々、うじうじしている私に渴を入れてくれることもあれば、彼女に話すと笑い飛ばしてくれることもあるから、とっても楽になるのだ。

昼、エレベーターの前で、いつも、なんとなく待ち合わせをしている。今日は桐子のほうが先に来て、私を待っていた。

「ごめんね。注文の電話がはいっちゃってさ…」

「うん、そんなに待ってないよ」

「さて、今日は何を食べようかな」

「ははは。瑞希は何食べようかとか言って迷っても、結局日替わりランチなんだよね」

「ま、そうなだけどさ」

「あと、お店のおすすめとかに弱いよね」

「桐子は同じメニューばかり」

「こだわりのあるのよ。お店によって、注文するものが決まってるの！」

「頑固一徹！」

「瑞希は人の意見に流されやすい！」

「うう、当たっているだけに、なんとも…」

そのうえ、私はね、流されやすいけど保守的な。人の意見を聞いているふらふらし、でも結局、動かないでこのままでいようって、殻に閉じこもるのよね。

桐子は、自分がこう思ったら、こう！っていう頑固なところがあって、でも、行動するときには、どんどん行動するタイプ。真逆なんだよね。

「私たちが仲いいの、不思議よね」

ちよっと遅くなったから、店は満員で、ウィンドーの脇に並んでいるいすに腰掛け、席が空くのを待っているながら話をしていた。

「価値観、考え方、全然違うのにな」

「うん、でもさ、だから面白いのかもよ。瑞希みたいなタイプは周りにいなかったからさ」

「私も、桐子みたいなタイプじゃないわ。周りみんな、うじうじしているタイプで、みんなしていいいい、うじうじ」

「ははは、くらくらい。私の周りはいけいけく！ちょっとは、考えて行動しようよって感じだったからね」

「お二人でお待ちの柴田様、どうぞ」

席が、空いたようだ。それぞれ注文をして、水を飲んで、一息つく。

「で？お見合いは？相手は速攻お断りしたいタイプだった？」

「それ、即行の間違いじゃない？早い攻撃してどうするの？」

「あれ？わかる？漢字の違い、言葉だけで…」

「なんとなくね」。ああ、あのね、生理的に受け付けない…」

「え？また？」

「ってわけじゃなかったよ」

「あら？あらら？もしや、好みのタイプだった？」

「ううん、好みでもないと思うけど、害はないって感じ」

「ふん、いい人って感じですか？」

「うん。そんな感じだね」

「お待たせしました。日替わりランチのお客様」

「はい」

って結局、私は日替わりランチにした。

箸を割り食べだすと、マイ箸をかばんからごそごそと、桐子が出した。

「今日も持ってたか」。マイ箸

「君はいつ、持つのかな？マイ箸」

えらいなと思いつつ、そこまでする？とも思う。

「桐子は？」

「何が？」

「昨日、本当は何か、あったんじゃないの？」

「うーん、するどいな」

「そりゃね、何年の付き合いだと思ってるの？で？」

「あのね。元彼がさ、奥さんと別れたってさ」

「え？あのですと付き合ってた、不倫の…」

「それ、不倫って言葉嫌いなんですけど…」

「あ、ごめん」

「電話がね、土曜にあつて、日曜会えないかってさ。私一人で行きにくくて、ついてきてもらおうかなんて、私らしくもないこと思っちゃったわけ」

「そうだったんだ」

しばらく二人、沈黙で、もくもくと食べていたが、先に沈黙を破ったのは私だった。

「それで、会ったの？」

「ううん。会ってない」

「…会いたくなかった？」

「もう、終わった恋だしさ」

そう言うと、水をぐぐつと桐子は飲み干した。

「けっこう、別れてからひきずったんだ。泣いたしね。別れてくれて言ってきたのは向こうだったし、奥さんにばれて、奥さんがなんていうのかな、ちょっと鬱みたいになっちゃってね。って話は少ししたっけ？」

「ううん。別れたってことしか、聞いてないよ」

「奥さん裏切れないって言われてさ、その時はどうしようもないし、別れた。奥さんと別れてほしいとか、私と結婚してほしいとか、そういうのなかったし…」

「そっか…」

「…うん。心のどつかでは、願ってたかな…」

「…うん。そっか…」

「でもさ、今回ね、奥さんに男ができたんだって」

「え？」

「それで、奥さんから別れてほしいって、言われたらしいよ」

「それで？それで、今になって桐子に？」

「うん。より戻さないかって。遅すぎるっちゅーのって感じでしょ？」

「そうなの？遅いの？まだ誰ともその後付き合っていなかったのは、元彼のことが忘れられなかったからじゃないの？」

「…でも、私はもうね、決心したのよ。田舎帰るって。だから、遅いの…」

「でも、その彼とより戻したら結婚も…」

「できないよ」

「なんで？」

「女将になるんだよ。相手には、婿養子になってもらうかもしれないんだよ。彼はね、専務なの。今の会社辞められないの。静岡なんて来れないんだよ」

「だから、女将になる必要がないんじゃない？」

「私、長女なのよ。継がなきゃならないのよ」

「だって妹さんもいるでしょ？それに今すぐじゃなくても、まだお母さんだって、お父さんだってさ」

「だめなの！」

ボロ……。桐子の目から涙が出た。大きな大きな涙のしずくだった。

こんな桐子は初めてだった。興奮して話して、いきなり泣き出す。「ごめん、言っただけ、お父さんね、倒れたのよ。半身不

随なの。お母さんはその介護で毎日病院行ってるし、妹たちも、旅館手伝ってる」

「え？」

「妹たちがいるし、私には会社があるからって、帰るのやめてた。妹たちには申し訳ないけど、もし帰ったら、二度と東京には来れないだろうって思ってたから」

「……」

「東京離れられなかったのは、彼がいたから。そうよ。未練たつぷりだったの。より戻したかったのよ。ずっとね……。でもね、肩たたきされて、決心がついたの。静岡に帰る決心も彼をふっける決心も。だから……、だから……」

桐子は涙を拭き、言葉を詰まらせた。

「妹さんには、任せられないの？」

「……知ってるんだ私。すぐ下の妹、遠距離恋愛してて、彼は名古屋にいる。転勤になってさ。多分、結婚したいんだよね……」

「……」

「3番目は、もう結婚してる。だんなさんは自営業なの。そのうち、妹もそこ手伝わなきゃならない。だから、私なのよ。後を継ぐのは……」

「うちは、普通のサラリーマンだ。もし、お店をしていたとしても、継ぐのは兄か弟だ。女の私は気楽なものだった。だから、桐子の気持ちも、事情も理解しきれないところがあつて……」

「わかるとも、辛いよねとも、彼と結婚しなよとも、実家に戻って継ぎなよとも、何もアドバイスできず……」

「知らなかったよ、桐子何も言わないから」

「私さ……、長女でしょ。それもうちの親はいつも働いてて、おばあちゃんに育てられたけど、きびしい祖母でね。早くから旅館も手伝わされてたし、悩みとかも、誰かに相談することなかったし、いろ

んなこと頑張ったり我慢したりしてきて、一人で解決したり、一人で悩んだりして、ずっと生きてきたんだ」

桐子は、少し間をおいてから、話を続けた。

「私って、妹の悩みを聞いたり、友達の悩みを聞いたりしてばかりだったな。でも、私が自分の悩みを打ち明けたり、相談したりってどう話したらいいか、それすらわからなくて…」

「でも、今話してるよ」

「ははは、そうだね。そっか、こんなふうに、話せばいいんだ」

「うん、そうだよ。私は頼りないし、桐子みたいなアドバイスもできないし、しっかりしてないし。でも、聞くことだけはできるよ。聞くことしかできないかもしれないけど…」

「やば～～～い」

「え？」

「泣きそうだ。胸腺に触れちゃったみたい。うわ…」

「ええ？何それ？」

「瑞希…、ありがとう。そっか。聞いてもらえるだけでも、楽になるね。ありがとう…」

そう言つと、桐子は目を押さえたまま、うつむいた。

強かったわけじゃなくて、強がらないといられなかったんだ。ずっと、そうやって、一人でいろんなこと抱えて、生きてきたんだな。ここが創作料理屋じゃなかったら、せめて夜で飲んで酔っ払っていたら、その勢いで桐子のことをハグしたのにな…。

その日、はじめて桐子が、小さくて、幼くて、そして愛しく感じた。

「先に戻ってて、化粧直してから行くよ」

桐子は更衣室に戻ると化粧ポーチを広げ、いすに座って手を後ろ向いたまま振った。

桐子に、圭介くんの話は話せなかった。だいたい話す必要もないね。もう会わない人だし、だいたい12歳も下だよ。何かあるわけないじゃない。って、そんなこと懸命に自分に言い聞かせている。言い聞かせているって気づきながら、そのことも否定したくなっている。

それにしても、桐子の恋も切ないな。ずっと思っていたときには叶わなくて、きっぱり忘れようって決めたら、向こうから会いたいって言うてくるなんてさ。私だったらどうするだろうか…。

…わからないや。だって、そんなに一人の人を、ずっと思ったことってないんだもの…。だから、なんのアドバイスもできない。

ああ、アドバイスって言うのは、いろんな経験してきた人が人にできることなのかな？

桐子は、元彼とは会わないって決めたようだった。会ったら決心がぐらつく、そう思っていたみたいだ。

私はというと、2週間後に茂さんから電話が来て、食事をする約束をした。今回はきちんとお互いの携帯電話を交換し合い、事前にもし何かあっても連絡が取り合えるようにした。

医者という職業は大変だな…。もし結婚しても、大変なんだろうな。ふと、そんなことがよぎる。

約束の時間の5分前に行くと、茂さんはもう来ていた。渋いスーツを着て、その上にコートをはおっていた。私も、夜の食事ということで、ワンピースにカーディガン、それにコートをはおっていた。

「すみません、お待たせして」

「いや、僕も今来たところですよ」

茂さんはちよつときこちない笑顔で、迎えてくれた。

「この前は本当にすみませんでした」

「いいえ」

「実はもっと早くに電話をしようと思ったのですが、その、タイミングがどうも、わからなくて…」

茂さんは、素直な人なんだろうな。そういうことって、あまり口に出して言わないものじゃないかって思うし…。素直というか、誠実というか…。

「あ、先週は私、少し風邪気味だったので、今週でちょうど良かったです」

これは、本当のことだ。数日だったし、咳も出ていたから。

「そうですか、そういうときには、薬出しますよ。うちの病院に来てくだされば」

「あ、そうですね。お医者さんですもんね。でも、私子供じゃないし…」

「あ、ははは。それもそうですね」

この人といると、なんだか、ゆったりとできる。言葉数少ない人だけど、安心感があるっていうのかな？

食事がすむと、車で送ってくれると言い、駐車場まで一緒に歩いた。

車まで着くと、なんだか緊張した。助手席のドアを開けてくれて、そついうところは紳士だなって思う。

茂さんは、運転も慎重な運転だった。だけど…、私の心はここにあらずだった。

車の運転をする茂さんの手を見ながら、思い出しているのは、圭介君の綺麗な手だった。線が細い指と、上手な運転。

かかっている曲も違えば、外の風景まで違う。車の中で流れていく時間までが、全然違っていた。

圭介君越しに見る風景は、きらきら輝いていた。時が止まっているかのようだった。ミスチルの歌と彼の声と、外の夕日とすべてが、

一瞬の中のきらめく絵のように、ずっと続く永遠の時のように感じられた。

ぎゅ……。胸が締め付けられた。急に息苦しくなった。あの空気が？あの空間は？あの時間は何だったんだろう？

外の風景は色あせていた。車のヘッドライトがすべてモノトーンに見えた。音楽は雑音になった。茂さんの話にあいづちをうつが、何も頭に入ってこない。

今この時が自分だけ残して、どんどん後ろへと流されていく。私だけ時が過去へと戻っていく。今は、隣にいない、圭介君との時間へと戻っていく。

「送ってくれてありがとうございます」

そう言い残し、車を降りドアを静かに閉めて、ぺこつてお辞儀をした。茂さんも軽く会釈をして、そのまま車は去っていった。

夜空には、たくさん星が輝いていた。

ポタポタ……。空を見上げてから、下を向くと、涙がこぼれた。驚いた。私、泣いてる……。！ポタポタ、ポタポタ……。うつむくと、アスファルトの上に涙が落ちる。どんどん、とめどなく……。

なんなんだろう？これ。なんなんだろう……。

また、頭の中に、ミステルの「花火」のメロディが、流れ出した。
……会いたい。会いたいの、圭介君で……。でも、もう会えない。
会えないんだ……。

5 再会

静かに家に入った。だが、クロが気づいて、カリカリカリってリビングのドアをひっかいているのが聞こえる。

「瑞希なの？」

母の声がしたが、

「うん、もう疲れてるから、寝る」

と言って顔も出さずに、私は2階へ直行した。顔が涙で濡れているのを、母には見られなくなかった。

トントントントン。クロが2階に上がってくる音。それから鼻をドアにくっつけて、く〜んってなっている。

「いいよ、入って」

ドアを開けると、尻尾をふって入ってきた。そして、私の横に座ると、私のほつぺをなめた。そして、私の横に座ると、私のほつぺをなめた。

「やだな、なんでわかるの？私が泣いてたのを…。そうやって、いつも慰めてくれるよね。泣いてると、いつも…」

ぎゅう…。クロに抱きつく。抱きつけるサイズの犬でよかったと思う。クロはそのまま、じっとしている。尻尾はふったままで。

「おりこうだね。クロは…」

そう言って、頭をなでると、クロはまた、く〜んとないた。

涙がポロポロまた出てくる。クロには心が通じるのか？優しい暖かいぬくもりだった。

3月終わりの日、退社した。その日、部で送別会をしてくれた。涙での別れになると思いきや、泣くことはなかった。12年もいた会社なのにな。

部長がご苦労様と言ってくれ、同じ課の女の子がお花をくれた。

総務でも送別会があり、ちょうど同じ時間に終わって、桐子と一緒に帰ることにした。

「この電車ともお別れか〜」

「桐子の旅館行くからさ。いつ静岡に行くことになった？」

「1週間後。それまでに一回うちに遊びにきなよ」

「1週間後か、早いな…。行けるかな…。夜でもいい？私あさってから、働くんだ」

「え？」

「言ってなかった？最近仕事忙しかったもんね、お互い、引継ぎとかで…」

「部長が薦めてくれたってところ？」

「そうそう、榎本部長の学生時代の後輩が社長らしいよ。小さめのIT関係の会社だつてさ。結婚するかしないかは、まだ決めてないんだけど、結婚しても続けたらいいし、結婚しなくても、仕事したらいいって。ま、契約社員なんだけどね。部長が話を通してくれたんだ。ちょうどそこ、前の契約社員が期限切れて、やめたらしくつてさ」

「よかったじゃん。榎本部長さままだね」

「うん、足向けて寝れないや〜」

「でも、なんでそんなによくしてくれるの？お気に入りなの？瑞希のこと」

「違うでしょう〜。ほら、甥っ子とお付き合いしてるからじゃないの？」

「ふうん…。で？その甥っ子とはどう？進展は？」

「うん。まだ、4回しか会ってないからな〜」

「え？そうなの？」

「なんかね、忙しいんだよね、彼は。日曜も、大学病院の入院患者さんみにいたりしてるしね…」

「検診？」

「お見舞い」

「は？」

「よくわからないけど、ほら、茂さんの患者さん、入院したでしょ。他にもいるらしんだ、入院してる子。普段の日は行けないから、日曜に会いに行ってるって」

「仕事熱心だね」

「子供好きなのかな？」

「子供好きな人はいいけど、結婚しても家にいないのは嫌だね」

「結婚か」。結婚は今いち、ぴんとこない」

「んなこと言ってるけど、誕生日が来て、33になった人は誰よ」

「それを言うな！」

そうだった、33歳だ。そろ目だ。ああ…。だからね、茂さんと別れていいものか、どうかわからないんだ。好きかどうかもわからないのにな。

結婚ってなんだろうって最近思う。両親は恋愛結婚だったらしい。それも、社内恋愛だ。

兄も社内恋愛だった。大学時代に付き合っている彼女とはさっさと別れ、会社の後輩でかわいかった子を口説き落とし、結婚したんだよね。なかなかの強引さだったようで…。まったく、兄ときたら…。

弟も、先生と生徒という、禁断の恋をしちゃってさ…。って、今はそんなに禁断ってほどでもないのかな？

それにしても、みんなどうしてそんなに、好きな人が簡単に現れるんだろうか。いや、どうして私には現れてくれなかったのか。それとも、あるところで、妥協をしなくちゃいけないのかな？結婚ってさ…。

妥協か…。だったら、茂さんは、いい線をいつているかもしれない。医者だしな…。

よく桐子に、何を迷ってるの？これを逃したらないと思えて言われる。兄にも、弟にも言われる。逃がした魚は大きいのよ…ってこの前、いきなり母にも言われた。

魚料理をしていた横で言い出したから、なんのこっちゃって思ったけど、茂さんのことを言っていたんだろうな…。

わかってるよ。でもね、そういう話って、女の私から持ち出すものなのかな？

「結婚どうしますか…？」

とか、

「いったい、結婚する気はありますか…？」

なんてさ…。っていうか、それ、自分に聞かないと…じゃない？

「瑞希、結婚する気はありますか？ないのに、付き合っていていいんですか？もしかしたら、期待させてるかもしれないですよ」
「だよね…」。

翌日は昼近くまで寝た。開放感を味わったが、すぐに新しい仕事が始まっている。仕事があるのだから文句は言えないが、もう少し開放感は味わいたかったな。

会社は横浜にある。新宿よりも全然近くてありがたい。

会社の規模も小さいし、社員の数も少ないし、給料も少なくなるが、そんな文句も言えないし、贅沢も言ってられない。仕事があるのだから…。と、思いつつも、今までの会社を辞めてまで、移る価値があるのかは疑問だった。

緊張で寝れなかったのか、昨日昼まで寝ていたからか、ほとんど寝れずに朝が来た。

少しはればつたい目のまま、化粧をする。のりが悪い。あ、花粉症のせいもあるね…なんて思いつつ、不安と期待が入り混じる。

どんな人がいるのか、どんな出会いがあるのか…？

会社に着いたのは、始業の時間の20分も前だ。まだ、早いかなと思いつつエレベーターに乗る。オフィスに着き、ドアを開けるとすでに、何人かの人パソコンに向かって仕事をしていた。

「おはようございます」

後ろからいきなり、声をかけられた。

「もしかして、今日から来た契約社員の方かしら？」

「は、はい…」

20代前半か、後半か、化粧が濃くてわからない。

「私、経理の稲森です。よろしく」

「あ、私、柴田瑞希です。よろしくお願いします」

「ね、今、おいくつ？」

いきなり、年を聞くか…？

「33歳です」

「あら。じゃあ、2歳年下か…」

「へ？」

「へ？って？私、いくつに見えた？」

「てつきり、20代に…」

「うふふふ…。いい人ね、気が合いそうよね」

若作りか…って言葉は飲み込んだ。

同年代がいてくれて、安心したような、していないような…。

そこに、前からつかつかと、白髪交じりだが、すって姿勢がよく若い感じもしないでもない男性がやってきた。色黒、腕に金の時計をしている。

「柴田さん？」

「はい」

「榎本さんの後輩の笹塚といいます。よろしく！」

すって、手を差し出した。握手の手、らしい。おそろおそろ握手

をする。こういうときに、握手をしたのは初めてだ。

「柴田瑞希です。よろしく願います」

「今日は、とりあえず、会社に慣れてもらうってことで、ま、伝表の仕分けや簡単なパソコン入力でもしてもらおうかな。えーとね、まだ、来てないけど、昨年入った新人君から教えてもらってよ。今年には正社員採ってないからさ、彼がまだ、この会社では1番の新人なんだ」

「はあ…」

昨年入ったってことは、23歳くらいかな？大学での、若い子が…。

「あ、来た来た。紹介するよ」

ドアがいつの間にか開いてて、そこから、すうつて風が入ってきた気がした。振り返ると、白い歯をにかつて見せながら笑っている、圭介君がいた。

「?!」

「柴田さん、もしかして面識あるのかな？榎本さんの息子さんの榎本圭介君」

「え？あれ？…はい、いえ、でも、あの…」

すごい動揺の仕方を隠し切れず、言葉が出なくなった。

「一回、お会いしたことがあります。どうも！その節はお世話になりました」

圭介くんが元気に挨拶をして、ぺこつと深くお辞儀をした。

「あ、はい…」

こっちも、お辞儀をした。

「顔見知りなら、よかった。仕事もやりやすいでしょう。圭介、柴田さんにいろいろと教えてやってくれ。じゃ、柴田さん、昼は、みんなで食へに行くとして、そこで、歓迎会でもしよう」

「あ、はい」

ぺこ！社長の笹塚さんにお辞儀をした。

「ここ、柴田さんの席だから」

圭介君が、自分の座っている横のデスクの上を軽く、グーでたたいた。おそろのおそろ座ると、

「びつくりしました？」

と、あどけない顔で圭介くんが聞いてきた。

「うん、だって部長何も、言ってなかったし」

「やっぱり？親父ってそういうの、何ていうの、言い忘れること多いんすよね。俺も昨日聞いたばかりで、すんげえびつくりして…」

でも、お前は驚きすぎだつて逆に驚かれた。はははは…」

なんて無邪気に笑うんだろう…」

やばい。だんだんとこみあげてくる。嬉しい…！今、最高にやけるかもしれない。

顔を見ないようにして、反対方向を向いて言った。

「圭介君、緊張してのど渴いてて、水とか自販機で買ってきてもいいのかな？」

「ああ、エレベーターの裏のところに、自販機ありますよ」

「ありがとう」

急いで、自販機へとお財布を持って向かった。その先にはトイレもあったので、先にトイレに行くことにした。

鏡で顔を見ると、やっぱり赤い。口がにやけていて、なんともみっともない顔をしている。

手を洗い、化粧ももつと、念入りにすればよかったと後悔し、濡れた手で髪を整えた。それから、自販機で水を買ひ、オフィスへと戻った。

「ここ数週間はわりかし、暇してます。あ、暇してても定時にあがることなんて、絶対ないですけど。でも、会社に泊り込んだり、徹夜で仕事したりって時期ではないんです」

「そんなときもあるの？」

「柴田さんは契約社員だし、定時にあがれますよ。多分」

「そんなに忙しいのか。ああ、そういえば忙しくて、彼女と会えず、別れたって言うていたっけ。」

「ITは忙しいって有名でしょ？ま、この会社はまだ、ましな方ですよ」

「そうなんだ…」

「大変なところにきたって思ってます？辞めるなら今かなって…」

「ううん。全然、頑張って働く気満々だよ！」

「あはは。そうですか、頼もしいな…」

「だってほら、その笑顔だよ。それ見れたらもう、頑張れちゃうでしょう～～！」

「ミスチルの歌がまた、頭の中で流れ出す。何だっけ？歌詞…。世界が輝くとかって…」

「ああ、違う、今はあれだよ。ドリカムの、嬉しい楽しい大好き。」

「え？え？え…？嬉しい…、大好き…？」

「思わず、真っ赤になったのを、自分でも気づいた。でも、周りには誰も人がいなくて、気付かれずにすんだ。当の本人の圭介君も、社長に呼ばれてデスクを離れていたし。」

「好きなんだっていうのはもう、自覚している。だけど、会うわけない人だからって、封印しようとしていた。」

「だけど、だけど、会っちゃった…。これ、運命かな？」

「……待てよ。……ちょっと待ってよ。好きになったとしても、どうすることもできないのか？私、今、茂さんと付き合っていて、圭介君は、茂さんのいところで、部長の息子さんと、12歳も下で、12歳も…。……そうだ。相手にされるわけないんだった。」

「ちん…。」

エレベーターが一階に着いた。と同時に、あんなに浮かれていた心が、沈んでしまった。

「さ、柴田さんの歓迎会だ。どこに行こうか？」

社長が、声を高くして盛り上げようとしている。

「いつものところで、いいんじゃないですか？」

化粧の濃い、稲森さんが、だるい感じで、言う。

「いつもの店」ってところに入った。奥に座敷があり、ちょうど社員全員が座れるほどの大きさだった。

そう、社員は少なく、8人しかない。経理の稲森さんも契約社員で、私も入ると10人……

稲森さんはどうやらその中の、見るからに、一人の男性が気に入っているようだった。

30歳前後の、ちよつと渋さも入った、イケメン。うっ、ん、芸能人で言うところの、仲村トオル。その人の横をずっとキープしている。

私の横には、誰かな？名前も印象も薄い、ついでに、髪も薄めの年齢不詳の男性が右に、社長が左に座っている。

圭介君は少し離れていた。圭介君はどうやら、誰とでも話せる明るい人懐こい性格のようで、周りの人たちと、始終笑いあっていた。会社のマスコットの存在なのか、1番年下だからか、「圭介、圭介」とみんなにかわいがられているようだった。

ちよつと離れてるからこそ、ときどき、その笑顔を、視界の中に入れることができた。そして、時々目が合った。目が合うと、胸がぎゅってするから、なるべく、視線をはずすようにした。だけど、次の瞬間にはもう、彼の姿を目が追う。その繰り返しだ。

周りの人と話しながらも、彼の声や、笑い声に耳をそばだてた。どんな会話をして、どんなことに興味があつて、どんなことで笑うのか、一つ発見するたびに心が躍っていた。

午後は、稲森さんが、伝表の仕分けを手伝ってと言って来た。

応接コーナーのようなところがあり、そこで、二人で向かい合って座り、作業をすることになった。残念なことに、仕切りがあり、ここからは、圭介君が見えなかった。

「ね、柴田さんは、結婚は？」

「してないです」

「あ、そうなの？一回もまだ？」

「はい」

「私はバツ一。離婚して、3年になるんだわ。離婚してからこの会社に来て、だから、勤めだして2年半くらいかな」

「そうなんですか…」

「結婚もね、2年しか続かなかったわ。でも同棲は長かったのよ。4年していた。同棲してうまくいったら、結婚してもうまくいくって思わない？だけど、やっぱり結婚と同棲は違うのよね」

「そういうものなんですか」

「男の人と暮らしたことは？」

「ないです」

「今、もしかしてご実家に？」

「はい。稲森さんは？」

「離婚して一回は戻ったの。でもさ、出戻りもいづらいのよ。兄のお嫁さん同居してたし。すぐに一人暮らしを始めたわよ」

「ふっふん」

「こんな話つまらないか」

「あ、いえ、すみません。私話を膨らませるのが、苦手で…」

「人見知りする方？」

「はい。ごめんなさい」

「謝ることないけど」

「はい…」

その後は、気まづくなり、沈黙が続いた。

この人とは気が合うのだろうか？桐子とも、藤子さんとも、違う

タイプだ。

私は、人見知りもするし、初めての人は苦手だし、大勢の中にもなかなか、入れない方だ。でも、いつの間にか、仲のいい人ができている。藤子さんもそうだったしな…。

だから、稲森さんとも大丈夫だよって思いつつ、不安もよぎる。

この人で二人目か…、私の周りにいるバツ一。

藤子さんといい、稲森さんといい、不倫をしていた桐子の彼といい、結婚っていいものなのか、どうなのか考えてしまう。

結婚をして幸せになっている友人が、多いわけではないから…。一人身の友人となると、結婚が羨ましいと言いつつも、一人身の楽しさのほうが勝ってしまう。そんな共通点があり、一人身の友達通しで会って、わいわいと楽しんでしまう。とはいえ、そんな友人も最近ぐんと減ってしまったが。

もう、結婚をあきらめ、一人身で仕事に燃えようというタイプと、まだ結婚はあきらめないと、結婚相談所や、お見合いを頑張るタイプとに別れるが、私の場合はどっちでもないな。

「さて、これで終わり。ありがとうね、手伝ってくれて」

稲森さんが突然大きな声を出して、驚いてしまった。

「終わったっすか？もう、柴田さん、返してもらってもいいっすか？」

いきなり、応接コーナーのブースから圭介君が顔を出した。

「ちよつと、今の話聞いてた？盗み聞き？」

「んなの、何回も飲んで聞かされてますよ、今さらですから。盗み聞きも何も、聞こえるくらい大きな声でしゃべってるのは、そっちじゃないっすか」

「圭介、生意気！」

圭介…。稲森さんもそう呼ぶのか。

「はいはい、大事な柴田さん、お返ししますよ。もしかして、圭介

の好みですか？」

ええ？ドキ！なんつうことを聞くの。

「そうっすね、ストライクゾーンど真ん中っすね」

ええ…？って、思い切りそういう冗談で返すのか？

「柴田さん、ちょい、パソコンの入力お願いしてもいいですか？」

「はい」

「前の会社で、ワードやエクセルやってました？」

「あ、はい。簡単なのなら、一応」

「じゃ、この辺の入力できますよね」

「うん。ああ、できると思う」

「じゃ、一応、流れだけ、教えるんであとはお願いします」

「はい」

圭介君はいすを、私のデスクの方に寄せてきて、顔を近づけパソコンの入力の仕方を、教えてくれた。耳の直ぐ横で聞こえる声と、マウスを動かす指が綺麗で、ときどきした。

こんな時、比べるなんて悪いって思うけど、つい、茂さんと比べてしまう。声も、手も、笑い方や、視線や、かもし出す空気や…。茂さんも、あたたかい人だが、圭介君はそれだけじゃない。隣にいて、あたたかいつて思うときもあるけど、ときめいて、ふわふわして、夢心地の気持ちにさせてくれる。

恋なのかな…。恋をしているのと、していないのとの差なのかな。だけど周りの人に、それを悟られないよう、せいっぱい普通をよそおい、必要以上に話さないようにした。でも、すぐ隣にいる圭介君には、胸の鼓動も、頬の熱さも伝わってしまったのではないだろうか？

桐子から夜電話が来たのは、4月も半ばを過ぎる頃だった。

「ゴールデンウィークに、うちの旅館に来ない？」

その声は明るくて、透る声だったから、あ、元気でやっているんだってことが、すぐにわかった。

「一人ででもいいし、彼とでもいいよ」

「彼？」

とつさに、圭介君の顔が浮かんだ。

「そうよ、医者 of 彼」

「あ、茂さん？忙しくて無理だよ」

「え？他にもいるのかな？」

「違うよ。彼って言われても、ぴんどこなかったただけです」と、私は少し慌てて嘘をついた。

「でも、ゴールデンウィークはかきいれ時でしょ。行って悪くない？」

「うーん、本当はゴールデンウィークじゃないときにしたいけど、空いてる時あるの？」

「土日なら、あるかもね」

「ま、考えとしてよ。瑞希はいつでも、ビップ扱いだからさ」

温泉か。桐子にも会いたいし、そうだ、藤子さんを誘おうか。

あ、でも、息子さんがいるものね。

お母さんとも行くかな…。

まさかな…、まさか、稲森さんとは無理よね。いまだに、仲良くなれてないしな…。

6 社内旅行

「温泉？静岡のどこ？」

だめもとで、稲森さんに聞いてみた。仲良くなるってことも、これから仕事をしていくうえで、大事かもしれないし…。

「西伊豆って言うてました」

「いいわね。それ、社内旅行にいいじゃないの？」

「社内…？」

「そう、春と秋に一泊ずつ、行くのよ、みんなで…。5月にたいてい行ってるから、もうすぐ考えなきゃって社長と言ってたところよ。あ、社長！社長！」

ちよ、ちよっと…。そんなこと勝手に決められても、桐子がさ…。

遅かりし…。社長も乗り気で、決まっちゃった。

「ぜひ、その友人に頼んでくれないか。5月の終わり頃の土日、一泊で。いや、無理なら、金曜の夜一泊でもいいかな」

「はい。聞いてみます…」

社長の頼みは断れないでしょ…。くくく。桐子、ごめん。おおことになった。

桐子にそのことを伝えた。すると、

「ありがとうくくく。お客を呼んでくれて。大歓迎よ！」

桐子は大喜びだった。

「え？ほんと？」

「もちろんよ。土日でもOKだから」

「よかった。よかった」

「うちの旅館はね、温泉もだけど、お料理も絶品よ。なにせ、コック長が最高の腕前なのよ。楽しみにしててね」

「うん。あ、そうだ、お父さんの具合どう？」

「それがね、毎日リハビリして、少し動くようになってきたの。すごいでしょ？母はずっと、父のリハビリの手伝いしてる」

「そっか。よかったね」

桐子も頑張っているんだろうな。

私はというと、やっと会社にもなれ、やっと仕事も覚えてきて、やっと社の全員と話すようになったところ。でも、毎日、隣にいる圭介にときめいている。

あ、そうそう、周りがみんな「圭介」と呼ぶから、私もいつの間にか、圭介って呼ぶようになった。

圭介は、私のことを「瑞希さん」と呼んだりする。はじめは驚いたし、くすぐったい感じがしたけど、でも名前で呼ばれると、すごく嬉しい。

茂さんとは、あいかわらず、2週間に一回くらいの割合で、食事に行く。食事して車で送ってくれるだけだ。それ以上もないし、それ以下もない。

母は、少し進展のなさに、じれったさを感じているようで、根掘り葉掘り聞いてくるようになった。でも、聞いてきても、進展もなければ、話すことなど何もないのだ。

どちらかといえば、毎日会って、横で話をしている圭介のことのほうが、よっぽど詳しくなってくる。

趣味も、好きな色も、食べ物も、癖も、手のほくろや、まつげの長さや、爪が意外と小さくてかわいいことや、好きな音楽や、読む雑誌や、漫画や、好きな俳優や、好きなスポーツや…。

一つ知るたびに私は、また圭介を好きになっていく。それも、十分自覚していた。

圭介も、私のいろんなことを知っていったと思う。好きな食べ物

も、飲み物も、嫌いな虫や、運動が苦手なことや、好きな映画や、好きな花や…。

私が話をしているとき、時々、私の顔を見る。その目が熱くて、心を射抜かれる。いつもは子供っぽいのに、その目だけが大人の男の人の目になる。

なんでかな？ 笑い顔は涼しいし、ときどき、無邪気な子供にもなるのに。いきなり男になって、私を困惑させる。

外が暑かったと言って、ネクタイを取り、シャツのボタンを2段くらい外す。圭介の鎖骨が見える。その鎖骨にドキッて、したことが何度あるかな。

私は変態か… って、自分を疑ったりもした。

だけど、土曜日のヨガで、男の人のどこに魅力を感じるか、藤子さんと話をしていて、藤子さんは腕とかお尻って言って、私は鎖骨かなって言ったら、それ、わかる気がする、セクシーだよねって言われた。

そうか、変態じゃないか。お尻って言う人もいるくらいだもんね。

でも、とても本人には言えないこと。言ったら引かれるな、間違いない…。

こんな、12歳も年上がときめいているだの、鎖骨にどきッてしているだの、やばいよね、これ、絶対に知られたらさ…。

そんなこんなの、数週間。あっという間に、社内旅行の日はやってきた。

一人、家の事情で来れないが（奥さんの出産が真近らしい）残り9人で、西伊豆にやってきた。堂ヶ島の近くにある、桐子の旅館。

3台の車にみんなで乗り合い、やってきましたよ、はるばると横浜から。

私は社長の運転する車に、稲森さんと、稲森さんのお気に入り、仲村トオル似の楠木さんと乗り、珍道中を繰り広げ、目的地に着い

た。

サービスエリアで、はぐれた車とまた落ち合いながら、どうにか3台一緒に、宿まで来ることができた。

社長と楠木さんと、たまに稲森さんも運転していた。申し訳ないことに、私はペーパードライバーで、交代してあげることができなかったが、稲森さんの意外と上手な運転テクニックに、びっくりしてしまった。

旅館に着くと、車の音ですぐに、従業員の人が出てきた。そのあとに桐子も、着物姿で登場した。

「いらつしゃいませ〜」。日向旅館によっこそ！」

日向というのは、桐子の苗字だが、日に向かう旅館なんて、ちょっとしゃれた名前だと思った。

「ささ、お荷物運びますね。あ！瑞希！」

「桐子〜」。元気そう〜！」

きゅ〜と、声にならない声で喜び合い、すぐにまた、桐子は女将の顔に戻って、みんなを案内し始めた。さすがだ。

桐子の着物姿は、すごく似合う。髪もあげて、きりりとしていて、どこからどうみても若女将だ。

「瑞希さんの友達ですか？」

小声で、圭介が聞いてきた。

「うん、N社の同期だったんだ」

「ふうん。綺麗な人ですね」

「ギク〜」。桐子が好み…？」

私はこうやっていつも、圭介の言葉で、一喜一憂しているんだから、言葉には気をつけてほしいものだ。

部屋は3部屋とつてくれていた。すべて同じ大きさの和室で、女性が二人で、一部屋を占領するのは申し訳ないと思ったが、ま、仕

方のないことだ。

私たちは荷物を置いたらすぐに、温泉へと向かった。温泉は、旅館の奥の階段から下へと向かったところにあつた。

そこには、すでにタオル1枚を持って、圭介が立っていた。横には桐子がいて、何か親しげにしゃべっていたが、桐子は私を見つけると、

「ちよつと。瑞希、聞いてないわよ」

と、大声を出した。

「え？何を？」

ギクギク…。何のことだろうか。

「榎本部長のご子息だつて」

「あ、うん、ごめん、言つてなかった？」

「聞いてないわよ。こんなイケメン、榎本部長の息子さん？」

「あはは。面白いですね。瑞希さんといい、N社つて、面白い人ばかりですか？」

圭介が、無邪気に笑つてそう言った。

「ええ？面白いって、他に言いようがあるでしょう？」

桐子がそう言うつと、

「ああ、じゃあ、綺麗な方ばかり…とか？」

圭介が、桐子に向かってそう言った。

「そうそう、そういうこと言わなくっちゃ」

「あははは、やっぱ、面白いよ」

まいったな。圭介は、すっかり桐子と意気投合してる…。

何回も、思ったけど、彼のあの人懐こさは、誰にでもなんだ。その人懐っこさで、私とも簡単に映画観れたりドライブしたわけだ。特別じゃないんだよ。

「はは…」

半分苦笑いをして、私は先に行つてしまった、稲森さんを追いか

けた。

「さっきの人、あなたの友達？」

「え？ああ、桐子。そう……」

「あなたといい、桐子さんといい、変わってるわ、あんな子供のどこがいいわけ？」

「子供？」

「圭介よ」

露天風呂につかりながら、稲森さんが話し出した。

「子供じゃないの。二人とも嬉しそうに楽しそうに話してるけど、わからないわ」

「楽しそうにつて、そんな、普通にいつも話してますけど……？」

「ええ？全然、楽しそうよ。彼氏とでも話してるみたいにな、うきうきしてるじゃない」

「ええ……？」

「やばい。動揺を隠せない。どうしよう。」

「私から見たら、子供よ。信じられないわ。だって一回りも下よ」

「私！別に……。他の人とも話して楽しいし、ただ、ほら、そう……」

子供っぽいから話しやすいみたいなのがある。気を使わなくてすむから、それだけです」

声がだんだんと、大きくなる。

「影で付き合ってるのかと思ったわ」

「え？やだ、何言ってるんですか？」

「あれれ？動揺してる？あやしい」

「あ、あやしいうて、いやだな。圭介はだって、わ、私の今お付き合いしてる人の、いとこなんですよ。それで、ちよっと、親しいって言うか、それだけで。圭介と付き合ってるわけじゃないじゃないです」

「あら。彼氏いるの？初耳！」

「やばい！」

「彼氏？ひょろろ、何？圭介のいどこ？」

隣の、男湯からだ。やばい。聞かれた。

「圭介知ってるの？」

「知ってますよ。いどこですから」

圭介の声だ。圭介にも聞かれた。

「ちよつとろろ、盗み聞きしないでったら！」

稲森さんが、男風呂に向かって叫んだ。

「盗み聞きしてませろん。声がでかすぎなんですろろ」

圭介の声だ。

「私、もう出るよ。お風呂長く入ってられないの」

「あ、はい」

稲森さんがお風呂からそうそうと、出て行った。

「圭介、もう出るから。お前まだ入ってるか？」

「はい。もう少ししたら出ます」

圭介の声だ。この竹垣の向こうには、圭介がいるんだ。

しゅるるん。チャポン……。静かだった。空は夕焼け空だった。

「あ、すげえ、夕焼け」

圭介の声がした。

「あれ？もう出ちゃいましたか？」

「いるよ！」

思わず答えた。

「空、綺麗ですね」

「うん。綺麗……」

「やばいですね」

「何が？」

「いや、だって空綺麗だし……」

「わかんない、何がやばいのかわかんない」

涙が出た。ああ、馬鹿だ。私はきつと大馬鹿だ。私が好きなのは圭介だ。なのに、なんで茂さんと付き合っているんだろう？

ポロポロ涙が出た。

もし、茂さんと別れたら、この気持ちを伝えられるのか？そんなわけない。そんなことをしたら、今の会社にいられなくなる。隣で、声を聞いたり笑顔を見たり、それすら、できなくなるのだ。

「同じ、綺麗な夕焼け見てるんですね、今。あ、それも裸同士で」「そうだけど？」

わざと、つつけんどんに答えた。

「これ、茂にいには、内緒にします」

「べ、別に、内緒にしくちやいけないわけじゃないでしょう」

「いえ、俺たちだけの秘密にしてください。したいんです」

「……」

それきり、何も話さなくなった。

どれくらい的时候が、流れただろうか。知らない人が、わやわやって入ってきて、その静かなときが中断された。

私はそのまま、お風呂を出た。もう、先に圭介は出たかもしれない。

髪を乾かして部屋に戻ろうとすると、ラウンジのところに圭介が座っていた。

「あ、遅かったすね」

圭介は、来たときと同じ格好だった。

「あ、浴衣っすね」

「そ、そりゃあ、温泉の後って言うたら……」

「浴衣と、コーヒー牛乳っすか？はい」

と、コーヒー牛乳を一本手渡してくれた。

「俺のおごりです」

「ええ？」

くす…。笑ってしまった。圭介もつられて、くすって笑う。

圭介の笑顔には魔力があると思う。人を惹きつけ離れられなくする魔力。

「これで、卓球があつたら最高」

「あ、あるつてよ。桐子が言つてた」

「まじつすか?!あとでしませんか?」

「うん。食事すんでからね」

「じゃ、俺も、そのときには、浴衣になりますから」

「ええ?なんで?」

「なんか、浴衣で卓球つて言うのが、いいじゃないっすか?」

ふふ…。つてまた笑うと、ふふって一緒に笑う。

コーヒー牛乳を飲み干して、部屋に戻った。まいったな。胸が痛いのが、おさまらない。

私はもしかして、すごい圭介のことが好きで好きで、たまらないくらい、好きになっていくんじゃないだろうか。もしかしたら、自分で気づかないくらいに。

旅館にはちょっとした宴会場があり、そこで、みんなで食事をした。そこには小さなステージがあり、カラオケがあり、みんなで、カラオケタイムになった。

圭介は、歌えと言われても、みんなからどうぞつて、歌おうとしなかった。もしか、歌は下手なのかな?いや、前に車で聞いたときには、上手だったっけな。

みんな飲んで盛り上がり、なかなかお開きにはなりそうにない。

トイレに行き、戻ろうとすると、廊下で、圭介が立って待っていた。

「卓球しましょうよ」

「え？でも宴会中だよ」

「いいんですよ。あれ、記憶なくなるまで、飲み続けるだけです。俺、いつも途中でばくれちゃうんです。でも誰も気づかないんですよね。みんな、すんげえ飲んで記憶なくしてるから」

「そんなに？」

「付き合ってたなら、夜が明けますよ」

「ええっ？」

「だから健全に俺らは、卓球しましょう」

「うん」

お風呂に向かう階段を下りて、お風呂とは反対の廊下を歩くと卓球台があった。ラケットも球もあったので、勝手に卓球を始めることにした。

「て〜〜りや〜〜！」

声だけではかいし、すごい迫力だが、どうやら、圭介は手加減をしてくれている。でもたまに、スコーンって、手も出せないような球を打ってきては、

「決まったぜ〜〜！」

って、ガッツポーズを取る。無邪気だな〜〜もう。

私はというと、温泉にはいり、ビールを飲み、卓球したら、へとへtoになった。

「ごめん、もう限界。息切れ…」

「もう〜〜？」

「だって、私はね、君よりも一回りも上…」

「ああ、それなしね。年の話は聞かないから、俺」

圭介は、なんとなく不機嫌になった。

「散歩しない？」

いきなり、圭介が聞いてきた。

「外、寒そうだもん」

「ああ、そつか」

「圭介、今、思いっきりタメ語だよ」

「あ…。ま、いいじゃん」

「ええ。。。？お酒のせい？」

「そ、酒の席のことだから、ほら、無礼講ってことで」

「ふふふ…」

「ふふふ…」

「や。。。ね、なんでまねして笑うの？」

「や。。。ね。。。」

「酔っ払いだ！」

「はは…。瑞希こそ、酔っ払いだ。すんげえ赤い顔してるし！」
ちよいちよい。。。呼び捨てか。。。ま、いっか。。。

ラケットと球をおいて、階段を上り、ラウンジで休憩することにした。

人はもう誰もいなかったし、お店も閉まっていた。何時なんだろうか？まだ宴会は続いているのか？

「瑞希、結婚すんの？」

「え？」

「茂にいと」

いきなり圭介が、聞いてきた。

「……」

「すんの？しないの？」

刺すような目だった。

「なんか、生意気…」

その目が辛くて、圭介の鼻をぎゅってつまんだ。

「俺、そんなに子供かよ」

「え？」

「風呂で言ってたじゃん」

「ああ、あれはさ、稲森さんが言ってたことだから…」

ラウンジには少しの明かりしかなくて、お土産屋もロビーも人影がなくて、ラウンジに流れていた音楽もいつしか消えて、私と、圭介だけがそこに取り残されたみたいに、二人だけになってて…。

圭介は薄暗い明かりの中で、ぼんやりとしか見えないけど、なんだか、うつむいている顔が、すごく悲しげに見えた。

私、傷つけたのかな。彼を傷つけていたのかなって、どんどん私の心まで、ぎゅーって苦しくなった。

「ごめん。傷つけたかな、私…」

「ごめんって、何が？」

「私、何か傷つけるようなこと…」

「言ってるじゃないよ。事実言ってただけでさ」

「？」

「茂にいと付き合ってる。俺は茂にいのいとこだ、それだけだ。そのとおりじゃん」

「うん…」

「それで？なんで俺が傷つくとか思ってたんの？」

「え？」

「なんで…？」

「…うん。そうだよ。おかしいね…」

「何が？」

「だからさ、圭介が傷つくなんて、おかしいって。そんな、傷つくようなこと何もないんだもん」

「そうだよ。茂にいと結婚すんならさ、親戚になるし、俺、まじ祝福するしさ」

「うん…」

「俺、もう寝ます。部屋帰ります」

「え？」

「おやすみなさい。また、明日」

「はい。おやすみ…」

圭介は、いきなり真顔になり、いきなり丁寧な言葉使いになり、そして、去って行ってしまった。

はあ…。ため息が出た。おつきな…って思ったら、涙だった。

ポロポロ…。次から次へと止まらなかった。嗚咽も出た。体の力が抜けていく。立つこともできない。

「ばっかじゃないの」

後ろから声がした。

「桐子？」

桐子が後ろからそっと、抱きかかえてくれた。

「好きなんですよ。なんで、無理して隠してるの？」

「12歳も下だよ…」

「それが何？」

「茂さんのいとこだよ…」

「だから何？」

「部長の息子だよ…」

「それがなんだっていうの？」

桐子は、少しむっとしていた。

「あんたは結婚してもいないし、向こうも結婚してるわけでもないし、お互い、まだまだ、結ばれるチャンスはあるじゃないの？」

「こ、こっちがその気があっても、向こうにはないよ」

「ええ？」

「12歳も上だよ」

「だれがどう見たって、あの子、あんたに惚れてるってわかるわ」

「そんなわけ…」

「まるわかりでしょが」

「もし、もしそうだとしても、若気の至りだよ」

「はあ？」

「まだね、21歳だよ。圭介はまだ…。今は年上にあこがれたりするそんな年齢かもしれないけど、あと2、3年もしたら、嫌になるかもしれない」

「で、瑞希の気持ちはどうなの？」

「私の？」

「そうよ。一番大事なのは、瑞希の気持ちでしょ」

「…ごめん。わからない。私も今だけ、気持ちが盛り上がってるだけかもしれない」

「そう…」

「桐子。ありがとう」

「え？」

「こういうこと、話せる相手がいなくて、ずっと苦しかった」

「話してよ。電話とか、メールとかなんでも手段はあるでしょ？瑞希でしょ。何でも話してみたらって、言ってくれたの」

「うん、そうだね。話すだけで、すっきりするね」

「そうそう。溜め込んでたんだよ。話そうよ。ね？」

「桐子は？今、大丈夫？」

「大丈夫。あ、でも一つだけ報告。私今、恋してるよ」

「ええ？」

「料理おいしかった？」

「うん」

「あの料理を作ってるコック長に恋してるの」

「料理に恋？」

「違う。コック長のほうよ。いや、彼の作った料理にも恋はしてるかな」

「そっか、気持ちは伝えた？」

「まだ。徐々にね。アピールしてるんだ」

「そっか。それで、生き生きしてたんだ」

「ああ、それもあるけど、この仕事が楽しくて、私にあってたみたい」

「うん、よかったね」

「瑞希も、自分の気持ちに素直になりなよね」

「うん、うん。そうだよね…」

7 怖さ

翌日の朝、稲森さんは早々と「お風呂はいつてくるね」と、出て行ってしまった。

昨日はいつの間にか、宴会から消えてどこに行ってたのと、部屋に戻った時には、かなり責められたが、圭介に卓球をしようとせがまれたからと言うと、変に納得してしまった。

「圭介は絶対に、柴田さんのことが好きだよ」

「それは絶対じゃないから。ただ、お酒飲んでるより、体動かしただけですよ」

「ふふん…」

力を込めて否定すればするほど、稲森さんは疑ってくるってわかってはいたが、実は稲森さんに否定していたわけではなく、自分自身に言っていたと思う。

昨日も桐子に、圭介は瑞希を好きだってまるわかりだと言われたが、どうかでその言葉を否定している自分がいる。

若気の至りだの、ほんの気まぐれだの言ってみたり、いや、若気の至りも何も、12も上の私を好きになるはずがないとか、そんなことを思っているのだ、私は…。

朝食にもまだ、時間があるので、庭を一人でぶらつくことにした。5月、緑がとても綺麗な季節。庭は小さいけれど、整然としていた。

ほろほろってため息をつく、後ろから、

「おはよう。早いじゃん」

と、桐子が声をかけてきた。

「おはよう。稲森さんが早くに起きて、お風呂いっちゃってさ、一人で暇だったから」

「瑞希はお風呂は？」

「うゝん、いいや。なんか、今入ってものぼせそう」

「考え事してた？すごいため息だったよ」

「ああ、うん…」

向こうに縁側があるからと言われ、庭の奥の方へと入っていった。縁側に二人で座る。どうやら、桐子は私の話を、じっくりと聞こうという体制らしい。

「昨日、素直になりなつて言っただでしょ」

「うん」

「なんかさ、自覚してたんだ。私、好きでもないのになんで茂さんとお付き合っているのかって」

「うん」

「圭介のことが好きなのも、自分でわかってる。だけど、踏み出せないのは、怖いだけなんだ」

「何が怖いのか？」

「いろいろと考えちゃって…」

ふうつてまた、ため息が出る。

「天秤にかけてみたりしてる。茂さんなら、今、結婚もできる年齢だし、収入が安定してるとか、将来とか、いや、圭介だって仕事してるし、その辺は大丈夫だろうけど…」

また、ため息が出た。

「でも、今すぐに圭介とは結婚とか、できないよなゝゝとか、だいたい2歳年下つてただけで前、結婚が駄目になったし、12歳も下なんてとんでもないとか。はゝゝゝ」

またもや、深いため息。それとともに、自分の本心が見えてくる。

「違うな…。違う。そうじゃなくって…」

「ん？」

「怖いだけなんだよ、ただ。あとは全部言い訳なんだ」

「言い訳？」

「そう。本当は年齢とかそういうんじゃない、いや、それもあるし、世間体とかもあるし、結婚も焦ってるし、それもあるんだけど」
「うん」

「でも、1番根っこにあるのは、圭介に好かれていないんじゃないかって怖さ」

「は？」

「桐子は、圭介も私を好きだとか、思ってるでしょ？」

「ううん、そう見えるよね。」

「そうかな」。私は、それ、信じられないんだ」

「言われてないから？好きだって」

「言われても信じられるかな…？」

「はあ？」

「馬鹿だね、馬鹿だね。でも、人をこうやって好きになったこと
あまりないし…。ああ、高校の頃好きだった先輩がいた。でも片思
いで、思いを告げたには告げただけど、卒業してそのまんま…。
そんなことあった。好きだと相手が自分を思ってくれるなんて、ど
うにも思えなくなる。そんなに好きでもない人なら、思わないんだ
けどな」

「自信がなくなるんだ？」

「うん」

「がーーーーっ！」

突然、私は頭をかきながら、思わずうなってしまった。
「何…？」

桐子が、びつくりしていた。

「これが、高校生とかで、見るだけでいいのとか、ふられても次
があるとか、そういう時期ならさ…」

「今は、そういう時期じゃないの？」

「33だよ」

「そうだけど」

「桐子は考えないの？今の好きな人との結婚」

「考えるよ。でも、なんて言うのかな、結婚ってタイミングとか、縁とかいろいろあると思うし、それに33歳だからって、焦る必要もないって言うか…」

「ええ？」

「40歳でも結婚する人いるし、今は、そんなに結婚適齢期ってないと思うしね。それよか、恋を楽しんでる感じかな」

「恋を？」

「瑞希は、焦りすぎてない？そりゃあ、会社も辞めて、いろいろと環境も変わって、未来に不安とかもあると思うけどさ」

「うん、余裕ないね…」

「でもね。瑞希の気持ちの方が大事でしょ？」

「うーん。だから、気持ちを大事にしようとしてるから、悩んじゃう」

「何を？」

「傷つくのが怖いだけかな。好きな人が自分を好きになってくれなかったらとか、結婚はやっぱり考えちゃうし、期待もする。だから、結婚できなかつたらとか…。あれこれ考えちゃうよ」

「先のことばかり考えすぎているんじゃないの？」

「そりゃあ、考えちゃうよ」

「でも、それって、取り越し苦労でしょ？」

「……」

「さて、もう行かないと。いろいろと忙しくなるから、見送ることはできるけど、それまでは時間取れそうもないな。また、ゆっくり電話で話そうよ」

「うん。ありがとう」

小走りに、桐子は戻っていった。

余裕があるのは、もう、道が決まっているからじゃないかって思った。好きな相手だって、自分の旅館で働いている人だし、だから桐子は、余裕があるんじゃないかって。

結婚ってなんだろう。人を好きになるってなんだろう…。

朝食を食べに食堂に行っても、男性陣の姿はなかなか現れなかった。昨日相当、飲んだんだろうな。

部屋に戻り、稲森さんとお茶を飲みながらゆつくりとして、荷物をまとめて、ロビーに行った。ロビーには、一人また一人と、男性陣が現れた。最後に来たのが圭介だった。

「すみません。風呂はいつて、遅くなりました」

二カつてやけに明るい笑顔で現れて、こつちが悩んでいるのが馬鹿らしくなるほどだった。でも、何気にそぶりが、よそよそしい。

「帰りは、それぞれ家が近い人同士で、別れて帰ることにして、ここでとりあえず、解散にしましょう。お疲れ様でした」

社長が、しかすれた声で言った。相当飲んだんだろうなって声だ。

「あ、俺は、圭介と柴田さん送っていくから、二人後ろに乗って」
かすれた声のまま、社長が言った。

ええ…？ 声に出さず、心の中でつぶやいて、

「あ、はい」

一呼吸、間をおいてからそう言つと、社長が、

「何？ 俺の車じゃ不服？」

と、冗談半分に言ってきた。

「いいいえ、光栄です」

私が苦笑いをする、圭介はこつちも見ず、

「社長、サービスエリアまで、運転します」

と、さつさと運転席に乗り込んでしまった。

「ああ、悪いな。そうしてくれると助かる」

圭介の隣もいづらいが、社長の隣もいづらくなって思いながら荷物を持つと、

「ああ、柴田さん、助手席でもいいかな？圭介が寝ないように、見張ってて」

と、ちよつと笑いながら社長が言った。

「寝ないっすよ、俺。こう見えても運転中は眠くなったりしないし、運転するの好きだし」

うん。それは知ってる。

「ははは。冗談だよ。ただ、後ろでゆつくりとさせてもらいたいな
って思ってるね」

「ああ、そういうことでしたら、いいっすけど」

なんとなく、社長は私が社長の隣だと、堅苦しい思いをするんじゃないかって気使ってくれたような気がした。

「柴田さんも、助手席で寝ていいですよ」

「あ、うん」

シートベルトをしている私に、圭介が言ってきた。

柴田さんか……。最近「瑞希さん」って言ってたのにな。社長がいて気を使ったのか、いや、思い切り、私との間に壁を作っている
とは思えないな。

シートベルトがなかなかできなかったが、圭介はまっすぐ前を向
いたまま、ほつとかれた。やっとシートベルトができると、圭介が
車を発進させた。なんだか、ちよつと悲しくなった。

運転中も何も、圭介は話さなかった。社長は後ろであつという間
に寝てしまい、車内は社長の寝息（たまに、いびき）だけが響いて
た。

しばらくして、圭介がラジオをつけた。軽快に流れる音楽と、D

」のやけに明るい声が、逆に車内を暗くさせていった。

こんなんで、明日からどうやって圭介の隣で、仕事をしようか…。

サービスエリアに着くと、社長がむくつと起き、

「ああ、もう着いた？ いや〜、よく寝れたよ」

と、後部座席から、話しかけてきて、

「トイレ休憩して、何か飲み物でも買ってくるかな」

と、さつさと、車を降りていってしまった。

圭介も車から降りて、大きなのびをした。

「柴田さん、寝れましたか？」

「え？ ううん」

「あれ？ 寝てなかったんすか？ やけに静かだから寝てたのかなって

…」

「え？」

「俺もトイレ行つて、コーヒーでも買つてこよう。柴田さんは？」

「あ、私も行く」

慌てて、お財布を持ち、あとを追いかけた。

トイレに行き、鏡を見た。ちよつと、疲れた顔をした私がいた。

圭介の隣で、ずっと緊張してた。この前、圭介とドライブしたときには、楽しくてしかたがなかったのに…。

だけど、だんだん、圭介がよそよそしいのは、私の思い過ごしかと思えてきた。黙っていたのは、私が寝れるようにって、思ってたれていたのかもしれないし。

水を買つて駐車場に行くと、どこに車を止めていたのかがわからなくなった。

「あれ？ 社長の車、どれ？」

きよろきよろしていると、圭介が、思いきり手を振っているのが見えた。

「ああ！」

ほっとして、車まで走っていった。

「どこだか、わかんなくなってますた？」

「うん」

「あはは。やっぱり。方向感覚にぶそうですよ、瑞希さん」

ええ？なんだよ。瑞希さんって呼ぶじゃない。それに思い切り、笑ってくれるじゃない。

「う、うるさいな。そうだよ、方向音痴だよ。悪い？」

「やっぱりね。あはは…」

ああ、やばいことに、泣きそうになった。目を合わせないようにして、助手席のドアに手を伸ばすと、

「あ、瑞希さんと俺は、今度後ろ」

って、圭介が私の手を取った。

「え？」

「後ろの席。社長の隣は、ちょっとびびるでしょ？」

小声で少し顔を近づけて、いたずらっぽい目つきで、圭介はそう言った。

確かに、そうだけど、君の横でも、緊張するんだよ。とは、言えなかったし、緊張しながらも、つながれた手が熱くなり、嬉しいのも事実。

後ろに二人で乗り込むと、運転席で新聞を読んでいた社長が、

「お？少しは、外の空気吸って、気分転換になったか？そろそろ、行くか？」

と、のん気に聞いてきた。

「はい」

「社長、なんか音楽かけてください」

「ええ？ないよ」

「え？まじで？」

「俺は、いつもラジオ聞いてんだよ」

「なんだ、そっか……。それじゃ、しょうがないっすね」

「いいだろ、ラジオでも。面白いじゃんか」

なんだか、圭介と社長の会話は、とても、上司と部下、それも1番若手の部下とは思えない会話だ。

二人の会話を聞いて「くす」って笑うと、

「俺が小さい頃から、社長は家によく遊びに来てて、年が離れてる兄貴って感じだったんです」

と圭介が、私に言ってきた。

「え、そうか……。部長の後輩って言ってたもんね」

「笹さんとか、笹おじさんって呼んでました」

「笹おじさん？」

「おやじが、笹って呼んでたから」

「俺の、大学のときの呼び名が、笹だったんだよ」

社長が、話に加わってきた。

「へ……。じゃ、会社に入ってから社長って呼ぶように？」

「うん。まあ、会社では……。でも、家に遊びに来るときは、また笹おじさんって呼んじゃうけど」

なんだか、社長が圭介をかわいがっているのも、圭介が社長になついているのも、わかるような気がした。きっと、圭介が小さな頃から、見てきたんだらうな。

高速を走り出し、ラジオにしばらく耳を傾け笑っていた圭介が、静かになったと思ったらすやすや寝てしまっていた。

窓に顔をくっつけ、無防備で寝ている横顔は、めちゃくちゃかわいかった。やばい、思い切り、その横顔に見入っている私がいる。

しばらく眺めていた自分に気づき、はって前を向いた。社長に気づかれてはいなかった……。すると、社長が、

「なんか、圭介って憎めないやつでしょ？」

と、やはり私が、圭介の顔に見入っていることに気づいていたようで、そんなことを言ってきた。

「そ、そうですね」

「不思議なやつだよ。誰とでもすぐに仲良くなる。無邪気って言うか、人懐っこいって言うか」

「はい、そうですね」

社長のそんな言葉を聞きながら、また、私の胸がぎゅってなった。

そうだ、誰にでもなんだ。この無邪気さも、愛らしさも、誰にでも見せる彼の姿なんだ。私にだけ、特別じゃない。そう自分に言っていて、私は自分の気持ちに釘を刺す。勘違いしちゃだめだよと…。

圭介とは反対の方を向いて、窓の外を見ていた。何も考えないよう、これ以上傷つかないよう…。

私はそうやって、自分が傷つくのをいつも防いでいた。これ以上のめり込むと、傷が深くなる。その前に身を引く。心をすべて見せる前に、閉じてしまう癖がある。

だから、元彼にだって、別れようと言われたとき、嫌だって言ったり、理由を聞かせてって言うこともできたのに、そのまんま、何も言わず、別れてしまったのだ。もっと傷が深くなる前に、傷が広がる前に、別れてしまおうと。

こてん……。

「え？」

びっくりした。圭介が私の肩に、もたれかかってきた。すぐ近くにある綺麗な圭介の横顔にも、かすかに私の頬をくすぐる圭介の黒髪にも、かすかに聞こえてくる圭介の寝息にも、どうにもこうにも、ときめいてしまう。

圭介の隣は、どうしてこうも、ときめいてしまうのに、あたたかいのか。心がほんわかしたあったかい空気に、包まれるのか…。

社長が、ちらつと、バックミラーを見たのがわかった。でも、私は圭介にそのまま、肩を貸し続けた。でも、圭介の顔は見ず、外を見続けていた。

高速を降りると社長が言ってきた。

「まず、柴田さんの家に向かうとするかな」

「あ、はい。すみません」

そんな会話をしている間、圭介は、そのまま動かなかった。

しばらくして、ごそ…、圭介が姿勢を直した。あ、起きたんだって思ったけど、圭介はなんにも言わず、反対側の外を見ていた。

社長が、

「え〜と、駅のすぐ近くなんだっけ？」

と、カーナビを見ながら聞いてきた。

「はい、そうです。えつと…」

道を説明しようとする、圭介が、

「その先、左です」

つて、社長に道の説明を شدした。

「あれ？なんで知ってんの？」

社長が聞くと、

「前に一回、送っていったことがあって」

と、なんの躊躇もなく答えていた。ま、そうだよ、あれは単なる代理できたんだし、誰かに秘密にしなくちゃいけないことでもないし。

「お前はすごいよな、一回で道、覚えちゃうんだな」

「ああ、う〜ん、この辺は、来たことあったから」

ちよつと言いくそうに、圭介がそう言った。へえ、そうなんだ、誰かがこのへんに住んでいるのか？

「友達でもいるのか？」

と、社長が聞いてきた。

「いえ、友達って言うか、まあ、えっと、諸事情がこれでもあるんですよ。いろいろと…」

「ははは、彼女か…」

あああ。駄目だし…。それは、社長、私の前で聞かないで…。

「違いますよ。正確には彼女じゃなくて…」

「え？」

「うーん、好きな人…かな」

「あれ？ ストーカーじゃないよな。彼女でもない人の家に、来てるって…」

「げげ！ ストーカーつか。俺？」

「え？ あれ？ 図星？ ははは。そんな追っかけなくてもお前なら、引く手あまたなんじゃないの？」

「もてないっすよ、俺。いつも面白い人とか、一緒にいて楽しいだけで終わるんすよね。どうしたらいいすか？」

「ははは。そこがお前の持ち味、お前らしいところだからな。そこを好きになってくれる人が現れるまで、待つしかないんじゃないの？」

「あ……。そんな人いるかな…」

そんな会話を聞きながら、私は少し気持ちが楽になった。なんだ、もてないんだ…。

いや、待てよ。何か大事なことを聞き逃している。

ああ、「好きな人」だ。いるんじゃないの。好きな人…。これは、ショックだ。彼女がいても、ショックだが、好きな人でもショックだ…。

家に着き、荷物を持ち「ありがとうございました」と、車を降りた。

「ああ、お疲れ様」

社長が、助手席から顔を向けて、軽く頭を下げた。圭介は、私が座っていた方にずれてきて窓を開け、

「お疲れ様！また、明日、会社で！」

と、明るく笑った。

ええい、ちきしょう。最後までかわいい笑顔を見せちゃってくれるじゃないの。さっきまで、「好きな人」がいるってことで、落ち込んでいたというのに、その笑顔を見ただけで、そんな暗さも吹き飛んでしまう。

そのあと、圭介はちよつと小声で、

「すみません。俺、寝ちゃって、重たくなかったですか？肩…」と、聞いてきた。

「うん、重かったよ」

憎らしいから、わざと意地悪でそう言ってみると、少し申し訳なさそうに、

「すみません。図に乗りすぎでしたね。すみません」と、謝ってきた。

「うそうそ、冗談。大丈夫だよ」

私がそう言つと、見るからにほっとした様子で、また明るく、

「じゃ、また明日！」

と、二力って笑った。

家に入ると、なんだか、一気に力が抜けた。

悲しくなったり、切なくなったり、喜んだり、ときめいたり、なんて最近の私の感情は、忙しいんだろうか。これも、全部、圭介のせいだ。っていうか、恋しているからなんだろうな。

こんな思いは、いつ以来かな。高校生のとき以来かな？元彼とだつて、こんなにくるくると、感情が入れ変わったりしなかったと思う。

圭介に振り回されているのかとも思ったが、やっぱり、私が単に、

圭介を好きだからだろうな。

そのまま部屋に戻り、そのままベッドに横になる。気づくと、深い眠りに入っていて、母の「ご飯よ」の声で、目が覚めた。もう、外は暗かった。

ああ、夜まで、寝ていた…と起き上がると、頭ががんがんに割れるように痛い。

下におりて行き、尻尾を振って私の足にじゃれついてくるクロの頭をなでながら、

「頭、がんがんする」

と、母に告げた。

「あら、顔も赤いわね」

私のおでこに母が、手を当てた。

「熱あるんじゃない？」

熱を測ると、38度5分。

「げげ…」

熱ってというのは、測って体温を知ると、ますます体中の力が抜けるといふか、頭が痛くなってくるというか…。

「食べれそうもないし、もう寝る」

私はまた2階に上がり、パジャマに着替え、寝てしまった。

その夜、夢を見た。どこかで、私は誰かを待っていた。車で、迎えに来てくれるという誰かを。でも、なかなか車は来なかった。悲しくて、会いたくて…。

朝、目が覚めて、私が待っていたのは圭介だって、はっきりとわかっていて。

起き上がると、まだ頭はがんがんにしていた。熱を測ると、37度5分。下がってはいるものの、まだ、熱はある。もう1度横になり、しばらくぼーっとする。

そのあと、携帯から会社に電話をして、社長に代わってもらった。
「柴田さん、どうした？」

「すみません。熱があつて。あの、今日忙しいですか？」

「大丈夫だよ。休んでも…。旅行で疲れちゃったかな？」

「すみません。明日には行けると思います」

「ああ、いいよ、いいよ。ちゃんと治してから来てよ。じゃあ、無理しないで、ゆっくり休養とって」

そう言つと、社長は、電話を切った。

ぼくとする頭で、思ひ出すのは、圭介の笑顔や、寝顔や、寝息や、あつたかさや…。

「会いたかつたな…」

と、ぼつりとつぶやく。

「熱、下がった？」

母が、部屋に入ってきた。

「まだ、熱あるから休むよ」

「そう。あ、そういうば、茂さん、昨日電話くれたの。熱があつて寝てるつて言つたらお大事にしてくださいって。なんなら、茂さんの病院にでもいつて、薬もらつたら？」

「冗談」。熱あつて、電車なんて乗りたくない。寝てたら治るか
らさ…」

「何よ。冗談に決まつてるじゃない。さ、寝てなさい！」

ちよつとふてくされて母は、出て行つた。

母の冗談に頭にきたのではない。茂さんのことをすっかり忘れて、茂さんのことを思い出し、気が重くなったのだ。ああ、やばいもうこの辺で、きちんと茂さんに、断らないといけないんじゃないのかな…。

夜、熱は下がっていた。夕飯を食べ、部屋に戻り、明日会社に

行くならお風呂にはいらなくちゃなって思いながら、どうやら、また寝てしまっていたらしい。

ブルル、ブルル…。携帯の振動の音で目が覚めた。

「あ、電話だ」

ベッドの横の小さなテーブルに、手を伸ばす。

「もしもし…」

「あ」

圭介だ…！

「圭介？」

あ…の一言で圭介ってわかってしまっている自分に、驚いた。

「寝てました？すみません。起こしちゃいましたか？俺」

「あ、平気。起きてお風呂はいらなきゃって思ってたし」

「風呂？熱もついいいんですか？」

「うん、下がったよ。明日には行けると思うけど…。今、会社？」

時計を見ると、もう9時過ぎていた。

「はい。今日は11時頃までかかると思います。あ、今、他の人は夕飯食べに行ってる…」

「圭介は？」

「俺は、非常食のカップラーメン食べます」

「そんなので、おなか膨れるの？」

「3個食えば、どうにか…」

「ええ…？大丈夫？きちんと食べなきゃ、体持たないよ」

「大丈夫ですよ。まだ、俺、若いし」

「ええ？それ、私に対する嫌味？」

「いえ、違います！」

「あはは、冗談だよ」

圭介の声にすごく、救われている私がいる。

「あ、よかったっす。元気そうですね」

「うん。もう、大丈夫だよ」

「すみません。熱出したって言うから、俺、悪かったなって、謝らなきゃって…」

「え？何を？」

「旅行で、俺、ちょっといい気になりすぎでした。かなり浮かれてて…」

「？」

「お酒飲んだ後に、卓球誘ったり、昨日の帰りも、車でずっとよっかかって寝たり…」

「卓球は関係ないよ。車でだって、大丈夫だって言っただじゃない」

「でも、俺がよっかかってたから、寝れなかったでしょ？」

「そんなこと…」

「すみません。俺、半分狸でした」

「は？」

「途中起きたんです。寝たふりしてました。なんか、瑞希さんあったかいし、そのままよっかかっていたくて…。でも、寝てなかったですよ。瑞希さん、ずっと起きてるの、わかってました。それで、疲れちゃったんじゃないですか？」

「……」

半分起きてたって言うのを聞いて、なんだか、ものすごく恥ずかしくなった。あったかいって、どういう意味なんだ。

「い、いいよ。そんな…。よっかからなくても、寝てないよ私。車とかであまり、寝れないんだ。だから、気にしないで」

「すみません」

「いって。それより、まだ仕事でしょ。頑張つてよ」

「はい。瑞希さんの声聞いて、すげえ元気でした。頑張れます」

「あはは。そう？私も、圭介の声を聞いて、元気でたよ。ありがとう」

「はい、あ、じゃあ、また明日」

「うん、また明日ね」

電話を切ったあと携帯を、にぎりしめていた。携帯からずっと、圭介のあったかさが感じられるような気がした。ずっとずっと、このあたたかさを感じていたい、そう思った。

そう思えば思うほど、茂さんに早く断らなくちゃって気が焦っていった。

いつも浮かぶのは、圭介の、圭介から感じるあの、あたたかさだった。それに包まれているのが、何よりも私の幸せだって、心の奥底から感じていた。

8 心の中

翌朝、会社に着いて驚いた。圭介が、よれよれのYシャツで、応接コーナーに座り込み、コーヒーとコンビニのサンドイッチを食べていた。

「あ、もう大丈夫ですか？」

大丈夫じゃないのは、圭介のほうじゃないのって顔をしていた。ひげがうつすらと生えていて、目の下にはくまができていた。

「寝てないの？」

「いや、寝ました。2時間くらい」

「仕事…そんなに忙しいの？」

「うーん、昨日なかなか出来上がらなくて…。こんなにかかると思わなかったんだけど」

「ええ……？みんな？」

「いえ、今朝までいたのは、俺だけっす。みんな昨日のうちに帰りましたよ」

「……」

「あ、こんなのですから、そんなにびつくりしないでください」

「あ、じゃあ、これから言ってくれたら、お弁当とか作ってきたりできるし…」

「いえ、いいっす。適当におなかすいたら、その辺のコンビニに行くから」

「……」

「顔、洗ってきます」

そう言つと、自分のデスクの引き出しから、歯ブラシ、歯磨き粉、タオルと髭剃りを持って、圭介は出て行ってしまった。

「おはよう、柴田さん、もう大丈夫？」

稲森さんが、後ろから声をかけてきた。

「あ、はい。すみません、昨日は…。なんだか忙しかったみたいなのに」

「ああ、大丈夫よ。私らは派遣だし、そんなに大変じゃないから」

「はあ。でも、みなさん、忙しそうですね」

「ここ最近が暇だったのよ。仕事なくなっちゃって、ちょっと焦ってたくらいよ」

こんなふうに、会社に泊まるようなことが多い仕事なら、デートの回数も減って、彼女ともすれ違いになるのは、しかたないことなのかな。

「この会社の人、結婚してる人少ないですっけ？」

「うん。まず、社長からして、独身だし…」

「え？」

「知らなかった？」

「はい」

「結婚しているのは、山木さんと、新藤さんと、…あ、二人だけだわ」

「へっ」

「まだ、若い人ばかりだしさ。私はもっと、結婚対象になる人がいるかと思ったら、年下ばかりじゃん、がっかりしたのよね」

そう言うと、自分のデスクへと稲森さんはいつてしまった。

確か、稲森さんがお目当ての楠木さんは独身で、30歳とか聞いたけど…。っていうことは、稲森さんより、年下だよね…。なんて思いつつ、社長が独身って言うのに、驚いてしまった。はて…。社長はいくつなんだ？

自分のデスクに戻り、仕事を始めると、圭介がさっぱりした顔で戻ってきた。

「圭介も1日たつと、ひげはえるんだ」

「それ、俺が子供かとも思ってたってことですか？」

「あはは。違うけど、なんかあんまりひげ濃くないから…」

「はやそうと思えば、はえますよ、もっとう…」

「でも、似合いそうにないよ。ひげ…」

「そうっすか？じゃ、はやすのはやめところ」

圭介はまだ、眠そうな目をしている。その目をこすってから、パソコンに向かいだした。

パソコンを打つ手は、いつもの綺麗な手だ。…しばらくうっとりそれを眺めて、圭介の隣にいるのを満喫する。

ほのかに、圭介の匂いがする。この前、隣でよっかかっていたときにもしていた。ほわってする、あったかい空気に包まれて、幸せを思い切り味わう。

この幸せはいつまで続くのだろう…。圭介は、好きな人とどうするのだろう。思いは告げたのか。そして、もしその人と付き合ってしまったら、私はどうしたらいいのだろう…。

私のパソコンを打つ手が止まる。しばらく止まる。圭介が他の人のもものになってしまったと思った瞬間、心が凍りついたかのように、止まってしまった。

「熱、下がってよかったですね」

「え？うん」

「風邪っすか？」

「うん、多分。でも、熱だけですんだみたい」

「病院行きましたか？」

「ううん、寝てただけだよ」

「ああ、なんだ、茂にいの病院にでも行っただかと思っただけにな」

「小児科でしょ。私子供じゃないし」

「はは…、じゃ、俺が風邪引いたら、茂にいのとこ、いかなくちや。子供だから」

「ふーん、わかってるじゃない。子供だって自覚してるんだ…」

「え？何それ？やっぱ、子供？俺」
「くすくす…」

パソコンを打つ手を止めて、圭介がこっちを見た。その目だ。その熱い視線にいつも、やられてしまう。

「瑞希さんさ、いくつくらい年下でもOK？」

圭介が、小声でそう聞いてきた。

「へ？」

「なんでもない…」

圭介はそう言つと、また、パソコンの方を向いて手を動かした。た。

なんだよ。ドキッとするじゃないか。私の心の声でも聞こえちゃったかと思つたよ。

彼は、私の気持ちに気づいているんじゃないかって時がある。ほのかにそんなことを匂わせるようなことを言う。そのたび、心臓が止まりそうになる。

ばれてもいいかもと思うし、ばれたら、ここにはいられないんじゃないかと思うこともあるし…。もう、ばれちゃった方が楽だつて、開き直りそうになることもあるし…。

もし、私が彼に気持ちを打ち明けたら、彼は何て言うだろう。どう反応してくるのだろう。それを考えると、どうしても、

「すみません。俺には、好きな人がいますから」

「すみません、瑞希さんのことは、女性としてみていません」

なんていう言葉を言っている、圭介が浮かんできたり、

「ええ？冗談でしょ」

とか、

「瑞希さん、茂にいがいるでしょ」

とか、そんなふうと言っている圭介も浮かんでくる。どんなに、いい答えを言っている圭介をイメージしようとしても、浮かんでこな

い。

「俺も好きです」

なんて、とてもじゃないけど、言うわけがないって思ってしまう。

6時を過ぎて、社長が稲森さんと私に、もう帰っていいよと言ってくれて、ようやく席を立ったが、周りみんな忙しそうで、帰るのに気がひけた。でも、

「おつかれっす！」

という、圭介の元気な声で、

「お先に…」

と、ロッカーに向かうことができた。

「ああ、疲れた。じゃ、お先にね」

稲森さんは、さっさと鞆を持って、帰ってしまった。

私はカーデイガンをはおり、鞆を持ち、ちらつとまた圭介の方を見た。圭介は、のびをして目をこすり、また椅子に座りなおして画面を見たあとにすぐ、私の視線に気づいたらしい。こっちを見て、立ち上がった。

それから、足早に私のほうにかけてきて、

「コンビに行くんで、途中まで一緒にいいですか？」

と、人懐こい目で言う。

「うん」

まだ一緒にいられるのが、嬉しい…。

二人でエレベーターに乗ると、

「俺、汗臭くないですか？昨日風呂はいれてないし…」
と、圭介が聞いてきた。

「大丈夫。圭介の匂いはするけど」

「え？なんすか？それ。俺の匂いって…」

「わかんない…」

「くさいっすか？」

圭介は、自分の腕をくんくん嗅いだ。

「ううん…。前にね、テレビで見たことあるよ。10人くらいの男性が1日Tシャツ着て、それをそれぞれビンの中に入れるの。それを10人の女性が匂いを嗅いで、1番いい匂いのTシャツを選ぶんだ」

「げ？1日着たやつ？くさそ…」

「それが、そうでもないの。良い匂いがするって言うんだよ。草原のような匂いとかって…」

「へええ！」

「でね、DNAを調べると、よりDNAが近い人はくさく感じて、遠い人がいい匂いがするんだよ」

「まじっすか？へえ。面白いですね。本能でそういうのかぎ分けるんすかね？」

「ねえ、面白いよね」

「あ、じゃあもしかして、俺が臭くないなら、遠いってことじゃないんですか？もし、DNAが近かったら、俺、きつと臭いかもしれないっすね」

「そうだね。そういえば、草原のような匂いがするよ」

「ええ？まじっすか？」

「うそ」

「なんだよ…。それ、ちよつと喜んだのに」

「あはは、草原の匂いって言われて喜ぶの？」

「そうじゃなくて、瑞希さんと俺、いい相性なのかなって。だって、より遠い方がいいんでしょう？強い子孫残せそうじゃないっすか」

「くす…。圭介はどんな相手でも、強い遺伝子残せそうだよ」

エレベーターを降りて、コンビニにまで行き、買い物に付き合うよって私もコンビニに入った。お茶とお弁当をかごに入れ、雑誌を立

ち読み始めた圭介の隣で、すごい勇気をふりしぼってみた。

「圭介の好きな人は、圭介のことをさ……」

「え？」

「いや、その人もいい匂いがするって、言ってくれたらいいのにね……」

「……」

「あ、ほら、うちの近くに住んでるんでしょ？その人に会いに来たりしないの？もう」

「ああ、はい。もう行ってません。っていうか、一回だけっすよ、行ったの……」

「そうなんだ。…会えたの？その時……」

「いえ。なんか、ずっと待ってたらまじ、ストーカーですよ。偶然装っても、不自然だし……」

「じゃあ、会えずじまい？」

「いいんです。もう……」

「いいの？あきらめた……とか？」

「いえ、会えてるからいいんです。もう……」

そう言つと、圭介は照れくさそうに、雑誌をわざとらしくパラパラめくつた。私は、何を言ったらいいのか、話を続けられなくなつた。

付き合つてるの？とか、気持ちは伝えたの？とか、彼女なの？とか、そんな言葉が頭の中をめぐつたが、結局何も聞けないまま、コンビニを出た。

レジで品物を買ひ、出てきた圭介に、

「じゃ、仕事頑張つて」

と言い、後ろを向いた。

足ががくがくしていた。でも、それを悟られないように、しっかりと踏ん張って歩いた。だけど、ヒールが時々、まるで、ぐにやつ

てやわらかいものにもなったかのように、よろけてしまう。

この前、彼女ではないと否定していた。まだ、彼女じゃないんじゃないか。じゃあ、まだ、大丈夫かもしれない。

何が…？圭介が他の人のものになっていないってこと…。でも、心はすでに、その「好きな人」の方を向いてるよ。じゃあ、こっちを向いてもらえばいい。…そんなの、無理！

そんな言葉が、頭をかけめぐり、やっとこ、足に力が戻ると、私の足はどんどん早くになった。まるで、圭介から逃げるようにと。

その夜9時過ぎ、携帯がなった。…圭介？なんとなく出たくないって思いながら、携帯を手にとると、茂さんの名前が表示されていた。

「はい、もしもし…」

「あ、瑞希さん？茂です」

「こんばんは」

「熱、下がりましたか？」

「はい。もう、大丈夫です」

「それは、よかった。昨日電話しようかとも思ってたんですが、もし寝てたら悪いなって思って」

「あ、はい…」

茂さんと話をしていると、どんどん胸の奥が苦しくなるのがわかった。原因は、罪悪感だ。

「あの…」

「はい？」

「今度、お話があるんです。時間とってもらえますか？」

「はい。実は、僕も話があります」

「え？」

ビクッとした。何の話だろうか？結婚を断る話なら良いが、その逆だったらどうしようと、一瞬たじろいだ。

会う約束は、その週の土曜の夜にした。

私は、何回も練習をした。頭の中で、シナリオを考えた。断る理由をあれこれ考えては、振り出しに戻し、もう1度シュミレーションをした。だが、どれも自分の気持ちを偽っている。

理由は「ほかに好きな人がいる」それだけだ。なのに、今は結婚を考えられないだの、私は茂さんに不釣り合いだの、そんな言い訳ばかりを考えている。

はあ……。

ボタン。隣のドアが閉まる音がした。修二だ。こんな時なら修二は何て言うかな？

過去2回の見合いを断るときには、親に断ってもらったんだが、今度ばかりはそうはいかないだろうな…。

コンコン。

「修二、今いい？」

修二に相談するつもりはなかったが、どうしても聞きたいことがあった。

「何？」

修二がドアを開けた。むっとする匂いがする。

「修二にしても、兄さんにしても、なんでこう、部屋が臭いの？」
「うるせえよ、そんなこと言いに來たの？」

「DNAが近いからかな〜」

「だから、そんなことを言いに來たのかって？」

「彼女、柚ちゃんは、修二のこと臭いって言わない？」

「言わねえよ。だから〜」

「ごめんごめん、そうじゃなくて、聞きたいことがあって…」

「んあ〜？ねっころがつていい？すっげ疲れてて」

「いいよ。でも寝るなよ。途中で…」

「かったる…」

こんなでよくまあ、あんなかわいい彼女がいると思うよ。でも、ま、彼女の前じゃこうじゃないんだろうけどね。

クカ~~~~ツ。っていういきは、修二の部屋のラグの上で寝ているクロのいきだ。たいていが、修二の部屋で寝る。たまに修二がいないときや遅いときは、私の部屋に来る。どうも、人がいないと寝れないという、さびしがり屋の犬らしい。

「修二さ、まだ結婚しないの？」

「何？いきなり。あ、もしや、おふくろに聞いてこいって言われた？」

「違うけど、付き合っただけなのに、何でかなって」

「う〜ん、まだ柚、24歳だしさ」

「24歳って十分結婚できる年でしょ。10代なら早いけど、早くはないよ、もう」

「う〜ん」

修二は面倒くさそうに、頭をぼりって掻いた。

「どうせ、修二がまだ遊びたいんじゃないの？結婚なんて人生の墓場とかって考えてて…」

「それ、姉貴の元彼でしょ」

「う…。うるさいな…。私のことより今、あんたのね〜」

「あ〜、はいはい。うっさいのはそっちだと思うけど。人がいつ結婚しようがいいじゃんよ。自分のこと考えたら？いい年してるんだから」

グサグサ。ほんと、こいつは〜。

ああ、こんな口の悪い、態度の悪い弟だからね、圭介がめっちゃかわいく見えるのよね。

「柚がさ、まだ結婚したがつてないんだよ」

「え？」

「俺は別に、いつでもいいんだ。今すぐだって…。でも柚の周りは、

まだ結婚しないで遊んでるやつ多いし、今、仕事も楽しいみたいだし、結婚はまだ先でいいって言うからさ」

「そうなんだ、あ、でも、そんなの待ってていいの？そのうち柚ちゃんかわいいから、ほかにいい人…」

「縛るの嫌なんだよね。俺もそういうの嫌だし」

「でも…」

「結婚ってタイミングみたいなのあるし、これからも柚と付き合ってたなら、結婚するかもしれないし、でも先のことだからわかんないよ」

「そんなもんなの？もう5年付き合ってた…」

「俺の中では、結婚するなら柚って決めてるけどさ」

「決めてる？決め手は何？」

「何って…。うゝゝゝん？ずっと一緒にいたいかどうか？」

「いたいんだ？」

「もう、いいじゃん。なんでこんなこと姉貴に…、あ！そうか。小児科医との結婚、決まったとか？ってか、悩んでるのか？」

「う…」

「ああ、それで、俺の話でも参考にしようかって感じ？」

「う…」

「図星？でも、そういうのは、自分で決めたら？」

「わかってるよ！ただ、参考までに、結婚をどう思っているのかなってさ…」

「姉貴の方こそ、結婚をどう思ってるんだよ」

「わかんない」

「は？」

「一生の問題でしょ。なんでみんな、結婚をしようって考えられるのかな？だって、一緒に暮らすんだよ？それも一生」

「ま、一生じゃない人もいるかもしれないけど」

「でも、結婚するときにはみんな、離婚考えてはいないでしょ」

「先のことまで、あれこれ考えてたら、何もできないんじゃないの？」

「え？」

「先の先まであれこれ考えてたら、動けないし、一步も踏み出せない。一步踏み出してから、また考えりや良いじゃん」

「でも…」

「姉貴は、考えすぎだよ。いつも先の先のことまで考えては、動けなくなってる。仕事も転職考えててもできなかっただろ、今の今までさ」

「あ、あんたがお気楽すぎてるんじゃないの。もっと、先のこと考えて、柚ちゃんとだって…」

「考えてないことはないけどさ、でも、先のことばっかじゃ、今のことおざなりにしてるよ」

「え？」

「だから、今をもっと大事にしたらってこと」

「……」

「結婚も、したいかどうかだろ。その人と一緒にいたいかどうかだろ」

「うん」

「後悔するかしないかとか、考えすぎだよ。だいたい、後悔しそうならやめりやいいじゃん。そんなに一緒にいたい相手じゃないんじゃないの？」

「…じゃあ、ずっと一緒にいたい。この人といると幸せだって思える人が、もし、現れたら？」

「その人と、ずっと一緒にいたらいいじゃん。その人と結婚考えたら？」

「うん。でも…」

「でも何？また、なんかあれこれ、考えすぎてるんじゃないの？」

「う…」

「姉貴、いつもそうだよ。学校決めるんでも、仕事決めるんでもさ。自分が行きたいところにいきやあいじゃん。親の言うことあれこれ聞いて、こっちがいいのか、あっちがいいのか、あれこれ悩んで、一番、無難なところにして。仕事もさ、せっかく総合職の話きてたのに、それ受けたら結婚できないかもだの、自分には向いてないだの、やってみなきゃわからないってのに。それに、仕事と結婚と両立だってできるかもしれないじゃん」

「そ、そんなこと言うなら、柚ちゃんも」

「柚はいいの、今は姉貴のこと言ってるの」

グウ、グガ~~~~ツ。こんな言い合っている中で、よく寝てるよな~~~~と、つい二人でクロの寝顔を見た。

「俺も寝たいんだけど。すっげ、疲れててさ」

「わかったよ。おやすみ」

と、ドアを閉めかけ、

「最後にもう一つ、柚ちゃんさ、あんたのこと草原の匂いがするなんて言うことある？」

と聞いてみた。

「ああ、はいはい、草原の匂いもバラの香りもするってよ。おやすみ」

けっ。馬鹿にして…。と、私は舌打ちをして、部屋を出た。

はあ、痛いな。弟め、私の性格をよく知ってるじゃないか…。

そう、私は取り越し苦労ばかりをしている。ああ、あれだ。メニューの件でもそうだ。自分でこれだと決めて、人の方がおいしそうで、あっちにしておけばよかったと思うことが多々あり、それから、店のお勧めや、日替わりでも頼んでおけば、間違いはないかなっていう、そんな性格なのだ。

自分の意見をしっかりと持つ修二も桐子も、羨ましいし、素直で

純粹で、無邪気な圭介は もつと羨ましい。

その夜は、なかなか寝れなかった。寝付けないならお酒でも飲もうと、ダイニングに行くと、母がテレビを見ながら、一人でビールを飲んでいた。

「あれ？めずらしくない？」

「うん、なんかお風呂はいつたら、ビールが飲みたくなくて」

「ふうん。私も飲みたくなくてさ」

「なくに？病み上がりの人が」

「もう、大丈夫だよ。それ、少し分けてよ。コップ一杯だけ」

「わかったわよ」

小さなコップを持ってきて、母がついでくれた。

「お母さんはさ、恋愛結婚でしょ？」

「そうよ」

「決め手は何？お父さんと結婚しようって決め手」

「ないわね」

「へええ？」

「そうねえ、しいて言うなら、お父さんのことを好きな人が、同期にいたのよね」

「へえ。それで？」

「取られたくなかったのよ。だから、こっちから、プロポーズした」

「まじ？！」

「まあ、結婚してくださいとは言わなかったわよ。でも、遠まわしにね」

「なんて言ったの？」

「柴田さんのような人と、結婚ができたらいいなって…。そんな感じ？」

「それで、お父さんは？」

「何も。でも、それ、おおっぴらにみんなで飲みに行ったとき言っ

ちゃったから、周りがさわいでさ、周りにこう、二人くつつけられた感じ？」

「お母さんの作戦じゃないの？それ」

「ふふ、違うわよ。飲んで酔って、本音をぼろって言っちゃっただけで、そんなにお母さん、恋のかけひきうまくないしね」

「それで、お父さんも、その気になったとか？」

「そうね〜。あまりそういう話してくれない無口な人だから、わからないわ、いまだに。本人に聞いてみたら？ま、言わないだろうけどね」

「そんな無口な人、どこがよかったの？」

「あったかかったのよね、なんか、一緒にいて…」

「ふうん」

「それにあの頃は、わりかし、かつこよかったのよ〜」

「へえ！」

「あなたは？茂さんとどうなの？」

「う、うん…」

「お母さんね、結婚はやっぱりしてほしいけど、でも、何よりも幸せになつてほしいのよ。だから、ただ結婚をしてほしいわけではないの。わかる？」

「幸せな結婚をしてほしいんでしょう？」

「そうなのよ」

「わかるよ」

「お母さんから見たら、茂さん良い人そうだし、幸せになれるんじゃないかって思うけど、でも、当の本人が決めることだから」

「うん」

「焦るなつて言う年でもないしね。子供を生むこと考えたらさ、そろそろ結婚した方がいいって思うけど、でもね〜」

「私が決めることだから…ね」

「そ、お母さんもお父さんも、なんも言えないわ」

ビールを飲んで、柿の種をつまむと、母は、少しため息をついた。

「タイミングかしらね。結婚しても良いなって人と、結婚する年頃
のとき、付き合ってたなら、結婚する…」

「結婚適齢期つてあるのかな」

「ないとは言えない。子供のことを考えたらね」

「そうだね。は……。なんでさ、世の中の人はずうやって、巡
り会っちゃえるんだろうか？」

「そうよね。でも多分、ほとんどの人は、そんなことも考えず結婚
してるわね。あなたは、考えすぎよ」

「く……。やっぱり？」

「頭で考えないで、ここに聞くの」

そう言つと、母は自分の手を心臓の辺りにおいた。

「ハート？」

「そう、感じてみることに。考えてもわからない。でもハートはきつ
と、わかつてる。出会えたらね、この人だって。そう感じたら、ゴ

ー！一歩踏み出してみる！」

「うん」

「茂さんは、ハートで、感じなかった？この人って」

「え？」

「この人かも…でもいい。そんな予感でもいい。感じたから、もう
一回会ってみたんじゃないの？」

「うん。どうかな…」

もう一回会つてもいいって思ったら、別の人に出会っちゃったか
らな。

「もし、ハートが違うって言うてるなら、部長に悪いとか、これを
逃したらやばいとか、年齢がとかそういうの関係なく、断りなさい。
ね…」

「うん」

ビールを飲みほし、ダイニングを出ようとして立ち止まり、振り返って聞いてみた。

「それは、やっぱり私から本人に？」

「え？」

「その、断るときにはさ……」

「そうね、今回はあなたからの方が、いいかもね」
「うん」

ドアを開け出て行こうとすると、母のため息が聞こえた。やっぱりだめだったかって言う、ため息のようだった。

部屋に戻り、カーテンを開けて夜空を見ると、月が綺麗に見えた。ハートに聞く……。今に生きる……。母と弟の言葉を思い返して、一人でつぶやいた。

今、私の心にいるのは、どっからどう考えても、いや、考えなくとも、圭介一人だ。圭介しか住んでない。もうどっぴりと圭介が住んでいる。答えは出ている。

ただ、私のすることは、私の心に素直になる、それだけだ。今、このときに生きて、心に素直に生きる。それが今の私には大事なんだ、きつと……。

不安と期待と、いろんなものが入り混じって、その夜は、本当に眠れなかった。

9 素直に

土曜日が来た。その週は、会社に行っても、圭介のことを見るたびにどきどきしてしまい、それを人にも圭介にも、悟られないようにするのが大変だった。

冷静にふるまおうとするが、ちょっと目が合っただけで赤くなる自分がいて、過剰に反応しすぎだって、自分に渴を入れたりしていた。

特に、稲森さんのそばにいるときには注意した。女の直感が働くのか、彼女はするどかったから。

時々、冷静に振舞おうとしすぎて、圭介につっけんどんな態度を取ったり、わざと冷たくしたりしたが、どうやら、圭介はそんなことおかまいなしだったようで、相変わらずの明るさと人懐こさで、よく話しかけてきた。

そのたびに、また私の顔はにやけてみたり、赤くなってみたりで、百面相でもしていたんじゃないかって思う。

そして、いよいよ土曜日だ。もう、私は素直になろうって決めていた。好きな人ができたと、はつきり言おうって。

約束の時間より10分も前に着いた。横浜で待ち合わせをしたが、駅が広くて、いつもわかりやすいようにと、そこの時計の前で待ち合わせをしている。だが、ここも人混みがすごく、相手を見つめるのが大変だった。

時計から音楽が聞こえた。約束の6時になったんだな。すると、人影から、茂さんが急いでこっちに来るのが見えた。

「待ちましたか？」

「いえ、大丈夫です」

いつもの会話だ。たとえ、早くに来てても私はつい、大丈夫と言ってしまう。これが、圭介なら、

「うん、待ったよ」

と、正直に言ってるかもしれない。

「また、バイクオーターに行きますか？」

「はい」

どうやら、茂さんはバイクオーターに車を置いて、わざわざそこうまで来ているようだ。だったら、バイクオーターで、待ち合わせをしたらいいのにも思うが、こつやって会つのも今日が最後になるだろうから、それは言わなかった。

アトランティスというお店に入る。なんだか、船のキャビンのようなお店だ。ディナーのセットを頼み、二人で水を少し飲んだ。私は、実は、のどがからからだった。なんて切り出そうか、そればかりが、頭をぐるぐるする。

「話は、何ですか？」

「はい」

「言い出しにくい事なのかな？」

「はい。あ、いえ……」

しまった……って思ったが、後の祭りだ。茂さんの顔が曇っているのがわかる。だが、

「僕の方から話した方がいいのかな。言い難いことなんです……」

「え？」

茂さんの話も、言いづらいことなら、結婚を断るということだろうか？

「叔父から、結婚はどうなったかと、聞かれました」

「はい」

「何も話を進めていないと答えたら、結婚をする気があるのかとも聞かれました」

「はあ…」

「結婚をする気がないのに、お付き合いをしていたら、瑞希さんに申し訳ないと思わないかと、言われました」

「部長が？」

「はい。それで…。考えました。一晚、いえ、数日間…」

「はい…」

「自分は仕事人間で、本当に頭の中は仕事のことばかりです」

「はい」

「休みの日まで、患者さんに会うほどですし、家にいても、急患があれば、病院に行きます。だから、結婚しても家庭をきちんと築けるとか、家族を守るとか、そういうことが自分にできるかというところ、正直、わかりません」

「はあ…」

「そんな自分でも、ついてきてくれる人でないと、多分、うまくはいかないと思っています」

「……」

「こんな僕についてくれますか？」

「え？」

「それが聞きたかったんです」

「……」

「卑怯ですよ。瑞希さんに決めさせて、自分で決断しない」

「いえ…、そんなことは…」

「仕事以外は、本当に僕は優柔不断です。以前、付き合ってた彼女とも、この優柔不断が原因で、別れました。自分に合うかどうかは、そっちが決めてくれと言ったら、即座にふられたんです」

「……」

「そんな人には、ついていけないと…。瑞希さんも、そうですか？」

「私…、いえ、あの…」

「はい…」

「結婚、ってどういうものって考えてますか？」

そう聞くと、しばらく茂さんは考え込んで、

「そうですね。正直、わかってないですね。自分は、仕事が一番なので。家庭というのは、仕事を支えてくれる場所。自分の奥さんになる人は、自分を理解してくれて、仕事から帰ると、暖かく出迎えて、そんなイメージがあります」

「奥さんとの信頼が、大事になりますよね」

「そうですね」

「私、ごめんなさい…。きっと、理解できないと思います。それに、茂さんを支えていく自信もないです。いえ、そんなの結婚してみなくちゃ、わからないって言う人がいるかもしれないけど」

「でも、今思えないなら、無理ではないでしょうか？」

「はい。無理ですよ…」

一呼吸おいて、やっぱりきちんと言わないかと思い、勇気を出した。

「でも、私、実は…」

「はい？」

いきなり、茂さんの顔を見て、声のトーンをあげたので、茂さんは驚いたようだった。

「そう、考える、えっと…。支えていたらいいとか、一緒にいれたら、それだけでも幸せだろうとか、たとえ相手の仕事が忙しくて、家にいる時間が少なくても、それでも、幸せだろうなって思える人が…。います」

「え？」

「いるってというか、出会っちゃったってというか…」

「もともと、そういう人がいたんですか？」

「いえ。最近…。その…」

「新しく勤めた会社にですか？」

「え…、いえ、あの…」

「いや、問い詰めたりしませんよ。そういう人がいるのなら、なおさら、この話はなかったことにしないとならないですね」

「すみません。私、本当はもつと早くに言わないとつて、ずっと思つて…。でもなかなか言えなくて…」

「いいんです。こつちも、煮えきらない態度でいましたし」

「すみません」

「謝るのはなしです。こつちも、結婚をどうしようかと思ひながら、お付き合いしていたんですから」

「はい…」

「その人には、気持ちは伝えたんですか？」

「まだです」

「こつちをはつきりとさせてから…と、思つたんですか？」

「はい。それもありますけど…。自信がなくて」

「大丈夫ですよ。それだけ想っているのですから、伝わるんじゃないですか」

「…ありがとうございます」

「ちょっと、羨ましいな。いや、相手がじゃなくて、そういう人がいることです。そういう相手がいるだけで、幸せなことだと思いますか？」

「そう、そうですね」

その言葉は、私の心に光をくれた。そうだ。そういう相手がいるつてことは、すばらしいことだ。そうだ。そんな人と会いたい、会つてみたいって思っていた。そうか、出会えたのか！

茂さんは、今日はそれでも、きちんと車で送ってくれた。律儀に、家の前まで送ってくれると、

「おやすみなさい。それと、今までありがとうございます。お幸

せになつてください」
と、言ってくれた。

お幸せに、か……。嬉しいようで、その言葉を受け取れず、もてあましながら家に入った。

茂さんには、きつちりとお断りをしたことを母と父に報告をし、部長には茂さんから話してくれるそうだからと告げた。父は黙ってうなずいて、

「焦ることはないから。落ち込むこともないから……」
と、言った。母も、

「あなたが選んだことが、ベストなことよ」

とだけ、ぽつりと言った。修二が、その話をなにげに、ダイニングで聞いていた。

部屋に戻ると、クロを連れて修二が部屋をノックした。

「なんかさ、クロが今日は姉貴と寝たがっててさ」

もちろん、うそだ。クロが1番好きなのは修二だ。修二の横で思い切り尻尾を振って、いつ修二の部屋に連れて行ってもらえるかを期待しているのがわかる。

「私が、あれでしょ。落ち込んでると思って、クロを貸してくれるって言うんでしょ？」

「いや、まあ、その。あれだよ。うん……」

「なあに？」

「早くに忘れちまうのがさ、1番だよ」

「別に、落ち込んでないよ。ふられたわけでもないし」

「あ、そう？なら、いいけど」

「ただ」

「え？」

「あんたに言われたように、今に生きてみようかなって」

「ふん」

少し、自慢げに鼻で笑うと、クロを連れて修二は部屋を出て行った。自慢げを装いながら、あれでも照れているのだ。まったく、なんていうか、わが弟はひねくれものだ。無邪気で、素直な圭介の爪のあかでも煎じて飲ませたい。と、そうだった。思い出した。圭介だ。

私はこれから、圭介とどうしたらいいのか…？

悩んでもしょうがないし、何も解決しないので、さっさと寝ることにした。お風呂に入り、頭の中を綺麗さっぱり、シャンプーとともに洗い流し、髪を乾かして、さっさとベッドに横になった。

頭を空っぽにしたせい、茂さんにきちんと言えてすっきりしたせいか、久々に熟睡することができた。

翌日、日曜日、朝早くから電話がかかってくるまで、目覚ましもかけず、本当に私はぐっすりと寝ていた。電話をくれたのは、圭介だった。

「あ、俺！」

俺って…。あなたは何かい？彼氏ですかい？でも、すぐに圭介だってわかるし、そのなれなれしさが嬉しかったりする。

「寝てた…とか？」

「早いね、もしや、徹夜？今、会社？」

「いや、昨日は5時で帰りました。もう、この前の仕事区切りついたんで、しばらくは、ゆっくりできます。」

「あ、そう」

今、何時だ？って時計を見ると、8時過ぎていた。あれ、こんな時間まで寝ていたのか。うわ、何時間寝たかな…。

「今日、暇してますか？」

圭介が聞いてきた。

「はい。暇してますよ」

「ですよね」

なんだ、その、ですよっていうのは…。少しムカツときた。私がそんな暇人に見えるのか？

「ドライブしませんか？車で、迎えに行きます」

「え？うん。いいよ」

「じゃ、えつと、10時頃でいいですか？これからシャワー浴びたり、頭洗ったりするから」

「はい、こつちも支度したらそのくらいの時間になるかな」

「じゃあ、あとで！家まで行ってもいいっすよね」

「うん」

なんだ？このすつきりとした感じで、誘ってきたのは、えつと、前にもあったような…。あ。そうだ。茂さんと約束した日の代理人代理を頼まれ、どうどうと、車で来たんだっけ。

うわ。もしや、もしや、また部長にでも頼まれたのか？私が結婚を断られ、傷心の身だから、ドライブにでも誘ってあげる…。とかなんとか…。

そんなことを思いながらも、私は洋服をどれにするかを悩んでいた。

髪をセットしなおし、春らしい服にするかつて、会社に着ていけそうもない、白の綿のブラウスに、膝丈のジーンズをはいた。籐のバックを持ち、白のミュールを玄関に用意する。

「どこ行くの？」

そんな私を見て、母が聞いてきた。

「ドライブ」

「誰と？」

眠そうに今頃起きてきた修二が、聞いてきた。

「部長の、息子」

「ええ？」

二人同時に、驚いていた。

「なんか、電話あつて、多分また部長にたのまれたんじゃないかな」

「え？いくつだっけ？」

修二が聞いてきた。

「21歳」

「あ、そ。まあ、せいぜい、楽しんできたら？気分転換になつていいと思うよ。でも、ほんと、部長さん、優しくて涙出るわゝゝ、俺」

「……。いいのかしらねゝゝ。いくら部長さんの息子さんとはいえ、こんな33の三十路の女とデートはかわいそうでしょ」

きつ！母をにらんだ。それが母親の言うことが。

「帰りに寄つてもらいなさい。お寿司でも取りましょう。あ、それともピザとかの方がいいかしらね？若いから」

「肉だろ、肉！焼肉か、すき焼きか、ステーキにでもしたら？」

「そうね。あ、ひさびさに、ウツドデッキでバーベキューしない？」「いいじゃん」

我が家には、狭いながらもウツドデッキがあり、バーベキューをまだ兄がいた頃よくしていた。兄が好きで（アウトドア派だから）兄が材料を買つたり、焼いたりしてくれていたんだよね。

「買出しは、修ちゃん、行つてきて」

「え？俺？」

母にいきなり言われて、修二は嫌そうな顔をした。面倒くさがりな修二は、そういうの嫌がるんだよね。

「柚ちゃんも誘えば。どうせ、会うんでしょ」

と、私は修二に言ってみた。

「今日、仕事だよ、あいつは。生徒連れて、キャンプだつて」

「あ、そう、じゃ、そつちでバーベキューしてるかな？」

「あゝゝ。ちきしょう、めんどくせゝゝ。せつかくの休みが。肉とか言っんじゃないかった」

ぶつぶつ言いながら、修二が顔を洗いに洗面所に向かうと、ピンポーンと、チャイムが鳴った。

「はーい」

修二が起き立てのくしゃくしゃな頭の、思いきり目やにがついたままの顔で、出てしまった。

「あ…」

どうやら修二を見て、一瞬驚いた様子の圭介の声がした。

「おはようございます。俺、いえ、僕は瑞希さんと同じ会社の、榎本圭介といまして、あの…、瑞希さんは…」

「ああ、おはよう！」

慌てて玄関に行こうとすると、私よりもわれ先にと、クロが玄関に行ってしまった。

「ワンワン！」

尻尾がぐるんぐるんと回っていて、ものすごい喜びようだった。

そのまま、クロは修二の、

「待て、クロ！」

という声すら聞かずドッスンと、圭介の体に体当たりをして顔をなめだした。

「あら、まあ。クロちゃん、すごい喜びよう…」

母が驚いていた。クロは家の人にはなつくものの、そんじょそこらの人には、大人しい頭のいい子なのだ。

「クロっていうんですか？ すごい、かわいい！」

圭介は、逆にクロをぎゅって抱きしめてしまった。いやーもう、嬉しいってばかりに、クロの尻尾は、さらにぐるぐると回る。

「こら、クロ、離れなさい。すみません、いつもは大人しいんです、こいつ」

「そうなんですか？ でも俺、大丈夫です。犬大好きで、今飼ってないんですけど、前柴犬飼ってて」

圭介は、しばらくクロをなでまわしていた。

「いいな、すつげえいいな。俺、散歩連れっちゃだめっすか？あ。今日ドライブに連れてったら、だめっすかね？」

「あ、いいけど。海とか好きだし、こいつ」

と修二が言うと、圭介はすごく嬉しそうな顔をした。

「わあ、いいすか！海、犬と散歩するの、夢だったんすよ。前に飼ってた犬、俺が車の免許取る前に死んじゃって」

「まあ、死んじゃったの？」

母が、少し気の毒そうにそう言うと、

「あ、老衰ですから。すげえ、長生きしたんで」

「そう」

あまりの明るいあつけらかんとした圭介の答えに、母もあつけらかんとしてしまっていた。

「じゃあ、クロ借りますね。あまり遅くならないように帰ります」

「はい。よかったわね、クロちゃん。あ、そうだ。今日外で、バーベキューするのよ。良かったら一緒にどうかしら？」

母の誘いに圭介は、さらに目を輝かせた。

「まじっすか？すげえ！庭ですか？あ。ウッドデッキがあるじゃないすか！それもあこがれてたんです。わあ。まじ今日すげえ、夢いっぱい叶ってるし。なんかやばい」

「じゃあ、帰ってきたら、バーベキューしましょうね」

「はい！早めに帰って、俺、手伝います」

「本当？えっと……お名前……」

「あ、圭介です」

「圭介君。よろしくね」

「はい！それじゃ！じゃ、クロ行こうか！」

圭介は、修二がクロにつないだリールを持ち、クロを連れて門を出た。

ぼつん、なんとなく取り残されてしまった。

圭介は車にクロを乗せると、後ろを向き、私がないことに気づいたらしく、慌てて、

「あ！あ！すみません！瑞希さんもお借りします」

と、言いに来た。それを聞いていた修二が、ぶくくってふき出した。
「え？」

なんかおかしいことでも言ったかなと、頭をぼりって掻いてから圭介は、

「えつと、いえ、あの…。瑞希さんとドライブ行ってきます。い、いいでしょうか？」

と、聞きなおしていた。今度は母が、ぷぷつとふき出した。

なんとなく部屋の奥から様子を見ていた父も、めずらしく声をあげて笑っていて、それから玄関まで出てくると、

「榎本部長の息子さんなんだって？部長によろしくお伝えしてください」

と、丁寧に圭介に言った。

「あ、はい」

いきなり緊張した様子で、圭介は気をつけの姿勢になり、お辞儀をした。

それから、助手席のドアを開けて、私が乗るのを見守った圭介は、
「行ってきます」

と、家族のみんなに向かって、明るくそう言うと、運転席に乗り込んだ。

窓から家族を見たら、みんなしてニコニコ顔で、手を振っていた。父までが満面の笑顔で見送っていた。

「素敵な家族ですね」

車を発進させて、圭介がそつつぶやいた。

「いつもは、こうじゃないの。きつと、圭介だからじゃない？」

「え？」

「それか、もしかすると、みんなで気を使ってたかな」

「…それ、茂にいのこと？」

「あ、やっぱり部長から聞いてた？」

「はい、昨日の夜」

「それでまた、部長から頼まれた？」

「何をですか？」

「今日のドライブ」

「頼まれてじゃないですよ。俺の勝手な…っていうか俺の意思で決めたことです」

「なんで？」

「なんでって…」

「もしかして、落ち込んでるとでも思った？」

「…はい」

「で、慰めようとか、元気ださせようとか？でも、あいにくだけど…」

私の話の途中で話をさえぎって、圭介が言ってきた。

「違いますよ。これはチャンス到来って、デートに誘ったんじゃないですか」

「ええ？」

あはははは。何それ…って冗談ばく、思い切り笑って、その言葉に動揺したのを悟られないようにした。

冗談でもなんでも、圭介はさらりと言う。その言葉に、一喜一憂してるって知らないくせに。

海が近づくと、クロが後部座席で、興奮しだした。わかるようだ。って、横を見ると、クロ以上に興奮している圭介がいた。

「すげえ、海だ、やった。犬と海を散歩だよ！」

そんなハイテンションになるようなことなのか？私と一緒に喜

んでいるわけじゃないのが、しゃくにさわった。

10 デート

ジーンズの裾を巻き上げ、靴も靴下も脱ぎ捨て、クロを連れて圭介は、浜辺に思い切り走っていった。

「若いな〜」

私はそうつぶやいて、そのあとをとぼとぼ歩いた。

「すっげ、クロ…、速すぎ。まって…！」

さすがの圭介も、犬の速さには勝てないか。

海の潮水にボチャン。しょっからかったのか、クロが、ペツペツて水を吐き出していた。でも、喜んで、波打ち際を走っている。

その周りを圭介も、走って喜んでいる。それを遠目から、浜辺沿いにある石の階段に座り、眺めていた。

しばらくして、二人、いや一人と一匹は、ハアハアゼエゼエ息を切らしてこっちに来た。

途中の自販機で、水を買っておいてよかったよ。そのうえ、車に乗り込むとき、クロ用にと渡されてた水をいれる皿と、体をふくタオルを修二からもらっておいて、本当によかったわ。

お皿に水を入れて、まずは、クロにあげる。ぺろぺろと水を嬉しそうになめる…姿を羨ましそうに見ている圭介。

「ぶっ」

つて、ふき出すと、

「え？」

つて、何に笑われたのかわからない様子で、圭介はこっちを見た。

「はい」

キャップをあけたままの水のペットボトルを手渡すと、

「ありがと」

つて、言う間もないくらいに早口で言い、水をゴックンゴックンと飲みだした。

それを横で見ながら、あまりにも綺麗に上へ下へと動く圭介のど仏にしばらく、見とれていた。まいったな。私は、圭介のなんにでも、見とれちゃうのか…。

でも、あれだ。よくCMで汗をかいだあとに、めっちゃおいしそうに、さわやかに、コーラや、ポカリを飲むかつこいい俳優さんが出てくるけど、それをまじかで見た感じた。なんでこうも、綺麗な顔でさわやかに、水を飲めるんだろうか、こいつは…。

思い切り流し込んだので、水が口からこぼれて、それを腕で、ぬぐってるのを見て、

「これだよ、これ……！よく見るよ、こういうの。CMとかでさ。超かつこいいじゃん！」

と、心の中で叫んでいた。

もちろん、当の本人はまったく私がその姿に、心の中できやあきやあ言ってることなんて、露知らず、

「水うめえ」

って、片目を太陽がまぶしいって感じで、つむって、喜んでいた。それを見てまた、

「これだよ。これ……！なんだよ……っ。さわやか過ぎるだろう……！！」

って、心の中で叫んだが、ふと圭介と目があい、そして、そのまま凝視されたから、困惑してしまった。

「何？」

「松田聖子の歌で、こういうのなかったですっけ？」

「え？」

「水着持っていないとか、なんとか、ああ、白いパラソルとかって歌」「古い歌だよ、知ってるの？」

「母が松田聖子好きで、カラオケで歌うんすよね。今日の瑞希さん、

白いパラソルとか似合いそうじゃないですか？」

「うっくん、日傘考えたんだけど…。日差しがもう強いし、焼けちゃうかな…」

「そうですね。あ、でも帽子とかも似合いそうですね。その格好にこつ、白とか、麦藁帽子とか…」

「麦藁…？」

「かわいいじゃないですか、似合いますよ。瑞希さんかわいいもん」

一回りも上の女性つかまえて、何言ってるの？と言いたかったが、その言葉に射抜かれて真っ赤になってしまい、何も言い返せなかった。それも、その真っ赤になっているのを、しっかりと圭介に見られてしまい、ますます真っ赤になっていくのがわかった。

何か、言い訳はないか、ああ、日焼けをしているから赤いのだとか、でも、一気にそんなに焼けないよね。ああ、頭の中は、真っ白だ。

圭介を見ると、海の方を見て、表情がわからなかった。でも、すぐにこつちを向いて、

「やばいっすよね」

と、一言つぶやいた。

何がやばいのかわからない。圭介はよく、「やばい」と言うが、いったい何がやばいのか？

「何が？」

こついうとき、聞いても答えない。そのまんま、わざと話をそらすか、無視をするかのどちらかだ。でも、このときは下を向いて、

「なんていうか、その…」

と、やばいの理由を話そうとした。

「すげえ、嬉しいって言うか、俺、はしやぎすぎててやばいかなって」

「？」

聞いても、よくわからない。

犬との海の散歩が、そんなにやばくなるくらい、嬉しいのか。それを聞いてみると、はあ？って顔をしかめて、

「瑞希さんで絶対に、鈍いですよね。どっか抜けてる…」と、馬鹿にした感じで言った。

「ええ？悪かったわね。そっこそ、あれよ。いつもやばいやばいって言って、何がやばいんだか、わからないわよ。もっとさ、わかるようにさ〜」

「俺があれです。やばいって言うときは、あれです」

「あれって何？」

「だから、やばいときです」

「どうやばいの？なんでやばいの？何がやばいの？」

「……。んと…」

「え？」

髪をかきながら、圭介はもにもよ言ったが、まったく聞き取れない。

クロが、どうやらのどの渴きもおさまり、落ち着いたようで、その場に横になってしまった。立ったままの圭介も、私の横にドカッって座った。

「サーファーがいますね、けっこう」

「うん」

「海って6月でしたっけ、解禁日」

「そうだったかな」

「泳ぎに来ませんか？」

「…。私、かなづち…」

「え？」

「だから、泳げない…」

「まじっすか？すんげえ、なんていうか、それ、お約束って言うか」

「なんの？」

「瑞希さんって、ペーパーですよ。方向音痴ですよ。で、泳げないんですか？」

「そうよ。悪い？ついでにね、歌も下手なの、音痴なの。あとは、えつと〜」

「自転車とか、乗れますか？」

「それはね〜、それはできるわよ！」

「あ、自慢げ。ぶぶっ」

圭介はふき出してから、もつと、

「あははははは！」

と、お腹をかかえて笑い出した。

「何がお約束なの？」

私は、もう一回聞いてみた。

「え、えつと、ぼけてるって言うか、かわいって言うか…」

「どこが、ぼけてて、かわいいの？ぼけてもないし、かわいくもないでしょ？」

「は〜、腹、いてえ、だって、周りにそういう人いなかったもん」

「え？」

「付き合ってた子も、サーフィンとかしてたし、車運転できたし。その前に付き合ってた子は、歌とかカラオケ行くと最高うまいし、何やつてもできてたな」

う、う、う。聞いていて、だんだん、腹が立ってきた。

私は何か？何をやっても、できないと言いたいのか。腹が立って、そのうち、情けなくもなってきた。ああ、落ち込んできたじゃないの。

じゃあ、なに…？私は今までの彼女たちよりも、はるかに劣っていて、勝ち目はないと…。私なんて、好きにもなれない、彼女にな

んてぜつたいに無理と、言いたいわけか？

海を見ていると、泣きそうになり、下を向いたが、下を向いたら涙がこぼれそうになり、目をぎゅってつむった。

そうだよ、そんなの知ってるよ。だから、自信がもてないんじゃない。美人でもない、頭も良くない、スポーツもできない、スタイルだって、そんじょそこの、どこにでもいるようなスタイルで、一山100円の中の、一人ってな感じです。貴方の今まで周りにいたよう女性とは、全然違ってますよ。

笑いがおさまった圭介が、ポツリと言った。

「なんで今まで、一人身なの？」

「え？」

ますます頭にくる、いや、落ち込むようなことを言う。

「なんでさ、茂にい、瑞希さんのことふっちゃったのかな」

「……」

なんだ、詳細は聞いてないんだ。私がほかに好きな人がいるって言ったこと……。って、それは貴方のことなんだけどね。

「……。あ、でも、そっちの方が俺にとってはラッキーだけど」

圭介は、またそういう冗談を簡単に口にする。

ずっと、下を向いたままでいると、

「なんでさっきから黙ってんの？下向いてるし」

ああ……。また、おい、タメ語になってるよ。なんて思いつつ、それでも、私は下を向いたまま、黙っていた。

「ね、なんで？こっち見てよ」

圭介は、思い切り顔を覗き込んできた。

「わ！」

すごい近くに顔があるじゃないの！驚いて、顔を上げ、そっくり返った。両手で、自分の体を後ろで支えるくらい、そっくり返った。

「？泣いてた…とか？」

あ、やばい、顔、見られた。

「ごめん、俺…」

うわ、なんでそう、素直に謝るんだ？

「茂にいのこと、やっぱ、あれだよ、昨日の今日で、こんな話、無神経だったよね…」

「……」

カク…。力がぬけた。そっちじゃないのよ。でも、私が圭介のことで、泣いているなんて知られたくなくて、そのまま何も言わなかった。

しばらく二人で、黙って海を見ていた。そのうち、圭介が海を見ながら話し出した。

「ラッキーなんて言っつて、ごめん…」

「え？」

「瑞希…、傷ついてたのに」

ああ、ほら、だから、なんで呼び捨てなの。私はそんな呼び捨てにする自分の名前にもドキッとするんだよ。

「…いいよ。冗談言っつて、励ましてくれようとしているんでしょ？」

「俺、そういうところが、鈍いつて言うか相手の気持ちを考えないで、自分の言いたいことだけ言っちゃうところがあつて、知らないうちに傷つけてて…。素直すぎるとか、正直すぎるとか、無邪気すぎるとか、元かのに言われた」

「…そこが、圭介の1番いいところなの？」

「え？」

「私は、そういう圭介の、無邪気さとかに救われてるよ」

「……」

少し圭介の目が、まんまるくなった。なんか、驚いてるみたいだった。そんなことを言われたのは、初めてだったんだろうか？

「無邪気で、素直で、かわいい。人懐こくて、うん、犬みたいだね」
「え…。それなに？ほめてんの？」

「ほめてるでしょう〜」

笑って言うと、

「あ、よかった。笑った」

圭介は、心底ほつとした顔をした。自分が泣かせてしまったと、相当気をもんでいたのか…。

そういう素のままの表情が、彼の優しさを見せてくれる。そういう表情を、見逃したくないって思う。彼の一つ一つの表情を見たいなあって…。

落ち込んでいる彼も、戸惑っている彼も、さっきみたいにびっくりにして目を丸くする彼も、おどけたところも、いたずらっぽい顔つきも、大人びてるときも、小さな子供のようにあどけないときも、少し不安げなときも、心底喜んでしゃいでるときも…。

やばいな。それだけ好きになっっているのだろう。どんな圭介も、愛しくてたまらないって思うようになってる。

「やばいね…」

ぽつりと、圭介に言うと、

「何が？」

と、聞いてきた。

「内緒…」

「え？なんで、内緒？」

「圭介も、教えてくれないでしょ、いつも…」

「俺の場合は、だって…」

「何？」

「言ってもわかんないよ。きつと」

「言ってみないと、わからないよ」

「……。内緒」

「もう！じゃあ、こっちも内緒」

圭介のことが、やばいくらいに、好きになっっているって内緒。でも、そのうちに言うから。きちんと心を開いて言うから。

圭介には、きちんと気持ちを伝えたいって思った。だって、大好きな人には、心を素直に伝えたいってそう思えるから。それに圭介なら、私をそんなふうに、思ってくれなかったとしても、きちんと誠実に聞いてくれるって思えたから。

海に向かって、おおきな伸びをした圭介の背中が、なんだか大きく見えて、その背中ならずっとついていけそうってそんな気がした。

昼ごはんは、近くの和食屋さんに行った。クロを連れて、たまに修二は、柚ちゃんと江ノ島に来る。江ノ島で食事をしてくるのだが、犬を連れてもいいお店があるってことを思い出し、修二に場所を携帯で聞き、そのお店にクロを連れて行ったのだ。

「クロちゃん？」

お店の人は、クロを覚えていた様子だ。クロは頭がいいので、店員さんに頭をなでられ、大人しく嬉しそうに尻尾を振った。

そう、いつもはこうなのだ。なんで、圭介にはあんなに過剰に反応したのかわからないが、多分、圭介もハイテンションだったから、クロもそれに反応してしまったのだろう…と思うことにした。

海に面したそのお店で、のんびりとご飯を食べた。

それから外に出て、ゆっくりとその辺を散歩して、駅前のマックで、コーヒーを買い、外にあったいすに腰掛け、二人でコーヒーを飲んだ。

クロは、さっきの和食屋さんで、犬用のお皿を出してもらい、私たちのご飯を少しと、水も入れてもらって、食べて飲んできたので、満足そうに足元でねっころがっていた。

「好きな女の子と、犬連れて海に行くって、なんとなくしてみたかったことなんだよね」

そう、いきなり圭介が言った。

「じゃ、半分叶ったね」

「うん、叶ったな」

満足そうに、圭介は笑った。でも、まだ半分でしょ。好きな子とこなくっちゃ。って、のどまで出かけてやめた。満足そうだから、そのままにしておこうって思った。

私は、とにかく、心から好きになる人が現れてほしかったから、

「私もさ、一つ叶ったことがあるよ」

と、ぽつりと圭介に言った。

「なに？」

「…。ま、いいじゃん」

「何？また、内緒？」

「うん、そう」

「ちえ」

「そのうち、教えるよ」

「え？まじ？でも今じゃないんだ」

「うん。そうね」

「ヒントは？俺、当ててみる」

「ヒント？長年の夢かな。そうそう一人じゃ叶えられない」

「？あ！俺とのデート！」

「だっかっら、長年の夢だっ。圭介とは、会って間もないでしょ？」

「ああ、あ、そっか。なんか、すごい前から知ってる気になってた」

「それに、ずっとタメ口ですね」

「え？あはは。そうだっけ。ま、無礼講ってことで、日曜だし。会社じゃ、ちゃんと敬語使いますんで」

今日も、無礼講？ってつつこみをいれると、いいじゃんって軽く言われた。

「瑞希といると、年齢とかさ、忘れるよね」

「私が、幼いの？」

「そうそう、精神年齢きつと同じだよ」

「じゃ、私は3歳児か」

「そう…え、何それ、じゃ、俺が3歳児ってことじゃん」

「あはは、だって、そうじゃん」

「ひっで〜」

ふふふ。二人で笑いあっていると、時々、クロが頭を起こした。

そうすると、それに気づいて、圭介が優しくクロの頭をなでる。クロは、また安心して頭を下げ目を閉じる。クロにもわかつているのかな、圭介の優しさ。

圭介と一緒に、ゆったりと流れるこのあたたかい空間や時間。これは、はじめて会ったときから、変わらない。不思議な時間の流れだ。ゆったりと、そして優しく、あたたかく包み込むように流れていく。

11 告白

クロの体や足をタオルでふいてから、車に乗せ、日が沈む前に江ノ島を出た。道はそんなに混んでいなくて、スムーズに家に着いた。家に着くともう、ウッドデッキに、お皿やグラスが並べてあった。修二が、鉄板をセットしていて、その横から母が野菜を持って、ウッドデッキに現れた。

「あ、お帰りなさい」

クロが、車から降りるとすぐさま、修二の足元にじゃれつきにいった。

「クロ、あぶないから、ちょっとどいてて」

クロの首輪を持って圭介が、自分の方へと引き寄せると、大人しく今度は、圭介の足元に座りこんだ。

「クロちゃん、良かったわね」。海、気持ちよかったでしょ」

「体砂だらけだな。あとで、一緒に風呂はいるか？」

そう修二が言うのと、

「え？一緒に風呂とかはいるんですか？」

と、圭介が驚いて聞いた。

「そうなのよね」。風呂場がクロの毛だらけになって、大変なのよ。掃除するのはこっちだから、あまり入れてほしくないんだけど、きたないままだと、家の中が汚れちゃうしね」。――

母が、ちよつと顔をゆがめながら、そう言った。

「へえ、でも、いいすね。クロ、すごいかわいがられているんすね」「でもね、1番散歩に連れてつてるのは、私なのよ」

「姉貴、1番暇だからだろ。休みの日も、何もすることないじゃん。あ、最近は、夜、食事に行ったりしてたっけ……って、ごめん……」

茂さんのことを、気使って謝ったのだろう。修二にしては、一応気にかけてくれてるんだ、めずらしく。

「いいですね、俺も時々、散歩しにきていいですか？」

「あら、どうぞ。クロちゃんも喜ぶわ」

「でも、いいのか？圭介君も、他に用事あるだろ。彼女とデートとか。こんなおばさんや犬相手にしてるよりさ。彼女とデートしてるほうが、いいんじゃないの？」

「修二……誰がおばさん？」

「うわ、こえ……。こんなよ、こんな怖いんだよ」

「あは……。でも、俺、彼女いないし、仕事以外、することってあまりないし」

「圭介くん、彼女いないの？でも、もてるでしょ。かつこいいもの、イケメンなもの！」

「お母さん……」

あまりのくいつきに、こつちがびつくりしたわ……。

「じゃ、どう？瑞希……。ちょっと、年が離れてるけど……」

「お母さん?!」

今度はとんでもないことを言うから、声がひっくりかえった。

「いくらなんでもな……。だって、一回り違うんだぜ」

修二は冷静にそう言ったが、母は半分本気だ。もう、こうなりや、誰でもいいのか？

「えっと……」

「ほら、圭介くんも困ってるじゃないか、ははは」

かなり、無理な愛想笑いをして、父がリビングから顔を出した。さすがの母の言動に、こりや黙っていられないと思ったのか、それとも、圭介のことをあまりにも気の毒に思ったのか。

「いえ、あの……」

まだ圭介は、めんくらったように動揺していた。

「ほ。ほほほ。冗談よ、冗談。まだ、21ですものね……」

なんだ、そのまだ21ですものねっていうのは…。そのあとに何があるんだ、結婚は考えられないわよね、とでも言いたいのか。

「8月で、22になります。やっぱ、若すぎますか？俺じゃ」

「？」

うちの家族が全員、目がクエスチョンマークになっただろう。私もだ。

「若いよ。うん。若い。そんなに若いのに、こんなおばさんにひっかかったら、もったいない」

「修二……」

本当に口が悪い、血が繋がってるとは思えないほどの口の悪さだ。いや、血が繋がってるから言えることか？

「やっぱ、若造ですよね…」

圭介が、少し声がトーンダウンしていくのがわかる。なんで、そこで落ち込むのやら…？

「さあ、そろそろ始めましょう！」

母がいきなり、元気に声を出した。

「お、焼こうぜ、ちよつと圭介くん、手伝ってくれる？」

修二も、気を取り直していた。

「あ、はい」

圭介も、気持ちを新たに、バーベキューするぞって顔つきに変わった。それからは、楽しい時間が過ぎていった。

車だからと、圭介はビールを断っていたが、そのうちに、

「泊まってけ、泊まってけ、兄貴の部屋あるから、で、明日1番で帰りゃいいじゃん」

と、酔っ払った修二に無理やり、飲まされ泊まっていくことになった。私は嬉しい、ずつと長くいられるのは。でも、圭介にとっては、苦痛じゃなかったかな？

ビールを母も、父も飲んだ。私も飲んだ。あまり遅くまですると

近所迷惑なので、外では早めに切り上げ、家の中で引き続き、飲んでいた。

父はなんだか、嬉しそうだったし、母も陽気だった。いつも陽気な人だが、どうやら、圭介のあの人懐こさと、明るさにつられてますます陽気になったのだろう。ふだん、あまり話さない父でさえ、圭介といっぱい話をしていた。

修二は、途中から圭介って呼び捨てになっていた。そりゃあもう、お気に入りになってしまったようで、がはがは笑って、圭介の肩に手を回しては、

「なあ、圭介……」

と言っていた。いや、あれはもう、からんでいたといってもいいかもしれない。でも、圭介はそんな修二にも、明るく答えていた。

私は、ちょっと離れたダイニングに腰をおろして、その光景を眺めていた。すごく不思議な光景だが、もうずっと、我が家になじみの深い人がやってきたようにも見えた。

ふと、圭介はいつも明るくしていて、疲れないのかなって思った。明るいだけじゃない部分だって、きつとあるだろうに……。ああ、そんなところまで、見せてくれたらな。圭介の、弱さとかダークな部分まで、全部、受け止められたらなって、そんな思いがこみあげてきた。

父は、そろそろ寝るとするかと、寝室に行ってしまった。母は、キッチンで洗い物を始めた。修二は、飲むのはやめたが、それでもしつこく圭介と話をしていた。

私は、今のうちにお風呂に入るかって、ちょっと酔ってはいたものの、お風呂に入ることにした。

今日は、クロはお風呂無理だな。修二が酔っていて、お風呂なんてとんでもないだろうし。玄関のマットか、リビングにクロ専用の、

マットを敷き、そこで寝ることになるかな。

お風呂からあがり、パジャマを着てバスルームを出ると、圭介が目の前にいた。

「わ。びつくりした！」

「あ、すみません。風呂、入ったらつて言われて。あ、なんだ…、もう少し早かったら俺、ドア開けてたのにな…」

「え？なんかがっかりしてない？」

「いえ、え〜と、少し。ははは…」

「もう〜、飲みすぎてるでしょ？お風呂平気？」

「ああ、はい。いつも飲んでもはいってます！」

「圭ちゃん！このバスタオル使ってね。あら、やだ、瑞希、お風呂入ってた？」

「入ってたよ。もう少し早くに圭介が来てたら、やばかったんですけど」

「あら、ごめんなさい。よかったわね圭ちゃん、おばさんの裸見ないですんで」

「お母さん！」

「あつはつは…」

「もう、こんなよ、うちの親とか、弟かは〜。まいっちゃうよ…」

「ははは。すごい、いい家族ですよ」

「どこが？！それよりも、お風呂で寝ないでね、のびちゃったりしないでちょうだいね」

「はい、わかってます」

了解って感じで敬礼をすると、バスルームのドアを開けて、入っていた。

ああ、圭介がうちにいるの、なんだか不思議な感じだな。それにしても、うちの親は…。圭ちゃんって、なれなれし過ぎるだろう…。

修二はやっぱり、飲みすぎていて、部屋に戻るとすぐに寝たらしい。時々、いびきが聞こえてくる。クロは可愛そうに、今日、玄關で寝ることになるのかな。

圭介が、お風呂からあがり、2階にあがってきたようだ。私のドアの前で、足音が止まっている。

「あの…」

小声で圭介が、ドアの外から声をかけてきた。

「おやすみなさい」

「あ、うん。おやすみ…」

さすがに、ドアは開けなかった。髪は乾いていたが、化粧も落としていたし…って、さっきも見られてはいるのだが…。

「今日は、すげえ楽しかったです」

「うん、私も…」

しゅんとしたまま、足音がしない。うちは、けっこう歩くと床の音がするんだけどな。まだ、部屋の前で立ち止まっているのかな。

しょうがないなって、ドアを開けた。髪を洗ってぬれたままで、ぼさぼさ頭の圭介がいた。バスタオルを肩にかけてはいるが、ぼたぼたと、しずくが床にたれていた。まだ、酔っ払っているのかな？

「濡れたままだよ。髪…」

「あ、すみません。ドライヤーどこかわかんなくて…」

「私の部屋にあるよ。待ってて」

部屋に入ってドライヤーを取ると、ドアの中に圭介が立っていて、

「へえ、なんか、イメージと違いますね」

と、つぶやいた。こら、入ってくるな勝手に！と怒ったが、まったく出て行く気がないのか、勝手に入った事も悪びれてない。

「もっと、女の子らしい部屋なのかって、想像してました」

「もう、33ですからね。そんな部屋には住まないですよ」

私の部屋は、物が少ない。ごちゃごちゃしていると、掃除が面倒

だからだ。家具は、濃いブラウンで統一され、小さなテレビと、丸い小さめのテーブルがおいてある。唯一の置物は、チェストの上に乗った観葉植物のアイビーだけ。

カーテンはベージュだし、絨毯もベージュだし、とても、落ち着いている部屋だと自分でも思う。

圭介は、そんな私の部屋に勝手にずかずかと入り込み、ベッドにまで座ってしまった。

「気持ちいい部屋ですね。なんか居心地がいい…」
すうつて、深呼吸をして、

「ああ、そっか。瑞希の匂いがして、心地いいんだ」
え?! かなり恥ずかしいぞ。

「ここで、髪乾かしてもいいですか?」

もう、敬語とタメ語と、ごっちゃになっている。飲んで、分けわかんなくなっているんじゃないのかな。へたすりゃ明日には、記憶がないとか…。

…記憶がない? それは好都合か、それともその逆か? でも、私も酔ってるし、その勢いで云えるかもしれない。

云う…。告げる…。告白だ!

ガ~~~~~ッ。ガ~~~~~ッ。このドライヤーの音の中で、聞こえるだろうか。いや、この状況でそんな話は、なんていうか、ちよつと違うかな…。

それにしても、ドライヤーをかけてはいるが、半分もうるうとしているのか、ドライヤーの風が、ほとんど圭介の髪に当たっていない。

「ドライヤー貸して」

「え? なんで?」

「やってあげるから。それじゃ、絶対乾かないよ」

「…まじ?」

何が、まじなんだか。自分では、しっかりやってるつもりだったのか。

バスタオルでまず、ゴシゴシって拭いてから、右手でドライヤーを、左手で圭介の髪を動かした。サラサラだった。髪からは私のシャンプーの匂いがした。ああ、私を使ってくれたか。高いのにな。修二はさ、男物のシャンプー使ってるのに、それも置いてあっただろう、おいおい。なんて思ったのが、通じたのか、

「瑞希と同じシャンプー……」

と、圭介はいきなり言い出した。

「うん。使ったでしょ。私の」

「匂いかわいたら、瑞希の匂いしたから、あ、これ使ってるんだってわかって」

「男用のもあったはず。修二が使ってる……」

「うん……でも、瑞希の使いたくって……」

「髪、いつもいいシャンプーを使ってるの？」

「え？別に。親が買ってくるやつ、適当に」

「じゃあ、私のじゃなくても……」

「高いの？これ」

「けっこうするのよ。そういうの、気を使ってるの」

「そうなんだ。じゃ、同じの買えないかな……」

「？」

「なんか、いいじゃん、瑞希の匂いと同じって」

「なんで？このシャンプーそんなにいい匂いかな？」

「うん。瑞希といつも一緒にいる感じがしていいよ」

「？」

「あち！」

「あ、ごめん」

びっくりしたから、ドライヤーを思い切り、近づけてしまったよ

うだ。

これなんだよ…。圭介の時々言う言葉。私のハートが嬉しすぎて、ひっくり返りそうになる。

「圭介の匂いも、いい匂いだよ」

「え？草原の匂い？とか？」

「うん」

「あはは…」

「まじで。本当に草原の匂いがするよ。さわやかな風の匂い」

「汗臭いんじゃないくて？最近、親に言われるよ。汗臭いから、風呂毎日入れって」

「そうなの？へへへ。じゃ、お母さんはDNA近くって、臭く感じるんじゃないの？」

「ああ、そつか。じゃ、俺と瑞希は、遠いんだ、きっと」

「かもね」

「そつか。へへ…。じゃ、お似合いってこと？」

「お似合い…？」

「うん。っていうか、相性がいいってことでしょ？」

「うゝん。そうね、強い遺伝子が残せるってことかな」

「それって、年関係ないじゃん」

「え？」

「年齢差があっても、強いDNAは残せるよ」

「どうかな…」

「それにさ」

いきなり、ぐるって圭介は、顔をこっちに向けた。まだ半分乾いた前髪から、まんまるで一生懸命に何かを訴えようとする、きらきらした瞳がのぞいた。その瞳を見て、ドキッとした。

「たいてい、女性の方が長生きすんだよ。だから、瑞希の寿命が終わるときと、俺が終わるときってきつと、同時期になってるよ」

「へ？」

「だからさ、今は年齢差があるって気になっても、おじいちゃんとおばあちゃんになったら、そんな変わらないし、それよか、ちょうどいい具合になるかも…でしょ？」

何が言いたいのかな。私と圭介は、相性が良くて、ちょうどいいって言いたいのかな。

「圭介は、結婚ってどう思う？」

「えっ?!」

その質問に相当驚いたのか、少し圭介は座ったまま飛び上がった。
「あ、そんなに驚かないでよ。別に結婚してって言ってるわけじゃないって…」

と、言ってから、あ、変なこと聞いたかなって思った。

「ただね、茂さんにも聞いてみたの。結婚でどういうものだと思うかって。圭介なら、どう答えるかなって…。ほら、それぞれに結婚観って違うし。聞いてみたかっただけで。参考までに」

「……。結婚か…。まだ、考えられないっていうか、実感ないっていうか…」

「そうだよな。21歳だもんね」

「ただ…」

「うん」

「すごい好きな人になりたいな」

「え？」

「なんか、この人とは、ずっと一緒にいたいとか、この人のことは全部知っても、きっと好きでいるだろうとか、そんな相手」

「…いたの？そういう相手」

「まだ。あ、うーん。わかんないや…」

ドライヤーを消したら、すごく静かになった。ベッドに座ったまま、宙を見つめている圭介は、どこかはかなげにも見えた。なんで

かな。ぎゅって掴んでないと、消えそうな気さえした。

色が白く、髪が黒い。髪の新黒さが、肌の白さを際立たせる。少し今日、日に焼けたのか、赤くなっているようにも見えたが、きつとすぐに色が落ちるタイプかな。私は日に焼けたら、そのまんま黒くなっていくから、羨ましいな。

そんな色白さがはかなげに見えたのか…。いつも明るくて元気ではかなさんて微塵も感じさせないのに、静かで黙っているからか…。

しばらく、黙っていた圭介が、ぽつりと口を開いた。

「瑞希は、結婚ってどう思う？」

「私？私は、なんかわからなくて…。だから、聞いてみたの」「そか…」

また、しばらく圭介は宙を見て、

「じゃあさ、そういう相手、いた？」

「え？」

「ずっと一緒にいたくて、全部知っても、好きでいるだろうなって相手…」

「…いるよ」

「え？」

いきなり圭介は、こっちを向いた。

「いたんだ…。そうだよ、結婚とかも考えたりしたよね…」

「違う。いるの」

「？」

「現在進行中」

「え？」

「あのね、昼間言ったでしょ、夢が叶ったって」

「うん」

「私、すんごく好きな人が、できないかなって思ってた。もう、

この世で、この人しかいないってくらい好きで、その人の全部大好きって言えるくらいの相手現れてほしいなって。そうずっと思ってた。そういう人とまだ、巡り会えてなかったから」

「叶ったんだ…よね？」

ふと、圭介の視線が下がった。

今の圭介の心の中がわからないから、告白して嫌がるのか、驚くのか、どう返事をしてくれるのか、まったく予想もつかなくて、ものすごく怖くなってきた。

「何？誰？会社の人？茂にいじゃないよね…」

それから、圭介は顔をあげて、

「茂にい？もしかして…。でも、想いが届かなかったとか。まさか、想いを告げてないとか？そのまんま、ふられたとか？」

圭介は、一気にそう言っていると、私の返事を少し待ち、

「ああ、あ、えっと…」

と、うつむいてしまった。もし、茂さんだとしたら、俺、どう慰めようかとでも、思案しているのか？

「違うよ。安心してよ。茂さんにも言ったの。好きな人がいるからって、きちんと」

「え？」

圭介は、また目をあげた。

だんだん、目を合わせるのが、こっちが辛くなってきた。ああ、でも、云うんだ。ここまできて、云わなかったら、後悔するのは目に見えている。どんな返事が来ても、どんな反応があっても、云うんだ。だって、伝えなきゃ、想いは膨れ上がる一方だし…。

「あのね…」

「会社の人？。えっと、まさか、社長じゃないよね…」

「少し黙ってくれるかな」

「え？ごめん…」

黙った圭介の顔を見て、なんて鈍いんだろうかって思った。もう、自分のことだとわかっていて、わざととぼけているんじゃないのか。だとしたら、答えはNOじゃないか。

「は〜」

ため息が出た。

「え？」

ため息にまで、反応をしている。ああ、もう、今日はよそうか…。

しばらくの沈黙の中、思わず、見つめあってしまった。なんて、綺麗な瞳なのだろう。吸い込まれるようだ。男の人をこんなに、綺麗って思ったことないな…。

困った顔をしている、そんな表情もするのか…。もしや、私が今、くいつきそうな顔で見えていて、おびえていたりして…。そんなことを考えたら、ちよつと力が抜けた。

えっと…。ほら、なんだっけ…。ああ、そう。この人なら、何を云っても、受け止めてくれるだろう…。

もし、受け止めてくれなかったら？全面的に否定されたら…？

ああ、もういいや。もし受け止めてくれなくても、そんな圭介のことすら私は、好きでいるような気がする。どんな圭介も、大好きでいるような気がする。

圭介は、いったいいつまで黙っていたらいいのかっていう、そんな顔をしている。どうやら、じれったくなっているようだ。もう少し黙っていいようか…。少し、意地悪心が出た。

私は、それから目線はずして、真横を向いて座りなおした。さあ、話すとするかと、覚悟を決めた。

「あのね…」

「うん…」

圭介は、ずっと待てって言われて、ご飯を目の前で、待たされている犬のようだ。

「すごい好きなんだなって、思うんだ…」
「うん？」

「たとえば、その人が、ちょっとへこんだり、弱かったりしても…」
「うん…」

「その人が、元気でも、そうじゃなくても…」

「うん…」

「優しくても、意地悪でも…」

「うん…」

「その人が、その人なら、それで、好きでいると思うんだよね」
「うん…」

圭介は、真横を向いたまま、こっちを見ようとしなかった。そんな横顔を、私は、はつきりと見ながら続けた。

「ね、それ、すごいでしょう。初めてなんだよね。そういう人と会ったの」

「ああ、うん…」

まだ、圭介は真横を向いたままでいて、視線は合わせない。

「やばすぎだよって、思ったんだ」

「うん…」

なんかさっきから圭介は、条件反射のようにならずにいる。

「それでね、そんなに好きになってるのも、初めは気づかなくて、っていうか、気づかないようにしてて、茂さんと付き合っていたりして…」

「…。うん…」

「でも、本当は自覚してて、好きなんだって」

「うん…」

「その人には…。あ、好きな人がいるって言ってたな」

そこで、はじめて、圭介はこっちを向いた。

「で…」

「すんげえ、緊張してるかも…」

へ…？

「手振るえてんの。見て」

顔を上げ圭介の手を見ると、本当に震えていた。わざとじゃないようで、微妙にカタカタしている。

「やっべ〜」

そう言っつて、圭介は苦笑いをした。

「あ、顔もこわばってない？俺…」

こわばるほど、嫌なのか…。少し私の表情が、暗くなったのが伝わったのか、

「あ、いや、あの…」

圭介は、慌ててその場の空気をどうにかしようとして、それから一回深呼吸をすると話し始めた。

「……。俺だよね？それ…」

コクン…。私は、黙ってうなずくしかなかった。

12 幻？

私が言ったんだから、今度は貴方の番です。そんな感じで、私は圭介が話すのを黙って聞いていた。本当は怖かった。耳もふさぎたかった。「やっぱり聞くのやゝめた」って、途中で逃げ出したかった。

「そうなんだ…」

ちよつと、脱力した感じで、圭介が言った。

「知んなかった…」

また、力が抜けたようだ。本当にすごい力を入れて、聞いていたんだな。今の私みたいに…。

「…えっと…」

圭介は、ぽりって頭を掻いて、あ、まだ濡れているって顔で髪を見て、それから、ぽつりぽつり、言葉を選んで話し出した。

「俺、結婚とかやっぱり、まだ考えられない」

「うん…」

私の口から、ようやく言葉が出た。あたりまえだよ、そんなの気にしないで。って頭の中では言っている。でも、言葉にはならない。言葉にしたら、途中で泣きそうだ。

「でも…」

「……」

でも…？

「同じことを、きっと、思ってると思う」

「…え?!」

同じって…？

「瑞希って、すごいんだ」

「な、何が…？」

「俺の、好みそのものっていうか」

「え?!」

好み…? 圭介の…?

「はじめは、親父から会ってこいって言われて、茂にいの代理でさ。顔見ないとわかんないからって、写真を見せてもらって。なんか、社内旅行とかのかな」

「うん…」

「写真見て、まず、驚いて…」

「何で？」

「わかんないけど、なんか、こう…、すごい惹かれて…。でも、そういうのも、なんだかよくわかんなくて、とにかく、茂にいのためにも、行かなくちゃって待ち合わせに行って…」

「うん」

「会って、話して、一緒にいて…」

「うん」

「すんげえ、やばいじゃん。なんか、声とか、雰囲気とか、話し方とか、どことっても、好きだなんて思えてきて」

「……」

驚いて、私は言葉にならなかった…。同じことを、圭介は感じていたんだ。

「でも、茂にいの代理だし、見合いの相手だし、こっちは、12も下だし好きになっても、見込みないしって言うか、勝ち目ないし…」

「……」

「もう、会えないんだよなって思ってた。でも、一目見られたらどうか、偶然会えたらなとかって、家の近くまで来たりしてさ、あ、ほら、住所ナビに入ってたし。でも、一歩間違えたらストーカー？だよな。はは…」

「私？私のことだったの?!」

「え？」

「私にだったの？会いにきたって、その…」

「そう、好きな人って、瑞希のこと。わかんなかった？」

「……」

わ…、わかんなかったよ…。

「俺、これでも、すごいアピールしたんだけど」

「……」

「茂にいいじゃなくて、俺を見てくださいとか、いや、やっぱり、祝福しなくちゃとか、好きな人の幸せを願うのが本当の愛だとか、でも、偶然同じ会社に瑞希はいってくるしさ、運命かって思ってみたり、俺、もうここ数ヶ月、頭ん中ぐるぐるしてたよ」

そんなの、知らなかった。そんなの全然、表面に見せなかったよ。気づかなかったよ？

「熱い視線でさ〜、想い伝われ〜ってやってたんだけど…」

「え？」

熱い視線って…。え…？

「ああ、でも、ま、いいや。だって、伝わっていたから俺のこと、好きになってくれたんだよね？」

ああ、もう！なんだよ〜。そんなことを言う？ほらね、もう、全部愛しい。ぎゅうって抱きしめなくなる。

「あ、なんか、まじ緊張した。だって、誰のことそんなに好きなのかって、すんげえ怖くって、ドキドキして…。やべ、力抜けた。いきなり眠気…」

圭介はそう言うと、もたれかかってきた。

「え？ここで寝ちゃ困るよ、兄さんのベッドに行つて！」

「連れてって…」

「ええ？重いから無理だって」

「俺、意外と軽いから」

「無理無理、自分の足で歩いてよ」

「けち」

けちじゃなくって……。

ああ。やっぱり相当酔っていると思う。これ、明日には忘れていましたとか言わないかな。告白覚えているのかな……。

圭介は、ちよつとふらつきながら、ベッドからドアまで歩き、
「おやすみ」

って、言つて、部屋を出てから、

「ああ……。バツカだ、俺」

つて、自分の頭をポカッてやった。

「？何が？」

「だってさ、キスくらいしてもよかったじゃん。こういうとき、そういう機転が利かない。ってか、そういうの、する勇気も出ないっていうか、ああ……。本当に、だめなんだよね、俺」

ええ……。それは心の中の声でしょう。口に出てますけど、いいんですか……？

「今からしても、いい？」

圭介は少し、甘える声で言ってきた。

「おやすみ。早くドア閉めてね。明日朝早くに起きて、一回家に戻るんでしょ。起きれるの？」

「……あれ？」

「何？」

「さつき、俺のことすんげえ好きだった、こくったよね」

「……それが？」

「いや、それにしては、冷たいなって」

「あほう。本当に早く寝なさい。起きれなくても知らないからね」

「は……。い。おやすみなさい」

ボタン。……ボタン。私の部屋と、兄の部屋のドアを閉める音、2回したから、これでもう大丈夫だろう。

心配なのは、朝になって、今の記憶が飛んでいないかってことだ。私の告白も自分が告白したことも。

それどころか、好きだなんて全部うそでしただってことはないだろうか。

いや、それどころか、これは私が、飲んだくれてみた夢だったりしないだろうか。ふわふわしていて、本当に夢の中にいる気がしてくる。

ベッドに横になる。さっき、圭介が座っていたあたりが、ほんのりと暖かった。圭介のかもしれない。あったかいオーラにまた一気に、包まれた気がした。

隣の部屋で、寝ているんだな。すごく不思議……。私のこと、本当に好きなのかな。本当なんだよね。まだ、半分信じられないけど。

それからまもなく、私は深い眠りに入ってしまった。夢すらみないような、深い眠りに……。

翌朝、目が覚めて、思い出した。

「あ。そうだ。圭介がいるんだ！」

鏡を見て髪を整え、きちんと洋服に着替えてから部屋を出た。いつもの、よれたパジャマに、くしゃくしゃの頭じゃ、やっぱりいかなだろう……。

一階に行くと、あれま……。よれたＴシャツに、パーカーをはおい、髪がすごいことになっている圭介が、半分ぼろろっとながらパンをかじっていた。

「んあ……、おはようございまふ」

パンをほおばりながらしゃべるので、よく、聞き取れない。

「おはよう」

少し照れくさくって、目が合わせられなかった。

「ぐ~~~~わ~~~~」。二日酔い。あったまいって~~~~。ちきしょ

うっ……。あんなに飲むんじゃなかった」

これまた、よれたスエットの上下で、髪をぼさばさにしている修二が、ダイニングにきた。

「お、おはようさん、圭介。きちんと起きてえらいじゃないか」

「いえ、お母さんにたたき起こされて……。優しいようで、こわいっすね」

「あっはっは。おふくろ、圭介が子供みたいな気がしてるんじゃないの？」

「子供っすか、俺」

「いや、子供ってのは、自分の子供みたいってこと」

「そうよ……。なんてったって、圭ちゃん、かわいいもの、あんたと違ってね。もう、圭ちゃんをうちの子にして、あんたを部長さんにあげたいくらい。さ、早く食べて、さっさと行きなさいよ。修二」

「げげ、なに？それ。傷つく修ちゃん」

朝からあほな親子っぷり…。

トーストにジャムをぬり、コーヒーを飲む。ああ、なんとか目が覚めてきた感じ。つてときにまた、母があほぶりを発揮する。

「あ、圭ちゃん。うちの子になっちゃいなさいよ。まじで」

「養子にでもなるんすか？」

母の切った、オレンジをほおばりながら、そんな冗談を圭介が言うと、

「ちっがうわよ。圭ちゃんが、瑞希と結婚するの。そうしたら、息子になるわけ。いいアイデアでしょう？」

ぶっ……。私は、思わずコーヒーをふき出してしまった。

「あっつい！」

「ごぼっごぼ」

どうやらオレンジにむせたのか、圭介が、むせていた。

「そっちの冗談のほうがきついんじゃないの？」

修二が、いかにも見下した感じで、母に冷ややかにそう言った。

「そんなのありえねえって。なあ、圭介。しっかりと、そういうのは嫌ですって断らないと、やばいぜ、この親子、本気になったらさ〜」

わざと聞こえるような声で、圭介の耳元で言うと、

「俺、朝いらない。コーヒーだけでいいよ」

と、リビングのソファに座り、新聞を読み出した。

のそのそって静かに、父がリビングに来た。いつもはパジャマだが、服に着替えていた。多分、圭介がいるからだ。ああ、まったく気を使わない修二は、父と同じDNAなのかって疑いたくなる。

「おはようございます」

圭介が父に挨拶をすると、父も、

「あ、おはよう」

と、軽快に挨拶をかえした。けっこう、機嫌がいいようだ。

このなんともいえないくらい、スムーズに、うちの家族になじんでいるのがすごいと思う。

「圭ちゃん、昨日は眠れた？」

特に、母は気に入っている。イケメンだし、めっちゃ母の好みかもしれない。ということは、私と母は同じ好みなのか…。

「はい、すごくよく寝れて、爆睡しました」

「それは良かった」

「あ、でも髪乾かさないうで寝たみたいで、すみません。シーツとか、枕とか、ぬらしたかも」

そうだよな。半乾きのままだったもんね。

「俺、風呂入ったんですよね。で、髪洗ったんですよね。そのへんは覚えてるんです。でも、どうやって部屋に戻ったか記憶がない。

もしか、風呂場で寝てたりとかしてませんか？俺」

「ええっ?!?!」

私が、すごい大声を出してたので、

「どうしたの？」

母が、その声にびっくりしていた。

「いや、あの…だ、大丈夫、自分の足で、きちんと、部屋に行ってたよ。覚えてない？」

「ああ、うううん。覚えてないんだなう。あ、風呂場の前で、会いませんでしたっけ？」

「会った」

「ですよ。その辺はうつすらと記憶があって」

が~~~~~ん。し、信じられん、信じられん！本当に心配していたことが、叶ってる。ああ、これも叶うというのか。

いや、待てよ。本当は覚えてて、私をからかっている…とか。いや、からかって何が楽しい？やっぱり忘れてる~~~~？ あ、あんなに勇気を出して、告白したのに~~~~？！！

それから急いで顔を洗い、髪をなおし、よれた服のまま車に乗り込み、圭介は自分の家に帰っていった。その間も、「見事に、記憶ねえ」とつぶやきながら。

早起きしたので、会社にも早くに出た。圭介はまだまだ、来ないだろう。

パソコンを開けて、メールを調べる。手紙も封を開けて、仕分けをする。

「おはようございます」

次々に社の人々が、現れる。

会社の始まる時間は、9時半。割とゆっくりめの会社だ。でも終わるのは6時。それが会社の定時だ。

朝は、9時半に来る人はめったになくて、みんなよっぽどのことがない限り、9時少し過ぎたあたりにはそろっている。が、今日はやはり一人、9時半を過ぎても現れなかった。

9時40分。

「お、おはようございます」

静かに、圭介が入ってきた。

「はい、遅刻」

社長にいきなり見つかった。そうっとなんて入ってきたのにな。

ま、すぐ見つかるか、小さなオフィスだし。

「酒臭い？お前」

「すみません。昨日ちょっと飲みすぎて…」

「で、寝坊？」

「いえ、すんごい早起きして、家に一回帰ってから来たので…」

「何？朝帰りか？」

圭介は、みんなの注目をあびた。

「何処に泊まってたんだよ？おい」

まさか「うちで」す」と手をあげるわけにはいかないだろうな

…。

圭介は、はあ〜と大きなあくびをしながら、席に着き、

「ども…」

と、お辞儀をした。

「どうも」

覚えてないっていうのが、しゃくにさわり、どうしてもつっけん
どんな態度になってしまう。

「なんか、道混んでたんですよ。余裕で、出社できると思ってたの
にな」

「ごめんね」

「え？」

「修二がさ、飲ませたから」

「ああ、いいすよ。まじ、楽しかったし」

「母親が、圭ちゃん、また呼んでねって気に入ってた。うちの家族
ク口までが、圭介のこと気に入ったんじゃないのかな」

「まじっすか、じゃ、ほんとに、養子になれますかね？」

「養子ね」

「あ、婿養子です、婿養子」

「え？」

ドキッてした。思い出したかつて…。

「冗談すよ。ははは…」

こいつ、本当に私を好きなんだろうか、それまで、疑ってしまう…。

お昼、稲森さんとランチに出かけた。

「あれ、あやしいな」

「え？」

「圭介よ。女のところじゃない？」

「え？」

「圭介、今日さ、なんか、女物の石鹸みたいな、シャンプーみたいな匂いがしてたんだよ」

ギク…。怖い、そんなところまで、わかる？

「あれ？くんくん。あ！これよ」。ちよつと、同じ匂い！

「私と？じゃ、同じシャンプーかな」。結構高いんですよ。これ

…」

「ふっふん」

嫌だな。その「ふっふん」と、その目つき…。

あ、シャンプー。この匂いは覚えているんだろうか…。席に戻って、こつそりと、圭介に聞いてみた。

「あのね、昨日のシャンプー」

「はい？」

「本当に高いの。美容院でしか売ってないのよ」

「？なんのことっすか？」

「え？だから、昨日、圭介が使った私のシャンプー」

「え？俺が？使ってないっすよ。なんで、女物の使うんすか？」

「……」

だめだ、こりゃ。そこも覚えてないか…。

「で、でもな〜。髪から、匂わないかな〜？」

「誰のですか？」

「いや、君の髪から、その…」

「自分の髪の匂いなんて、かげないっすよ。短いし」

「ええ？そうなの？」

「そうですよ、だいたい、かいでる男がいたら変態ですよ」

だめだ〜、これは〜…。いつも私の匂いに包まれているみたいで、いいって言ってたじゃんか〜。なんなんだ、なんなんだ…？！

どこまで、本音？どこまで、本気？お酒飲んで酔っ払ったから、口から出たでまかせか？

ああ〜。あの幸せなひと時は、なんだったの…？こう、目と目、見つめあったじゃない。それとか、髪を乾かしてあげたじゃない。キスしたらよかったなんて、冗談言って、ドキってさせたじゃない。

それとも、やっぱり、あれは私の見た夢か幻〜？

13 雨は苦手

6月、夏のような日差しの日が続いていたが、とうとう、梅雨の季節に突入した。私は、この季節が苦手だ。雨の日っていうだけでも、憂鬱になる。

そのうえ、圭介がまったく、あの日のことを思い出さず、あれは本当に私が酔って夢を見たのかとか、圭介は本当は私のことを、なんとも思っていないのではないかって疑ってしまい、心はなかなか晴れず…。この梅雨の空のように、毎日、心が曇っていた。

ボーナスの日が近づいてきた。圭介が隣でにわかに嬉しそうだ。こっちの気も知らないで…。

「契約社員にも、ボーナス出るようですよ」

「あ、そう」

「え？嬉しくないんですか？」

ええ、まあ。あなたのおかげでね…。っていうのは、心の声だ。

その日、6時を過ぎ、帰ろうと廊下に出ると、後ろから社長に声をかけられた。

「今度、ボーナスが出たら、食事に行っても行かないかな？」

「あ、いいですね。みんなではあつと…」

「いや、二人で…」

ええ？

「二人で食事はまだ行っていないね。いろいろと仕事も頑張っているから、一回くらいおごらないとね」

「いえ、そんな、気を使っていたかなくても。私は雇ってもらえただけで…」

「いやいや、まあ、おごらせてよ。ね」

「はあ…」

あれかな、稲森さんとも、食事に行ったのかな…。でも、そうい

うの稲森さんに聞いてまた、変なことを言われるのは嫌だし、稲森さんには黙っておくか。

ボーナスの日に、社長が食事に連れて行ってくれというので、6時を過ぎ仕事を終え、ロッカーで待っていた。稲森さんは、仕事を終えるのとつと帰ってしまった。

最近、稲森さんは、帰るのが早い。化粧も念入りだ。稲森さんのお気に入りの楠木さんは残業ばかりだから、多分、楠木さんでない人と会っているのだろう。会社の人じゃないな。だって、会社の人みんな、残業しているからなく。ま、いいんだけどね。どうでも…。

社長がみんなに「お先に」と言っているのが聞こえたので、廊下に出て待っていた。ちょうど、そのとき、トイレの方から圭介がやってきた。

「あ、瑞希さん、今帰り？」

「うん…」

今、社長に来てほしくないな…。

「お疲れ様。あ！そうだ！ボーナスでだし、今度一緒にご飯でも…」
圭介がそう言いかけたとき、社長が、

「ああ、柴田さん、待たせたね」

と、やってきた。ああ、なんてタイミング…。

「え？」

圭介が少し、驚いていた。

「あ、笹おじさんと…、お出かけっすか？」

「ああ、食事にね」

「そっか…。なんだ…。今度俺も誘ってください。社長…」

「今度な。飲みにもまた行くか？」

社長は、圭介に笑いかけ、

「じゃ、お先にな」

と、圭介に手をふり、ちょうど来たエレベーターに乗り込んだ。

「はい、お疲れ様です」

圭介の声が、1オクターブ下がっていた。

エレベーターが一階に着くまで、私はなんだか、居心地が悪かった。圭介のちよつとさびしいような、悲しいようなそんな視線がいつまでも、心に残っていて…。

連れて行ってくれたお店は、イタリアンのしゃれたお店だった。

社長はワインも頼んでくれて、その店で美味しいというものを、いろいろと頼んでくれた。

「実は、榎本先輩から、柴田さんのことを聞かれて…」

「え？」

「最近、元気がないのは、やっぱり、お見合いの件が原因かな？」

「あ、いえ。違います。あ、私、元気なかつたですか？」

「うううん、なんとなくね」

「すみません。あの、きつと雨が續いていて、その、この季節は気が沈むって言うか…」

「ああ、まあね。毎日こう、雨じゃね」

「あの…。榎本部長…。何か言っていましたか？」

「ああ、いや…。ただ、お見合いの件でふさぎこんではないか、心配していただけで…。それとなく様子を見てくれないかとね」

「そうなんですか。お見合いの話、社長も知っていたんですか」

「あ、いや…。会社に勤めるときに、一応そういう話もあると、先輩から聞いていたからね。それで、先輩もその結果を報告してくれたんだと思うよ。一応、君の上司だからね、僕は」

「そうですよね。すみません」

「いや…。まあ、結婚ということでないなら、このまま柴田さんには働いてもらえるのだから、こっちは嬉しいんだけどね」

「もし、結婚して辞めることになったら、その、すごく短い間しかお勤めできなかったかもしれないんですね。なのに、何で雇ってもらえたんでしょうか？」

「そりゃ、まあ、先輩の頼みだったしな〜」

「そうですか、すみません。本当に…」

「ああ、いや、別に柴田さんが謝ることではないし、それにお見合も駄目になった…、ああ、ごめん。こういう言い方は、あれだなあ…」

「いえ、いいんです。駄目になって今、すっきりしていますし…」

「う〜ん、そうか。ま、そんなもんかな〜。僕も以前、お見合いして、もうすぐ結婚って言うときに断られたことがあってね」

「え？そんなんですか？」

「相手が、やっぱり結婚に踏み切れないって言い出して…」

「……」

「でもね、破談になって僕もほっとしたんだよ。多分、僕も結婚に踏み切れない部分があったんだろうね。お互い様だったんだ」

「それで、今でも独身？」

「縁がなくてね〜。ははは…。一人身も長いと、一人身の方が楽になっちゃうんだよね」

「独身貴族ですか？」

「そんなにかっこいいもんでもないよ。ただ、会社も経営しているし、会社だけでも責任が重いうえに、家族を持つのはけっこうきついつていうかな。何も肩に背負っていないから、自分で会社をつくることに踏み切れたっていうこともあるしな〜」

「仕事人間なんですか？」

「いや、仕事だけでもないけど。こう見えても多趣味でね」

「一人で、いる方が気楽で楽しい？」

「まあ、そういうところだな。年を取ったら寂しいかもしれないけどね、こういう生き方は…」

おいしいイタリアンを食べて、おいしいワインを飲んで、ほろ酔い気分になった。もつと話していて緊張する人だと思っていたが、けっこう話しやすいんだな…。

「柴田さんは、どうなのかな。結婚はしたいのかな」

「はい、したいですよ」

「そっか。じゃ、今まで出会いがなかったか、それとも、理想が高すぎたか…」

「出会いがなかったです」

「どんな人が好み？うちの会社にはいないかな？っていつても、年下が多いか」

「…年下でもかまわないです。ただ、年が下すぎると、結婚を相手はあまり意識してくれないのかなって、そんなことは思っちゃいます」

「うーん、そうだね…。でも、年齢いつても結婚しない僕みたいなものもあるし、若くてもさっさと結婚しちゃうやつもあるしね」

「その人の価値観とか？生き方とか？」

「そうだね。あと、結婚したいっていう相手と出会ったかどうかもあるかもしれないけど」

「結婚したい相手って、どういう相手でしょう？」

「さあね、これもまた、人それぞれじゃないのかな？」

「そうですね…」

「今は昔よりも、独身でいることに、肩身の狭い思いはしないですむよ。結婚するのが当たり前の世界じゃないからね。女性だって、独身で仕事をばりばりしていたり、シングルマザーもいるしね」

「そうですね。私の周りにもいます」

「だから、結婚って言ってもその人それぞれだな。それで、どんな人が好みなんだっけ？もし、僕の知り合いに柴田さんの好みの男性がいたら紹介するよ」

「え？ええつと…。そうですね、えつと…。好みつて、う〜ん」
頭の中には、圭介しか浮かばない、でも言えるわけがない。
「好きになった人が、好みつて言うか…。だからないです」
「ははは、そんなものかもね」
グラスのワインを飲み干し、社長はそろそろ出ようかと言って、立ち上がった。

会計を待っている間、なにげに携帯を見ると、一件着信が入っていた。圭介だ…。

「それじゃ、駅まで送ろうか」
その店は会社からそんなに、離れた場所ではなく、駅からも近かった。

圭介は多分、まだ仕事をしているだろう。

「あの、私忘れ物をしました。それで、その…一回会社に戻るの、ここで失礼します」

「明日じゃ駄目なのかな？」

「えつと…、携帯だから、ないと困っちゃうかな…」

鞆の中にある携帯を見られないようにしながら、嘘をついた。

「ああ、そうか…。じゃ、誰かしらまだ、この時間なら残っていると思うから」

「はい、お疲れ様でした。あ、ごちそうさまでした」

「ああ、また明日ね」

よかった。一緒に会社に戻るって言われるかと思った。

会社に向かう途中、携帯で圭介に電話をした。

「もしもし」

ちよつと、そっけない声がした。

「あ、柴田です。電話くれた？」

「…社長は？」

「今、別れたところ」

「ふ〜ん」

「圭介はまだ、仕事？」

「…もう終わりました」

「え？そうなの？」

会社のビルに入ろうつてところだったが、行っても圭介がいないのなら、しょうがない。

「今、圭介どこ？」

「え？」

「今、どこにいるの？」

「ここ」

ビルのドアが開いたと思ったら、圭介が出てきた。

「わああ、びっくりした！」

電話を持ったまま、さけんだので、圭介が耳を押さえた。

「声、でかすぎっすよ」

「ごめん…」

慌てて、携帯を切る。

「すごい偶然、今、会社出たところだったの？」

「はい」

「そっか…」

圭介の顔が見れて、ちょっと心がほころんだ。きっと、ワインで酔ったせいもあったかな。

「顔、赤いですね。酔ってますか？」

「あ、あれ？わかる？」

「飲んでたんだ、社長と」

「なんだか、すねた言い方だ。」

「圭介も、一緒にこれたらよかったね。今度、社長に連れて行ってもらいなよ」

「…。俺は、行かない方がよかったでしょう」

「は？」

「社長も、二人の方が良かったんですよ」

「なんで？」

「なんでって…」

「もしや、妬いてる…？」

ああ。こんなことを言えちゃうのも、酔ってるからだな。

「…妬いちゃ、悪いっすか？」

「え？」

「…冗談ですよ」

でも、冗談と言っている顔が、あからさまにすねた顔だ。

「だけどき、妬くようなことな…んにもなかったけど」

「社長に口説かれて、喜んでたんじゃないんすか？」

「……」

そんなわけないじゃん。私が誰を好きだか知ってんでしょ！告白したでしょう…。と心の中では叫んだんだけど…。

「あれ？何？その間…」

黙っていると、圭介は、少し不安げな顔をした。

「あゝ、えつと…。今のも冗談っすよ。そ、そんなわけないですよね。いくらなんでも…」

「社長は最近、私が元氣なくて、お見合いを断られたからかって心配してくれてた、だけです」

「え？」

「それから、私の好みの男性を聞いてきて、誰か紹介してくれるって」

「ええ？」

「それだけ」

「いや、それだけって…。で、何て言っただんすか？」

「は？」

「だから、好みの男性」

「ああ、そうね。渋くって、年上で、頼りがいがある紳士」

「そう私が言っていると、圭介は黙ったまま、その場に立ち尽くしてしまっただけだ。」

しばらくして、再起不能だっというような顔をしたまま、ちよつとよろけてこつちを向いた。顔はあきらかにひきつっていたが、必死に笑いかけ、

「それで、社長はなんて……？ そんな男紹介してくれるって？」

本気にしてるよ、笑えるな……。

「そうね……」

ああ、どこまで嘘をついてやるつか……。相当な意地悪かな、私。

「……」

しばらく黙っていると、ほつぺたをひきつらせながら、じゅつと話すのを待っている圭介が、なんだか今度は妙に可愛く見えて、

「嘘だよ。嘘」

と笑って言った。

「え？」

「だから、好みの男性、まったく逆だよ」

「え？ え？ え？ え？ じゃ、えっと、渋くなくて、年上じゃなくて、頼りにならない？ そんなやつですか？」

「ふふふ……。そんなやつよ」

「……」

あ、あれ？ 俺じゃないですかって、言わないの？ 黙って考え込んでるよ。

「それ、冗談っすよね」

って、今度は、すごいまじな顔。

「そうね……。本当は好みのタイプってないですって答えました。好きになつた人が好み」

「…ああ、そうっすか」

圭介は少し、安心したような、でもがっかりしたような、変な顔をした。

「おなか空いてない？」

「はい、ぺこぺこです」

「なんか、食べようか？」

「でも、瑞希さん、ご飯食べたんすよね」

「私は、何か飲むくらいにする」

「ああ、じゃあ、その辺の、ファーストフードでもいいっすか」

「ええ？ボーナス日に？」

「それは、また、瑞希さんときちんとご飯食に行くのに、取っておきますから」

「え？もしかして、おごり？」

「当たり前です。そのくらいしますよ、俺だって！」

「嬉しいな、ありがとう」

酔っているせいか、今日はなんだか、圭介と楽しく会話ができる。今まで、圭介は私のことをどう思っているのか、そればかり気になつて、なかなか、こんなふうに楽しく会話もできなかったんだ。だからきつと、会社でも元気がないって思われたのかな。

あ、それは、圭介も気づいていたんだろうか？

14 恋は偉大

ハンバーガーを食いつきながら、圭介がもごもご話し出した。

「やっぱ、元気なかったのは、茂にいが原因っすか？」

「元気ないように、見えてた？」

「はい。っていうか、俺のことも避けてたって感じですよ…？」

今度は、コーラをぐいって飲んで、

「すみません。俺、気にはなってたんですけど…。俺のこと避けてないですかって、聞きづらくて…」

「そうだったの？」

「なんか怒らせることしたかなとか、なんか嫌われることしたかなとか、気になってたんですけど…」

圭介は、一呼吸おいてから続けた。

「でも、もし嫌いになったなんて言われたら、その、俺、立ち直れそうもなかったので…」

「え？」

そんなことを、気にしていたのか…。

「あ、でも、茂にいのことで、元気なかったんすよね…？」

「ううん」

「え？違うんすか？」

「うん」

「あ、じゃあ、何で？やっぱ、俺、何かしましたか？」

「うん。君、何かしちやっただのよ」

「ええっ？」

圭介は、すごいけぞり方をして、そのあと、頭を抱え込んだ。
「何だろう、えっと、すみません。思いつかないんです。ずっと、もし嫌われたとしたら俺、何したかなって考えてたんすけど…」

「考えてたんだ」

「はい、あ。やっぱ、あれっすか？俺、飲んで記憶なくしたとき、
とんでもないこと、したとかつすか？」

「あら……」

「あら？あらって……？」

「いや、いい線いつてるなって……。で、何か思い出した？」

「……………」

くだらだらと、汗をかいている様子が手に取るようにわかる。可愛
そうに、きつとんでもないことをしたのだろうと、あれこれ頭の
中で、イメージしているに違いない、相当、最悪なことを……。

「そうそう。お風呂にね」

「え？」

「出たときに、圭介が入ってきそうになって、そこは覚えてる？」

「え？はい。覚えてます。えっと、ちゃんともう瑞希さん、パジャ
マ着てました。大丈夫でした」

「覚えてるんだ」

「その辺は、しっかりと思いださなきゃって」

「え？なんで？」

「いや、だって、もしその辺で、とんでもないことしてたら、大変
だからって……。それで、一生懸命に思い出して」

「思い出したんだ、じゃ、そのあとは？」

「お風呂でて、2階にあがったんです」

「うん」

「それで……、お兄さんの部屋に入って、寝ました」

「え？」

「え？」

「……………」

目を丸くして、私が圭介の顔を見たので、どうやら、その辺の記憶
が怪しいと言ったことがわかったらしい。

「何か、俺、しましたか？」

「私の部屋に来たかな…、そういえば」

「え？」

「覚えてない？」

「……」

圭介の顔が、若干青ざめた。

「お、覚えてないっす。でも、俺、瑞希さんの部屋だけ思い出して…」

「部屋を？」

「なんか、すつきりしてる部屋で、カーテンとか絨毯がベージュで、あ、観葉植物があった」

「ふ〜ん、なんで、部屋の中を知ってたのかな？」

「で、ですよ…。中に入ったから…、ですよ…。」

圭介はやばいって顔をして、しばらく下を向いたままになった。

「でも、部屋しか思い出せないんです。その…」

黙って、圭介は一回つばを飲み込むと、

「俺、襲ったりしてないですよ…。」

とあほなことを、聞いてきた。は〜〜〜？なんだ、何を唐突に！馬鹿じゃないの？とも思ったけど、でも、顔面蒼白になっているから、ちよつと、可愛そうな気もしてきて、

「大丈夫、圭介はただ、ベッドに座ってただけだし」

と、安心させようとしたが、圭介はかえって焦ったように、

「え？ベッド？」

と、顔をひきつらせた。

「いや、あの、だからね、髪がぬれたままだったから、私がドライヤーで乾かしてあげて、それで、少し話をして、それで、部屋に戻っていったの」

「……。髪？俺の？」

「うん」

いきなり、圭介は真っ赤になった。え…？真っ赤になるようなこと…？

「あ、そうなんすか…。うわ、覚えてないや…」

黙って、圭介は、今度は両手で頭を抱えてしまった。…必死に思い出そうとしているの…？

指の間から見える圭介の顔は、少しにやけてて、耳が真っ赤になっていた。…もしかして、喜んでんの？

「ちよつと、悔しい」

「え？なんで？」

「だって、そんなラッキーなこと、覚えてないなんて…」

「ラッキー？髪を乾かしたただけだよ。美容院に行ったら、してもらうでしょ…？」

「そうだけど、でも、瑞希さんに髪、触られてたんだって思ったら、その…」

「何？何よ？ちよつと…。こっちまで恥ずかしくなるから、やめてよ」

みるみるうちに、私まで真っ赤になっていくのがわかる。

そうか…。そうだよ。今になって気づく。圭介の髪を触れたなんて、ラッキーだ。超嬉しいことだ。

っていうか私がラッキーだから、なんで圭介がラッキーなのよ？

「なんだ、そつか。ああ、損した。覚えてないなんて…。あれ？でも、なんでそれで、瑞希さん怒ってるの？」

「それは、あまり関係ないの」

「え？」

「話のほづがね…。まあ、いろいろと…。なんで忘れちゃったのかわかって、覚えてないのかわかって…」

「え？そうなんすか？なんかもしかして、俺、大事なことを忘れてる…とか？」

「ああ、いい線いつてるね…」

「え？」

今度は、しかめつつらをして、頭を抱えてしまった。

「やつべ〜、だめだ。まったく思い出せない。俺、何を話したんすか？」

「教えない…」

「え？何で？」

「なんか、悔しいから」

えええ？って顔で、私の顔を覗き込む。

「やつべ〜、まじやべ〜。それ、結構重要っすよね。相当なこと俺、言ったんすか？」

「言っただとか、聞いたというか…」

「瑞希さんも、何か話したんすか？なんか大事なこと…」

コクンって、圭介の顔を見ないでうなずいた。

「……」

顔を見なくっても、圭介の表情が固まったのがわかった。

圭介は、しばらく黙り込んで、

「それ、俺が喜ぶ…こと？」

と聞いてきた。

「さあ、どうかな」

「俺が、シヨックなこと？」

「どうだろう、たいしたことないこともね、だって、忘れちゃうくらいだし」

「ま、待ってください」

慌てて圭介は、コーラを飲むと、ゲホゲホ咳をして胸をたたいてから、

「俺、夢だと思ってたんですけど、ずっと…」
と話し出した。

「え？」

夢…？

「瑞希さんに、こくられている夢です」

「なんて…？」

「う、その、はっきりと言葉までは覚えてないんですけど、でも、告白されて俺が、すげえ嬉しくって、で、俺も瑞希さんのこと好きだって、言ってる…」

「それで？」

「それだけなんすけど…。こう、もやがかかった感じで、はっきりとしないんですけど、でも、とにかく俺が喜んでいるのは確かなんです。で、朝起きて、すんげえラッキーな夢見たなって思ってる…」

「いつ？」

「え、瑞希さんちに、泊まった翌朝…」

「ああ、ああ……。そうか……。…」

夢だっと思ったのか……。いや、私も夢だったかもって、思ったりもしたけどさ…。

「あ、あれ、…現実？」

「……」

黙って、コクンってうなずくと、

「まじで？」

圭介は、目をまんまるくして驚いて、

「あ……、なんだよ。俺、何？一ヶ月もいい夢を見たって思い込んでたの？」

とちよつとにやけながらも、頭を抱えてそう言った。

「……」

どうも、顔も見れなくなってきた。

「え？じゃ、なに？そこんところを俺が忘れてて、瑞希さん怒って

たの？」

「……」

また、黙ってコクンってうなずくと、

「……。可愛い」

と、ぽつりとつぶやかれ……。そして、しばらく、笑いをこらえている圭介が突然、またこつちを向きお直して言った。

「じゃ、あれ？待って……」

「？」

「両思いなんだ、俺」

「……うん」

「まじ？」

「……まじ」

だ……………！って圭介は、今度はガッツポーズをした。

「まじかよ、あ、やべ、これも夢とかつてないよな」

お約束って感じだよな、圭介は、ほっぺたをつねってみせた。

「いて……………。まじだよ」

「あの、圭介、声のトーンを下げようよ、みんな見てるよ……」

くすくすと笑いながら、周りの人が見ていた。多分、今までの圭介の、いろんな表情や、ポーズも見ていたんだろうな。かなりオーバーだったもん…………、リアクションが……。

「ああ、すみません、俺、興奮してて……」

また、ゴクって圭介は、コーラを飲んだが、どうやらあまり入ってなかったらしく、紙コップのふたを取って中の氷をほおばった。

ガリガリ……。圭介はしばらく氷を食べていたが、気持ちも落ち着いたらしく、あたりを少し見回して、

「店、出ましようか？」

と、注目を浴びていて、恥ずかしくなったのか、小声でそう言った。

店を出ると、雨が降り出していた。

「あ、傘、会社だ」

「じゃあ、入っていく？」

私の傘をぼんって開くと、

「俺、持ちます」

と、圭介が傘を持つてくれた。歩き出したら、ほとんど傘を私のほうに傾けていたので、圭介の反対側の肩が濡れていたのがわかった。なんだか、そんな圭介も愛しいと思った。

圭介は無口だった。私もなんとなく気恥ずかしくて、無口になった。すぐとなりにいる圭介の肩が触れたりするたびに、胸の鼓動が鳴った。

「ああ、夢じゃなかったんだな〜」

心の中で、つぶやくと同時に圭介が、

「夢じゃなかったんだ…」

と、言ったので、びっくりした。

「夢だっと思ってた。だって、そんなことありえないってどっかで思ってた。瑞希さんにもし、好きになってももらえたら嬉しいって思ってたけど…。12も年下だし、そんなのありえないって…」

「私も思ってたよ。12も年上で、好きになってももらえるわけがないって」

「そうなんすか？」

「だから、絶対に想いを告げることもないなって、そう思ってたんだけどね」

「はい…」

「でも、やっぱり、きちんと気持ち伝えなくなっただんだよね」

「はい」

はいって…、何をかしこまっているんだか…？

「ありがとうございます」

「え？」

「きちんと気持ち、伝えてくれて…」

「……」

「すみません、それなのに、俺、覚えてなくて…」

「覚えてたじゃない、ただ、夢だって勘違いしてたけどね」

「すみません。そりゃ、怒るの無理ないですよね」

「まあ、ね…」

「あ、すみません、ほんと、俺、馬鹿ですね」

「ふふ、もういいよ」

本当にしよげているのが、伝わってきて、そんなところまで可愛いなっと思ってしまう。

駅に着くと圭介が、

「今度は、あれですよ、瑞希さんが夢だったとかって思わないでくださいよ。それとか、記憶なくしたりしないでくださいよ」と言ってきた。

「あはは、大丈夫、そんなに飲んでないし、もう酔いも冷めてるよ」

「じゃあ、ここで」

「うん。お疲れ様」

「はい」

車だと、わりと近いんだけど、電車だと圭介はJRで、私は私鉄だから、まったく乗り場まで違ってしまう。

駅で別れると、私は私鉄の乗り場へと向かっていった。ふいに、視線を感じて振り返ると、まだ、圭介はこっちを見ていた。手を振って笑って、それからペコってお辞儀をした。私も軽くお辞儀をして、手を振った。

周りからはどう見えるかな、やっぱり会社の同僚とか、先輩後輩とかかな。恋人には見えないだろうな。だけど…、恋人…なんだね。ワインを飲んでいたからか、恋人の言葉に酔ったのか、しばらく

顔がほてったまま、私は混んでいる電車に乗って、さらに車内の暑さで赤くなり、家路に着いた。

さあ、これから、どうなるのかな。部屋から雨の降る外を眺めて、そんなことを思っていた。

「雨もいいな、相合傘できるもんね……」

雨嫌いの私が、雨を好きになっていた。恋は偉大で、圭介はもつと偉大だ…、なんてあほなことも、ぼく々と雨を見ながら思っていた。

15 恋人

翌朝、雨が好きになった私は気分良く起きた。そしてカーテンを開けると、みごとに晴天…。梅雨の中休みといったところか…。

「雨が好きになったとたん、晴れか…」

顔を洗い、ご飯を食べて、着替えて、家を出る。なんだか、行くのが嬉しいような、怖いような変な感じだ。

会社にいつもより、5分早く着いた。圭介はもう来ているのかな…。

オフィスに入ると、圭介はもうデスクに向かい、仕事をしていた。ロッカーによつてから自分の席に向かおうとしたら、後ろから、

「おはよう、早いね」

と、稲森さんに声をかけられた。振り返るとどう見ても、昨日と同じ服を着た稲森さんがいた。

「おはようございます」

昨日はどっかに、泊まったんですか…なんて聞けない。それにしても、いつも派手な色の服を着ているし、同じ服だつてばれねのにな…。気にしないのかな…。

稲森さんが席に着くまで、周りの人も注目していた。みんな、気づいただろうな。

圭介が、すごく真剣にパソコンをしているので、黙って席に着いた。私もパソコンを開き、メールチェックをする。すると、圭介からメールが来ていることに気づいた。

「おはよう、瑞希。昨日のことは覚えてる？」

「どうやら、今送ったようだ。…なんだ…、仕事に打ち込んでるのかと思つたら…。それに、もう呼び捨て？」

「おはよう、昨日のことって、何だっけ？」

ちよつと、ちらつてこつちを見てから、圭介はすごい速さでパソコンを打ち出した。

<それ、冗談ですよね。

ものすごい速さで、送信をしたようだ。しばらく黙ってから、

「ちよつと、びびった？」

と、小声で聞いてみた。

「ちよつとどころか…」

つて、圭介も小声で言うつと、また、カシャカシャとパソコンを打ち出して、

<覚えてないって言っても、俺、また、こくりますから。何度でもというメールを、送ってきた。おいおい、社内でする会話ではないでしょう、仕事中にさ…。

周りに見られてないかって、少し見回してから、

<仕事しなさい。

と、送り返した。どんな返事が来るのかを期待していたようで、メールを見てがっかりしながら、

「へ〜〜い」

と、頭をぼりぼり搔いて、圭介は仕事に戻った。

でも、心の中で私は、ドキドキしていた。ちよつと、二人だけの秘密をもっちゃったような、ときどき感だった。まるで、高校生が中学生に戻ったような…、そんなときめきだった。

昼休み、稲森さんとご飯を一緒に食べに行った。

「ああ、寝不足。眠くて眠くて」

何ですか？とは、とても聞けない。

「ねえ、柴田さんさ〜、彼氏できた？」

「え？」

唐突に聞いてくるので、本当にあせる。

「私さ、ここだけの話ね」

「はい」

「最近付き合ってる人がいるのよ」

「はあ…」

「あれ？驚かない？」

「あ、あのなんとなく、そうかなって…。最近帰るの早かったです」

「あら、な〜んだ、ばれてた？」

稲森さんはそう言っていると、携帯をちらって見た。それから、スパゲッティを食べだした。

私は、セツトでついてきたサラダを食べながら、何か聞いたほうがいいのかな、それとも…と頭を悩ませていた。

「相手はバツ１なんだけどね、今は一人暮らししてるの」

「どこで知り合ったんですか？」

「ええ…。言にくいわ〜」

「え、あ、すみません」

やばいことを聞いたかと思い、慌てて水を飲んだ。

「実はね、この前、お見合いパーティに行ってきたのよ」

「なんだ、話すんだ…。っていうか、話したかったとか…？」

「え、あ、そうなんですか〜。私も前に、一回行ったことありますよ。でも、なかなかいい人なくて」

「そうなのよね、私も前に行った時は、若い人ばかりで場違いって感じで、それで今回は、30代40代の限定のに行ってきたの」

「そっこののが、あるんですか」

「うん、それで、けっこう好みのタイプがいてね」

「好みのタイプって…？」

「う〜ん、私より年上で、しっかりしてそうで、お金持ってそうで…。あ、体つきもがっしりしてる人がいいのよね」

「そうなんだ…。そういえば、楠木さんも男っぽい感じだったけね。」

「それで、ほぼ毎日、デートをしてたのよ。でね、けっこういい感じになってたんだけど、相手に娘がいてさ……。今、17歳の多感なときで」

「え？でも一人暮らしって…」

「前の奥さんが引き取って、奥さんと暮らしてるらしいんだけど、でも、娘に弱いらしくて、私と付き合ってるのがばれて、なんかかんかってうるさく言ってきたみたい。前の奥さんはもう、何も言わないらしいけど。は……。娘ってやっかいね。どうも、お父さんのことが好きだったみたいよ、相当」

「そうなんですか、取られるみたいで嫌なんでしょうね…」

「そんなものかしらね…。難しいわ、ほんと…」

みんな、それぞれに悩みがあるんだな…。

「こつちもね、親が反対してるのよね」

「え？どうしてですか？」

「バツ1だからよ」

「え？でも…」

「娘のことは、棚に上げちゃってるのよ。私もバツ1なのにね…」

「はあ…」

「それと、年かな……。今、47歳なの。一回りくらい離れているカップルいるでしょう。でも、親が離れすぎだって…」

「あ、はあ…」

ガク……。私と逆か…。

待てよ…。じゃ、圭介が35くらいになったら、私はもう、47なのか…。わ……。ちょっとクラってきたな…。こりゃ。

「私はね、そのくらい年が離れていたほうがいいのよ。少しくらいわがまま聞いてくれる人じゃないとね」

「はあ…」

「あなたは？」

「え？」

「どつという人がタイプ？」

「ああ。タイプってないです、あまり……」

「ええ？なんか、あなたも頼りなさそうだから、年上がいいんじゃない？社長なんて似合ってるわよ。どう？」

「ああ……、私、あまり年が離れ過ぎちゃうと、話が何も無いって言うか……」

「そう……？圭介とは、たくさん楽しそうに話してるじゃない」「圭介は年下だから」

「ふ……ん、年下が好み？それとも、弟みたいで、楽チン？あれ？弟さんっているの？」

「はい、います。5歳年下の……」

「じゃあ、弟といえるみたいなのね、きっと。私は逆で、年下と話してもつまらないわ。何話していいか、わからないし」

「そういえば、圭介とそんなに話しているところを見ないかも……。それにしても、弟か……。やっぱり、そう見えるのかな。」

ランチが終わり、オフィスに戻ると、圭介が応接コーナーで、ぐったりしていた。

「どうしたの？」

「ああ、なんでもないっす」

と、言って笑って、自分のデスクに戻っていったが、明らかに顔色もおかしかった。

デスクに戻っても、顔を少ししかめながら、パソコンの画面をにらんでいた。

「どこか、具合悪いんじゃないの？」

「ちよつと、胃がむかむかして」

「お昼、へんなもんでも食べた？」

と、少し、冗談交じりに聞いてみると、

「あ、なんも食ってないです」

と、力さなそうに、返事が返ってきた。

「そうなの？おなか空きすぎて、気持ち悪いとか…？」

「いえ…。ちよつと、さつきトイレでも吐いちゃって、なんも食べれそうもなくて…」

辛そうにしている圭介のことを知った社長が、近くにきた。

「圭介、大丈夫か？あとは俺に任せて、帰ったらどうだ？」

「あ、だいじょうぶつす。なんとか持ちこたえます」

「何言ってるんだ？真つ青じゃないか…。俺の方の仕事は、まだ締め切りも先だし、楠木がサポートしてるから大丈夫だ。ほれ、そんな具合が悪くつちゃ、仕事もきちんとかできないだろう。かえって、間違ったりしたら、先方に迷惑かけるんだから、お前はもう帰りないいいな？」

「はい…」

すまなさそうな顔をしながら、圭介は社長の言うことを聞くことにした。

「柴田さん、悪いけど、こいつ家まで送ってやってくれ。タクシーチケットを使っついていいから」

「え？大丈夫つすよ。俺一人でも帰れます」

「いいから、送ってもらえ、前みたいになつたら、大変だろう。先輩にも申し訳ないからな」

「はい。すみません…」

前みたいにな？前にもこんなことあったのかな…？

「送つたら、このチケットで、柴田さんちまで帰っていいから。悪いね、頼んだよ」

社長はそう言つと、タクシーチケットをくれた。

ビルを出て、駅のほうに歩いた。タクシー乗り場に行くと、運良くタクシーが止まっていた。圭介を先に乗せ、あとから私も乗り込んだ。圭介は、社長に釘をさされたからか大人しかった。

「。。駅の方まで」

運転手に圭介が行き先を告げた。顔色はまだ、真っ青だ。タクシーで、ますます気持ち悪くなったりしないだろうか。

「大丈夫？辛かったら、よっかかってもいいし、それとも、少し横になる？」

「うん、大丈夫。肩だけ貸して」

少し甘える感じで言うと、そっと肩に頭をのせてきた。圭介が揺れないように、なるべく体を動かさず、同じ体勢でいた。かなり疲れたけど、でも、圭介の方がもっと辛いはずだ。

黙って圭介は、ずっと目をつむっていた。たまに、息が漏れる。苦しいのかもしれない。あまりしゃべりかけても辛いかなって思っ
て、私も黙っていた。

しばらく走り続けると、運転手が聞いてきた。

「もう。。駅に着きますが、駅のどの辺ですか？」

ああ、私は圭介の家、知らないんだよね。。

「。。公園、知ってますか？」

「うゝん、この辺はよくわからないな」

「じゃ、ここまっすぐに行つて、バス通りに出てください」

苦しいだろうに、私にもたれかかったまま、圭介が説明をした。タクシーはバス通りに出た。

「そしたら、このまま、まっすぐ行くと、公園があります。公園の手前を右に曲がってください」

「はい」

運転手が、圭介の小さな声に耳を傾け、返事をした。圭介が、もたれた体を起こして、少し顔を前に出した。道を見ているようだ。

「あ、その路地を今度、左…」

タクシーは左に曲がる。

「あ、その次の家で止めてください。そこです」

「はい」

タクシーが止まった家の表札は、「榎本」とかかれてあった。ここか……、わあ……、大きい家だな。

私が先に降り、圭介があとから降りてきたが、顔色は真っ青だし、足元はふらふらだし、心配になり、

「圭介、家にお母さんか誰かいるかな？」

と、聞くと、圭介は時計をちらつて見た。

「ああ、まだ、帰ってないかな」

それは、大変。とても一人で、残せやしない。

「すみません、これ、タクシーチケットです」

そう言つて、運転手にチケットを渡した。運転手はチケットを受け取り、車を出した。

「え？いいんですか、タクシー……」

「うん、家の中まで、一緒に行くよ」

そう言つと、圭介は安心した顔をした。肩を貸して、ふらふらな足取りの圭介を抱えた。でも、私に体重をかけないように、なるべく自分の足で歩こうと、圭介がふんばっているのがわかった。

門をくぐり、玄関の前に行くと、ポケットから圭介が鍵を出し、玄関のドアを開けた。中は薄暗く、しんとしていた。やっぱり、誰もいないようだった。

圭介はドカッと、玄関に座り靴をぬぐと、中によろよと入っていった。私も慌てて靴を脱ぎ、あとを追いかけた。

圭介は、リビングのドアを開け、中に入るとそのまま階段を上りだした。

「大丈夫？肩貸そうか？」

「あ、平気」

言葉すくなくにそう言つと、ゆつくりと階段を1段1段上り、ようやく圭介は2階に到着した。それから真正面のドアを開け、中に入り、今度はベッドにドカッて座り込んだ。

相当、辛かったのかな。上着を脱ぎ捨てベルトを取り、そのまま、横になった。

「ね、ズボン、しわになっちゃわない？」

「うん、脱ぐ」

また、言葉すくなくにそう言つて、もぞもぞと脱ぎだした。修二のパンツ姿ならいくらでも見慣れてはいるが、さすがに圭介のパンツを見るわけにはいかななって思い、後ろを向いていた。

でも、そんなことおかまいなしに圭介は、ズボンを脱いで、その辺にほつて、布団の中に潜り込んだ。

そして、「はあ~~~~」って長いため息をついた。

「大丈夫？辛くない？」

「うん、横になって少し楽になった」

そうこつちを向いて、圭介は言った。どうやら、圭介は自分のベッドに潜り込めて、安心したようだった。

圭介が脱いだ上着と、ズボンをたたみ、机のいすにひっかけるとそれを見ながら、

「あ、なんか、奥さんみたい」

圭介は、そうつぶやいてふって笑った。

「ええ？お母さんみたいって言われなくて、よかったわ
って、私もふって笑って見せた。

「ね、そこにでかいクッションあるでしょ。それこつちに持つてきて、ここに座って」

圭介は、ベッドの直ぐ横あたりを、指さした。クッションを持つて、ベッドの横に置き、圭介が指さした辺りに座ると、
「手」

と、圭介は手を差し出した。そして、私の手を握って、
「ちよつと、こうしてて」

と、甘えた声で言った。

「うん」

私は、黙って言われたとおりに、手をつないでいた。

そのうちに、圭介は落ち着いたのか、すくすくして寝息をたてて、寝てしまった。かなり苦しかったんだろうな。でも、寝れるってことは、だいぶ、楽になったかな……。そんなことを思いながら、じいつて圭介の寝顔を見入っていた。

つないだ手も、顔も、色白で、本当に綺麗だ。眉毛の下にほくろがあった。あと、あごにもある。

顔のほくろの数を数えてみたり、圭介のまつげ長いなって見ていたり、圭介の顔を眺めているだけで、何時間でもいられるような気がした。

そつと、圭介のベッドに顔をのせてみる。圭介の部屋は、修二の部屋とは違ってむつとした男臭さがなかった。DNAが遠いからかな？それとも、若さのせいかな。

圭介の寝息を近くで感じた。圭介のあつたかさにも包まれていた。なんで、目の前にこうしているだけなのに、こうもあつたかいのかな……。いつも不思議に感じる。

外がだいぶ暗くなってきたころ、ガチャガチャという玄関の鍵を開ける音がした。それから玄関のドアが開いた。

「圭介？帰ってるの？」

お母さんだ。そのまま、トントンと2階に上がってくる音がした。でも、階段にも絨毯がしいてあるからか、うちみたいにするさい音はしなかった。

ガチャ。ドアが開いた。私はつないでいた手を離し、その場にす

くつて立つた。

「あら、どなた？」

圭介に負けないくらいの色白で、髪は黒々とした、りんとした顔つきのお母さんだった。

「私、圭介くんとは同僚の、柴田といいます。圭介くんが、具合が悪くなって家まで送ってきました。すみません、勝手にあがってしまつて…」

「いいえ、こちらこそ、わざわざ、ごめんなさいね」

お母さんはそう言つて、ちよつと心配そうに、圭介の顔をのぞきに部屋の中に入ってきた。

「寝てるのね」

「はい」

「だったら、心配ないかしら、顔色もそんなには悪くないわね」

「はい、家に帰つて横になつたら、楽になつたみたいで…」

「そう、えっと、柴田さんだったかしら。ごめんなさいね、本当にお仕事中だったんでしょ？」

「ええ、でも社長にタクシーで送つてあげると、頼まれたので…」

「笹塚さんに？そう…。前にも会社で具合悪くなつて、そのとき一人で帰つてきて、ホームで気持ちが悪くつてどうにも動けなくなつたみたいだね。何時間もホームのベンチに座つてたらしいのよ。そんなことがあつたから、笹塚さんも気をつかつてくれたのね」

「そうだったんですか。前にも…」

「去年の秋よ。この子、無理して仕事頑張つちやうから。それに、いつもたいたしたもの食べてないでしょ、会社では。それで、残業だの、たまに徹夜もしてるつて言うじゃない。体がおかしくなるに決まつてるのよね」

「そうなんです…」

なんだか、いつも元気だから、こんなに具合が悪くなつちやうなんてびっくりだ。

「この子ね、元気だけが取り柄って自分じゃ言うけど、そんなでもないのよ。子供のころは体弱かったし。中学と高校でサッカー部に入って、体がだいぶ丈夫にはなったけど、コンピューターし始めたら、また色白の弱い体になっちゃって。それなのに、高校生の気分でいるからまいっちゃうわよ」

お母さんはべらべらと、圭介の寝顔を見ながらそう言うのと、

「あ、柴田さん、下でお茶でも飲まない？圭介きつと、まだまだ起きないわよ。ね。下におりて、お茶にしましょう」

と、誘ってくれた。そろそろ帰ろうかなとも思っていたが、無下に断るのも悪い気がして、一階に一緒におりていった。

リビングとダイニング、そしてキッチンがつながっている、広々としたモダンな家だった。建ってまだ、間もないんじゃないかな。

我が家はもう、築17年。かなりあちこち痛んできているが、圭介の家はまだ、新しい匂いさえした。

「柴田さんって、あの、もしかして、柴田瑞希さん？」

「はい、そうです」

お茶と、お菓子をリビングのテーブルに置きながら、お母さんがそう聞いてきた。

「主人の会社に、春までいた方かしら？」

「はい。部長から聞いていますか？」

「ええ、茂とお見合いをした…。あ、でもこの話は、あまりしないほうがいいかしらね」

「いえ、大丈夫です。お気遣いなく…」

「そう…」

あ、お茶どうぞって言うってから、お母さんもいすに座ってお茶を飲み、ほってため息をついて、

「主人はね、実は茂がお見合いをしても、結局は破談になるんじゃない

ないかって、初めから思っていたみたいなの」と話し出した。

「え？そうだったんですか…」

そういえば、はじめから、あまり薦めていなかった感じだもんな。「私の姉に頼まれて、しかたなく…。ごめんなさいね。主人は本当に柴田さんのことを、素敵な女性だからって、茂のお嫁さんにはもったいないし、茂は仕事人間だから、柴田さんを幸せにできるかどうか不安だって、そう言ってたんだけど…」

「部長が…」

「はあ、本当に駄目になっちゃって…。あら、ごめんなさいね。姉は、今度こそ、結婚できると思ってたみたいで、でも、駄目だったからショック大きかったみたい。主人としては、破談になってよかったって思ってるくらい인데ね」

「え？」

「いえ、ほら、初めてのデートからして、ほっぴらかしちゃったんでしょう？それを知って主人はかんかんになって、慌てて、圭介に行かせたのよ。柴田さんに悪いからって」

「……」

お菓子もどうぞと言ってから、お母さんはお菓子を手にとって食べだして、

「お仕事どう？大変？」

と聞いてきた。

「いえ、私は定時に帰らせてもらえるし、そんなに忙しくないです」

「そう、ならよかった。笹塚さんの会社、とにかく忙しいから。I Tはみんなそうだって圭介は言うんだけどね。ちょっと圭介見ると、こきつかいすぎだわって思っちゃうのよね」

そう言つと、ため息をついて、

「そうそう、主人はね、柴田さんが結婚駄目になるのを予想して、

笹塚さんに頼んだみたいなの」

「そうだったんですか？」

「ごめんなさいね、本当にそれだったら、はじめっから、お見合いなんて話持ってこなかったら良かったのよね〜」

「いえ、いいんです。受けるって決めたのは私です」

「そう？そう言ってもらえると、気が楽になるけど…。あ、そうだね、圭介はどう？」

「え？」

どう？って、どういう意味…？

「会社で、どうかしら。まあ、忙しくしてるんだから、きちんと仕事してるんだろうけど。家じゃのん気だし、能天気だし、これぢやんと社会人やってるのかって心配で」

あ、ああ、そういうことが、びっくりした〜。

「大丈夫です。しっかりと仕事していますよ」

「そう？あなたに迷惑かけてないかしらね。かけてたらガツンと言ってやってね。すぐにいい気になるところがあるから」

「はい」

くすって笑ってしまった。圭介も、お母さんから見たら、まだまだ頼りない子供なんだな〜。そんな彼にぞっこんですなんて知ったら、驚くだろうな〜。

ガチャガチャ、また鍵が開く音がした。

「あら、順平かしらね」

玄関のドアが開き、リビングに日焼けして、髪が金髪のいまどきの若い子って感じの男の子が入ってきた。圭介とは、似ても似つかない感じの…。

「あれ？客？」

「お客さんって言いなさいな。圭介の同僚で、柴田瑞希さんよ。圭介を送ってきてくれたの」

「圭介、またぶつたおれた？」

「そうなのよ、2階で寝てるわ」

「なんだか、口の悪そうな、そんなところが修二を思わせるような、そんな子だった。圭介の弟で、今年大学生になったのかな？」

「柴田瑞希さん…、茂にいの見合いの？」

「知ってるんだ〜」。

「破談になったって、よかったじゃん。茂にいななんて面白くもおかしくもない、まじめ人間。結婚したってつまらなかったよ」

「順平、口の利き方に気をつけなさいって！」

「そう言って、お母さんは順平君のお尻をぽかって蹴った。…蹴った？すごいな〜」。

「ちょっとその光景を見て、驚いていたら、」

「あら、変なところ見られちゃった。もう、息子3人もでしょ、だんだん、私も男になっちゃうのよね。柴田さんのところは、兄弟は？」

「と聞いてきた。」

「兄と、弟がいます」

「あら、じゃ、人数は一緒ね。でも女の子がいるとこないじゃ、全然違うんでしょね。家の中がもう、汗臭いわ、男臭いわ…」

「うちも、弟の部屋、臭いですよ」

「あら、やっぱり？嫌よね。圭介の部屋も臭かったでしょ〜」

「え？いえ、全然…」

「いいのよ、はつきりと言って、圭介の部屋も汗臭いって言うか、高校生くらいから、そんな匂いがするようになったわね。あ、あんなの部屋も臭いわ」

「今度は順平君の背中を、ぺちつてたたいた。」

「いって〜よ。俺、もう部屋行くわ」

「順平君はそう言っつと、階段を上っていった。逃げていったと言っ

た方がぴったりかな。

「あの、そろそろ私」

そう言いかけると、お母さんが言葉をさえぎった。

「夕飯食べていってね。それから、主人が正吾に車で、家まで送らせるから」

「え、いいです、駅まで歩いていきます」

「あら、いいのよ。圭介を送ってくれたんだから、そのくらいは……」
そう言つと、エプロンをかけて、キッチンに行ってしまった。

さて、どうしようか。お手伝いでもするべきか、それとも……。圭介のことが気になっていたので、2階にあがることにした。

「あの、圭介くんの様子、見てきます」

「ああ、そうね。夕飯できたら呼ぶから、それまで、圭介のこと見てくれると助かるわ」

「はい」

2階へ静かにあがり、そつと圭介の部屋に入った。薄暗い中、圭介は寝ていた。と思つたら、

「瑞希？」

と、話しかけてきた。

「起きてたの？」

「うん、ちよつと前に」

「気分はどう？」

「うん、大丈夫。それよか、まだ、家にいたんだ」

「ああ、うん、お母さんに引き止められちゃって」

「ははは、あの人強引でしょ？なんなら、泊まってく？俺のベッドの横に寝ていくってのどう？」

「遠慮しとく」

「なんだ、隣にいてくれたら、俺、絶対すぐに元気になるのに」

「もう少しなら、隣りにいるよ」

「じゃ、またここで、手つないでてよ」

クッションの上に座り、圭介の手をにぎった。

「順平君に会ったよ、似てないね」

「順平？ああ、彼の人生は今、尖ってるからね」

「何それ？」

「高校生まで、まじめだったんだけど、大学行ったらいきなりあれだよ」

「そうなの？」

「サーフィン始めた影響もあるけど」

「ああ、サーフィンね、それで真っ黒なのか」

「あれは、日焼けサロンじゃないかな？」

「ええ？まじで？」

「もともとは、色白だもん。うち、色白一家だよ。あ、親父は違うか……」

「へえ。お兄さんも？」

「うん。色白で、痩せてる」

「ふうん、あ、正吾さんっていうの？」

「うん。コンピューターゲームのソフト作ってるよ」

「へえ！そうなんだ！」

「すげえ、面白いゲームだよ、兄貴むかしっから、そういうの作るの得意って言うか、あれはもう、才能だね」

「ふうん、でも圭介も今の仕事、コンピューターの……」

「俺のは、WEBでしょ。WEBデザイン。ちよっと兄貴とは違う。でも、俺がコンピューターのほうの仕事に進んだのは、やっぱ、兄貴の影響大かな。兄貴にいろいろと、教わっていたから」

「ふうん」

手をつないだまま、圭介の顔を眺めていた。すると圭介が、

「暗くない？電気つけようよ」

と、言った。

「あ、そうだね」

電気をつけると、圭介の顔がすごくはつきりと見えた。ああ、具合がよくなったかと思ってたけど、まだ、青い顔をしていたんだな…。

「手、手！」

圭介は、手を出して催促をする。ほんと、子供か、犬みたいだ。

「はい」

と、手をつなぐ。何ていうか、もっと手をにぎられたら、ドキドキするんじゃないかって思ってたけど、こつこつとにぎっていると、ときめきって言うのではないよな…。

だけど、電気をつけたら、顔が良く見えて、目の前にある圭介の顔を凝視できなくなった。なんだか、照れてしまう。

「瑞希さ、圭介の彼女の柴田瑞希ですってちゃんと挨拶した？」

「え？誰に？」

「おふくろとか、順平」

「しないよ。するわけないでしょ」

「え？でも、いつかはするんでしょ？」

「う、うゝん」

そりゃあ、隠しとおせるわけ、ないだろうからな…。

「きつと、びつくりするね、特に部長は…」

考えただけでも、鳥肌が立つ。

「瑞希の家族は何て言うかな？」

「うち？うちはみんな圭介のこと、気に入ってるから、特にお母さんなんて大喜びするんじゃないの？」

「ほんと？」

「うん」

「わあ、すげ、良かった、俺」

くす。本気で喜んでいるのがわかって、笑ってしまった。それに、こんなふうに笑うってことは、だいぶ元気になったんだね。

トントン、いきなりドアをノックする音がして、

「柴田さん、夕飯できたわよ」

と、お母さんが、ドアを開けて入ってきた。慌てて手を離し立ち上がり、

「はい！」

と、大きな声で返事をした。わざとらしくったかな。

「圭介は？何か食べる？」

圭介が起きているのを知って、お母さんがそう聞いた。

「俺はいいや、なんか飲みたいけど…」

「じゃ、ポカリもって来るわね。柴田さんは、下に来てね」

「はい」

圭介に、軽く手を振り、お母さんのあとを追いかけて一階におりた。

16 彼の家族

ダイニングに行くと、順平君がもう食べていた。

「あ、お先に食ってます」

「ご飯をほおばりながら、順平君はお箸をぶらぶらふった。」

「順平、はしたないからやめなさい」

面白いな〜、この三男は…。でも、緊張をほぐしてくれて助かる。

「柴田さんは、ここに座ってね」

お母さんにうながされ、順平君の前の席に座った。

ピンポン。

「あ、お父さんだわ」

そう言つと、ばたばたと玄関にお母さんは走っていった。

「お帰りなさい。お父さん、また圭介具合が悪くなって、早退して来たのよ」

「え？圭介が？」

そう言つと、部長がリビングに入ってきた。

「あ、お邪魔してます」

席を立ちお辞儀をすると、部長がびっくりして立ち止まった。

「それで、柴田さんが送ってくれたの」

と、後ろから部長の鞆を持って、お母さんが入ってきた。

「ああ、そうだったんだ、いやあ、柴田さん悪かったね〜」

「いえ、なんかこちらこそ、夕飯までごちそうになっちゃって…」

あ！

「え？」

いきなり、大きな声を出したから、部長がびっくりしてしまった。「すみません。家に電話するの忘れてました。食事いらないうって電話しないと…」

「あら、そうよね、夕飯の支度しちゃうものね。ごめんなさいね、私もうっかりしてたわ」

「いえ、ちよっと、電話してきます」

そう言つて、携帯を持ち廊下に出た。

母に、圭介くんの家で夕飯を食べていくと伝えたと、

「ええ？　どういうこと？」

と、母はかなり驚いていたが、

「詳しくは帰ってからね。じゃあ」

と、さつさと私は、電話を切ってしまった。

部長が、スーツから普段着に着替えてきて、キッチンの方へ行き、冷蔵庫からビールを持ってきた。お母さんが、部長のご飯と、お味噌汁をよそつて、ダイニングにきて、

「あら、やだ、ビール？　飲んだら運転できないじゃない」

と、部長に釘を刺した。

「運転？」

部長が、不思議そうに聞いた。

「そうよ。柴田さん送ってもらわなくっちゃ」

「あ、あの、私、電車で帰りますから……」

「ああ、じゃ、俺が送ってく」

「順平？　まだあんた、若葉マークでしょ……。何言ってるの」

「大丈夫だつて！」

「駄目よ、柴田さん乗つけてて事故にでもあつたらどうするの？」

「俺、運転うまいよ！　まじ」

「駄目！」

「ああ、いいよ、いいよ。僕が送っていくから」

開けてしまった缶ビールを、テーブルの真ん中にずらして、部長がご飯を食べだした。

う、申し訳ないな〜。…。

「じゃ、そのビール俺が飲む」

「あんたは、未成年でしょ〜」

「んなの。大丈夫だって、俺、もう19だし」

「でも、未成年なのよ!」

この親子の会話は面白い。

ガチャ…、玄関のドアが開いた。

「ただいま」

「あ! いいところに!」

どうやら、長男の登場のようだ。お兄さんか〜。といっても私よりもだいぶ年下。でも、圭介のお兄さんって言うだけでも、「お兄さん」っていう感じがしてならない。

リビングに入ってきて、知らない人が食卓にいるのを見て、かなり驚いた様子だ。

「正吾、お帰りなさい。あなたご飯食べたら、柴田さん送って行ってくれる?」

「は?」

突拍子もないことに、驚きを隠せない様子。そりゃそうだ。いきなり家に帰ったら、知らない人がご飯食べているし、いきなりその知らない人を、送っていけって言უნだから。

「柴田瑞希さん、圭介と同じ会社の人で、今日具合の悪い圭介を送ってくださったのよ。ほら、挨拶なさい。」

「ああ、どうも。圭介がお世話かけて…」

「い、いいえ」

長男、正吾さんはとてもまじめそうな人だ。大人しそうで、圭介とも、順平君ともまったく違う。正吾さんは、いや、正吾君っていった方がいいのかな、上着だけを脱いで、リビングのソファに置くと、食卓についた。

「これで全員そろったな」

部長が、もう自分のお役目は終わったようだと思ったのか、開けたビールをくいと飲んだ。

「ああ！」

順平君がそれを見て、ちえっという顔をした。

「20歳になったらどうせ、お父さんの晩酌に付き合わされるんだから、いいじゃないの」

お母さんが、そう言うつと、

「それは、絶対にかんべん」

と、順平君はばくばくとご飯を食べだした。そして、

「ごちそうさま〜」

と順平君は、さっさと席を立ち、リビングのソファーに座りテレビを観だした。

「順平、音は小さくね」

お母さんもやっと、正吾さんのご飯を用意して食卓についた。

「圭介、また倒れた？」

正吾さんが、お母さんに聞くと、

「そうよ、ちよつと忙しすぎないかしらね〜」

とお母さんは、正吾さんに向かってそう答えた。

「まあ、会社で1番若いんだし、しょうがないだろう」

部長が、多分後輩の笹塚社長の肩を持つとしたのだろう、そんなことを言った。

「しょうがないよ。ITの会社に入っちまった運命かな」

正吾さんも、さすが事情を知っているようだった。

「でも、あなたは、けっこう家に帰ってきてるじゃないの」

「俺の場合は、家で仕事してたりするから」

「ふうん、そうね。家でもずっと部屋に閉じこもってるわね。でも、まだ家のご飯が食べられるだけましよ。圭介はコンビニのお弁当とか、

カップラーメンとかですませてるみたいだから。お弁当だって持たせてただけ、そのうちいらないうて……」

「笹に気を使ってるのかな？ 笹は一人暮らしで、だれもお弁当作ったりしないからな」

「母親の弁当なんて、恥ずかしいだけだろ」

テレビを観ている順平君が口を挟んだ。

「ええ？ じゃあ誰のならいいの？ 彼女とか、奥さんとか？」

お母さんが、順平君に向かってそう聞いた。

「圭介は、早くに結婚した方がいいかもな……。無鉄砲だし、限界っていうのを知らないで、仕事もしちゃうし、その辺をセーブしてくれたり、手料理をしっかりと食わせてくれるような、しっかりした奥さんがいたほうがいいと思うよ」

と、部長が言った。そうか！ 早くに結婚した方がいいって、部長は思っているのか！ ご飯を食べながら、私はちよつと心の中でガッツポーズをした。

「年上がいいわね。あの子の場合、甘えん坊だし、しっかりした年上がいいわよ」

お母さんも、話にのりだした。ああ、お母さん、一回り上でもいいでしょうか……？

「そうだな、あの子の場合は、大きくどんと構えてくれるくらい、器のでかい人じゃないと」

ああ、それはちよつと、無理かもです……。部長……。そう、心の中で、答えていたが、

「う……。理想は、柴田さんみたいな人だな……」

と、部長がいきなり、そう言うので、びっくりしてしまった。

「ええっ？」

すつとんきような声とともに、食べてたご飯が、器官にいつてしまったらしく、私はむせてしまった。

「大丈夫？ほら、水飲んで」

お母さんが慌てて、水を入れたコップを、持ってきてくれた。

「お父さん、とんでもないことを言うから、柴田さんが困っちゃったじゃないの。ねえ、ごめんなさいね」

「いえ、ごほ…。ごほ…」

「でも、俺も圭介には年上がいいと思うよ。今までの彼女みたいな、年下や、タメだとさ、わがまま聞けないからさ」

「1番のわがままなやつが、何言ってるんだ」

順平君に、クールに正吾さんがそう言った。

正吾さんは、あまり、表情を変えず、もくもくとご飯を食べている。ポーカーフェイスなんだろうなってそう思った。

「本当にもう、お父さんは…。茂のことといい、柴田さんに失礼だわ」

「ああ、本当に悪かったね」

部長が、ビールを飲む手を止めて、私に少し頭を下げた。

「いえ、いいんです。本当に…。その、私のほうこそ、その…」

好きな人ができて断つちゃったんだから。でも、その話を誰もしないってことは、茂さんが気を使ってくれたのか、誰にも話していないんだろうな。

「会社にはいないかな、柴田さんのタイプは」

部長が少し、くだけた感じでビールを飲みながら聞いてきた。

「いえ、えっと…」

困った…。会社どころか、部長の息子さんのことを好きになっっているんですと、とても言えない。ああ、いつか言わなきゃいけないだろうなって思うと、考えただけでも頭がくらくらする。

「いないかな…。けっこう、独身がそろっているだろう？」

「はあ…」

「お父さん。柴田さん困ってるわよ」

「ああ、悪い悪い。はっはっは」

部長は立ち上がると、冷蔵庫を開け、もう1缶ビールを持ってきた。

「柴田さんも、飲むかい？」

「いえ、私は…」

圭介が具合が悪いのに、飲めるわけがない。

プシュっていい音を立てて、缶ビールを開けると、おいしそうに部長はごくごくって飲み、そのうちに、陽気になったようだ。

そう、部長はあまりお酒に強くない。ビールだけで、十分酔える人だ。それも、陽気になる。

「いや、本当に、茂は、結婚する気がないんだな、ありゃあ…」

「まあ、しょうがないんじゃない。仕事で頭がいっぱいなものよ」

「そんなやつと見合いをさせて、すまなかったな…」

ああ、まだ言ってる…。気がひけるよ…。

「そういえば、おい、正吾も今、付き合ってる人いないんだろう？」

「え？」

いきなり、自分にふられて、正吾さんは一瞬びくってした。

「兄貴、いるよ」

順平君が口を出した。

「ああ、そうよ、私も知ってるわ」

お母さんも、冷静にそう言った。

「どうなのよ、相手の人、年上でしょ？」

え？年上なの？

「なんだ、知らなかったのは、僕だけか…」

部長が少し、がっかりしていた。

「もう、30になるんじゃないの？えっと、楓さんだっけ…」

茶化したように、順平君が言った。ああ、30…。それでも、私

より若いわ。

「まだ、29になったところだよ」

冷静に、正吾さんはそう言った。

「じゃあ、6つつ上？」

「うん」

お母さんの質問にも正吾さんは冷静に、下を向いたまま、軽くうなずいた。6つか、えっと、私と圭介の年の差の半分だね。

「そうか、いたのか」。もう29歳だと相手の人は結婚を考えるんじゃないのか？正吾」

これまた、冷静に部長が、正吾さんに聞いてきた。

「別に。結婚願望ない人だから」

「あら、そうなの？じゃあ、もしかして、正吾、結婚できないかもしれないじゃないの」

え、それはないんじゃないかな、だって正吾さん、まだ23ですよ。

「は〜。なんだかね、うちはみんな結婚できるか心配だわ。あ、

柴田さんのところは？お兄さんご結婚」

「はい、もうしています。2歳になる女の子もいて、今、仙台にいます」

「そうなの〜。2歳っていったら、可愛い盛りじゃないの。じゃあ、お母さんも喜んでるでしょう」

「いえ、あの、あまりうちには来なくて、遠いし、どっちかって言うと、お嫁さんの実家に行くみたいで」

「やつぱり〜？ああ、息子ってそうなのよ。うちもそうなるかしら。ちゃんと、うちにも孫ができれば、遊びに来てくれたらいいんだけど、ねえ、正吾！」

「え？俺？俺は、結婚する気ないから、俺に言っても無理」

そう正吾さんが、クールに言うのと、

「もう、これだから。順平もあんなじゃ、結婚なんて考えられないし、やっぱり圭介だわ。あの子1番家庭もちそうだわ」

「うん、圭介なら、家族サービスとかよさそうじゃね？犬とか飼って、家族で公園とか、海とか、旅行とか絶対、行きそう」

順平君はもう、テレビよりも、こっちの話に夢中のようにだ。

「ねえ、そんな感じるわよね。柴田さん」

え？私にふる？お母さん……。

「そ、そうですね。そういうの、好きそうですね……」
思いつき好きだろうな。

「柴田さんみたいな人がいいわね。それで、ちよくちよく家に来てくれたら嬉しいわ。一緒に住んでくれとは言わない。でも、ちよくちよく、来てくれたら……。孫も連れて。そういうのを夢見てるのよ。もう、圭介にしか託せない夢だわ」

お母さんは、ふうってため息をついて、お茶をすすった。それ、私もしたいです。でも、私で本当にいいんでしょうか？なんて、聞けない。

「失礼だけど、柴田さんおいくつ？」

「33です」

「え？そんな？」

驚いたのは、順平くんだった。そんなって何？そんなって。

「若く見られない？20代に見えるわよ」

「いえ、そんな……」

「ほんと、圭介の隣にならんでも、そうね、7、8歳しか離れてない感じかな。でも、一回り離れているのね」

「はい……」

ああ、落ち込んできた。

「一回りも下の圭介じゃ、柴田さんから見たら子供よね。恋愛対称になんてなりっこないし、結婚はありえないわね」

「げえ、まじで、結婚させようって思ってたの？」

順平君がソファから転げ落ちた。多分、わざと……。そうだよ、普通、恋愛対象にはならないって、思うよね……。

トン……。すごく静かに下りてきたから、わからなかったが、圭介が階段を下りてきていた。

「あら、圭介、もう大丈夫？」

「うん、うるさくて、寝れないし……」

「あら、2階まで聞こえてた？」

「圭介！信じらんねえよ、この夫婦、圭介と、柴田さんくつつけよともくろんでる！やばいから、ここらで、一発言とかないと、柴田さんも丸め込まれちゃうよ」

順平君は、半分、楽しそうに圭介にそう言った。圭介のことは、呼び捨てなんだな。

「ああ、なんか聞こえてた」

「圭介、冗談よ、そんな、ねえ。ごめんなさいね。いえ、ついね、圭介にも彼女いないし、柴田さんもないならって、ほら、圭介には絶対に年上の方がいいって思ったし……」

「ああ、圭介、柴田さんは、正吾に送らせるからな。それより、もう大丈夫か？」

話を変えようとしているのが、みえみえの部長だ。多分、圭介の知らないところでそんな話をして悪いとも思ったのか。

「あ、兄貴が？」

「ああ、親父、ビール飲んじやったしな」

正吾さんは、いたって冷静。

「そっか……。もっと具合よくなったら、俺が送ってつただけ……」

「何言ってるの、あなたが送っていったらまた、あなたを誰かが送ってくることになるわよ」

「ははは、エンドレスになっちまう」
順平君は大笑いした。

圭介は笑いもせず、食卓について、
「兄貴さ、彼女いたよね」

といきなり、正吾さんに話しかけた。

「ああ、うん」

「じゃあ、大丈夫だよな」

「何が？」

「あ、でも彼女年上だっけ？」

「何が言いたいんだよ、お前」

そんな会話を続けている二人を、周りのみんなは、静かに見守っていた、というか、圭介のあまりにも神妙な態度が、みんな気になっ
っていたのだ。

「瑞希のこと、駄目だよ。好きになっちゃ」

「はあ？お前、あほか？何で俺が？」

「一応、言っておかないとさ」

何言ってるの？ってのどまで出かけた。でも、ここで、興奮した
方がかえって、怪しいよね…。黙って、知らん振りをしていたが、
順平君が圭介の方に来て、

「あ、すげえ、まじなんだ。圭介の方は、柴田さんのこと…」

と、少し悪ふざけをしている感じで、言ってきた。圭介はそんなの、
無視をしてお母さんの方を向いた。

「おふくろさ、ポカリ忘れてんだけど」

「あ、ごめんなさい、忘れてた」

お母さんは席を立ち、冷蔵庫に取りにいつて、圭介にペットボト
ルを渡しながら、

「そつ、そつなの…」

と、意味深にうなずいた。

圭介は、ペットボトルを受け取ると、すぐにふたを開け飲みだした。相当、のどが渴いていたようだ。

「ははは、あれだ、あれ…。まあ、柴田さん、そんなに圭介の言ってることも気にしないでいいから。うん。ははは…」

部長の笑い方は、どうにもわざとらしく、それとは反対に、お母さんの方は目を輝かせていたようだった。

「ま、今日は正吾に送ってもらって、今度違う機会に、ドライブでも誘ったら？ねえ。圭介。圭介ね、運転うまいのよ。柴田さんどこか行きたいところある？連れて行ってもらつといいわよ」

「え？」

お母さんの、のりのよさにのけぞると、

「あ、出たよ。やつべえ。ああなると、止まらないからな」と、順平君が茶化すように言った。

「まあまあ…」

部長が、お母さんの前のめりの体制を直すような感じで、さえぎった。だが、

「いいよ。またどつか、ドライブ行こう」

圭介は、あっさりとそう言った。

「また？」

みんなが同時に、聞いてきた。やばい？えっと…。

「それよりさ、瑞希、まじ今日はサンキュー！助かった」

圭介は、まったくみんなの反応を気にせず、そう私に微笑みかけた。この、周りをまったく気にしない、マイペースさは、お母さん譲りか。

「じゃ、送ってくるから」

正吾さんが立ち上がり、上着を取って、上着のポケットからキーを出した。

「ごちそうさまでした」

そう言つて、私も立ち上がると、
「本当にありがとうね、柴田さん。また、これにこりずに、遊びに来てね」

と、お母さんが優しく言つてくれた。

「はい。ありがとうございます」

「じゃ、正吾、きちんと安全運転するんだぞ」

部長がそう言つと、

「ああ、大丈夫」

と、これまた、クールにそう言つて、正吾さんはリビングを出た。

圭介も一緒に玄関に来た。

「兄貴、頼んだよ」

「ああ」

ほんと、正吾さんは、クールで無口だ。

玄関で、私は圭介と目を合わせ、少し微笑むと、圭介も、声を出さず明日なつて口だけを動かした。　どうやら、明日には会社に来れそうだな。

この前、圭介が運転していた車に乗り込む。シートベルトが固いんだが、どうにか、自分でベルトをすることができた。それを見てから、正吾さんが、車を発進させた。

正吾さんも、やはり、色が白かった。それに、圭介よりも痩せていた。手も細く、指も長くて細い。圭介よりも、一回り痩せさせた感じがした。

圭介の隣はあったかいが、正吾さんの隣は緊張した。何を話していいかもわからなかった。正吾さんも同じだったのか、ラジオをつけた。

「圭介、まじかもしれないですよ。どうしますか？」

しばらくすると、正吾さんがぼそつて話しかけてきた。

「え？何が…？」

「ああ、柴田さんのこと、多分、本気で好きなんじゃないですか？」
「え？」

見る見るうちに、顔が赤くなっていき、やばいって冷静を装うとした。

「ど、どうかな、冗談半分かも…ね」

「いや、すんごい真剣な顔してたからな。あいつは顔にもろ出るタイプで、あんなに真剣な顔をしたときには、本当に真剣なんですよ」
圭介も運転が上手だが、正吾さんも上手だった。圭介より、さらに丁寧な運転。

「あまり、柴田さんも、冗談で受け止めない方がいいですよ。きちんと断るときは断らないと。結局、傷つくのは圭介ですから」

「弟さん思いなんだ」

「そっというわけじゃないけど…」

少し間をおいてから、

「あいつは、あんなふうに、いつも明るいし、馬鹿言ってるけど、けっこう傷つきやすいんです。それに、根に持つタイプかもしれないから、これは、柴田さんのためにも言ってるんですけど」
と正吾さんは続けた。

「ええ？根に持つ…？」

ちよつと、笑ってしまった。

「健気に、思いつめるところもあります。いつもなんに対しても、本気だから…」

うん、なんとなくわかる。

「順平は、本当に何も考えてないですけどね、圭介は意外と、周りのこと気にしたり、相手のこと考えてものを言っていたり、相手に気を使わせないようにする気配りって言うか、配慮が絶妙だから、周りとしては、何にも考えてない、無邪気な子供に見える。でも、内心は大人ですよ」

「うん、なんだか、わかる気がするよ」

「そうですか？ただのアホだの、馬鹿だのって、思ってるやつもいますからね」

なんだか、正吾さんは、圭介のことを理解しているんだなうと思つと、嬉しいような気がしてきた。そういえば、圭介も、正吾さんのことをほめていたつけ。

「純粹で健気な分、傷つきやすいから、もし、あんまり圭介のこと何とも思つてないなら、気を持たせるまねだけはしてほしくないなつて…。生意気言つてますけど、俺」

「はい、わかります。私も圭介くんことは、傷つけたりしたくないです」

「わかつてもらえたんなら、いいですけど…」

カーナビに、私の家の住所が入っていると教えたので、カーナビを見てすんなりと家まで送ってくれた。

「ありがとう」

と、車から降りた。

「それじゃあ」

と、ハンドルを握つたまま、正吾さんは軽く頭を下げ、そのまま、発進して車を出した。

家に入ると、ばたばたと母が玄関にかけてきた。母が走るので、クロも嬉しくなり、尻尾を振つてついてきたようだ。

ハッハッハッ…。クロはペロを思い切りだして、尻尾をぐるぐるとまわし、私に抱きついてきた。

「クロ…、重い…」

今日は、けつこう疲れていて、クロの体重がいつもの倍に感じた。

「なんで、あんた圭ちゃんの家に？」

「圭介がね、会社で具合悪くなつて」

「え？大丈夫なの？圭ちゃん」

「うん、もう私が帰るころには、起き上がってたし、明日には会社

に來れそうだった」

「そう…。何、それで、夕飯までいたの？あんたずうずうしくない？」

「だって、圭介のお母さんが、食べていってねって…。断るのも悪いから」

「でも、断らなきゃ…。部長さんのお宅でしょう」

「うん、でも、車で送らせるからって」

「え？部長さんが送ってくれたの？」

「ううん、圭介のお兄さんが…」

「あら、圭ちゃんお兄さんいるの？おいくつ？」

あからさまに母は、目を輝かせた。どうせ、私とお付き合いできるかと思ったのだろう。

「23歳」

「ええ？そんなに若いの！」

駄目だって思ったらしく、これまたあからさまに、がっくりしていた。

「お風呂はいつて寝るね」

そう言つと、私は2階に上がり、着替えを出した。

それにしても、長い1日だったな…。圭介の家族全員に会っちゃったんだけど、みんないい人だった。話しやすいかどうかは、別として…。

でも、圭介が家の中でも明るく、家族から好かれているのは、よくわかった。

お母さんが、私と圭介が付き合うことにのりりだったのは、冗談なんだろうとか、正吾さんの言葉がずっと頭の中をくるくるしてたりとか、結局その日は、寝れたのが、夜中の2時過ぎだった。

17 お泊り

翌日、9時半を過ぎても、圭介は会社に来なかった。休むのかなって思ったとき、携帯がなった。

「もしもし？」

「あ、瑞希？俺だけど…」

「どうしたの？」

圭介の声は、電波が悪いのか、よく聞こえなかった。

「今、病院。なんかまだ、調子悪くて。親父に病院にいつて診てもらって…。すんげえ混んでて会社に着くの、昼、過ぎそうだから、社長にも言っておいてもらえる？」

「うん、わかった」

電話を切って、社長に伝えて席に戻った。病院に行くほどのことなのか…。ううん、病院で診てもらったほうが、安心だもんね。自分にそう言い聞かせ、頭を空っぽにしたくて、仕事に打ち込んだ。

社長が、少しすると来て、圭介のパソコンを開いて、圭介の依頼されている仕事を始めていた。

「圭介、どうしたかな…。なんともないといいけど…」

「そうですね…」

社長も心配なんだな…。

午後、1時過ぎてようやく、圭介がやってきた。顔色はそんなに悪くないし、少しほっとした。

「あ、社長、すみません」

圭介は、社長が圭介のパソコンで仕事をしているのを見て、慌てて席に走ってきた。

「いいよ、それより、どうだった？病院」

「はい、胃カメラの予約してきました」

「おお、そうか…。なんだか、おおことだな」

「そうなんすよね。俺、たいしたことないって言ったんだけど、親父がでかい病院行けって。大学病院にいったら、即検査ですよ。あ、めんどくさい」

「いやいや、先輩も心配してるんだよ。安心させるためにも、受けたら？それにもし、どっか悪かったら、早めに治した方がいいんだから」

「はい、そうっすよね…」

社長と席を入れ代わると、そつと小声で、私に聞いてきた。

「社長、メールのところ、見てなかった？」

「うん、多分ね」

「やべ〜。この前瑞希に送ったメール、見られたらどうしようかって思った。消しとこっ…」

「消さなかったの？」

「瑞希消したの？」

「うん、それより、呼び捨てになってるけど…」

「あ、やば」

相当、動揺したらしい。昨日帰ったあとも、社長は圭介のパソコンで仕事したんだろうから、その時だってやばかったかもしれないのにな〜。

「調子悪いつて、大丈夫なの？」

「う〜ん、なんか、微熱あつてさ。それに朝、めまいもして…。風邪だっと思うんだけど」

「でも、診てもらったら、検査だつて言われたんでしょ」

「一応、検査しましょうって。瑞希…、さん、胃カメラのんだことある？」

「ないよ〜。バリウムならあるけど」

「そっか〜。俺、バリウムもないよ。なんでいきなり、胃カメラかな〜。嫌だな〜」

「大丈夫だよ、最近はあまり辛くないって聞いたよ」
「まじ？」

そんなことを話しながらも、圭介は仕事を始めた。そのうちに、仕事に集中しだし、黙り込んでしまった。その横顔を見て、ちよつと不安になった。胃力メラか…。なんでもないといいんだけどな…。

6時、社長が圭介のところに来た。

「今日はもう、圭介は帰る事！」

「でも…」

「お前がまた倒れたら、俺が先輩にしかられるんだよ。お前のお母さん怖いしな…」

「すみません」

「ははは、ま、今日は家でゆっくりして、明日、頑張ってくれよ」
「はい」

「あ、柴田さんも、お疲れさん」

社長にそう言われて、私と圭介はオフィスを一緒に出た。

エレベーターに乗り、一階に着くまで、圭介はちよつと難しい顔をしていた。一階に着き、ドアが開いた。

「なんか、気が重いな」

「え？」

「社長に、申し訳ないっていうか、俺って使えないやつだよな」

「そんなことないよ。でも…」

「でも、何？」

「お母さんも言ってたけど、もっと自分の体は大事にしなくちゃ。食べるものに気をつけたりね」

「ああ、言ってた？俺もよく、言われてる」

「じゃあさ、コンビニのお弁当とか、カップラーメンとかじゃないご飯にしたら？」

「うゝん、外食でも、栄養は偏るよ。それに高いじゃん」

「お母さんのお弁当は？」

「うっくん」

圭介はがりがりって、頭を掻いた。

雨が、ぽつりぽつりと降り出してきた。二人とも傘を開き、少し、圭介との距離ができた。

「いいんだけど、どうもな〜。抵抗ある。だって、誰も弁当持ってきてないし、それも親の作った弁当ってなんだか…」

「彼女とか、奥さんのならいいの？」

「……」

なんか、変なことを言ったかな？圭介は、いきなり、私のほうを向いて、黙ってしまった。

「そっか…、それも有りだよな」

そこで、はたと気がついた。作るのは、多分私だ。でも、前にお弁当を作ってこようかと言ったら、いいって断ったよね〜。

「そっくだよね〜」

圭介は宙を見つめて、また、つぶやいた。なんだなんだ？

駅について、圭介と別れて、私鉄の乗り場に行った。微熱があると言っていたし、ちよつと心配だったんだけど、元気に手を振っていたし、大丈夫かなって思った。

翌日、朝からどしゃぶり。あああ、こういう日は、出たくない。お出かけ用にと買った長靴を履き、レインコートもおった。外はレインコートをはおって、ちょうどいくらいの涼しさだったが、電車の中はむっとしていた。電車から降りて、ようやく涼しい空気に触れることができた。

会社に着くと、圭介が、応接コーナーで顔を伏せていた。

「どうしたの？」

レインコートを脱ぎながら聞くと、

「うっくん、電車混んでて、暑くて、蒸してて…」

と、元気のない声で圭介は答えた。

「気持ち悪いの？」

「うん、めまいも……」

大丈夫かな……。

「ちよつと、ここで休めば治るから……」

今日は金曜だ。もし、仕事の区切りがつけば、明日とあさっては、休めるはず。

そこに、社長が来た。

「お、圭介、どうした？」

「あ、おはようございます。すみません、ちよつと休んでから、仕事始めます」

圭介は少し、辛そうに言った。

「大丈夫か？」

「はい、どうにか、休めば……」

絶対に辛いだろうに、圭介はぎこちない笑顔を作った。それは、社長にもわかったようだ。

「木下、お前、少し圭介のサポートできるか？」

「はい、こつちの終われば、できます。多分、午前中には終わるか……」

「ああ、そつか、悪いけど頼むわ」

「社長、俺、大丈夫です、もう……」

「うん、じゃ、あまり根をつめないで、仕事にかかってくれ、な？」
優しくそう言うと、社長は自分のデスクへと向かっていった。

圭介は、よろよると立ち上がると、自分のデスクに座り、パソコンを開いた。

「大丈夫？」

「うん、大丈夫」

圭介が、強がっているのは、痛いほどよくわかる。

午前中が過ぎ、圭介は、

「ちよつと休憩してくる」

と言って、また、応接コーナーに座りに行った。ちよつと早めに、昼食を終えた木下さんが、圭介のデスクに座った。

私は、急いで外のお弁当を買い、地下にあるコミュニケーションルームというところで、食べ終え、すぐにオフィスに戻った。稲森さんは昨日、今日と、風邪でお休みをしている。

「圭介、ポカリ飲める？」

自販機で買ってきた、ポカリを圭介に渡した。

「ああ、ありがとう」

ちよつとだけ、口に含むと、すぐにふたを閉めてしまった。

「頭いて…」

「今度は頭いたいの？」

「うん…」

そう言つて、また頭を伏せてしまった。何か、私にしてあげることはないのか…。何もしてあげられなくつてもどかしかった。

「瑞希…」

すごく小さな声で、圭介が呼んだ。

「ん？」

私も、できるだけ小さな声で、返事をした。

「もう少しここにいて」

頭をふせたまま、少しだけ私の手をにぎった。誰かが来て見られないよう、すぐに手を離してしまつたが…。ここにいただけでも、圭介の支えになるのだろうか…。だったら、ずっと、ずっと、そばにいるんだけどな…。

木下さんが、仕事のことを聞きに、やってきた。

「あ、席、戻ります、俺」

そう言つと、多分、最大限の力を振り絞っているんだろうな、席

を立ち、デスクへと歩いていった。強がってみせてはいるけど、たまに、顔がしかめつっらになる。頭が痛いのかな？

木下さんが、圭介の反対側に椅子を持ってきて、圭介から、いろいろと仕事の内容を聞いていた。

「あ、その辺なら、俺にでもできるから、圭介休んでな」

「すみません」

圭介は頭を下げ、そしてまた、応接コーナーに戻っていった。

6時になった。圭介はそれまで、何度か、席に戻ってパソコンを見て、また、応接コーナーに休みに行っていた。

「圭介、いいぞ、帰って。あとは俺がやっておくからな」

社長に言われ、大人しく圭介はオフィスを出た。

「送っていくよ？」

そう言つと、「大丈夫」とまた、強がった。

「いいから、あ、でも今日は、帰り電車で帰るからね」

「悪いよ、遠回りじゃん」

「いいよ、金曜日だし」

「あ、じゃ、俺んちに泊まって行けば？」

「無理無理、着替えもないし」

「俺のパジャマ貸すよ」

「無理だつて〜」

なんか、これだけしゃべれるから、大丈夫かなとも思ったが、やっぱり顔色が悪いから、送っていくことにした。

電車に乗ると、やっぱり辛そうだった。そんな圭介の手を、私はしっかりと握っていた。駅に着き、改札を出た。圭介は、電車に乗ったあたりから、無口になった。駅前には、タクシーが何台か止まっていた。

「タクシーに乗ろうか？」

そう言つと、素直に、

「うん」

と、圭介は答えた。どうやら、歩くのは辛いようだ。

二人でタクシーに乗ると、圭介が行き先を告げた。家には、5分も乗らないうちに到着した。お金を圭介がさつさと払い、私にタクシーから降りるように言った。実はそのまま、このタクシーに乗って駅まで戻るつもりだった。

「家、寄っていった」

そう言うのと、玄関の鍵を開けて、圭介は入って行ってしまった。私も慌てて、家に入った。

「お帰りなさい」

お母さんが玄関に来て、私がいるのを見ると、

「あら！柴田さんじゃない？」

と、びつくりしていた。

「また、送ってもらっちゃった」

圭介は、お母さんに荷物を持ってもらい、靴を脱いで、先にリビングに入っていた。

「さあ、どうぞ。柴田さんもあがって」

「はい」

ああ、帰るつもりだったのにな。ここで、帰りますとは言いつらい。

「圭介、また、具合悪くなったの？」

「うん、ちよつと行きの電車でやられた」

「え？行きの？」

「圭介君、1日ぐったりしてたんです」

「そうなの？今は？」

「ああ、ずいぶん、落ち着いた」

そう圭介は言ったが、お母さんは心配そうだった。

「柴田さん、ごめんなさいね、また、迷惑かけちゃって」

「いえ、私が今回は勝手に、ついてきただけですから…」

「でも…、あ、そうだ。夕飯食べていつてね。あ、それから、今回はきちんとお母さんに連絡入れてね」

「はい、でも、悪いですから、もう帰ります」

「何、言ってるのよ。遠慮はしないで！帰りはまた、誰かに送らせるから」

それが、気が引けるのだ…。

「電車でも、そんなに時間かからないですし、今日は電車で…」

「だから、泊まって行けばいいんだよ」

リビングのソファで、横になっている圭介がそう言った。

「あら、いいわね。そうしなさいよ」

ええ？そうしなさいって…。ちよつと…。

「でも、着替えもないし、化粧道具も」

「私の貸すわよ。お化粧道具は、合わないかしらね…。でも、なんとかなるって」

「でも、あの、部長は？」

「あ、今夜はね、接待で遅くなるって。いいのよ、遠慮しないで。もう、上司じゃないんだし」

そ、そうだけども…。

「お母さんに連絡して！あ、私に途中でかわってね。じゃなきゃ、お母さんも心配でしょ」

「いえ、そんな心配されられる年じゃないし…」

私の言うことなど聞かず、お母さんはその気満々みたいで、私が電話するのを心待ちに待っている様子だった。

ああ、もう、泊まるしかないようだ。携帯で家に電話をした。

「あ、お母さん。あのね、実は今日も圭介くんが具合悪くなって、送ってきたんだけど」

「まあ、大丈夫なの？」

「うん、それでね…」

「もしかして、またご飯ごちそうになるんじゃないでしょうね」

ああ、お母さん、ごちそうになるどころか…、泊まるんです。と言ったら母に怒られそうな気がして黙ってしまった。すると、

「ちよつと、貸して」

と、圭介のお母さんに携帯を取られた。

「こんばんは、すみません。圭介の母です。瑞希さんにはまた、送っていただいて、いつもご迷惑ばかりおかけして…」

母はきつと、いきなり電話をかわったんで、めんくらっているだろうな…。

「今日はもう、遅いですし、帰り送って行かせようと思ったんですけど、あいにく主人が、接待で遅くって、うちの息子たちもまだ、帰ってきていないし、多分、金曜日だし、遅いかもしれないんですよ」

母よ。頑張れ、負けるな…。電車で帰らせてくださいって、強気で言ってくれ…。

「いいえ、そんな！遅くにあぶないですから。うちの近くは暗いところも多くて、一人で帰せませんわ」

ああ…。圭介のお母さんの方が、やっぱり強気…？

「今日は瑞希さんに泊まっていたいただきますから。明日、お昼くらいにでも、誰かに送らせます」

「え？泊まる？！」

かなり、母は大声をはりあげたらしい。母の声が携帯電話から聞こえた。圭介のお母さんは、携帯を耳から思い切り、離していた。

「大丈夫ですよ。うちの息子たちには、よく言って聞かせますし」
何をだ？

「じゃあ、瑞希さんにかかりますね」

圭介のお母さんは、にこにこしながら、携帯を私のほうに差し出した。ああ…。もう泊まるしかないんだろうな…。

「あ、お母さん、そういうことだから…」

「え？ちよつと、瑞希」

母が何か言いたそうにしていたが、ぶちつと切ってしまった。また、家に帰ったら、怒鳴られるかもな…。

「OKだった？」

圭介が、ソファから身を乗り出して、聞いてきた。

「もちろんよねえ。さて、ご飯作るわね。あ、そうだ、瑞希さん、お風呂入る？まだ、お湯いれてなかったわ。お風呂が先ね」

そう言つと、そそくさと、お母さんはキッチンを出て行ってしまった。

「お、お風呂…」

「パンツ、俺の履く？」

「い、いいよ！」

一応、替えのパンツ、持ってるし…、なんてとても言えないけど…。よく桐子の家にいきなり泊まっていたことがあり、その頃の癖で、鞆には常に替えのパンツが入ってるんだよね…。

「そうだ、瑞希、この前俺のパンツ見たでしょ？」

「え？」

「この前、送ってくれたとき」

「見てないよ」

「うっそ、俺が着替えてたとき、部屋にいたじゃん。エッチ。すけべ」

「な、何言つてんの？見るわけないじゃん。後ろを向いてました！」
そう言いながらも、顔が赤くなっていった。

「冗談だよ。そんなにむきになるなよ」

圭介は笑いながら、また、ソファに横になった。なんだ、ずいぶん元気じゃないの…。

ガチャ…。玄関の鍵が開いた。

「ただいま」

あ、正吾さんだ。お母さん、帰りが遅いって言ってなかったっけ？金曜だからって。

「あれ？柴田さん？」

「あ、お邪魔してます」

「また、圭介…」

「うん、ちよつと、会社でダウンして」

「お前、ほんと大丈夫なの？」

「うん、もうだいぶ、楽になった。なんか食べそうだし」

「なら、いいけどさ。あ、じゃあ、また送っていった方が…」

「ああ、いいよ、兄貴、今日は瑞希、泊まっていくから」

「え？」

正吾さんが、びっくりした顔をした。そりゃあ、そうだろう。それが普通のリアクションだ。これで、あとから、部長も帰ってきて、こんなリアクションを取るんだろうな…。

18 俺の番

圭介が、着替えに部屋に戻ったが、なかなかおりてこなかった。ベッドで休んでいるのかもしれない。その間、暇になってしまい、手持ち無沙汰になった。

キッチンで、お料理をしているお母さんの横に行き、

「あの、何か手伝いましょうか？」
と、聞いた。

「あら、いいのよ、座ってて」

「え、でも、何もすることなくて」

私がそう言うと、お母さんはリビングの方へ目をやり、

「あら、誰もいないの？」

と、はじめて圭介がいらないことに気づいていた。

「じゃあ、そうねえ……」

そう言うとお母さんは、近くにあったエプロンを貸してくれた。

「野菜、切ってもらおうかしら」

広いキッチンで、二人並んでも余裕だった。うちのキッチンは、二人で入ると、どっちかが、邪魔になる。

「いいですね、広くて。二人くらい余裕でいられますね」

「そうなの。一緒にキッチンで、お料理したくて、広いキッチンにしてみらったの。でも、この家建ててからは、誰も忙しくて手伝わてくれなくなっちゃって。ああ、こういうの、夢だったのよ。本当は女の子がほしくって……。女の子と、一緒にお台所に立ってご飯を作る」

「いいですよ。私もそういうの夢です」

「あら、柴田さんは家では？お母さんとお料理しないの？」

「うち、狭いんです。だから、私が料理するときは、私だけでしています」

「そうなの。あ、でも、家でお料理するの？」

「はい、料理は好きです。あ、下手なんですけどね…」

「いいじゃないの。愛情こもっていたら、おいしいわよ」

「はい」

「そう、いいわね…。じゃ、お母さんも楽ね」

「母は、あまりお料理が好きじゃなくて…。休みの日はたいてい、私がつっています」

「まあ、そうなの？得意料理は？」

「う……。得意っていうのはないかな。全般的に作りますけど…」

「そう…。じゃあ、今度、お料理習いに来ない？」

「え？どこにですか？」

「うちよ。これでも、料理の先生してたのよ。今は近所の人を呼んで一緒に作る程度だけど」

「ええ？そうなんですか！すごい」

「引っ越してくるまではね、お料理教室で、教えてたの。引っ越して広いキッチンとダイニングで、自宅でお料理教室をつて思っていたんだけど、やっぱり大変なのよね。材料とかそろえたりするの。それで、お料理教室はやめて、みんなを呼んで、みんなで作って、楽しくわいわい食べるようになって…」

「それもいいですね」

「それは平日だから、柴田さん無理かしらね。でも、休日に来て。お料理教えるから」

「はい、ぜひ！」

「わあ、嬉しい。楽しみだわ。あ、教えるって言っても、お金はいらないわよ」

「え、でもそれは…」

「いいの、いいの。楽しみだから、ほら、趣味みたいなものよ。一緒に楽しくお料理しようよ」

「はい」

思わず、はいと答えたが、いいんだろうか。うん、いや、いいじゃないの！そうしたら、圭介にも会えるんだし。

圭介が、ＴシャツとＧパンになって、おりてきた。

「あれ？何してんの？」

「お料理を手伝ってもらってるのよ。瑞希さんね、お料理好きだつて言うから」

「へえ、そうなの？意外……」

「なんで？」

圭介に、意外って言われる方が意外……。

「なんか、何やっても、とろそうじゃん、瑞希って」

「ひどいわね、圭介！それにあなた、さっきから呼び捨てはないんじゃないの？年上の女性に向かって、失礼よ」

お母さんの方が、怒ってくれた。

「あ、そつか。ま、いいじゃん。会社じゃないし」

「駄目よ、何言ってるの。ごめんなさいね」

この「ごめんなさいね」はどうやら、お母さんの口癖らしい。

「ちゃんと瑞希さんもガツンって言ってね。この子、すぐ調子乗るか」

「あ、はい……」

そつは、言われても、本人は呼び捨てを気に入っているのだ。呼び捨てにされるたび、嬉しくなっている私がいる。

「さ、できた。ほら、圭介、運ぶの手伝って」

「へいへい」

軽々と、キッチンに来て、お皿を運び出す。どうやら、体の方はすっかりよくなったようだ。

正吾さんも、２階からおりてきた。

「あ、ちょうど良かったわ。さて、食べましょう」

「いただきます！」

元気に圭介が言った。

「圭介、もう大丈夫なのか？」

正吾さんが、心配そうに聞くと、

「ああ、おなか減ってるし、元気になったみたい。まだ、頭は痛いけどさ、さつきよりかましだよ」

と圭介が答えた。頭、痛いのか……。熱かな？少し心配になったが、そのあと、ご飯をがつついていたので、心配するのはやめにした。心配症は私の悪い癖だ。

「順平君、遅いですね」

「ああ、金曜の夜はバイトだよ」

圭介が、ほおばりながらそう言った。

お母さんの作った料理はどれも美味しかった。実はこの前は、味わう余裕もなく、ほとんど流し込んでいたのだ。今日は隣に圭介がいるからか、気持ちに余裕があった。

それにしても、お料理の先生が作るお弁当を嫌がるとは、なんてもったいないことをしているのだろうか。この人は……。と、思いながら、がつつく圭介を眺めていた。

圭介は、がつつきながらも、お母さんの話に耳を傾け、返事をし、時々お母さんを笑わせていた。それを横で聞きながら、正吾さんも静かに笑っていた。

圭介は家でも、明るいんだな。きつと、ムードメーカー役だ。この前も、お母さんと順平君のやり取りは面白かったが、圭介がいると、食卓に花が咲いたように明るかった。

食事が終わると、お母さんがコーヒーを淹れてくれた。

「お酒の方が良かったかしら？でも、あまり飲めないのよね？」

そう言って、カップをリビングのテーブルに置き、こっちにどうぞと、すすめてくれた。

「瑞希、お酒飲めるよ。けっこう強いんじゃないの？」

「あら、でもこの前は…」

「あ、あの、この前は圭介君が、具合悪いから、なんだか気がひけてて…」

「あら、じゃあ、お酒出せばよかったわね。ビールか、何か持つてくる？」

「いえ、いいです。コーヒーいただきます」

「コーヒーを飲むと、とても美味しかった。」

「美味しいですね、このコーヒー」

「そうでしょう？豆から買ってきて、うちでひいてるのよ」

「え、そうなんですか？」

「そういうの、凝っちゃうのよね。私。ほら、美味しいお料理に美味しいコーヒーや紅茶、出したいじゃない」

「私も、家で、時々豆からコーヒー淹れるんです」

「あら、そうなの？」

「実は、兄もそういうのが好きで、うちにいろんなコーヒーの器具がそろっているんですよ。エスプレッソのマシンとかも」

「まあ、いいわね、ほしいのよね、エスプレッソのマシン。今度、飲みに行こうかしら、瑞希さんのおうちに」

「あ、はい、ぜひ、部長といらしてください」

「瑞希んち、ウッドデッキあるんだよ。この前そこで、バーベキューした」

「え？いつ？」

「いつって、ほら、朝帰りした日」

「ええ？ちよっと、会社に泊まったんじゃないの？」

「会社じゃないよ。スーツ着てなかったでしょ、俺」

「初耳よ。そうなの？瑞希さん」

「はい、うちの弟がお酒飲ませちゃって、泊まってもらったんです。すみませんでした」

「まあ、本当に？ いやだわ、知らなかった。ごめんなさいね、知ってたらお礼の電話くらい、あ、さっき、お母さんと話したときに、お礼を言いたかったわ。もう、この子は、なんでそういうことをきちんと、報告しないのよ？」

「ああ、だって、朝も忙しかったし、おふくる何も聞かなかったし」「そうね、そうよね、会社だったらわざわざ、帰ってこないわよね。それも車で……」

「クロっていつてさ、ボーダーコリーがいるんだよ、黒い毛のコリィ。めっちゃ可愛いんだわ。それでクロ連れて、瑞希と車で、海までドライブいつてさ、浜辺をクロと走つてさ。最高だったよ」

「……あなたね、なんで瑞希さんのところにお邪魔したりしたの？」

「ああ、茂にいと破談になったって聞いたから」

「で、慰めのデートか？」

食卓でコーヒィを飲んでいた、正吾さんが口をはさんだ。

「いや、えっと、ま、それもあるけど」

「それも？」

「まあ、さ、うん」

と、しどろもどろに圭介はなってしまった。

洗い物を手伝い終わると、お母さんがお風呂に入つてと、タオルと着替えを用意してくれた。お母さんのパジャマかな……。薄いピンクの長袖Ｔシャツとズボン。

お風呂に入り、髪を洗い、軽くタオルで拭いて、急いで出てきた。私ひとりで時間をとったら悪いって思った。

「あら？ もっと、ゆっくりしてよかったのに」

キッチンのドアを開け、お母さんがそう言った。

「いえ、あのすみません、お先に入っちゃって」

「いいのいいの。男連中のあとじゃね、垢とかいっぱいうつってるのよ。ほんと、嫌になるわ。じゃ、私も入ってこようかしら、汚され

る前に」

そう言つと、着替えを取りに寝室へと向かつていった。

私は、「ドライヤーどうしよう」と、思ったが、お母さんが出てから聞いたほうがいいかなと思い、濡れた髪のまま、リビングへと向かった。

リビングにはソファにねっころがったまま、テレビを観ている圭介がいた。

「あ、髪も洗ったんだ」

圭介は、そう振り向いて言つと、

「はい」

と、ドライヤーを出した。

「あ…」

なんだ、そこにドライヤーあったのねと、言いかけたが、圭介にさえぎられ、

「俺の部屋で乾かしたら？」

と、言つてきた。リビングで乾かすのも気が引けたし、バスルームにはお母さんがいるし、圭介の言つとおりには圭介の部屋に行くことにした。

圭介の部屋に入ると、圭介の匂いがした。やっぱり、男臭さもないし、汗臭さもない。

「そこ、座つて」

圭介は、ベッドを指差した。そして、ドライヤーをコンセントにつなぐと、圭介もベッドに登つてきて、

「今日は俺の番ね」

と、嬉しそうに言つた。俺の番？何が？つて思つたら、私の髪を持つて、ドライヤーをあてて、乾かし始めた。ああ…。乾かすのがつてこと…？

圭介の手が時々、首に当たる。そのたびにドキッとした。美容師

さんって、女性よりも男性の方が、優しく髪を乾かしてくれたり、とかしてくれるが、圭介も、すごく優しい手つきで、乾かしてくれていた。そのたびに、胸が高鳴っていた。

「髪、綺麗だよな」

「圭介のほうで、黒くってサラサラだよ」

「うーん、あんまり嬉しくないかな、髪ほめられても」

圭介はそう言いながら、タオルで髪の毛の先を拭いたりしてくれている。あーあ。やばいな。とろけそう。これは心の声。とても口にはできない。

「具合は？大丈夫？」

ふと、今日のぐったりしていた圭介を思い出した。

「あのさ、すんげえ、気持ち悪かったのに、瑞希がそばにいと、俺、治っちゃうみたい」

そんなことあるの？って言いたかったが、嬉しかったから、黙っていた。

「もしかして、魔法かけてない？」

圭介が聞いてきた。

「魔法？」

「そう、俺が元気になる魔法。なんていうの、瑞希がいると、安心するんだ。なんか、こう、ほわってあったかくなって、すげえ優しい空気に包まれてるようになる」

「それ、私もだよ」

「え？」

圭介の、ドライヤーを動かす手が止まり、ドライヤーをいったん止めた。

「圭介といると、あったかいの。圭介のほうこそ、魔法かけてない？」

「うん。かけてる」

「ええ？どんな？」

「う〜〜ん、どんなつて…」

また、ドライヤーをかけて、ブオーってわざと、うるさく動かしながら、

「やっぱ、愛の魔法でしょ」

と、圭介はぼつりと、照れくさそうに言った。ドライヤーの熱さで耳が赤くなったのか、その言葉で、耳が赤くなったのか、自分の耳がほてっているのがわかった。

く〜〜〜！一回、圭介に思い切り抱きつきたいな〜。そんな衝動にかられたが、どうにか抑えた。それって、あれだよ。へたしたら、押し倒しちゃうかもしれないし…。

髪がだいたい乾いてきて、

「もう、下に行くね。きつと、お母さんお風呂出ているよ。圭介の部屋に入り込んでたら、なんか、変に思われちゃう」
と私が言うと、

「ええ？うちの息子がおそわれてないかしらって？」

と圭介が、笑って言った。

「ち、違うよ、何、言ってるの？」

と、否定したが、さっきまで、抱きつこうとしてたではないか…。

一階におりていくと、ちょうど、お母さんがキッチンに来たところだった。冷蔵庫から水を出し、コップに移しながら、

「瑞希さんもお水飲む？」

と、聞いてきた。

「はい、いただきます」

と答えると、もう一つコップを出してきて、ついでくれた。

「あ、タオルありがとうございました」

コップを受け取ってから、タオルを渡した。

「あら、髪…。ドライヤーどこにあった？」

ギク…

「圭介君が、持ってた…」

「あら、そう。洗面所になかったから。圭介が渡してくれたのね」

「はい」

ちよっと、汗が出たような気がした。いや、別に悪いことはして
いないと思うが。

「客の間に、お布団しましうね」

そう言つと、お母さんはキッチンを出て、バスルームの前を通り、
ドアを開けた。そこは和室で、少しまだ、新しい畳の匂いが残って
いた。床の間には、掛け軸と、お花が飾られていた。

「わあ、綺麗ですね」

「ああ、それね。お花も師範のお免状を持っているのだけど」

「え？」

「教えるほどの腕前もないから、こうやって、うちでお花をいける
だけになっているのよ」

すごいなあ、桐子みたいだ。そういえば、きりりとしているところ
なんて、似ているかもしれない。

押入れをあけて、布団を出して、それを私も手伝っていた。

ピンポーン。

「あ、お父さんだわ、瑞希さん、あと自分で敷いてくれる？」

「はい」

さっき入ってきた側でないドアを開け、玄関にお母さんは出て行
った。

「瑞希さんがお見えなの。また、圭介を送ってくれて。今日は泊ま
っていつでもらおうってことになって」

「ああ、そうなんだ。圭介の具合は？」

あれ？もつと驚くかと思ったのに…。直ぐ横が玄関で、話し声が、
まる聞こえだった。

「圭介はすっかり元気になったようよ」

「そうか。それじゃ、安心だな」

ボタン…。そこから声がしなくなった。リビングに入ったんだ。

布団をきちんと敷いてから、布団の上に横になった。天井を見上げて、大の字になってみた。とても、気持ちのいい部屋だし、気持ちのいいお布団だし、素敵なお住まいだなんて本当に思った。

それに、お母さんも素敵だし、家族仲もいい。部長が会社で、落ち着いていて、どんな若いのに出世していくのも、わかる気がした。

「圭介、何処行くの？」

お母さんの声が聞こえた。リビングの方からだ。どうやら、圭介がこの部屋に来ようとしているところを、お母さんに見つかったらしい。

「え？ いや、瑞希さびしくないかなって…」

「あなたみたいに、さびしんぼうじゃないわよ。それより、失礼でしょ。もう、お布団だって敷いてあるのよ」

「え？ まじ？」

「え？ まじ？ じゃないわよ。夜中でも駄目よ。寝室の隣なんだから、寝込み襲いにきても、ばれるからね。瑞希さんは大切な、お嬢さんなの。今日はお預かりしているんだから、わかってるの？」

「…。はい」

そう言つと、圭介はどうやら、すこすこと戻っていったようだ。

「あ、おやすみも言っていないな…」

でも、今、出て行きにくい……。時計を見たらまだ、10時だった。

寝るのには早すぎる。でも、今リビングに行ったら、部長がいるかな。ちょっと、このかっこうで、顔はあわせづらいような気がする。少しここで、ゆっくりしてから行こうかな。

リビングや、ダイニングの音が聞こえないから、まったく様子がわからなかったが、

「お父さん、飲みすぎてない？お風呂は入れるの？」

と、今度は、寝室側のドアの外から、お母さんの声が聞こえた。

「ああ、入れる」

部長の声だ。お風呂に入るのか、じゃ、リビングにはいないよね。

そつと、ドアを開け、リビングの方に行ってみると、音を小さくして、ソファに寝転がり、テレビを観ている圭介がいた。

「あ、瑞希。まだ寝てなかったの？」

「だって、まだ10時」

「あ、そっか…」

圭介が、ソファから起き上がると、座りなおし、ここっで感じて、自分の隣をぽんぽんたたいた。圭介の隣に座ると、圭介の匂いがして、ちよつとほつとした。

「俺、ここでこうやってテレビよく観てるんだ」

「ふうん」

「あ、確かさ、瑞希は部屋にあつたよね、テレビ」

「うん、たいてい部屋で観るかな」

「そうなんだ。でも、一人でさびしくない？」

「くす。さびしがりやなんだ。圭介」

「え？」

「さつき、お母さん言ってたでしょ」

「あ、聞こえてた？」

「ふふ。寝込み襲いにきちや駄目よ」

「なんだよ。ちえ。チャンス到来だったのにな」

「何それ…」

ゴホン。音もなく、2階から正吾さんはおりてきたようで、その

咳払いで、びつくりして、二人して同時に振り向いた。

「ああ、風呂誰が入ってる?」

「今、親父が入ってる」

圭介がそう言うと、

「あ、そう」

とだけ言つて、正吾さんはまた、2階へと上がっていった。が、踊り場から顔を出し、

「あのさ、なんかいい感じだけど…」

「え?」

二人同時に、聞き返した。

「だから、恋人同士みたいだけど、あんまり仲良くしてるとき、やばいんじゃないの?圭介」

「え?何が?」

「おふくろ、勘違いするよ。それに、喜んじゃうよ。なんか、たくさんでるって言うか、もくろんでるって言うか、あの人、怖いよ、何考えてるかわかんないけど」

「?」

なんのことを言っているのか…。

「気をつけて、柴田さん。あの人ね、強引だから」

「はあ…」

そう言うと、とんとんと正吾さんは、2階へ一気に上がっていった。

「?なんのこと?」

「さあ?」

圭介に聞いても、わからなかったようだ。

19 思惑

「あら、瑞希さん、起きてた？」

お母さんが、気がついてやってきた。

「まだ、10時だよ、寝るわけないよ、ねえ」

圭介が、かわりに答えてくれた。

「じゃ、お酒飲まない？ビールか、あ、ワインもいいわね。開けてくるわ」

お母さんはそう言うと、そそくさとキッチンに戻り、グラスを二つとワインを抱えて、やってきた。

「俺のは？」

「何言ってるの。あなたは、検査が終わるまで、お酒は駄目よ」

「検査？」

「胃カメラのむんでしょ」

「ああ、そうだった、嫌なこと思い出した！」

と圭介は、本当に嫌そうな顔をした。

きゅきゅってお母さんは、慣れた手つきでワインのコルクを開けると、グラスについでくれた。よく冷えた、白のワインだった。

「私、ワインは甘いのが好きで、フルーティーなのよ、これ」

お母さんはグラスを持ち、

「乾杯」

と、私のグラスに、カチンとグラスをつけた。

「何に、乾杯？」

圭介が聞くと、

「そうねえ、瑞希さんとの出会いにかしら」

そうお母さんが答えた。

「瑞希さん、気が合うのよ、ねえ。好きなものもけっこう合う」「へえ、そうなんだ」

「ん〜、美味しいわ、どう？」

「はい、甘くて美味しいです」

「そう？嬉しいわ。うちの子たち、ワインは飲まないのよ。ビールとか缶チューハイとかで、主人もそう。だからワインをなかなか一人で飲めないじゃない？友だちが来たときにあげたりしてたんだけど、そうそう昼間から飲めないしね〜。みんな、夜は、家族がいるから出て来れないし」

「そうですよね」

「瑞希さんの家では？お酒は？」

「あ、やっぱりビールです。兄も、弟も、ビールをよく飲みます。父は日本酒や、焼酎が好きなんですけど」

「そう。やっぱり、一回遊びに行かなくちゃね〜。私、焼酎も好きなのよ」

「お酒、強いんですか？」

「うちで1番強いかもな」

と、圭介が、口を挟む。

「圭介、あなたね、せっかく二人で話が盛り上がってるのに、邪魔しないでくれる？」

「え？なんで？おふくふろの方が邪魔してるのわかんないの？せっかく二人で、テレビ、観ていたのにさ」

「そんなこと言って、瑞希さんはあなたみたいな子供、相手にしてるの、大変なのよ。ねえ」

「いえ、そんな。楽しいです。圭介君といえるのは」

ちよつと、ワインで酔ったかもしれない。私は1番ワインで酔ってしまう。それも、飲みやすいから、どんどん飲んでしまっていた。

「あら、そう？圭介といると、楽しい？」

「はい。すごく」

「な？な？」

圭介が、どうだって顔をした。自慢げだった。

「そう、それは、もしかして…」

「え？」

「いえ、ちよつとね、この前から主人と話してたんだけど…」

「はい…」

「やつぱりね、瑞希さん、良い子よねって。本当に、お嫁さんに来てほしいくらいよねって…」

「は？」

「主人も、お気に入りなのよね…」

「はあ？」

「私もなのよね…。ねえ、圭介」

「え？そうなの？」

「そうなのって、あなた、この前から言ってるじゃないの。今度また連れていらつしやいって言ってたでしょ。ま、こんな形になったけど、また、来てくれて嬉しいわ」

「はい」

なんだろうな、ああ、正吾さんの「強引だから」の声が頭の中で木霊する。

「茂にはもったいないわ、ほんと。良かったわよ。破談になって。

ねえ、圭介」

「ええ？ああ…」

圭介もグル？…グルって何が？ああ、なんだか、頭が朦朧としてる。酔ってるのかな、相当。

「もう、お見合いはしないわよねえ？」

「え？」

お見合い？お見合いの話か？

「はい、する気ありません」

即行で答えた。

「じゃ、誰か周りに良い人とか、いないわよね。あ、好きな人とか

…」

私は、ちらつて圭介を見た。圭介もこつちを見た。なんて答えたらしいのか。

「あら…、あら？その間は何？いるの？」

「あ…」

なんて言ったらいいのか…。

「いるの？」

ゴホン。また、正吾さんが音もなく2階からおりてきたらしい。いったい、この人の足音はするのだろうか？

「母さんさ、強引なんじゃないの？そんな聞き方して、困ってるじゃん。それに、好きな人がいるんでしょう。柴田さん、はっきり言ったほうがいいよ。じゃなきゃ、この人、たくらんでるからやばいよ」

「ちよつと、変なこと言わないで」

「本当のことでしょ？」

「？」

いったい、何がなんだか？何をたくらんでいるのやら。圭介の顔を見ても、目がクエスチョンマークだった。

「断らないと、っていうか、はっきり言わないと、圭介とくつつけられるよ。この前から二人はお似合いだの、圭介には、ああいう人が必要だの、圭介は、とつと結婚させないとだの、怖いよ、聞いてても…」

「聞いてたの？」

「夜な夜な、親父と話してるの聞こえてた。やつべ〜〜って思ってた、圭介、瑞希さん連れてきちゃうし」

「……」

圭介と二人、びっくりして黙ってしまった。

なんだ、そのたくらみって？私と圭介が、けけけけ、結婚？

「だから、そんなことになったら、いいわねえってそういう話よ。別にね、たくらんでいたわけじゃないのよ。ただ、圭介はどうも、瑞希さんのこと気に入ってるようだし、でも、圭介じゃ、進展しそ
うにないし」

「……」

少し、呆れ顔の圭介だ。

「いや、だから、ちよつと、ちよつとだけ……。こう、なんていうのかしらね、キューピッド役？っていうのかしらね」

「わ、こえ〜」

正吾さんが、苦笑いをした。

「柴田さん、だから気をつけてって言ったでしょ？ちゃんと断って、じゃなきゃ……」

正吾さんは、圭介の方をちらりと見て続けた。

「圭介もその気になるからさ」

圭介は、それを聞いてかって赤くなった。

そうは、言われても……。断るところか、結婚なんて、嬉しすぎちゃう。でも、当の本人の圭介が結婚は考えていないのだ。圭介が頭を掻いて、

「ああ。なんかこんがらがる！」

と、苛立ち気味に言った。う、そうだよね。結婚なんて言われたって、できないよね。

圭介は、黙って宙を見つめていた。それから、

「風呂、親父出たよね。入ってくる」

と立ち上がり、2階へ上がろうとした。

「って、おい、俺が先」

着替えをすでに持っていた正吾さんは、そう言ってバスルームに向かっていった。

ああ、圭介……。一人にしないでよ、お母さんに何て言ったらいい

のか、わからないじゃない。っていうか、お母さん、私12も年上です。そんなのが嫁に来て、本当にいいと思っっていますか？

私の頭も、こんがらがっている。嬉しいんだか、困惑しているんだか。

「早まりすぎたかしらね……」

そう、お母さんがつぶやいた。

「圭介には、お似合いって本当に思ったのにな」

「俺、まだ、21だよ」

「そうよ。でも、あなた、一人じゃあぶなっかしいのよ」

「何？それ」

「今だって、体壊すまで働いてるし、自分で自分の体、ちゃんとみれないでしょ。管理できてないでしょ。母親の言うことは聞かないし、あなたには、ずっと年上の、面倒見のいい女性がいて、早くに結婚でもしたらいいと思っただのよ」

「んだよ、それ……」

圭介は、ちよつとむつとしていた。

ああ、お母さん、圭介を怒らせないで……。元彼の、別れの言葉思い出した。結婚の話を出したとんだった。結婚を考えていない男性には、結婚って絶対に面倒な言葉なんだろうなって思う。

「すげえ、むかつく。俺、そんなに子供？っていうか、じゃ、なんのために結婚するの？俺の、管理するため？」

「そうじゃないけど……。でも、圭介は、仕事でもなんでものめりこむから、セーブして、守ってくれる人が必要なのよ。21歳でもね、結婚はできるわよ」

ああ……。お母さんは圭介の体が、心配なんだ……。その圭介の体をいたわる人が欲しいんだな、きつと。

そんなお母さんの子供を思う気持ちが、痛いほど伝わってきた。なんだか、泣きそうになった。

「でもさ、結婚ってさ、そういうもんなの？」

「そうよ、お互い支えあって…」

「お互いじゃないじゃん。なんか、瑞希にばかり支えてもらうみたいじゃん。情けなくねえ？俺」

「そんなことは…」

お母さんは黙ってしまった。私の方が、そんなことはないって、反論したかった。私は圭介がいてくれるだけで、幸せなんだ。だから、圭介がいてくれる、それがもう支えになる。のどまで、出かかった。でも、言えなかった。

お母さんのちよつと、がっかりした顔を見たら、なんだか言えなくなった。それに、圭介の憤慨してる顔も、少し怖かった。圭介は、結婚自体を嫌だったりしてるんじゃないかなって、ふとそんなことも感じてしまってた…。

「ごめんなさいね…」

お母さんは、静かにそうポツリと言って、ワインを飲んだ。

「心配しすぎね…」

「心配って、何が？」

圭介は、まだ怒っていた。

「圭介の体だよ」

思わず、私は口ばしった。

「俺の？」

「だって、圭介、あまりにも、うとすぎるんだもん。お母さんが心配してるの、わかってないんだもん」

止まらなくなった。

「そんなの、自分の体なんて自分が1番わかってるよ」

「わかってないよ！」

なんだか、腹が立ってきた。お母さんが瑞希さん、いいのよって私を止めたけど、私は止まらなくなっていた。

「圭介、わかってないよ！人の気持ち」

ああ、これ、私だ。私の気持ちだ。

「人がさ、心配してるんだよ？無理ばかりして、強がってばっかで、無茶ばっかで…。少しは自分の体大事にして欲しいのに」

「瑞希さん…」

お母さんが、私の顔を見た。気づかなかった。私、泣いていた。あつたかいものが、頬に流れていた。

「あ…」

自分の手で、涙をぬぐった。私、こんなに圭介のこと心配していたんだ。今になって、初めてわかった。

「ごめん…」

圭介が、私の涙を見て、素直に謝った。

「ごめん、俺、そんなに心配かけてるって、知らなくて…」

こんなことで、泣いちゃったんだ。お母さんにも私の気持ちはばれたよな…。

「ごめん、俺、全然わかってなかった。瑞希の気持ちわかってるよ、うで、全然…」

お母さんが、今度は、圭介の顔を見た。

「なんか、全然駄目だよ。俺、心配ばかりかけて、甘えてばっかで、やっぱ、ガキじゃん」

なんだか、圭介が自分を責めだしている。

「やっぱ、釣り合わないよ。俺じゃ…」

ああ、やっぱ、責めてる。落ち込んでる。どうしよう…。責めたかったんじゃない。ううん、責めていた。なんで、わからないのかって責めいたんだ、私。

圭介はいつも、明るくしていたし、ふざけてたけど、本当は、自分は不釣り合いなんじゃないかって思ってたんだ。

「おふくろ、やっぱ、俺じゃ…」

そう言いかけて、圭介は黙ってしまった。圭介は、泣きそうな表情になっていた。圭介のお母さんも、何も言えずにいた。でも、
「瑞希さん、もしかして、そんなに圭介のこと、思ってくれてるのかしら？」

と、静かにそう、私に聞いてきた。

どう答えたらいいんだろう……。声が出る代わりに、また、涙が出た。大粒の涙がこぼれた。圭介がまた、びっくりして、こっちを見た。

「あ……」

私は、あ、しか言葉がでてこなかった。

「圭介、あなた、そんなに落ち込まないでもいいのよ」

お母さんは、今度は優しく圭介に言った。

「やっぱり、あれね、私が邪魔したのね……。二人いい雰囲気だったのに」

そう言うとお母さんはソファから立ち上がり、グラスを持ってキッチンに行こうとした。

「あの……」

何を言ったらいいのか。でも、何か言わないと……。

「私、圭介のこと、責めるつもりはなかったんです。ただ……」

圭介の方は見ないで、お母さんに向かって話した。

「ただ……お母さんが圭介を思う気持ち、なんか伝わってきて……。痛いほど、伝わってきて、それで……」

「瑞希？」

圭介が、私に声をかけた。

「それで……」

今度は、圭介の方を向いた。お母さんが、少し近くに来た。

「私も、すごく大事なんです」

「え？」

お母さんと、圭介が同時に聞きかえした。

「私も圭介がすごく、大事なんです。だから、結婚とか、そういうの今、考えるんじゃないくて、ただ、大事だから、一緒にいたいし、支えになりたいし…」

「瑞希？」

圭介が、目を丸くしながら、私の顔を見た。そのあと、すぐに目を押さえた。どうやら、涙が出そうになったらしい。

「だから…、えっと…、お互い支えあうってさっき圭介、言ってたけど、圭介がいてくれるだけでもう、私の支えになってるの」

ああ、言ってしまった。さっき、言えなかったこと…。

「…やべえ」

圭介の口癖だ。それから、もう一回、圭介は目を押さえた。

「そう、そうなの？」

お母さんが、嬉しそうに聞き返した。

「こんな、12歳も下の圭介でも…？」

「はい…」

そう言うのが精一杯だった。私も泣きそうだった。

圭介はそのまま、ソファに座り込んだ。ちょっと、泣いているようだった。

「じゃ、私、もう寝ようかしらね」

キッチンから、寝室へと向かうドアをお母さんが開けると、その先に、部長と、正吾さんがいたらしい。

「あ、あなたたち、立ち聞き？」

「ああ、いや…」

部長も、正吾さんも、もごもご言って、正吾さんは2階へ、部長はそのまま寝室にいったようだ。

圭介と、リビングに二人きりになった。私は、そっと圭介の隣に座った。圭介が、私の顔をじっと見てから、

「手……」

と、言ってきた。手を握ると、圭介は握った手をじっと見ながら、ぼそって言った。

「結婚……、しようよ」

「……えっ?!」

驚きのあまり、心臓が止まったかと思った。

「おふくろの思惑通りっていうのが、やなんだけど……」

「……」

圭介が、手を握ったまま、私の顔をじっと見て、

「俺、絶対、瑞希ほかのやつに取られたら、後悔する」

そう、力強く言った。

「それに結婚するんだったら、絶対、瑞希だっと思う」

心臓が飛び出しそうだった。鼓動は、ドキドキと大きく響き、どんどん早くなった。

「それから……」

「……」

それから……?

「早くに結婚してあげないとき、ウェディングドレス、似合わなくなるし」

「え?! ということ?!」

つい私は、声をあげた。

「あはは。冗談だって。うそうそ」

そう言って、圭介は大笑いをした。

ああ……、お母さんの思惑通りか。でも、私には、最高の思惑だったよ……。

翌朝、布団を上げ着替えて、髪をとかして和室を出ると、キッチンからコーヒーのいい香りがしてきた。

「おはようございます」

キッチンに入ると、お母さんが、

「おはよう。ね、朝は、トーストで良いのかしら？それとも、ご飯の方がいい？」

と、聞いてきた。

「あ、トーストで…」

と、答えて、顔を洗いに行った。

家の中は、キッチンで朝食を作っている音しかなかった。

顔を洗って歯を磨いて、もういっぺん髪をとかして、キッチンに戻った。

「瑞希さん、肌きれいね」。ノーメイクでも全然平気ね」

私の顔を覗き込み、お母さんがそう言った。

「いえ、お母さんも、綺麗です。色が白くって、羨ましいです」

「ああ、北海道生まれだからかしらね」

「え？そうなんですか？」

「うん、もう北海道の両親も亡くなって、親戚もあまりいないから、帰ることもないんだけどね」

そうか…。そういえば、前に圭介がおじいさん似だって、聞いたことがあるけど、そのおじいさんのことかな」。

朝食の用意を手伝っていると、圭介がおりてきた。

「あら、めずらしい。早いじゃない」

「うん、目覚めちゃって」

目をこすりながら、圭介はダイニングに来た。髪はこの前のよう

に、寝癖だらけだ。ああ、そんなところも可愛いよ。

「おはよう」

圭介が私の顔を見て、嬉しそうに言ってきた。

「おはよう、気分は？大丈夫？」

「ああ、もう全然大丈夫。すんげえ、気分いいし」

朝から、テンション高いな〜、と思いつつ、なんだか嬉しくな
った。

「朝食食べたら、俺が、車で送るね」

「え？でも、大丈夫なの？圭介」

「コーヒーを注ぎながら、お母さんが聞いた。」

「うん、全然。今日は頭も痛くないや」

「そう、じゃ、送ってあげて」

「うん」

そっか〜、圭介の運転する車に乗れるのは、嬉しいな〜。

朝食を3人で済ませると、お母さんが冷蔵庫からジャムの入った
ビンを持ってきた。

「これね、さっきトーストにぬったマーメイド。うちで作ったも
のなの。たくさん作ったから、もって行って」

「ありがとうございます」

ジャムもお手製なんだ。さすがだ〜。

圭介が、髪をきちんと整え、さっぱりした顔でリビングに来た。
それから、ポッケの車のキーを取り出した。

「んじゃ、そろそろ行く？」

「うん」

玄関に行くと、お母さんが、

「また、いらしてね。それから、ご両親によろしくね」

と言って、にっこり微笑んだ。

「はい、ご馳走様でした」

「ああ、来週にでも、お料理、習いに来て」

「何？それ？」

圭介が、そう聞くと、

「ふふ、内緒よ」

と、お母さんが、いたずらっぽく目をしてそう言った。ああ、この目つきは、圭介に似ている。

外は、曇り空だったが、雨は降っていなかった。

圭介は、私がシートベルトを締めようと、ちよつと悪戦苦闘していると、

「貸して」

と、シートベルトを持って、締めてくれた。

「これ、この前兄貴が送っていったときも、自分でできなかった？」

圭介が、すぐく顔を近づけたまま、聞いてきた。

「できたよ」。ちゃんと自分で……」

そう、この前はできたんだけど……。すると、いきなり、ふわって圭介の唇が触れた。

「え?!」

あまりにも、突然すぎて、びっくりしていると、圭介は、もう、車を発進させようとしていた。

キス？突然すぎるから、びっくりするじゃん。ていうか、っていうか……。あたりを見回したら、誰もいなくて、ああ、誰にも見られていなかったとほつとした。

お母さんも玄関までは送りに来たが、駐車場までは来なかったから良いものの……。

突然すぎるよ……。心の準備も何もなかったし、それに、一瞬過ぎて何が起きたんだか……。私は相当、困惑してしまい、黙り込んでしまった。

「瑞希さん」

え？なんで、さんづけ……？

「初めてのキスじゃないでしょう？」

「……！」

何言ってるの、っていうか何を、聞いているの？

圭介は、こつちを見てから、ハンドルを握りなおして、

「やつべ〜、なんかそうやって意識されられると、照れる」

と、笑って言った。なんだか、馬鹿にされたような気もして、思いつきり、平然とした態度をとり、

「今のはね、キスにはいらなから。触れただけじゃない」

と、クールに言ってみた。だが、

「へえ、そんなのでも、動揺しちゃうんだ」

と、逆に言われてしまった。

「もう！なんか、にくたらしい！」

圭介の腕をぺちつてたたくと、圭介は、笑って駐車場から車を出し、走り出した。

圭介の隣は、本当に安心した。正吾さんの隣は、めっちゃ緊張したが。それに、やっぱり圭介の運転は心地いい。

ハンドルを握る圭介の手は、今日も綺麗だ。あの手を、ずっと、握っていたんだ〜、なんてぼ〜っと思ったりもした。

それから、圭介の横顔を見る。瞳も黒くって、すごく綺麗だ。鼻はすうつと通っていて、口元は涼しげ。眉毛はけっこう、きりってしてて、黙っていると、きりりとした印象だ。

でも、笑ったとたん、目じりが下がり、すごく可愛くなる。

「ね、さっきから、なんでずっと、こつち見てるの？見とれてるの？」

「うん、見とれてるの」

わざと、そう言ってみた。すると圭介はやっぱり照れて、

「あ〜、見とれるのはいいんだけど、ちょっと運転しにくいかな

…」

と、こっちも見ずに、そう言った。

「くす…。そう？じゃ、見とれるのは、あとでにする」

そう言つと、圭介は、ちらっとこっちを見て聞いてきた。

「どっか、ドライブに行く？」

「うん！」

嬉しくなつた。圭介といられるだけでも嬉しい。会社でも隣にいて、私ずっと圭介の隣にいるんだな。って思つたら、それだけでも、嬉しくなっていた。

「やばいよね」

私が、つぶやくと、

「え？何が？」

と、圭介が、聞いてきた。

「あ！そっか。もしかしてさ、圭介のやばいって、いつも言ってるのも、同じ理由かな？」

「え？」

「そうなの？」

「そうなのって言われても、瑞希のやばいって言ってる理由知らないから、同じかどうかかわかんないよ」

「ん」

教えようか、内緒にしておこうか、しばらく考えたが、これも素直に言つてみたら、どんなふうに反応するか見てみたくなった。

「あのね、私のやばいっていうのはね…」

「うん…」

まっすぐ前を見ながらも、興味津々っていう感じで、圭介は耳を傾けてた。

「圭介のことを、好きになりすぎてて、やばいなって…」

「あはは！」

いきなり、笑うとは思わなかった。でも、圭介はすごく可愛い笑

顔を見せた。

「圭介は違った？」

「一緒！」

圭介は、また、あははつと笑った。

「だって、瑞希のこと一つ知るたびに、好きになるじゃん。どんどん好きになっててやばいなって、俺、まじ思ってたもん」

「同じだ…」

そうか、その「やばい」だったか…。

なんだか、それを聞いてて、だんだん恥ずかしくなってきた。かなり、恥ずかしい会話を二人でしているんじゃないかな？でも、いつか。付き合いたての恋人なんて、こんなだよな。多分…。

多分と言うのは、こんな熱々モードは、今までに経験したことがないからだ。元彼とだって、こんなふうには、なったことがなかったし…。

「雨降ってきたね」

圭介が、ワイパーを動かして、つぶやいた。

「これじゃ、海とか行ってもな〜」

「車、走らせてるだけでも、いいよ。私…」

「え？」

「圭介の隣にいられたら、幸せだから…」

私は、自分で言って自分で照れた。でも、圭介のほうが、もっと照れていた。

「ああ、じゃ。このまんま走らせようかな…」

そう言いながらまっすぐ前を見ていたけど、圭介は耳まで真っ赤になっていた。

圭介が、音楽をかけて、しばらく二人で黙って聞いていた。
「あ、この辺…」

圭介が、沈黙を破った。

「あつた。ここ…。プラネタリウムあるんだよ。寄っていかない？」
「プラネタリウム？見たい！」

実は、まだ生まれてこの方、プラネタリウムに行ったことがなかった。

圭介は、「子ども科学館 駐車場」と書かれてあるところに車を止め、後部座席から傘をとった。

「1本でいいよね」

そう言うと、傘をぽんとさして、私を入れてくれた。相合傘をしながら、足早に建物の中に入って、さつさと、

「プラネタリウム、大人2枚」

と、圭介は切符を買ってしまった。

「はい」

切符を私に1枚渡してくれて、圭介は中へとどんどん入っていく。

「圭介、いつもお金払わせてる…」

「ああ、いいよ。このくらい、全然」

もしかしたら、背伸びをしてるんじゃない？とも思ったが、

「じゃあ、昼ごはん、私おごるからね」

と、言うのと、

「え？まじ？やった！」

って、圭介はそう言って、軽く喜んだ。

なんていうか、圭介といると、すごく楽だ。氣を使わないで済む。元彼とは、私は2歳上っていうだけで氣を使い、大人でいないとか、でも、たまに甘えないと駄目かなとか、いろいろと一緒にいても考えちゃって、疲れちゃってたな。

圭介はなんだろうな？私、素のままでいられる。甘えないとか、大人でいないとか、そういうのないな。ああ、もしかして、圭介の方が、氣を使っているんじゃない？

「あれ？」

ふと、顔をあげると、目の前を歩いていた圭介がいない。しばらく辺りを見回してみると、

「なんで、そっちに行ってるの？プラネタリウムこっちだよ」

と、圭介が走ってきた。

「ごめん、下向いて歩いてて、わからなかった。あれ？でも、誰かのあとをついていた気がするんだけど…。別の人だったかな？」

「もう…。何それ…」

圭介は、そう言つと、

「いつつも手、つないでないと駄目だな」

と、私の手をぎゅって握った。

「ちゃんと、ついてきてよ。いないから、すんげえ、びっくりした」

「ごめん…」

あゝあ、どっちが大人なんだか…。圭介、あきれちゃったんじゃないかな…。

プラネタリウムには、雨の土曜だからか、家族連れがたくさんいて、けっこう混んでいた。

その中で、二席空いてる席を圭介が見つけて、まず、私を座らせてくれた。こういうところ、紳士だね…。とか思う。

時々強引、でも優しい。女の扱いに慣れているのかとも思う。何人の人と今まで、付き合ってきたんだろう？

元気な女の人が出てきて、プラネタリウムの説明をしたら。それから、暗転して、天井いっぱい星が現れた。

360度、夜空…。

「わあ…！」

つて、思わず声が出た。圭介が耳元で、

「ね、けっこうすごいでしょ？」

と、ささやいた。

息がかかるほど、すぐ近くに圭介の顔があつて、ドキドキした。

圭介はまだ、私の手を握っていた。その手がすごくあたたかかった。満点の星を見ていると、宇宙の中に私と圭介の二人しかいないんじゃないかって思えるほど。ふと、星に吸い込まれるんじゃないかって気になった。

もし、吸い込まれるなら、そのときにも圭介と一緒にいたい。絶対にこの手は、離したくない。そう思うと、無意識に圭介の手を握る手に力が入った。

圭介が、顔を近づけてささやいた。

「ずっと隣にいるから」

ドキ！私の心を読まれたのかと思った。きつと、私は真っ赤になつていた。

圭介の顔を見た。圭介も照れているんじゃないかって思つて見てみたけど、暗くてわからなかった。だけど、圭介の横顔の輪郭が綺麗で、しばらくじつと、見とれていた。

この横顔を、見ていたいな。ずっとずっと、見ていたいな。あの星の光が地球に届くくらいの、長い何万年光年っていう気の遠くなるくらいの時間、見ていたいな。

そんなことを、思いながら、ずっと圭介の横顔を見ていた。圭介はずっと星を見ていた。私が圭介の顔を見ているのわかつていただろうに、それでも、圭介はずっと、星を見ていた。

会場に明かりがとまり、一瞬目の奥が痛くなった。

手をつないだまま、プラネタリウムを出る。傘を傘たてから出し、圭介がぽんと開いた。そして、駐車場まで、ゆっくりと二人で歩いた。

「すごかったね、星。私、プラネタリウム初めてだったんだ」

「ちゃんと、見れたでしょ」

「うん……」

「あ、間違った。ちゃんと、見とれることできたでしょ?」

「…うん?」

見とれる? 星にかな?

「俺、顔に穴が開くかと思ったよ」

「え? 何それ?」

「ははは。だから、俺の顔、十分、見とれることできたでしょ?」

「ええ?」

「思いつきり、見とれちゃってたでしょ? 瑞希」

「ええ〜? 何よ、それ!」

圭介の傘を持つ腕を、ぺちつてたたいた。

車に乗り、おなか空いたねって、すぐ近くにあったファミレスに入った。圭介は、本当に美味しそうにご飯を食べる。見ていて、気持ちがいいくらいに。

「今日は、元気なんだね。よかった」

「うん、すごい元気! 瑞希がいるからかな」

そう言つてにこつと笑い、また食べた。3回、ドリンクをおかわりして、

「ああ、満足」

と、圭介がのけぞった。私が、コーヒーを飲むのを、待っていてくれて、それからお店を出た。

「ご馳走様!」

お店の前で、圭介がにこつと笑った。こついうところが、可愛いんだよなって心底思った。

車に乗ると、圭介は軽快に話しながら、私の家へと車を走らせた。

「圭介…」

圭介が、途中、黙つたときに話しかけた。

「え? 何?」

「今日の星空、本当にすごかった。宇宙にね、圭介と二人っきりに

なつたみたいだったよ。ほら、手、つないでいたし……」

「うん」

「圭介、なんであの時、ああ言ったの？」

「え？」

「ずっと、隣にいるからって……」

「ああ、だって、ぎゅって手を握ってきたから」

「私が？」

「うん、なんか、不安にでもなつたのかなって……」

「……」

なんだかな……。私の心が黙ってても通じちゃうのかな。以心伝心？それとも、超能力者？

「まじで、ずっと、隣にいるからさ」

「うん……」

「っていうか、ずっと、隣にいてよ」

「うん……」

圭介の横顔を見て微笑むと、ちらっとこっちを向いて、手を握ってきた。そして、しばらく私の手を握ったまま、圭介は運転をしていた。

いつの間にか、雨は上がっていた。空に青空も見えていた。

21 急展開

家の前に、圭介が車を止めた。

「寄ったほうが良いかな、迷惑かけちゃったんだし…」

「大丈夫だよ。また、うちに寄ると遅くなっちゃうかもしれないし、早く帰って、休んだほうがいいよ」

「うん、ごめん、お母さんによろしく言つていて。じゃ、また明日ね」

「うん、気をつけてね」

圭介は、にこつと笑って、車を発進させた。曲がり角まで、車を見送り家に入った。

ワンワン！クロが、リビングから走ってきた。

「クロ、ただいま」

クロは、なぜか私ではなく、玄関のほうに行き、あれ？なんで圭介はいないの？って顔をした。一緒にいたのが、わかったのか？

「お帰りなさい」

リビングから、母がやってきた。

「今日も、車で送ってもらったの？」

「うん」

「あんまり、迷惑かけちゃ駄目よ。まったく、いくら泊まっていきなさいと言われたからって、本当に泊まってくるなんて…。そういうのはね、丁重にお断りして…」

「じゃ、昨日の電話で言ってくれたらよかったのに」

「あんたが自分で、きちんと断んなさいよ」

なんだか、今日の母は機嫌が悪い。母はけっこう、体裁を気にする方で、相手に失礼だとか、そういうのをよく言ってくる。

「圭ちゃんは、大丈夫なの？」

「うん、もう今日はだいぶ…」

「圭ちゃんもね〜、具合が悪くなるたびにあんたに送らせるんじゃない、ちよつと困っちゃうわよね」

「違つよ、一回目は社長命令だし、今回は私が勝手にしたことだし、圭介は関係ないから」

「やけに肩を持つじゃない？でも、たいがいにしなさい。そんな若い一回りも下の子と仲良くしたつて、周りの人がどう思つか…」

「？今日はやけに、あれこれ言うよね」

「昨日ね、隣の奥さんが、回覧板を持ってきてね、ほら、隣の百合ちゃん、二人目がもう直ぐ生まれるとかで、今度生まれるまで隣に帰ってくるそうよ」

「へえ。よかったね」

「よくないわよ、隣の奥さんね、あんたが夜、車で送ってもらつたり、圭ちゃんと車で海にいたりしてたのを見たらしいのよ。それで、ずいぶんと若い人と仲が良いんですね。同じ会社の人みたいですとは、言つたんだけど、お付き合いしてるんですかとか、あんたがいくつになつたかとか、もう、うるさくて…」

「いいじゃん、言わせておけばさ」

2階からおりてきた修二が、口を挟んできた。

「だいたい、圭介が来て、母さんも喜んでたじゃん。それを今になつて、なんであれこれ言うんだか…」

「だつて、自慢げに、うちの娘はいい人と結婚できたの、孫がよく遊びに来て、楽しいだの可愛いだの、お宅はあまりお孫さんが来ないですねとか、瑞希ちゃんはまだ、結婚しないのかとか、若い人とお付き合いしてるから、結婚が遅いんじゃないのとか、あれこれ言われて、もう、お母さんすごい、嫌な思いをしたんだからっ」

本当に嫌だつて顔をして母が愚痴を言つと、また修二が、

「だから、言わせとけつて。昔からそうじゃん、ほつとけばいいんだよ」

と、軽く母をあしらった。

ああ…、車でどっか行ったり、送ってもらったりするだけで、そんなふうに言われて、母は嫌な思いをするのなら、付き合っているなんて言ったら…。

それどころか、結婚なんて、言い出したら…。うちの家族は賛成してくれるだろうなんて、たかをくくっていたんだろっか、私。

「さ、そろそろ出かけようっと」

修二が、その場を早く逃げ出そうとしたようだ。

「どこ行くの？」

「ドライブ、柚と…」

「あんたのことも、言われたのよ。下のお子さんご結婚は？お付き合っている方はいるの？って」

「いるって言った？」

「言ったけど、じゃあ、結婚ももうすぐね、楽しみですって」

「うるせえ、ばばあだな、人んちの子が結婚しようがしまいが、どうでもいいじゃんか」

「しー。しー。お隣に聞こえたらどうするの。それよか、外で会ったらちゃんと、ご挨拶してよ」

さっきまで、1番声を張り上げていたのに、いきなり母は小声になった。

「へーへー。んじゃ、行ってくる」

ボタン。修二は、玄関まで見送りにいったクロの頭をなでてあげてから、家を出た。くくく、少し寂しそうにクロが、リビングに戻ってきて、クロ専用マットの上になっところがあった。

「誰か、良い人いないのかしら」

「え？」

「あんたよ」

「……」

とても、今、「圭介がいる」とは言えそうもなかった。圭介、今日はさっさと帰って、正解だったかもしれない。

それにしても、修二の「うるせえ、ばばあ」は気持ちよかったな。私もほんと、そう思うよ。それに、近所のそういう話を真に受け、世間体だのを気にする母も、どうかなって思う。

そうなんだ、あまり言わないようにしているみたいだけど、たま～～に、隣の奥さんと話をしたりすると、とたんに母は、

「30過ぎて、家にいるなんて…。嫁にいけないなんて…」

と、ため息をつく。今日みたいに、ヒスをおこすこともある。

クロには悪いが、私もさっさと退散しよう…。

2階に上がって、しばらく、ぼ～～とベッドで横になっていた。すると、圭介が電話をくれた。

「今、何してた？」

「ぼ～～ってしてたよ。圭介は？家に着いたの？」

「うん。それで、家に着いたら、おふくろにつかまって、一回瑞希の家に、きちんと挨拶に行けって言われて」

「え？」

「あ、まずは、俺が一人で行ってから、おふくろと親父が挨拶に行こうかなって。なんかおふくろ、のりのりで、結婚式の日取りまで、決め兼ねないよ」

「ま、まじで？」

「うん、大安がいいだの、式場はどこにするだの、今日、俺がいないうちに、親父と話してたみたいで…」

「え～～～～？」

そんな～～。うちは、とてもじゃないけど、圭介と結婚するだなんて、そんなの言えそうもないような状態だったのに…。

「あれ？困る？」

「う、うゝん、私は嬉しいんだけどね。うちの、母親が…」

「え？俺のこと駄目だった？」

「いや、お付き合いしてるとか、そういうのもまだ、言っていないけど、ただ…」

「うん。何？」

「さつき、ぐちぐち言われちゃって…」

「何を？」

「いやゝゝ、いろいろと…」

「瑞希、瑞希の家族は賛成してくれるって言ってたじゃん」

「そ、そうなんだけど、お母さん、圭介のこと気に入ってたから。

でも…、結婚相手としては、わからないかも…」

「年下だから？」

「うゝゝん、うちの母親、すごく世間体とか、気にするから。父はそうでもないんだけど…」

「世間がどういおうが、大事なのは本人どおしだろ？」

「そうなの、私もそう思うの。母もそういうことを言うときもあるの。でも、たまゝゝに、近所のばあ…、いや、奥さんからいろいろ言われると、とたんに世間体を考え出すの」

「そついう、ばあがいるんだ」

ああ、圭介まで、ばああつて…。

「圭介のお母さんは、そういうの気にしないの？」

「うち？うちのは、わかるでしょ。人の言うことよりも、自分の考えを貫き通す。もう、誰の言葉も聞きやしないよ。だからある意味、怖いんだよ」

「う、わかる…気もする」

「うちの母親にかかったら、瑞希のお母さんも考えが変わるかもなゝゝ。いや、変わらなくても、強引だから、どんなに反対されても俺たちを結婚させるんじゃないかって気もするなゝゝ」

お母さん、頼もしいと言っか、怖いと言っか…。味方になればいいけど、もし、お母さんに反対されてたら、どうなっていたか…。

「瑞希、俺行くからさ。挨拶に…。もし、反対されても、それでも何度でも行くよ」

「本当？」

「うん」

「……」

「何？なんで無言？」

「うっん、圭介、意外と頼もしいなって…」

「意外はよけいでしょ。一応、あの強引な母親のDNA受け継いでるんだから」

「あはは、そっか…」

「そうか…、そういえば、物怖じしないところとか、似てるかも…。

「じゃ、日にちどうする？」

「え？ああ、挨拶に来る日？」

「そうだよ。いつにする？」

「来週の週末…とか、早すぎるかな」

「わかった。じゃ、仕事が土曜に入るかもしれないから、日曜で。日曜に行くって言っというてね」

「え？」

「ね。じゃ、また明日」

「ブチって、電話を切られた。言っというてねっというっておけばいいのかな…。

「あ…、もう、圭介にまかせよう。とにかく、圭介が来るってことだけ言おう。」

「それにしても、すごい速い展開だな。結婚っていうのは、こうやって、決まっていくなのかな。でも、でも、圭介は、まだ21なんだよ？いいのかな。」

その夜11時頃、久しぶりに桐子からメールが来た。
「まだ、起きてる？」

お風呂から出て、髪を乾かしていたときだった。

「うん、まだ起きてるよ。」

こういう、短い文章だから、お酒でも飲んでたかな？

また、携帯が振動した。メールでなく桐子からの、電話の着信だった。

「はい、もしもし」

「ごめんね、こんな遅くに。ちょっといいかな」

桐子の声は、声を潜めた感じだ。

「いいよ、どうしたの？」

「うん…。あ、なんか久しぶりだよ。ちょっと、忙しくて、やっと落ち着いた感じなんだ。瑞希元気だった？」

「うん、桐子は？」

「元気だよ。そうだ、お医者さんや圭介君とはどうした？」

ああ、全然報告してなかったな…。

「茂さんとの交際は、きっぱりお断りした」

「そうなんだ、圭介くんとは？告白したの？」

「うん…」

「え？告白したのね…。すごいじゃん。…でも、ちょっと暗いね…。あんまりいい結果じゃなかったのかな？」

「ううん、圭介も、同じように思ってたんだけど…」

「え？やっぱり…？もう、絶対そうだと思うってた」

「うん、ただ…」

「ただ？」

「なんか、急展開で、結婚まで、するかもしれないんだけど…」
「どひえ……………」

どっひえ〜〜って、驚きすぎでしょ…。

「何それ。どういう展開の速さ？あれ？もう、うちの旅館きてから、そんなに日にちたつ？え？まだひと月もたつてないよね」

「え？そつだっけ？もう、何ヶ月も過ぎた気がしてたよ」

「そんな短い間にいろいろとあつたんだね」

「うん」

「あれ？なににんで沈んでるの？もう、マリッジブルーですか？」

「違う違う。うちの母親がね、なんか反対しそつで…」

「お母さんにはまだ、話してないの？」

「まだ。会ったことはあるし、お母さん、圭介のこと気に入ってるけど、付き合つてるとか結婚の話は、まだしてないんだ」

「そつか、まあね、無理もないかな、12も年離れてるもんね。圭介くんの親も、簡単には受け入れてくれないかもしれないし、ここは正念場…」

「あ、圭介の親はノリノリなの」

「は？」

「私と圭介を結婚させようつて、ノリノリなの」

「は？そつなの？」

「うん」

「じゃ、半分はクリアしているんじゃない！」

「ま、ね…」

「じゃ、悩むことないよ、前に進むのみ！でしょ」

「うん。あ…。桐子は、どうしたの？」

「うん、あはははは」

「何よ〜、どうしたのよ」

「いや、瑞希の急展開に、圧倒されて…。なんか私の悩みはちつぽけだなつて思つたわ」

「え？」

「私も、前に進む。ゴーゴーだな」

「ん？恋の話だった？もしや…」

「ちよつとね、縁談の話が来て、母親も薦めてて」

「え？だって、桐子。コック長…」

「そうなのよ。でも、瑞希と違って、告白もまだだったからさ。あつちの気持ちもわからない。何気なく、縁談があるってこの前、言ってみたんだ。それはよかったですねって言われてさ。がつくりしてたんだけど…。だめもとで、告白してみるわ」

「うん、大丈夫だよ、桐子なら」

「はは…。私が弱気になるとはね」

「みんなそうだよ。恋したら、いつもの自分とは変わっちゃう」

「そうだね…。うん、よし！元気だ。頑張る。だから、瑞希も頑張つてね。反対されても、その恋逃しちゃ駄目だよ」

「ありがとう」

「また、電話するよ。告白した結果報告させて」

「うん」

「じゃあね、おやすみ」

「おやすみ」

桐子との電話を切り、ちよつと心が軽くなっていることに気づいた。

みんな、いろいろあるんだ。桐子も、これから勇気を出すんだな。うん、私も勇気を出そう。私には、圭介がいてくれるんだし。圭介のお母さんもいる。強い味方がいるんだもん。頑張れるよ。

翌日、会社に着くと、圭介がもう仕事をしていた。

「おはよう」

「おはよ」

圭介は、見るからに元気そうだった。

「昨日の夜、社長が遊びに来たんだ」

「え？」

「でさ……」

それから圭介はすごく、声を潜めて、

「おふくろが、俺らが結婚することになっても、瑞希のこと辞めさせないわよね……っていきなり言い出して」

「え?!?!」

すごい声をあげたので、一瞬、オフィスにいた人が全員、こっちを見た。圭介は黙って、カシヤカシヤキーボードをたたいた。

＜社長が、それでびっくりしてたけど、でも、辞めさせたりしないって、言ってた。＞

と、メールを送ってきた。

「そ、それって、私たちのこと……」

＜おふくろが、結婚式のスピーチは、よろしくって言い出して、さすがに親父が、まだ早すぎるって。＞

「……」

私は圭介の顔を、口があいたまま、見てしまった。開いた口がふさがらないとは、こういうことを言っただろうな。

「おふくろに、俺も早すぎるって言った。なんなんだろうな、あの人は、ほんと……」

軽くめまいもした。うちじゃ、結婚のけの字も話してないと言うのに……。

そこに社長が「おはよう」とやってきた。ああああああ……。社長はもう、私たちが付き合っているのも、知っているんだよね。

「圭介、調子は？」

「あ、もう完璧っす」

「胃力メラはいつだったっけ？」

「あ、明日の午前中」

「そっか、じゃ、今日もあまり無理するな」

「はい」

社長はそれだけ言うと、自分の席に行ってしまった。あれ？それだけ……？圭介と、なんだ……ってお互い、顔を見合わせた。

お昼は、元気になった稲森さんと一緒に、外でランチをした。

「風邪、もう大丈夫ですか？」

「ああ、うん。なんとかね」

そう言うと、スパゲッティをフォークでくるくるまわしながら、

「私、彼と別れたわ」

と、いきなりつぶやいた。

「え？」

こっちも、いきなりの展開？

「は……、土曜に会ったのよ。彼と、娘さんと3人で。なんか、結婚したらこの娘さんに、ずっと気を使わなくちゃいけないと思ったら、一気に冷めちゃって。昨日、電話して別れたわ」

ええ？そんなに簡単に？っていうか、そんなもんだったの？稲森さんの彼を思う気持ちは……。心の中で、つぶやいたが、口にはしなかった。だけど、

「ああ、私って、男運がないのかな。前のは、姑、今度は、小姑。良い条件の男があらわれりゃしない」

という、稲森さんの言葉につい、反応してしまった。

「条件で選ぶんですか？相手を好きかどうかじゃないんですか？」

稲森さんは、あきれたって言う顔で私を見て、

「あなた、33よね。そんなこと言ってるから、婚期逃しているんじゃないの？」

と、言ってきた。ムカ！そんなこと言われたくないわ。

「でも、この人が本当に好きで、ずっと一緒にいたいって、そんな人が現れて欲しいって思ったりしませんか？そう思うのって、そんなに変なことですか？」

ちよつと、私はムキになった。

「そんなときもあつたわね。前のだんな、付き合いだしたときには、そう思つてたわよ。だから、一緒に暮らしたんじゃない」

少し、水を飲んでから、稲森さんは続けた。

「でもね、そんなの一時の感情よ。だんだんと、お互い冷めていくのよ。そうしたらあとに残るものなんて、我慢か、忍耐か…」

なんだか、そんな話は聞きたくなかつた。

「そんな経験しちゃうと、なかなか、結婚に踏み切れないわよね。きつと、トラウマになっているのかしらね」

それは、私もだ。元彼と別れてから、なかなか男の人と付き合いえなかつたし…。

「また、そんな燃え上がるような、恋もしてみたいわね」

帰りがけ、稲森さんは、ぽつりとそんなことを言った。でも、稲森さんは、この前まで生き生きとしていた。

おしゃれをし、お化粧品もきれいにして、毎日のようにデートをし、そのときの稲森さんは、生き生きしてたではないか。自分では気づかなかつたのかな…。

やっぱり、娘さんが現れたことで、前の離婚のことを思い出してしまつたのか。また、同じ思いをしたくなかつたのかもしれないな…。

一回、深く傷つくと、2度と傷つきたくないって思うよね。

その日、圭介と6時に会社を出て、一緒に駅まで帰つた。

「なんか、食べていけない？」

「え？でも、圭介、明日胃力メラ」

「うん、だから遅くには食べれなくて、早めの方が良いんだ」

「あ、そっか」

圭介と、和食のお店に入った。肉とか脂っこいものは、なんとなく

く避けた方がいいかなって思ったからだ。

圭介は、ほっけの定食、私はお刺身の定食を頼んだ。

「あゝあ、明日憂鬱」

ほっけの身を崩しながら、圭介がつぶやいた。それにしても、綺麗に骨と身を分けられるものだ。しばらく、それを見ていると、

「はい」

と、圭介は私のご飯の上に、ほっけをのせてくれた。

「え？」

「食べたいんでしょう？」

いやいや、そういうわけじゃなくって…。

ま、いつか。なんていうか、本当にこういうところが、可愛いよな…。

「可愛いよねゝゝ、瑞希ってさ」

ええ？私のほうが…？

「お刺身、食べない？」

「え？いいの？俺、赤みの刺身好きなんだよね」

圭介は、すぐ嬉しそうにそう言った。やっぱり、君の方が可愛いよ…。

「ご飯も半分を食べたころ、稲森さんの話をしてみた。」

「他の人には、言わないで欲しいんだけど」

「うん、言わない」

圭介は、まじめな顔になった。

「条件？結婚の？」

「うん」

「瑞希にもあるの？」

「前はね…」

「ふうん、今は？」

「今は、うゝん、自分の気持ちが一番大事だなんて思う。好きで、一

緒にいたいかどうか」

「うん…」

それから、桐子の恋の話をした。

「へえ、桐子さんも恋してるんだ」

「桐子は、あまり結婚とか意識してないみたい。恋を楽しんでるって言ってたよ」

「ふうん…」

そう言っていると、圭介はしばらく黙って、味噌汁をすすったり、お漬物を食べたりして、

「ご馳走様」

と、すべてのお皿をからっぽにして、満足そうにお茶をすすった。こういうところが、気持ち良いって思ったりして。

「うちに料理教わりに来るって、ほんと？」

「ああ、うん。お母さんと約束した」

「そっか、じゃ、瑞希の手作りのご飯食べられるんだ」

「あまり期待しすぎないでね」

「ええ？なんで？瑞希がつくるって言うだけで、俺、嬉しいけどくくく。可愛いことを言ってくれるじゃないか。」

「お弁当も、作ってもらおうかな。あ、もし朝、大変じゃなかったらさ」

「いいよ」

「瑞希の分も作ってきて、一緒に食べるってのはどう？」

「ええ？でも、そんなことしたら、付き合ってるのばれちゃう」

「いいじゃん、結婚するんだし」

そんな簡単に言われると…。でも、ちょっと嬉しい。あ、でも、稲森さんに、何て言われるかな…。怖いな…。

「結婚したら、毎日瑞希の料理食えるんじゃない。すげえ！」

「ええ？」

くす。笑ってしまった。

あれ、待てよ……。結婚したら、毎朝、圭介の可愛い寝顔が見れるんじゃない。もう、思いつき見とれることもできるし。

待てよ、隣に寝るってことは、毎日、圭介のあったかい空気に包まれて、それから……。

「瑞希！」

「え？」

「顔がにやけてる。やらし……、何考えてた？」

「な、何も！」

やば……い、にやけてたか！

最近、圭介といても年の差を感じない。私の精神年齢が低いんだろうか？

結婚したら、どうしようと手をつないだり、腕を組んだりして歩けるんだな。もつと、いちやいやちやもできるのか……。

いやいや、今からしてもいいのかな？いやいや、やっぱり周りの目が……。ああ、私も母と同じで、周りの目は気になる方だ。

「それじゃ、また明日ね。多分、午後にはいけると思う」

圭介が、わざわざ、私鉄の改札まで来てくれた。

「うん、検査頑張って」

「ええ？何を頑張るの……。ああ、へこむ……」

「大丈夫だよ。すぐに終わっちゃうよ」

「うん、早くに終わらせて、早くに瑞希の顔見に行くよ」

じゃあねって改札を通り、電車に乗った。圭介の、後姿をずっと眺めていた。ああ、明日、なんでもありませんようにって祈りながら。

翌日の午前中はなんだか、静かだった。圭介がいないから、静かな感じがしただけかもしれないが。もう、隣に圭介がいるのが、当たり前になっっているんだな……。

昼を過ぎても、圭介が来なかった。だんだん、不安になってくる。私の心配性がどんどん私の心を暗くする。

2時過ぎて、圭介がやっと来て、すぐに社長のところに行った。

「すみません、遅くなって」

「ああ、どうした？もう、結果でたのか？」

「はい、すごいですね！自分の胃の中見ちゃいましたよ。真ピンク！まったく、異常なしっていうか、すごい健康だった」

「そうか、良かったな」。安心だな、これで…」

「はい！心配かけてすみませんでした」

ぺこつてお辞儀をすると、自分のデスクへと歩いてきた。

圭介の声がかかったので、社の全員に聞こえてて、

「良かったな、圭介」

と、みんなから背中をたたかれたり、頭をくしゃくしゃにされたりしていた。くしゃくしゃになった頭のまま、席に着くと、私に、満面の笑みを向けてきた。

「良かったね」

「うん！一安心。ほっとした」

圭介は、目を細くして笑って、

「瑞希にも心配かけて、ごめんね」

と、小声で謝った。小声だが、多分周りには聞こえてたはず。でも、周りにはあまり、その会話を気にしている感じではなかった。

3時になり、缶コーヒーを自販機で買ってくると、廊下で稲森さんにつかまった。

圭介が検査をしたり、具合が悪いことを稲森さんは知らなかったようだ。ああ、そういえば、稲森さんも風邪引いて休んでいたっけ。

「圭介、去年も具合が悪くなったことあったな」

「そうみたいです」

「それにしても、圭介はあなたに、なついてるわよね。犬っころみ

たい。なんか、見ててほほえましいわ」

それから、稲森さんは、年下もいいかもねと言に残し、オフィスへ入っていった。まさか、圭介がよくなったわけじゃないよね。一抹の不安を残し、私もオフィスに入った。

圭介はもう全然元気だからと、その日ははりきって残業をすることにしていた。

「お先にね」

そう言う私に、お疲れ様って圭介は元気に挨拶してくれた。

ああ、良かった…。本当に、良かった…。帰りのエレベーターの中で、私は胸をなでおろし、自分は心底、圭介のことを心配していたことを、また改めて実感した。

家に帰り、検査のことをなんとなく母に言っていたので、なんでもなかったよと、報告をした。

「そう、良かったわね」

ただそれだけ言うと、母はテレビを観るのに集中した。この前の一件からなんとなく母は、圭介の話をするのを避けているようだった。

私は、日曜に圭介がうちに挨拶に来るってことは、まだ、切り出せずにいた。

「はあ～～～」

母がお風呂に入っている間、リビングのソファに座りため息をつくくと、クロが擦り寄ってきて、尻尾を振った。

「君は、賢いな～～」

クロの首のふさふさした毛をなでまわると、もつと、なでて～っという感じで、何度も催促してきた。今度は、体に抱きついてみた。あつたかった。犬臭いけど…。

でも、そのふわふわな毛と、あつたかさに包まれ気持ちが落ち着

いていった。犬って癒し系だよな〜と思いつつ、ああ、圭介に似てるわってつくづくそう思った。

22 反対

その週は、あつという間に過ぎた。圭介は体がなんでもなかったって安心したせいか、仕事をばりばりし始めて、会社でもほとんど無言で、もくもくとパソコンに向かっていた。

夜は残業をしていたが、無理はしないようにと思ったのか、泊まったりすることはやめて、遅くても11時には切り上げていたようだ。

私は、お弁当を圭介の分だけ作っていった。きちんと結婚が決まり、みんなに報告してから、どうどうと二人分作るからというと、圭介も、うん、わかったと、納得していた。

圭介は、パソコンをうちながら、デスクでお弁当を広げて食べていたが、私が昼から帰ると、メールで、

<すげえ、うまかった！

と、送ってきてくれた。

朝、母親が起きてくる前からお弁当を作っている。家に帰っても、こっそりと男性用のお弁当箱を見られないよう、母が寝室にいつてから洗っていたりする。もし、見られたら絶対、圭介のだってばれるだろうなって思っていたからだが、ちょうど、洗っているのを修二に見られて、

「俺のを作ってるってことにしたら？」

と、言ってくれた。

「でも、そんな優しいお姉さんじゃないって、母さんわかってるか」とも、言われてしまった。失礼な。いや、でも実際そうだけど。頼まれたって修二のなんかは、作りたいとも思わないが…。

毎日朝早かったので寝不足が続き、土曜日は寝坊をした。

「ああ、明日、圭介が来るって、親に言わなくちゃ…」

そう思うと気持ちは、さらに重くなり、なかなかベッドから出られなかった。でもな〜、ここで、親に言わなくっちゃ、前に進んでいかないんだよな。外もやっぱり曇り。うう、気がめいる。

どうにかこうにか、一階におりて行つた。遅い朝食なのか、早い昼食なのかわからない時間帯に、ご飯を食べた。

母が作ってくれているわけはなく、いつも自分で冷蔵庫を開けてあるもので作る。たまに同じ時間に修二がおりてくると、修二の分も作ってあげるが、今日はもう出かけたようだ。

母は、寝室に掃除機をかけていた。父は、リビングでコーヒーを飲みながら、新聞を読んでいた。

何も言わずに、キッチンに行き、ご飯を適当に作っていると、掃除機をもった母が来て、

「あら、遅かつたわね。このへん掃除したいんだけど、ご飯なの？」と、ちよつと嫌みつたらしく言ってきた。

「うん」

「じゃあ、あとで掃除機かけといてくれる？」

ああ、しまった。面倒なことを頼まれた。リビングはクロの毛があつて、掃除が大変なんだよね。

「今日は、ヨガに行くの？」

あ、ヨガ。最近忘れてた。

「うん、行ってくる」

「そう、じゃ、買い物には行かないわね」

「なんで？」

「ほら、今横浜で福引してるじゃない。一緒に買い物にでも行こうかと思つて」

「私は、福引が終わって、バーゲンが始まってから行くから」

「あら、そう」

母は、少し残念そうに言うと、

「服、見てもらいたかったんだけど、明日は用事は？」
と、まだ、食い下がってくる。

「あ、明日？」

ちよつと、声がひっくり返ったかもしれない。

「何かあるの？」

「うん、実は、その…。圭介が来るって言ってた」

あゝあ、言っちゃった！

「あら、遊びに？クロの散歩かしらね。明日晴れたらいいわね、クロ」

クロは、それを聞き、尻尾をぐるぐる回した。…いやいや、クロ、君の散歩をしにくるのではないんだよ。

でも、まさか、結婚の申し込みに来るとは言えず、そのまんま、何も言わず、私は無言でご飯を食べた。

午後、ヨガに久しぶりに行き、籐子さんに会った。久々だし、お茶しましうって帰りにいつもの、ファミレスに行った。曇り空だが、雨は降ってなかったので、二人とも自転車であつたことを

アイスコーヒーを飲みながら、籐子さんに、今まであつたことを報告すると、

「ええ……………?!」

籐子さんは、思いつき驚いていた。

「結婚の申し込み？12歳年下？」

その驚きようは、はんばなかった。そうだよな、そのくらい驚くことだよな。なんて思いながら、アイスコーヒーをストローでくるるかき混ぜ、氷の音をカランカランさせていると、

「写真は、写真はないの？」

と、聞いてきた。

「あ。社内旅行があるけど、持ってきてないよ」

「え……………今、持っていないの？」

籐子さんは、がっかりしていた。

「あ、写メ撮ったんだ」

圭介と、海に行った時、クロと撮ってあげてたのがあったの思い出した。それを圭介にも送ると、めっちゃ喜んで待ちうけ画面にしていたんだっけ。

自分の写真をかゝって聞くと、クロとのツーショットが嬉しいからって言っていたけど、あとから聞いたら、私が撮った写真っていうのが、嬉しかったようで…。

「これ、うちの犬と写ってる」

籐子さんにそれを見せると、

「ええ？若い。高校生みたいよ。可愛い〜」

と、さわいだ。うん、確かに…。パーカーとジーンズ姿で、めっちゃくちゃ、思い切り笑っているその顔は、高校生にしか見えない。

「スーッ着たら、一応、社会人には見えるんだけどね」

そう言つと、スーッ姿も、今度撮って来いと言われてしまった。

「明日楽しみね〜」

「ええ？楽しみじゃないよ、気が重いつて…」

「なんで？圭介君が何を言つか、楽しみじゃない？」

籐子さんは、他人事のように言う。いや、他人事なんだろうけど。

「そうか、そういう楽しみ方もあるか…」

「そうよ〜。きつと、緊張してるわよ〜。来週ヨガに来る？来たら教えて！ああ楽しみ！」

人の真剣な結婚話で、遊ぶなよ〜と思いつつ、少し気が軽くなつた気がしていた。

翌日。…ああ、翌日。…ああ。…ああ。とうとうきた日曜日…。

圭介は約束の12時きつちに、チャイムを押した。

結婚の申し込みだと知らない母は、のん気に、

「は〜い」

と、玄関に行った。圭介が来ることを知っていた修二が、久しぶりに圭介と話でもするかって、自分のデートの時間までずらし、家にいた。

父も、圭介と話ができるのを楽しみにしていて、お昼ご飯と一緒に家で食べるか、外で食べるか、ぎりぎりまで、考えてたらしいが、「家にしようよ」

と私はそう提案し、簡単なサラダと、お吸い物と、炊き込みご飯を作り、母がお魚の煮物を作った。どうやら、何の異常もなかったはいえ、少々母は、気を使って、お肉でなく魚にしたようだった。ただ、このご飯が無駄にならないことを、私は願っていた。

母が、玄関を開けに行くと同時に、クロも玄関に走って行った。私はキッチンにいて、サラダをもりつけていたので、出遅れてしまった。

ドアを母が開けると、一目散にクロが圭介に抱きつくこうとしたが、圭介がスーツで決め込み、ネクタイまでして、直立不動で立っていたので、クロは飛びつくのをやめ、くくくんと、その場で、止まってしまった。

クロだけでなく、母も、動きが止まっていた。

「おや、今日も仕事だったのかい？」

母の後ろから父が、そうやわらかく聞くと、母もようやく動き出し、

「いらつしやい、圭ちゃん。仕事帰りなの？大変だったわね」

と笑って、圭介を、迎え入れた。そのあとに、戸惑ったのは圭介だった。

「あ……」

と、言ったきり、圭介は黙ってしまい、一番後ろにいた私のほうを、凝視した。

「何も、言っていないの？」

と、どうやら、目で訴えている。

「じゅめん」

と、心でつぶやきながら、両親に見られないよう手で謝った。

「お邪魔します」

玄関に上がり、きちんと靴をそろえて、リビングへと圭介は入っていった。母は、その行動を見ていてどうやら、ただ事ではない様子、と感じたらしい。女の感か。しかし、父は、わかっていない様子だった。

「さあさあ、一緒に昼でも食べよう」

父は、満面の笑顔でダイニングの方へ、圭介を通そうとしたが、圭介は、お昼を食べる前に大事なことを済ませて起きたかった様子で、父に向かって切り出した。

「いえ、その前に、話があつて…」

「え？」

父は、まだ気づかないのか、すつとぼけているのか、にこにこしながら圭介に聞いた。

「お昼を食べながらじゃ、駄目かな？」

さすがに、食べながら話すことではないだろう…母は、私の横で、感づいているようで、

「リビングに座る？お茶でも淹れて来るから」
と、キッチンへと行ってしまった。

2階から、そうつと修二がおりてきたようで、そのまま、キッチンに行つて母に、何かを話していた。

「はあ…」

小さなため息をつき、圭介は、そのままリビングでも直立不動でいた。

「まあ、座つて、圭介君」

そう父が言うと、やっと、

「はい」

と、圭介はソファに腰を下ろした。

父の顔は、まだまだのん気。多分、圭介が結婚の申し込みをしに来るだなんて夢にも思っていないのだろう。それよりも、何か、相談事でもあるのかとか、そんな感じで、少し喜んでいるようにも見えた。

ああ、こののん気な顔が、いったい、どう変化するというのか…。見ものだ。なんて、のん気なことを思っている場合ではない。

母が4つお茶を淹れてきて、リビングのテーブルに置いた。それから、父の横に座ると、「さて。話は何？」というような顔で、圭介の顔を見た。

私も、圭介の隣に座った。

ダイニングの食卓にそつと座った修二が、新聞を読むふりをしながら、こつちを見ているのがわかった。

いつもなら、修二、邪魔って言いたいところだが、今日は、味方でいてくれ、頼むからと、心の中で、修二に思いを投げかけていた。

「あの…」

と、切りだしておきながら、圭介はお茶をすすった。

「あ、あち！」

思い切りすすったようで、やけどをしていた。

「大丈夫かい？」

父は優しく言ったが、母は、そんなのどうでもいいから、早く本題に入ってっていう感じだった。

「あ、大丈夫です、すみません」

圭介は、思いきり深呼吸をすると、

「い、いきなりですみません、瑞希さんと、結婚をさせてください！」

と、でかい声で、頭を下げて一気に言った。

父は、まだにこやかな顔だった。母は、顔がこおりついていた。修二は、自分の耳を疑っているかのように、小声で、

「何だって？」

と、つぶやいた。

しばらくすると、父が、状況を把握したようだった。口が四角くなり、ぽかんと開いたままふさがらない様子…。母は、こおりついた顔を、必死で動かしながら、

「お父さん」

とだけつぶやいて、父の方を見た。父も、母の顔を見て、しばらく二人で、黙って見つめあっていた。

それから、父が、冷静さを取り戻した。

「圭介君、その…。何を言っているのか、自分でわかっているのかな？」

「はい。もちろんです」

圭介は元気に答えた。

何を言っているのかがわかっていないのは、父の方だ。まだ、ぽかんとした顔をしている。

修二が、椅子を少しこっちに傾けてきた。

「瑞希さんとは、お付き合いをさせていただいています。それで、結婚を二人で考えて、今日、挨拶に来ました」

圭介は、さつきとは違い、すぐく落ち着いた態度に変わっていた。「お付き合い？い、いつからだね？」

その正反対に、父は動揺を隠せないようだった。

「少し前からですが…」

「そ、そうだろうね。瑞希はこの前まで、茂君と交際していたくらいだからね」

父は、自分で冷静さを取り戻そうと、必死の様子が見て伺えた。

母はというと、ずっと、苦虫をつぶしたような顔でいた。ああ、聞きたくなかったとか、ああ、大変な状況になってしまったとか、そんな表情だ。

「お付き合いしてから、まだ日も浅いんでしょう？ちよっと、結婚を考えるのは早すぎないかしらね？圭介君」

母は、いつも圭ちゃんと呼ぶのに、このとき、圭介君と呼んでいた。「早すぎるとは思っていません」

圭介は、きつぱりとそう言った。

「圭介君、まだ、21だったよね。君くらいの年齢には、年上の女性にあこがれる時期もある。でも、それは一時のことだ。そのうち、あこがれてただけだったと、わかる時期が来る」

父が、圭介を諭すように、落ち着いて言い出した。

「それにね、瑞希だって、一時の感情に流されているだけなんじゃない？いくら、茂さんが駄目だったからって、そばにいた圭介君と結婚しようなんて、ちよっと安易すぎないかしらね」

母は、諭すようではなく、刺すように言ってきた。出た。これ、いつものパターンだ。

私は、こんなとき、なんて答えたらいいのか、どう反抗したらいいのか、嫌だつてだだをこねたらいいのか、それとも……？と、考え込んでしまった。

圭介は、そんな私の方をチラツと見て、私が考え込んでいるのを知り、

「僕は、一時の感情とか、そんなので、瑞希さんと結婚しようなんて思っていない。きちんと、結婚するなら、いえ、一生を共にするなら、絶対に瑞希さんがいいって思ったから、結婚を考えたいです」

と、正面を向いて、堂々と言ったのけた。

その横顔を私は、見ていた。くらってした。

あの、高校生のような笑顔で写真に写っていた男の子と同じ人と疑ってしまうくらい、今の圭介は大人で、しっかりしていて、頼もしく見える。

「結婚、瑞希さんと付き合おうって決めたときには、考えてなかったです。というか、考えることもできないくらいでした。でも、僕の体を心底心配している瑞希さんを見ていて、しつかりしないといけないとか、瑞希さんのこと守っていかなきゃいけないとか、なんか、自分の中で、考えがどんどん変わっていったんです」

「……」

母も、父も、何も言い返せずにいた。

「それで、あの、人生のことを考えるには、まだ若いのかもしいし、まだ、瑞希さんのことを守っていくのには未熟かもしれないんですけど、でも、僕なりに精一杯考えて出した結論なんです。だから、安易に言ってるわけではありません」

「は~~~~~」

感心のため息を思わず、出したのは修二だった。お前、すごいわって顔で、圭介を眺めていた。

私も心の中で、は~~~~~って、嬉しかったため息をもらしていた。「僕は、結婚をするなら、瑞希さんしか考えられないし、だったら、今しても、何年後かにしても、同じではないかなって……」

「圭介君、それは違う。今は瑞希のことしか考えられないかもしれないが、何年後かには、他の女性が現れてだな……」

父が、そう言いかけると、

「じゃ、おじさんは、結婚を決めたとき、どうだったんですか。何年後かには違う女性と出会うかもしれないとか、そんなこと考えましたか？」

と、圭介に、逆に質問をされてしまった。

「目の前にいた人と、一生一緒にいたいって思ったから、結婚を決めたんじゃないんですか？」

そう言われて、父は、一瞬、母の方を見てから、圭介を見て、「うむ」

と、静かに、うなずいたまま、腕組みをして黙ってしまった。

母は、しばらくそんな様子の父を見てから、じれったさを感じたようだ。

「圭介君のご両親だって、賛成してくれるわけがないわ」

「いえ、うちの親でしたら、大賛成です」

「ええ……？」

両親も、修二も大声を出して、驚いてしまっていた。

その声でリビングの犬用のマットの上で、ねころがっていたクロが、顔をあげた。でも、すぐにまた、顔を伏せ、目を閉じた。

どうやら、真剣な話をしているのを知っているのか、ずっと、ク口はおとなしく寝ていた。というよりも、寝たふりをしている感じだ。時々、圭介の声にあわせて、耳がぴくぴく動く。

「賛成してるの？12も上のおばさんが嫁いでくるのに？」

母は、そうなたまった。いくらなんでもひどいじゃないか、その言いよう。父がそれを聞き、まあまあと母をなだめた。修二が小声で、

「ひでえ……」

と、つぶやいた。でも修二、あんたも似たようなことを、いつも言ってるよ……。

圭介は、少し苦笑いをしてから、

「うちの両親は、瑞希さんのことをすごく気に入って、あ、こんな言い方失礼ですよ……。えっと、逆に瑞希さんとの結婚を、応援してるというか、いえ、勧めているというか……」

という圭介の言葉に、母は、動揺を隠せなかった。

「でもね、でもね」

母は、反対する理由はないかと、探しているようだった。

「まあ、そうだな。今すぐに、結論を出さなくても、もう少し、お母さんと話をさせてくれないかな、瑞希。お父さんは、お付き合いしているのも知らなかったわけだし、今はまだ、動揺しているんだよ。冷静に考える時間をくれないかな」

父は、ゆつくりと私に向かって、そう言った。

「はい…」

私が、初めて発した言葉だった。

「け、圭介君、あの…」

母はまだ、動揺していた。

「今日は、その…、このまま、帰ってもらってもいいかしらね。食事、申し訳ないんだけど、ちょっと、瑞希とも話したいし、家族だけで食事をしたんだけど…」

「ああ、はい。わかりました。今日はこれで帰ります」

すつくと、圭介は立ち上がった。やっぱり、ご飯の用意をしたのは無駄に終わったな、と思いつつ、私は玄関まで見送りに行った。

母は、リビングから出てこなかった。でも、修二と、クロがひよつこりと顔を出した。

「圭介、かつこよかったよ。まじ。俺は二人の味方だから」

修二は、圭介の肩をたたきながら、小声でそう言った。

「あ、嬉しいです」

圭介も、小声でそう言うと、私のほうを向き、

「あとで、電話するね」

と、またも小声で言った。それから、クロの頭をなでて、

「お邪魔しました」

と、大きな声で言うと、圭介は玄関を出て行った。

「は~~~~~」

力がぬけて、ため息をもらすと、修二が、
「姉貴、今からのほうが、大変だと思うよ」

と、脅かしてきた。いや、本当に、そうだよね…と、リビングには
いっていくと、クロと、修二もついてきた。

「瑞希…」

父が、何か言いたそうだったが、何を言ったらいいのかって顔を
していた。母が、重く、

「は〜。まさかね、あんたが圭介君と結婚とはね」
と、ため息混じりに、そうつぶやいた。

「12歳も下なのよ？わかってるの？親戚の人とか、ご近所の人と
か、何ていうか…」

「んだよ、それ」

「修二は、黙ってなさい。お母さんは瑞希と話しているの」

「世間体の方が、娘の幸せより大事？」

私はつい、頭にきて、そう言ってしまった。

「娘の幸せを思っているから、言ってるの。世間からいろいろと言
われて、のちのち、苦労するのは、あんたなのよ。そういうこと、
全然あんたわかってないけど」

「わからない。なんで、いつもお母さんは人の目ばかり気にし
てるの？人の目を気にして、ものを考えても、幸せになんてなれる
わけないよ」

思わず、声が大きくなった。

父が、優しい表情で、私に話しかけてきた。

「瑞希、お母さんは、お前のことを考えているんだよ。世間ってい
うのは、大事だ。まだ、若いとわからないかもしれないがな」

「確かにさ、12歳年上の女性はあんまりないかもしれないけど、
でも、最近じゃ相撲や、野球選手なんて、年上女房いるじゃん」

修二がそう言うと、母は修二に向かって、言い返した。

「お相撲さんとか、野球選手じゃないでしょう、圭介君は。普通の
サラリーマンで、うちだってそうよ。圭介君だって、もっと、年相

応の人と結婚した方がいいのよ。まだ若いし、結婚するには早すぎる。結婚してから後悔しても遅いでしょ」

「離婚も今、いるよ、けっこう」

「修二！結婚する前から、離婚するかもしれない結婚なんて、勧められる？」

「でもさ、結婚してみなきゃわかんないだろ？はたからみりゃ、すんげえお似合いのカップルが離婚とかつてあるぜ」

「あんたは、2階行つてなさいよ」

そう言われても、修二は動こうとはしなかった。

私は、泣きそうになったが、ここで泣いたら駄目だ、圭介もあんなにどうどうとしてたんだもん、弱気にはならないって、自分に言い聞かせていた。

「は~~~~、33にもなつて、結婚がまだで、やっと結婚かと思つたら、そんな一回りも下の子つかまえてきて、あんたは何を考えているのやら……」

そう言つて、母は頭を抱え込んでしまった。

「まあ、年齢差は、最近でも女性が年上つていうのは、あるからなただ、圭介君は、若すぎるとお父さんも思う」

父が、ぽつりと、言葉を選びながらそう言った。

「じゃあ、いいよ……私。結婚できなくても……」

開き直つたわけではない。結婚が目的ではないからだ。

「え？何？あきらめんの？姉貴」

1番驚いたのは、修二だった。

「違うよ、圭介が若すぎるなら、もう少し結婚は待ってもいいってそう思つて……」

と言うと、母は、また、ため息をついた。

「いったい、そうしたらいくつになるの？子供は？どうするの？」

「いいよ。いくつになろうが。でも、私は結婚するしない関係なく、

圭介と一緒にいたいだけだから。反対されようが、別れる気はまったくないから」

「籍いれちゃえば？もう成人してるし、親の同意は必要ないじゃん」
修二があっさりと言うと、母が、

「何を言い出すの、あんたは。いくつになったって、あんたたちは、私の子供でしょ！」
と、どなった。

いや、もう33だ。子供って言われる年齢でもない。結婚するかもしれないかを決めるのは、まったく本人の意思で決めていい年齢かもしれない。

「なんの問題もないと思うけどね、俺は。だって、姉貴と結婚してもいいって言ってるんだぜ。それも、あんなに性格も良くて、きちんと働いてる、わっかい青年が！相手のご両親まで、賛成してるんだぜ。なんの問題があるんだよ？周りがとやかく言おうが、本人がちゃんと生活してさ、幸せに暮らしてりゃ、文句言うやつなんている？いたら、言わせときゃいいんだよ」

「そんなことないでしょ、もし、あと5年もして圭介君の気が変わったらどうするの？」

「はあ？それ、母さんの悪い癖だよ。そんな先の心配してどうするんだよ。そんなの相手の年齢関係なく、駄目になる夫婦もいれば、いろんな夫婦がいるんだよ。そんなさ、取り越し苦労してないで、結婚賛成する方で考えてみれば？」

「そんなに簡単に言わないで！」

母が、切れた。父は、まあまあと母を静めたが、母の気はおさまらず、そのまま、むかむかした様子で、リビングを出て行ってしまった。

父は、少し泣きそうな、でも、怒っている私の顔を見て、
「お母さんとは、お父さんがあとで話すよ。今はちょっと、冷静に

なれそうもないから、あとでね。お父さんは、反対してるわけではないよ。お前が幸せになることが1番だからな」

と、優しく言ってくれた。それから、

「圭介君は年のわりに、しっかりしているな〜」

と、つぶやき、リビングを出て行った。

「修二、ありがとう」

「いんや…。なんか姉貴すげえって思ってたさ」

「何が？」

「今までなら、こんな大冒険でできなかったんじゃないの？」

「大冒険？」

「無難な人生送ってきたじゃん。どうしていきなり、こんな180度も変わっちゃったわけ？」

「そんなに、大冒険してるつもりはないよ。でも、結婚っていうか、ずっといたって思える人に出会っただけ」

「ふうん。圭介の影響か。ま、なんとなくわかるかな」

「え？」

「圭介って、なんか、人の人生を変えちゃうくらいのすごいパワーがあるっていうか…。いや、今日の圭介は、かっこよかった。男の俺でも、しびれたもんね〜」

「うん、私も」

惚れ直した。しびれた。かっこよかった。

「ま、いいんじゃないの？姉貴にはああいふ強引で、強い男性がさ

…」

「…」

何も言えなかった。

母と父は、ダイニングで、もくもくのご飯を食べていて、修二も、
「あ、やべ、待ち合わせの時間に遅れる、早く食べよう」

と、ご飯を急いで食べた。私も席に着き、黙って、ご飯を食べ

た。

しんと静まり返っているのも、気まずく感じたのか、母がテレビを途中でつけた。お笑い芸人の大騒ぎをしている声だけが、ダイニングに響いていた。

夜、圭介が電話をくれた。

「どうだった？あのあと」

「うん…。なんか、あのまんま、進展なし」

夕飯までがしんとしていて、やっぱり母がテレビをつけた。動物の番組をしていてクロが一人、いや、一匹で、それを見て喜んでいった。

「そっか…。ま、しょうがないかな。突然だったし。また、挨拶に行くよ。何度でも賛成してくれるまで行くから」

「うん。ありがとう。今日の圭介ね、頼もしかったよ」

「惚れ直した？」

「うん、めっちゃめっちゃ、惚れ直した。やばいくらいだよ」

「あはは…。やっぱり？それ以上惚れたら、まじ、やっぱいよ、瑞希」

圭介のそんな明るい笑い声に救われた。

圭介の家族はどうやら、うちの両親が反対してるのを聞き、自分たちも挨拶に行くと、言い出したらしいが、それは、圭介が止めてくれた。

「来週の日曜日、また行くよ。じゃ、おやすみ。また明日ね」

「うん。おやすみ」

電話を切ったあとも、圭介の声の余韻に浸っていた。ああ、本当に大好きだな。大大大好きだな。

母に反対され、落ち込んで、重くなっていた気持ちが、ふわふわって軽くなり、どんなことがあっても、大丈夫ってそんな気になっていった。

23 心配

翌日、お弁当を作り、早めに家を出た。外は大雨。空はどんより…。

「あゝ。憂鬱…」

私は、晴れがやっぱり好きだ。

会社にも早めに着いた。なんとなく眠れなかったので、まぶたが重く、コーヒーでも飲もうと自販機の方に行くと、社長が缶コーヒーを買っていた。

「あ、おはようございます」

「ああ、おはよう」

缶コーヒーを社長は取り出し、それから、私がいえるようにと少しずれた。

「なんだか、元気ないみたいだね」

「私って、顔に出ちゃいますか？」

「うゝゝん、出るほうかもなゝゝ」

「はあゝ。そうですか」

重いため息のような、返事をしてしまった。

「どうした？もしかして、圭介のことか？」

「え？」

「圭介のご両親、結婚をどんどん進めているみたいだが、乗り気がないなら、断つてもいいと思うよ」

カク……。少し私はずっこけた。見当違いもはなはだしい…。

「違います。結婚のことは私、嬉しいです。ただ、うちの母が反対してて…」

「はははは、なんだ、そういうことか」

と、社長は笑い飛ばし、

「そのくらいのハンデがないと、面白くないよ。圭介みたいなやつ

は、障害があつたほうが張り切るし、燃えるタイプだ。良かったな
ゝゝ、反対されて」

社長はそう言つと、私の背中をばんばんたたいた。い、痛い…。
笑い飛ばすようなことなのか？面白くないって…、なんだそれ。

「おはよ！」

席に着くと、圭介が最高の笑顔で挨拶をした。結婚を反対されて
いることなんて、ものもしないって感じた。

社長に、こんなことを言われたとメールで送ると、

「あはは、それ、当たってるかも。俺、俄然張り切る気になつたも
ん」

つて、笑つた。

そ、そうか。ああ、障害があつたほうが、燃え上がったりするも
んなゝ。つていうのは、若いころの話。私は、もうそんな余力が
あるかどうか…。どうせなら、あつさりうまくいつて欲しいよ。

圭介は、今日もまた、張り切つて仕事をしていた。横顔がなんだ
か、生き生きとしている。そんな圭介を見ていて、私も、なんだか
パワーをもらっている気がした。

結婚しても、働かせてもらえるのか。そうしたら、ずっと圭介と
一緒なのか…。けんかとかするのかな？今までしたことないけど。

6時を過ぎると、

「今日も残業するから。瑞希、お疲れ様」

そう言つて圭介は、私を見送つてくれた。毎日残業だけど、体、
大丈夫なのかな…。

とはいえ、社のみんながそうだから、結婚している人なんて、奥
さん大変だろうなつて思う。そうだ、赤ちゃん生まれたばかりの人
だっている。いつつもだんなさんが午前様じゃ、大変だろうなゝ。
私もそうなるのかな。

一緒に働いていれば、圭介と会っている時間も長いけど、辞めた

らなかなか会えないのかな……。帰りの電車でそんなことを考えながら、私は帰ってきた。

夕飯は、父が接待で遅いらしく、母と二人で食べることになった。う、気まずい……。母は、ほとんど無言で、テレビを観ていた。いったい、いつまでこんな状態が続くのだろう？ 私も黙ってもくもくと食べ、さっさと2階へあがっていった。

その日の夜10時頃、桐子が電話してきた。

「告白したの」

「え？ 彼に？」

「うん」

「で、なんて？」

「彼もね、私のこと思ってたくれた」

「やったじゃん」

「それで、縁談断ろうってことになって、母のところに、一緒に来て話してくれるって」

「おお！ 急展開だ！」

「うん、結婚もすぐかもしれない」

「え？」

「まだ、わからないけど、コック長と二人で、日向旅館を継ぐっていうのもいいなって、そんなことをぼろって言ったら、すごく嬉しいですって言ってたから」

「うひょ……。良かったね……」

「うん、でも、まだ、両親が何て言うか……」

「反対されても、頑張るんでしょう？」

「もちろん。瑞希は？」

「反対されました。もう、母親、口もきいてくれない」

「圭介くんはどうした？」

「反対されて、逆に燃えたみたいよ。張り切ってる」

「あはは、若いね〜。燃えるなら、反対もいいんじゃない？」

「う〜ん、私はすんなり結婚したいよ」

「ま、そうよね、この年じゃ、すんなりがいいわよね」

「そんなことを話しながら、30分話していた。桐子が、

「あ、一回宿に戻らなくちゃ。ごめんね。また電話するわ」

と言って、電話を切った。忙しいんだろうな...と思いつつ、桐子の恋がうまくいったこと、嬉しく思った。

翌朝も早くに起き、お弁当を作った。

昨日の夜中、雷がなって雨も強く降っていたが、朝は青空が広がっていた。それに、気温も高かった。

外に出ると、ちょっとむっとした。さわやかさが無いのが残念だったが、ひさびさのお日様が嬉しかった。

こんな日は気分がいいな〜と、会社には足早に着くと、圭介がもう席について、仕事をしていた。

「おはよう!」

元気に言つと、圭介がこっちを向いたが、顔色が青かった。

「あ、あれ?どうした？」

「うん、また頭痛...」

「大丈夫？」

「うん...」

「熱は？」

「ああ、朝測ったら、37度」

「微熱？」

「うん」

少しだるそうに話していた圭介は、仕事をしては手が止まっていた。

「少し休んだら？」

「うん、でもここが終わったら、もう完成なんだ」

そう言って、パソコンの画面とにらめっこをした。頭痛？胃はなんでもなかった。でも、どうして微熱と、頭痛がするのだろう？

「ああ、気持ち悪い…」

「吐き気？」

「うん、ちよつと…。っていうか、めまいかな」

めまい？ますます、心配になる。

圭介は、その日かなり頑張っていた。お昼もとらず、仕事を続けて2時半頃、

「終わった！」

と、ようやく背伸びをした。

「う、いててて…」

「頭？」

「うん、ガンガンするや。ちよつと、応接コーナーいつてくる」

「お昼は？」

「ああ。ごめん、もう少し気持ち悪いのおさまったら、食べるよ」

「うん」

応接コーナーでぐったりしている圭介を、社長が見て、

「おい、大丈夫か？仕事終わったんなら、もう帰っていいぞ」

と、圭介に声をかけた。

「はい、そうします。でも、ここで、少し休ませてもらっていいですか？」

「ああ、いいけど。なんなら会議室で、寝てくるか？」

「え？いいんですか？」

「いいぞ、そっちの方が落ち着くだろう？」

会議室と言っても小さな部屋だが、まったく仕切られているので、確かに落ち着くかもしれない。圭介は、すみませんと言い、会議室に入ってしまった。

自分の席から、一部始終を見ながら、私は心配でドキドキしていた。

圭介は、胃ではなく、他のどこが悪いのではないだろうか？いや、単に疲れがたまっているだけだ。だって、ろくすっぽ寝ていないはずだし…。でも…。

私は、仕事をする気にもなれず、ずっと圭介のことで頭がいっぱいだった。

圭介は、１時間ほどして会議室から出てきて、社長のところに行き、

「すみません。少し頭が痛いので、これで帰ります」と、頭を下げた。

「ああ、一人で平気か？」

「はい、大丈夫です。お先に失礼します」

圭介は、そう言うと、デスクに来て鞆を持ち、私に声をかけてきた。

「瑞希、先に帰るね」

「うん、大丈夫？」

「うん、今日は一人で帰れそう」

圭介は他の人にも「お先に」と言いながら、オフィスを出て行った。結局私は、あまり仕事が手につかないまま、その日家に帰った。

電話じゃ、寝ていたら悪いしと思い、メールで「大丈夫だった？」と送ってみた。しばらくして、圭介から返信が送られてきた。

「なんか、やばいかもしれないから、明日また、検査しに行く」。

ええ？検査…？

「そんなに具合悪いの？」

「<帰り、吐いちゃった。頭もすごく痛い。おふくろも明日は、ついてくるってさ。瑞希は心配しないで。検査して、はっきりした方が安心するだろ？」

心配しないでって言われても、心配せずにはいられないよ。それでも、精一杯、

くわかった。きっと、大丈夫だよ。

と、送った。自分自身に言い聞かせるように。圭介は、おやすみというメールをくれた。どうやら、寝たかったようだ。

結婚のことか、一気にふつとんでいった。早く、安心したい。なんでもありませんように。

翌日は、お弁当を作らずに家を出た。足が重かった。空は青空だったが、その青さがむなくさえ感じた。

圭介は、社長にも検査に行くことを電話で連絡したらしい。

「大丈夫、きっとなんでもないさ。また、なんでもありませんでしたって、笑ってくるから」

社長は私のところに来て、そう言ってくれた。

その日1日圭介は、会社に出てこなかった。

夜、気になってメールを送ると、

「待ち時間とか長くて、今日は会社に行けなかった。でも、昨日よりは、楽になっているから。」

と、私を安心させようっていう圭介の気持ちが伝わるメールが返って来た。少しほっとした。早く圭介の顔がみたい…。

翌朝、圭介は会社に来ていた。

「おはよう」

「あ、おはよ」

少し、一昨日より顔色がいい。ほっとした。仕事も落ち着いているので、圭介はその日のんびりと、今まで溜めてしまっていた手紙や書類の整頓をしていた。

「検査の結果はいつ？」

「うっ、ん、早くて明日って言ってたけど」

「そう。明日病院に行くの？」

「一応、予約はしてる」

「そう……」

検査の結果が出ないと、まだ不安だった。

翌朝は、雨がしとしと降っていて少し肌寒かった。まだ、梅雨はあけそうにない。暑い夏もしんどいが、梅雨よりはいい。

今日は圭介、いないよねって思いながら会社に行く。ぼつん、圭介の席があいていて、なんだかますます寒さを感じた。

病院には、お母さんで行ったのかな。午後になっても、出てくるかと思っただが、その日圭介は会社を休んだ。

夜、怖かったが、勇気を出してメールをした。

<圭介、どうだった？

返事は1時間してもこなかった。寝てしまったのか？でもまだ9時だ。お風呂かな？ずつと、気になりメールを待っていると、夜中1時頃、やつと返信があった。

くなんでもなかったよ。おやすみ。

なんだか、あっさりとしたメールだな。でも、私はそれを見て、ようやく安心して寝ることができた。

翌朝、定時の時間になっても圭介は来なかった。社長が、私のところに来て、聞いてきた。

「圭介から連絡あった？」

「え？今日は何も……」

「じゃ、聞いてない？」

「は？」

「圭介、検査入院だって。昨日の夜、うちに先輩が電話してきた」

「え？聞いてません！圭介は、なんでもなかったって……」

「うん、念のためだって言ってたから。心配させなくなかったんだよ、きつと」

そう言つと、社長は少し笑って見せて、自分の席に戻っていった。

社長の顔が少しひきつって見えた。私の気のせいだろうか…？

夜、どんよりした顔で、夕飯を食べていた。ほとんど食欲が出なくって、箸がすすまないでいるとそれを見た父が、

「お母さん、もういい加減、瑞希と話をしたらどうだ？最近二人とも話をしていないだろう」

と、母に言った。ああ、結婚のことか…。でも、私の悩みはそれではない。

「ごちそうさま」

ほとんど残し、私は2階にあがった。

父が、私の部屋に来た。

「お母さんも、どうやら、悩んでいるようだよ。賛成した方がいいのかどうか、お前のことを考えてのことだから、な？そんなに落ち込むな。圭介くんはどうだ？元気にしてるか？」

父に、検査入院をしていることを告げると、

「え？そうか。それで瑞希は元気がなかったのか」と、納得した。

「検査入院っていつでも、最近ほ、少しあやしいつていうだけで、医者は入院させたり、検査させるんだよ。そっちの方が、ほら高くつくからな」。それだけだよ。大丈夫」

父はそう言っ、私を安心させた。

そっか、そういうものか…。と、頭で納得しようとしても、心がついていかない。心にまっくるな雨雲のようなものがずっとあって、重苦しくて辛かった。

朝、お弁当を作らないので、出る時間ぴったりに下におり、ご飯も食べずに出ようとすると、

「あんたまで、具合が悪くなったらどうするの？きちんと食べなさい」

と、母が言ってきた。

「もう、時間ないから」

と言に残し、私は家を出た。母は、昨日の夜きつと父から、圭介の検査入院の話を聞いているのだろう。

気が重い。足が沈んでいくようだ。空を見ると、今にも降り出しそうな暗い雨雲がおおっていた。

検査入院っていうのは、1日だけなんだろうか？それとも、何日もかけて、検査をするのだろうか？

その日を境に、圭介からの連絡はぴたりと来なくなり、どうやら部長から社長に、会社をしばらく休むということだけ連絡があったようだ。

しばらくとはいつまでか。いつになったら、連絡が取れるのか。病院にいたら、携帯はつながらないのか。ああ、どうしたらいいものか…。

真っ暗な思いを抱えたまま、私は会社に行っていた。稲森さんが、私が暗いのを気にして、何かと励ましてくれたが、愛想笑いをして、すぐに顔が暗くなっていった。

仕事をしているときには、みんな何も言わないが、昼などご飯を食べに行ったとき、あれこれ圭介の話をしていたようだ。でも、社長も何も聞いていないと一点張りで、圭介のことは誰もわからなかった。

1週間が過ぎた。日曜に家に来ると言っていたのに、やっぱりなんの連絡もなかった。

圭介が担当していたオフア―は、みんなが分担してどうにかになっていたが、ぽつかりとあいた圭介の席を見ているのも辛いくらい、私は沈んでいた。

会社がモノクロになり、どんなに周りがつるさくても、聞こえないほどだ。

水曜日、ひよつこりと定時ぎりぎりに圭介が現れた。

「圭介！」

会社のみんなが、声をかけた。

「すみません、ずっと休んじやって…」

「いや、もう大丈夫なのか？」

社長が心配そうに聞くと、

「はい。仕事、すみませんでした。たまってますよね」

と、圭介は申し訳なさそうに言った。

「いや、どうにかみんなで、分担していたから。それより、無理はするなよ」

「はい…」

社長が神妙な顔つきで、圭介を見たが、圭介はにこつと明るく笑っていた。

席に来た。久しぶりの圭介の顔は、なんとなく細くなっているような気がした。痩せたのだろうか？

「あ、ごめん。何度かメールくれたのに…」

「うつん…」

うつんと言うのが、精一杯だった。他になんて言ったらいいのか。

…心配したんだよ。

…検査の結果どう？

…もう、大丈夫なの？

…どうしてメールできなかったの？

頭の中で、いろんな言葉が出てきては、消えていった。

圭介は何も言わず、パソコンを開き、仕事を始めた。圭介が言ってくれるまで、待ったほうがいいのかなくてそんな気がして、何も聞くのをやめた。

昼、稲森さんがランチに誘いに来てくれたが、圭介とご飯が食べ

たいし、話したかったから断った。

「圭介、ご飯食べない？おごるよ」

だが、圭介は、

「仕事たまってるし、弁当買って、ここで食べるよ」

と言つて、さつさとオフィスを出て行つてしまった。なんとなく様子が変だな。避けられているような、よそよそしいような…。

私もお弁当を買い、下のコミュニケーションルームで一人で食べた。どうしようか、こっちから何か聞いてもいいのだろうか？

24 真つ暗闇

6時に仕事が終わわり、私は席を立った。

「お疲れ様」

「あ、俺も帰るよ」

圭介が慌てて、帰る支度を始めた。ああ、良かった……。一緒に帰れるし、話ができる。

圭介と会社を出て、エレベーターに乗る。圭介があまり話をしてこない。それから、ビルを出て傘をさして歩き出した。

「ご飯、食っていかない？」

圭介が、ぼつりと言った。

「うん」

まだ、一緒にいられる！

圭介は、近くにあるビルの地下に入っていた。初めて来るところだ。ちよつと暗い雰囲気のする店内だった。どうやら、レストランというより、カフェバーという感じだ。

店員に席を案内してもらい、奥へと入っていた。その席はまた、一段と暗かった。すっかりお酒を飲む雰囲気になっていたが、

「あ、俺、酒は飲まないよ。瑞希は？」

と圭介が、聞いてきた。

「私も、飲まないよ」

検査のこととか聞きたいから、飲むわけにはいかないって思ったが、ああ、検査の結果がなんでもないなら、飲んでもいいかな。

席に座り、メニューを見る。おつまみっぱいものも多かったが、1品料理もあって、圭介はピザを、私はスパゲティを頼んだ。

料理が出てくるまで、圭介は仕事のことを少し話し、それから料理が来るともくもくと食べた。

食べ終わると圭介は、私が食べ終わるのを待ち、食後にコーヒを二つ頼むと、

「俺、瑞希に話しておきたいことがあるんだ」
と、まじめな顔で言ってきた。

「何？」

「うん。実はさ、親父やおふくろとも話したんだけど…」
圭介の声が低くて、なんだか嫌な予感がした。

「…。何…？」

「結婚…、やめない？」

「え…？」

「瑞希の両親に反対されるのも、無理ないって、なんかおふくろもやっと冷静になって」

「……」

いきなり、何を言っているの…？

「ああ、あのさ。俺も、まだ早いつていうか、もう少しやっぱ、独身でいたいっていうか」

「…なんで、急に？」

「…一週間考えたよ。結婚は、はずみで…つていうか、親に言われてその気になったただだったかなって。冷静になってみたら、やっぱ、早すぎるよ…」

「…入院して、そう思ったの？」

「え？」

「だから、検査入院…」

「それとこれとは、別だよ！」

圭介は、一瞬、声をあげた。

「でも、いきなり何で？わからない、私…」

「…だからさ。だから…」

「……」

暗かったから、あまり圭介の表情がわからなかった。でも、困惑

しているようにも見えた。

いや、頭が真っ白なのは、私のほうだ。ついこの前まで、お母さんだってノリノリだったじゃないか。

「お母さんもなの？」

「そうだよ。冷静になってみたら、結婚なんておかしいってさ」

「部長は？」

「親父も、そう言ってた」

「……。圭介もそう思うの？」

「うん。やっぱり釣り合わないよ。俺ら……」

「結婚をやめるだけ……だよな？」

「え？」

「付き合ってはいくんだよね。これから……」

「瑞希、他に相手探した方がいいよ。俺、いつ結婚なんて考えるかわからないから」

「……。本気？」

「本気……」

圭介は、私の目を見なかった。ずっと、下を向いていた。

「本気？本当に？なんでこっち見ないの？」

「……」

黙って、圭介は顔をあげた。冷静な目をしていた。とても冷めた、クールな目だ。そこには、私は映っていないんじゃないかって思った。

「だから、メールもくれなかったの？」

「うん」

「だから、日曜も来なかったの？」

「うん」

「うちの親に反対されたから、それで？」

「それだけじゃなくて、いや、瑞希のお母さんの言うことももっと

もだなつて……」

「……」

圭介は、まだ、クールな目つきだった。

本気なの？なんで？一週間会わなかっただけで、そうなっちゃうの？なんで？……。元彼を思い出した。結婚の話したら、別れ話
がきた。今回もなの……？

ボロ……。涙が出た。

「もし、会社一緒にいづらかったら、俺がやめてもいいし……」

圭介は、私の顔を見ないで違う方を見ながら、そう言い出した。

「え？」

「俺のほうが若いから、どうかすぐに見つかるよ」

「……」

嫌だ、そうしたら、まったく接点がなくなってしまう。まったく
圭介に会えなくなる。……いや、もう、隣にいるのは、辛いだけじゃ
ないの？

待つて……。なんで別れ話をまた、私は聞き入れようとしているの？

「私、結婚そんなに、考えてない。結婚ができなくても、圭介の隣
にいられたらそれでもいい」

必死で、そう伝えると、圭介が少し顔をこわばらせて、

「俺、悪いけど、もう付き合えない……」

と低い声で、ぼそつと言った。

「え？」

「……俺、やっぱり、同じくらいの年の子の方が、いい……」

「……」

何を言われているのかも、わからなくなった。圭介が何を言っ
ているのかもわからない……。

「……。圭介。会社辞めなくてもいいよ」

しばらく黙っていたが、私はそんなことをいきなり、口走っていた。

「え？」

「私が、辞める」

「……。でも」

「私、圭介が隣にいないのに、会社にいけない。絶対に辛くなる……」
涙がぼろって流れた。そのあと、どんどんどん、涙が溢れ出て、止まらなくなった。

圭介は、そんな私を見てから、そっぽを向いた。それから、冷めたコーヒーを飲みほすと、

「先に出るよ」

と言って、レジに向かい、お金を払って出て行ってしまった。

暗い1番奥の席でよかった。私は、声を殺して泣いた。涙が止まらないから、席を立てなかった。

店員さんはなんとなく様子がわかっていたのか、なかなか圭介の飲んだカップをさげにこようとはしなかった。

…何が起きたのだろう。

涙がようやく止まり、店を出て、夜の雨の降る町を歩きながら、私はぼくとしていた。

少しして、傘をさしていないことに気がついた。雨の中、傘をさしていないので、すれ違う人が私を変な目で見ていた。

傘を開いた。傘を開くと、圭介とのデートのこと、プラネタリウム、いろんなことが走馬灯のようになると頭の中をかけめぐり、また涙が出てきた。傘で、顔が見られないようにして、私は泣きながら歩いた。

電車でもずっと、外を見ていた。涙が時々流れるたびに手でぬぐった。

圭介は一週間で、なんであんなにも変わってしまったのか……。私

への思いが一気に冷めたのか…。結婚が重くなつたのか…。誰かと出会ってしまったのか…。

明日、顔をあわせるのも辛い。私はその夜、社長に電話をすることにした。

家について、そのまま2階に上がった。

「瑞希？ご飯は？」

「食べた」

とだけ、母に2階から叫んで伝えた。

それから、少し深呼吸をして、社長の携帯に電話をした。今日あったことを社長に告げて、明日は休んでいいかということと、会社を辞めてもいいか聞いてみた。

「うん、しばらく辞めるというのは、保留にしておこう。何日かたつて、落ち着いたら出てきたらどうだ。圭介の気も変わるかもしれない」

「…そうは、思えません。私…」

「なんで？」

「圭介の顔、すごく冷静で、怖いくらいクールで…。もう、気持ちが冷めているんです。きつと…」

「……。どうかな」

「すみません…。新しく派遣の人を雇ってください。私のわがままですが…」

「いや、うーん。そうはいつでもな、柴田さんは仕事どうするの？」

「また、派遣で探します。大丈夫です。すみません…。私、会社にも挨拶にいけないかも…。みなさんに迷惑かけますが…。すみません…」

「うん…。そっか。じゃ、2〜3日考えて、それからしよう。ね？」

「はい…」

そう言って、私は電話を切った。もう、限界だった。

ベッドにうつぶせになり、枕で顔をおさえて泣いた。声が一階に聞こえないよう、ずっとずっと泣いた。

明日には、これが夢であるよう願いながら泣いた。明日には、圭介の電話があり、今日のことはすべて悪夢だったって、きっとそうなるって、そう願いながら、ずっとずっと私は泣いていた。

翌朝、起きてこない私を起こしに、母が2階に来てノックをした。

「今日はお休みするの？」

「うん。しばらく休むから……」

「どこか、具合でも悪いの？」

「うん。風邪かな……」

母は、少しかすれた私の声を聞き、

「じゃ、ゆっくり寝てなさい」

と、ドアの向こうから声をかけ、下に下りて行った。

鏡を見た。目はすごく腫れていてその目を見て、

「ああ、夢じゃなかった」

と、実感した。

夢の中で、私は圭介と会っていた。圭介は無邪気に笑っていて、

「ああ、なんだ、別れるなんて、夢だったんじゃない」

って、夢の中でそう思っていた。でも、現実は違っていた。

ぼくっとながら、私はまた考えた。なんで、いきなり？なんで、なんで？どうしても腑に落ちない。

圭介が、もう、会社には着いているだろうから、私は圭介の家に電話をして、お母さんに聞いてみることにした。

ベルが5回くらいして、お母さんが電話に出た。

「榎本ですが」

「あ、あの、柴田です…」

そう言つと、お母さんは一瞬黙つてしまい、それから、
「瑞希さん…?」

と、すごく冷静な声で、聞いてきた。

「はい。あの、ご無沙汰してます」

「……。圭介から、何か聞いたかしら?」

「……。はい。あの…、昨日の夜…」

「そう。結婚をやめる話よね?」

「はい。それで、あの…」

「ごめんなさい。私も浮かれすぎてたわ。圭介に言われて、やっぱりまだ、結婚は圭介には無理だつて思つてね。圭介と瑞希さんじゃ、年の差がありすぎる」

「でも…」

「悪いけど、今から出かけるの。圭介が結婚をやめたのなら、もう、仕方がないと思うわ。それじゃ」

お母さんの言い方も、どこか冷たく感じた。いったい、何が起きたのか。なぜ、そんな180度も変わってしまったているのか。

母が昼頃、おかゆを作つて部屋に持つてきて、私の泣きはらした顔を見て、やっと尋常ではないことが起きていることを知り、聞いてきた。

「どうしたの?圭ちゃん大変な病気なの?」

「うつん、違うよ。昨日会社に来たし…」

いや、待てよ。検査の結果は何も、聞いていない。

「じゃ、どうしたの?」

「…結婚をやめようつて、別れようつて突然言われた」

「ええ?」

母は、いきなりのことで、驚きを隠せない様子だ。

「で、でも、だって、この前結婚させてくださいって…」

「反対されて、考え直したみたいで…。向こうのお母さんにも、年の差があるし、無理だって言われた」

「お母さんまでが？いきなり？」

「うん…」

「……」

「お母さんには、嬉しいことですよ。だって、結婚反対してた…」

「そうだけど、まさか、こんな展開になるなんて…」

「お母さんが反対したから…」

私は、母のせいにもして、思い切り泣きたかった。誰かのせいにでもしないと、やりきれなかった。

「瑞希…。もし、そんなことで、別れを決めるような相手なら、結婚しないで正解なの。わかる？」

「そんな理屈言わないで！」

「でもね！瑞希。圭ちゃんは、そんな簡単に気が変わるような、そんな子じゃないと思う。真剣だって伝わってきたし。お母さんね、あと数回来たら、賛成してもいいって思っていたの。そのくらいの誠意見せて欲しいって。そして、圭ちゃんなら、きっと、見せてくれるだろうって思っていたの」

そんなこと、今言われても、すべてが遅いのだ。

「何か、あるんじゃない？ねえ…。本当に圭ちゃん、体、なんともなかったの？」

「え？」

「だって、おかしいでしょ。検査入院してから、そんなこと言い出すなんて」

「…悪いのかな？検査の結果、何か悪いこと…」

「わからないけど、そう考えてもおかしくないんじゃない？」

がたがた、震えがきた。もし、そうなら？もし、それで別れを告

げてきたなら？圭介のお母さんまでが、一緒に嘘をついているとしたら？

いきなりの別れ話、そっちの方が筋がとおっている。でも、そんなこと思いたくもなかった。

「…もし、もしそうなら、私、どうしたらいいの？」

「……」

母は、黙っていた。母も、どうしたらいいのか、わからない様子だった。

「ちよっと、お父さんが帰ってきたら、相談するから。ね？少し横になってなさい」

母が優しくそう言って、部屋を出て行った。

震えはまだ、止まらなかった。もし、もしそうなら、圭介は一人で、辛い思いをしているんじゃないのか。自分で抱え込んでいるのではないのか？もし、そうなら、なんで言ってくれないのか。もし、そうなら……。

私は、耐えられるのか……？

ああ、こんなの全部、私の妄想だ。母のいつもの悪い癖だ。悪いことばかりを想像し、心配する。きつと、そうだ。圭介は私が嫌いになっただけだ。

それも、悲しかったが、圭介の体に異変が起きていることを考えると、ずっと、救われるような気がした。

の、
いつの間にか私は寝ていた。昨日、今日と、泣き疲れていた。父

「入るよ」

という声で、目が覚めた。

「瑞希、お母さんから聞いたよ」

「……」

「それで、お父さん、圭介君のお宅に行って来ようと思う」

「え？」

「もし、理由が何にしろ、結婚させてくださいと言った矢先に、別れ話をしてくるなんて納得がいかないと、お父さんが乗り込んでいっても、間違ったことじゃないだろ？」

「乗り込むの？」

「いや。きちんとした理由を聞いてくるから。もし、万が一、万が一何か、悪いことを言われたとしても、いいね。瑞希に伝えるから。それだけの覚悟は持っていないさい」

「……。覚悟？」

「それを聞いて、どうするかは自分で決めるんだよ」

「……。もし、何か悪い結果だったら……？」

「別れるのか、そばにいるのかを決めなさい」

「え？」

「お父さんは、何も口を出せないな。お前が苦しむのを見るのが一番辛い。たとえば、もし、お母さんが病気になったら、お父さんはちゃんとそばにいて、看病もするだろう。夫婦だからね」

父は、いったん話を止めて、ゆっくりと息を吸った。そして続けた。

「だが、お前たちは、まだ結婚をしていない。だから、別れてもいい。でも、1度は結婚まで考えた仲なんだから、そばにいるのを選ぶなら、それでも、かまわないとお父さんは思っている。離れるのと、そばにいるのと、どちらが辛いかも、お父さんには決められないしな」

「でも、まだ、そんなのわからないでしょ？本当に私のこと嫌になっただけかも」

「だから、はつきりと聞いてくるよ。いいね？」

「……」

父はそう言うと、部屋を出た。

怖かった。本当の理由を聞くのが…。なんでもなくて、そしてずっとそばにいてくれるのが、1番いい。

どうか、どうか…。祈る気持ちで、その夜は眠りについた。

土曜の午後、父は圭介の家に電話をして、圭介がいるかを聞き、家にこれから行くと言っていた。父は冷静に話をする人だ。

今でも、冷静だっただろうが、でも、電話で家をたずねると言ったとき、少し声をあらげていた。うちの娘と結婚するとこの前言っておきながらどういうことだ、きちんと説明を聞きに行くからと…。

電話を切ると、ため息をつき、

「こんな感じで、よかったかな」

と母に向かって、言った。どうやら、怒っているという演技をしたらしい。父にしては、上出来だ。

「お父さん、頼んだわよ」

母が、玄関まで行き、そう言っていると、

「うん、わかった」

と、父は深くうなずき、家を出て行った。リビングからその様子を、私とクロと、修二が見ていた。

修二も、話を母から聞いていた。

「心配ばかりするなよな」

ぼつりとそう言うだけで、他には何も言ってこなかった。それが修二の優しさだと、痛感していた。

母は、私のことを心配していた。ご飯は食べなさいとか、きちんと寝ているのかとか、その母の心も伝わってきて、胸が痛くなった。

クロも、時々私のほっぺをなめたり、夜、私の部屋で寝てくれたりなくさめようと、必死なのがわかる。

…怖かった。父が家に帰ってくるまで、何度か布団に潜り込み、

両手を合わせた。

なんでもありませんように。なんでもありませんように。こんなに辛いなら、ただ、ふられちゃう方がいい。

5 時頃、父が玄関のドアを開け、静かに帰ってきた。

父が帰ってきたのがわかり、修二は部屋から下へと下りていった。私は、怖くて聞きたくなかったが、やはり、気になりそろそろと下に下りた。

父は、リビングのソファに深く座っていた。

「瑞希、ここに座りなさい。…母さんも」

そう言つと、父は一回深呼吸をした。

「どうだったの？」

母が、心配そうに父に聞いた。修二も、かたずを飲んで見守っていた。

「お父さん、また、演技をしてきたよ。怒鳴り込んでいった」

「え？お父さんが？」

「そのくらいにしないと、正直に話してくれないだろうと思ってな。そうしたら、圭介君は、土下座して謝るばかりで…」

圭介が、土下座…？

「お母さんも、半分泣きながら、謝って…。でも、何も話してくれなかった。だけど、それじゃ、納得がいかないと、もて遊んだだけか、謝ってすむことじゃないと、お父さん頑張ったんだよ」

「うん…」

母が、よくやったわと言う顔をした。

「そうしたら、榎本部長さんが、落ち着いて話を聞いて欲しいと、リビングのソファに座ってね、それで、話してくれた」

「……」

ゴク…。のどが渴いていた。つばを飲み込んでも、からからだっ

た。

「瑞希、落ち着いて聞きなさい…」

怖い！本当は、今すぐ逃げ出したいくらいだ。

「圭介君は…、脳に、腫瘍があるそうだ。それも、悪性の…」

「…そんな！」

大きな声をあげたのは、母だった。

「うそだろ?!」

修二も、大きな声をあげた。

私は、父が何を言っているのかがわからなかった。

「…手術は、できない。命にかかわる危険なところに腫瘍があるらしい。抗がん剤治療や、放射線治療が始まると思うが、通院だけではすまなくなり、しばらくは入院するようになるだろう」

「それで？治療をしたら、助かるの？」

「いや、延命するだけだろうと、言っていた。持って、半年か、1年か…」

「うそだろ?!だって圭介、すげえ元気だったし、まだ、若いんだぜ」

「瑞希?」

父が、私の顔を覗き込んだ。

私は、今の話をすべて、消去したかった。何も聞いてない、そんなこと、私は知らない。

圭介と別れても、圭介はずっと元気にいる。ずっとずっと…。今の話は全部嘘だ。父のつくり話だ。ああ、そうだ。そうに決まっている。

私がただ、ふられるのが悔しくて、そんなでっちあげを言っているのだ。

「瑞希?」

今度は、母が青い顔をして、私を覗き込んだ。私はひきつった顔

で、笑った。

「冗談言ってるんでしょ？」

「どんな話でも、覚悟を決めて聞きなさいと言ったよね？」

父は、冷静にそう言った。

母が、父に向かってせつつくように聞いた。

「それで？どうしたの？」

「瑞希には、言わないでくれと、圭介君に頼まれた。でも、きちんと話さないと、フェアじゃない。圭介君も、瑞希ときちんと向き合
って話してくれと頼んできた。瑞希はどう選択するかはわからない
でも、もしもう結婚をしていたとしたら、夫婦で、共有すること
になったことだと、話してきたよ」

「それで、圭ちゃんは？なんて？」

「お母さんがね、絶対に別れて欲しいと言っていた」

「ええ？」

「瑞希に、辛い思いをさせたくない。それが、榎本家の考えで、
病気のことも告げず、別れるという結論になったそうだ」

「……」

みんなが黙って、聞いていた。

「圭介君は、自分を憎んでもいいから、忘れてもらいたかったって
言ってたよ。辛い思いをさせるなら、俺が悪役になった方がましだ
って……」

ボロボロ……。涙が突然出た。その涙で、私はすべてを受け入れて
しまった。

そんなの嘘だって否定して、認めないでいたかった。でも、圭介
のそんな思いを知って、涙が止まらなかった。

「どうして……？」

何を責めたらいいのか。

「なんで？なんで圭介なの……？」

嗚咽を上げて私は、泣き出した。声がおさえきれない。

「私、どうしたらいいの？どうしたらいいの？なんで圭介、自分を悪者にするの…？」

「瑞希…」

母は、一緒に泣いていた。

「くそ！」

修二は怒っていた。父は、ただ黙っていた。

私は部屋に戻り、ずっと泣き続けていた。ベッドで、泣きながら横になっていると母が部屋に来た。

「何か、食べれる？」

母が、優しくそう言った。

「うっん…」

「そう…」

母は私のベッドに、腰掛けた。

「瑞希は、どうしたいの？」

「わからない…。どうしたらいいかな？」

「…瑞希が決めることですよ。圭ちゃんと、きちんと話す？」

「怖い…。私、思い切り泣きそうだ。圭介を苦しめそう…」

「……。そうね…」

「お母さん、私ずっと、考えてた。私が、悲しむ、苦しむことが、圭介は1番辛いのかな。悪者になってまで、別れた方が、圭介も楽かな？」

「……。どうかしら…」

「…それ、私の逃げかな？」

「圭ちゃんから逃げる？」

「うん…」

「それもけして悪くないわよ。無理して、そばにしようとしてお互い傷ついてもしかたがない」

「…圭介がいなくなるなんて、考えられない。もし今、別れても、

そばにいないくなるんだよね」

「そうね…」

「……」

圭介は、怖くない？怖くないの？辛くないの？苦しくないの？

翌日、さらに目が腫れあがっていた。昼まで部屋にいと、母がサンドイッチを持って来た。

「これなら、食べやすいでしょ？あと、ハーブティ。落ち着くわよ」

「うん。ありがとう…」

サンドイッチを一口食べると、母が安心した顔で、

「あとで、顔も洗いなさい。すごいことになってるわよ」と言った。

「お母さん…」

「え？」

「お母さんなら、圭介が病氣って知ったら、お付き合いやめるように言うかと思っただな」

「……。そうね。娘の苦しむ姿は見たくないからね。でも…」

「でも？」

「お母さんも、お父さんと出会う前、学生るとき、好きな人がいてね。病氣で亡くなったの」

「え？初めて聞いた」

「お付き合いもしてなかったし、もともと、体の弱い人で、でも、亡くなった後から、彼のお母さんから、実は、あなたのことをずっと、好きだったみたいって言われてね」

「……」

「悲しかったわね……。もっと、早くに言って欲しかったわよ。そりゃあ、好きな人だもの、辛いけど、でも、せめてもっとそばにいたかったってそう思ってたわね。お母さん、彼女でもないしって、お見舞いも遠慮していたから」

「そばに…？」

「そう、思い出ももつとほしかったし、そばにいられたら、それでよかったかな」

「……」

「だから、そんなことがあったし、あんたに別れなさいとは言えない。でも、そばにいてあげなさいとも言えない。お父さんは圭ちゃん、話しなさいと言ってたけど、お母さんはね、あんたが決めることだと思うわ。1番どうしたいかを…」

「……」

「さ、食べたら、お皿とカップ、片付けに来てよ」

「うん…」

母の言ったことを、何度も、繰り返してみた。

「せめて、もつとそばにいたかった……」

私も、そう思うかもしれない…。

ここで、圭介と別れても、きっと圭介のことを思うだろう。きっと、圭介のことを考えては、つらい思いをするだろう。それなら…。どんなに悲しくても、そばにいる方がいい…。

どんなに苦しくても、圭介を見ていたい…。

どんなに、圭介に別れ話をされても、私は、圭介を、いっぱい感じていたい…。

夜、携帯がなった。圭介からだった。

「もしもし…」

すごく弱々しい圭介の声だった。

もつ、迷うことはない。圭介。私は決めてるからね…！

25 今に生きよう

圭介は、しばらく無言でいた。それから、息を吸い込む音が聞こえた。

「瑞希の、お父さんが来た…」

「うん…」

「話、聞いた？」

「うん」

「……。ごめん…」

「……。何が…？」

「…嘘ついたことも。苦しめたことも。悲しませたことも…」
圭介は一呼吸おき、ゆっくりと続けた。

「これから先、そばにいれないことも…。守ってあげられないことも、幸せにしてあげられないことも…。全部…、ごめん…」

……。聞いていて、涙が出てきた。圭介、どうして？何が、ごめんなのよ…。

「俺、瑞希に会わないほうがいいかなって思ってる」

「嫌だ」

「え？」

「謝るなら、ちゃんと会って謝ってよ」

「……」

圭介は、黙っていた。

「今日、これから会って…」

「今から？もう、8時過ぎだよ」

「圭介の家に行くから」

「わかった。俺が行くよ…」

「大丈夫、私が…」

「じゃ、どっかで待ち合わせしよう」

待ち合わせの場所を決めて、電話を切った。

それから、急いで支度をした。化粧をしても、目の腫れはごまかせなかった。

リビングに行き、これから圭介と会うと言うと、修二が待ち合わせの駅まで送ってくれると言ってくれた。

「姉貴、大丈夫？」

「うん。大丈夫。不思議と落ち着いてる」

「そっか」

駅のロータリーで降ろしてもらい、待ち合わせの駅の改札に行くと、圭介はもう来ていて、改札口の方をじっと見ていた。私が電車で来ると思っ、見ているんだろっ。

圭介の姿を見て、ほっとした。もう、会えないかとも思っていたし、涙が出そうになった。だけど、ここで泣いたら、圭介がますます辛くなる。気を引き締めて、走って圭介のもとに行った。

「圭介……」

後ろから声をかけられ、圭介は一瞬驚いていた。

「あれ？どこから来たの？」

「修二が送ってくれた」

「そっか」

圭介は、私の顔を見てすぐに目をそむけた。それから、とぼとぼと歩き出し、

「どっか店に入る？でもこの辺には、開いているところ、なさそうだね……」

とぼそつて言った。駅の周りは閑散としていて、お店も少なく、あってももう閉まっていた。

「車で、ちょっと出たらあるかな」

路上駐車をしていた、圭介の車に乗ると、圭介がすぐに車を走ら

せた。どつかのお店といつても、ファミレスくらいか……。なんだか、そういう明るい店では、話しくいな。

しばらく車を走らせていると、横道にはいったところに公園が見えた。

「そのへんの、路地に止められないかな？」

そう私が聞くと、

「あ、うん。公園の脇なら大丈夫かも」

圭介は車を、公園の横に止めた。エンジンも切ったので、車内はしゅんと静まり返った。

圭介は、低く小さな声で、ぼつりと、私を見ないで言った。

「瑞希、なんか痩せたね……」

「……」

私は、何も答えなかったが、なんだか圭介は、私が痩せたのは自分のせいだと自分を責めている気がして、

「あまり、最近食欲なくて、食べてなかったから痩せたかな。体重計には乗ってないからわからないけど。ダイエットしたかったからよかったよ、痩せて」

と、静かに言った。圭介は私の方を、初めてそのときに見た。圭介と目が合った。圭介も痩せた気がする。

「目、腫れてる……。泣いてた？」

圭介が、腫れている私の目を見て、そう聞いた。

「う、う……。不細工になってるでしょ……」

私は、ちよつと目を両手で隠した。

「ごめん……」

圭介が、謝った。

「何で？別れ話をしたから？」

「悲しませたから……」

「……。圭介は？悲しくなかった？苦ししくなかった？」

と聞くと、私の顔を黙って見つめたまま、少し目を細めた。その顔がはかなげに見えた。

でも、それは一瞬だった。前を向くと圭介は、
「俺のことは、いいんだ。それより、瑞希にきちんと謝らなくちゃ
…俺」

と、表情を変えずに言った。

「謝らなくても、いいよ、別に…」

「え？でも、会って謝ってって」

「会いたかっただけ…」

そう言つと、涙が出そうになった。でも、こらえた。圭介は一瞬こつちを見たが、また、前を向いた。

「瑞希、会社辞めた…？」

「社長から、聞いてない？」

「うん、何も…」

「まだ、辞めてない。しばらくお休みするってことにしてくれてる」

「……。そっか」

「圭介は、会社、行ってるの？」

「うん。今はね…。でも、新しい人入れてもらうよう頼んだんだ」

「何で？辞めるの？」

「うん。入院しなくちゃならないし、会社には行けそうもないからズキン…。現実をいきなり、突きつけられた気がした。」

いや、動揺しているところを圭介には悟られちゃいけない。圭介のほづが、辛いんだから。

「来週から、入院して、治療始める」

「うん…」

駄目だ。声が沈んだ…。顔を見れなくなった。

「瑞希のお父さんが、きちんと瑞希と話しなさいって…。でも、俺、

瑞希が悲しんだり、苦しんだりするの、見るのが1番辛くてさ。…
…。ごめんね。俺、弱いよね…。とても、苦しむ瑞希を受け止められそうもなかった。だから、逃げたんだ」

「……」

「それだけじゃない。俺と一緒にいて、辛くなつて、瑞希が遠くに行ったりしたら、もっと辛いから、そうなる前に俺のほうから、遠ざけようって思った」

「……」

「話し合うも何も、俺は……」

圭介が、言葉を詰まらせた。そして、しばらく黙ってしまった。

「……。何？」

話し出すのを待っていたが、なかなか圭介が口を開かなかったの
で、私からそう聞いた。

「もう…。俺、瑞希には会わない。いや、会えない。やっぱり瑞希
が悲しむのは見たくない。そう、決めてる……」

「……そう。でも、別れを告げられても、私すごく悲しい思いをす
るよ。それはいいの？」

「！」

圭介が、こっちを向いた。

「わかってる。だけど、何日か、何ヶ月かしたら、忘れられる。で
も、もし俺と一緒にいることになったら、これから、何ヶ月苦しむ
のか、わからないじゃないか」

「そんな何日とか、何ヶ月で、忘れろと思ってるの？もし、あのま
ま別れてたら、私一生結婚もできなくなってたかもしれないよ」

「え？なんで？」

圭介は驚いた表情をした。

「結婚しようって言われたのに、別れを言われて…。元彼だって、
結婚の話をしたとたん、別れ話をしてきた。私、2回もそんなこと

あつたら、絶対結婚怖くてできないと思う。それどころか、恋だつてできない。好きな人だつてできない……」

「……」

圭介の顔は、みるみる申し訳なさそうな、情けない顔になっていった。こんな表情は、初めて見た。

「だから、圭介と、今別れたからって、私が悲しまないとか、苦しまないとか、そんなこと思ってるとしたら、まったく逆だから」

「でも、瑞希。俺、ずっとそばにいてあげられないよ。ずっと、守ってあげることできないよ。そんないつか、別れが来ること知りながら、一緒にいたら苦しむよ」

「……」

圭介が、目を押さえた。涙がこぼれるのを必死におさえているみたいだった。圭介が小さく見えた。今までで1番……。

しばらく黙って、圭介を見ていた。そして、圭介の腕にそつと触れた。

圭介がびくって驚いて、私を見た。圭介の顔をまじかで見た。瞳をのぞくと私が映っていた。

この前は、私の姿なんて映っていなかった。すごくクールに装って、あれは、圭介の精一杯の演技だったんだ。

今の圭介も、演技をしていた圭介も、そして、会えなかったときに、苦しんでいただろう圭介も、すべてが愛しく思えた。

圭介の腕に置いた手を、そのまま圭介の背中に回した。もう片方の手で、圭介の頭をなでて、圭介を私の胸に引き寄せた。圭介は黙って、私に体をあずけていた。

しばらく、圭介のあつたかい空気を感じていた。ああ、この空気だ。目を閉じて、呼吸をした。圭介の匂いもする。

「瑞希……？」

圭介が、ようやく口を開いた。でも、まだ私は、圭介を抱きしめ

ていた。

「圭介は、わかってない」

「え？」

「私、こうやって一緒にいられたら、それでいい」

「だけど、どのくらい一緒にいられるか、わかんないんだよ。1年か、半年か……」

「未来のことなんていい。だって、誰にも明日のことはわからない。元気な人も、いきなり死んじゃうかもしれない。みんな、わかんないんだよ？」

「……。そうだけど、でも、俺、何も瑞希にしてあげられないよ。苦しめることしか……」

「だから、こうやって、ここに居てくれるだけで、幸せなんだってば」

ようやく私は、圭介を抱きしめていた腕を離し、圭介の手を両手で握った。

「ね、圭介。私、泣いてる？悲しんでる？」

「いや……」

「ね。今、私、幸せだよ？」

「……」

「だから、それでいいの。圭介。今に生きようよ……」

「……今に？」

「そう。誰だってね、明日はわからないの。でも、今にみんな生きてる。今は、生きてる。今は、圭介、生きてるよ」

「……」

圭介が、大粒の涙を流した。

「瑞希……」

そう言つと、圭介は泣き出してしまった。

圭介の手を握ったまま、私はうつむいて泣いている圭介のおでこ

に、私のおでこをくつつけた。圭介は震えながら、声を押し殺して泣いている。

片手を圭介の手から離して、圭介の前髪をかきあげた。少し圭介は、顔を上げた。圭介の、頬に流れている涙を手でぬぐった。圭介の目は真っ赤だった。

今まで、泣くのを我慢していたんだろうか？本当は、一番辛かったのは、圭介で、一番怖くて、一番悲しくて、泣きたかったのは、圭介なんじゃないのか…。

ぎゅって胸が痛んだ。でも、すぐに圭介への愛しさで、いっぱいになった。

圭介の頬に伝っていた涙のあとに、そっとキスをした。圭介は、ずっと黙っていた。それから、髪にキスをした。もう1度、圭介を抱きしめた。

「圭介が好き。圭介が好き…」

そう、繰り返した。圭介も、私の背中に手を回した。そして、ぎゅって抱きしめた。

「圭介が、病気だってね、関係ないよ。弱くても、泣いてても、どんな圭介だって私は、大好きなの」

そう言くと、圭介は、腕にもっと力をこめて、ぎゅってもう1度私を抱きしめた。それから、小さな声で、

「うん」

とつぶやき、また、圭介は泣き出した。今度は、声をあげて。

「瑞希、俺、すげえ怖くて…」

「うん」

「すげえ、ほんと怖くて、死ぬのも、瑞希を失うのも…」

「うん」

「ほんと、俺、瑞希と一緒にいたくて。会いたくって、こっぴどく、抱きしめたくって…」

「…うん」

「俺も、瑞希がすげえ好き…」

「…うん」

涙がこぼれた。悲しさの涙じゃない。圭介が愛しくて、愛しくて、胸が張り裂けるぐらい愛しくて、涙が止まらなくなった。

「圭介、私が泣いてても、悲しんでいるって思わないでね」

「え？」

圭介が、私の顔を見て、私が泣いていることに気づいた。

「私、圭介が好きで、愛しくって泣いてるだけだからね」

「……うん、わかった」

それから、今度は圭介のほうが、私の涙を手でぬぐって、そっと、私の頬にキスをして抱き寄せた。

「瑞希…」

「ん？」

「俺、鼻水も出ちゃった」

「ええ？」

「へへ…」

と圭介は笑うと、鼻をズズツてすすった。

「ティツシュ…」

ダッシュボードのティツシュを圭介がとって、鼻をかんだ。

「私にもちょうだい」

つて、圭介から、ティツシュの箱をもらい、私も涙と、鼻をふいた。

「ああ、ひでえ、顔。親、びっくりするだろうな」

車内の明かりをつけ、バックミラーを見て、圭介が言った。

「ずっと、泣いていなかったの？」

「うん。一回泣いたら、崩れそうで…。親の方が、泣いてたし」

「…部長も？」

「うん。泣いてた…」

「じゃ、圭介、我慢してたの？泣くの…」

「ん…。我慢っていうか、なんか、そういうの全部、考えないよう
にしていた。どうやったら、瑞希を苦しめないかとか、親の前では泣
いたら、もっと、親が苦しむかなとか。そんなことばっか考えて…」
「そんな、人のことばかり？」
「そうやって、忘れたかった。自分の病気や、死を考えるのも嫌で
…。考えたくもなくて…」
「……………」

また、圭介は、鼻を思い切りかむと、
「あ。でも、泣いたら、すっきりしたや」
と、私を見て笑った。圭介はずっと、我慢してたのか。泣かないよ
うに、ずっと。

「泣きたいときは、泣いていいよ。そのときには、私、またずっと
抱きしめてるからね」

「うん…」

「そうだ。いつでも、私の胸は圭介のために取って置く。だから、
いつでも私の胸でお泣き」

そう言って、私が両手を広げると、圭介は、げらげら笑い出して
しまった。

「下手な芝居見てるみたい。何それ？」

「ふふ…」

いつもの、圭介だ。

圭介は、車の時計を見ると、

「わ。もう、こんな時間。送ってくね」

と、車のキーをまわし、エンジンをかけた。それから、私のシート
ベルトを締めてくれると、

「あ、さっきさ。キスしようって思ったんだけどさ」

「え？」

「鼻水たれてきて、できなかったんだよね…」

「ええ？」

と、そんなことを言ってから、キスをしてきた。この前よりも、長いキス。でも、そっと、触れるような、キス。

それから、圭介は少し窓を開けると、車を走らせた。車内に、涼しい風が入ってきた。公園の緑の匂いがした。

圭介は、ラジオも、音楽もかけることなく、そのまま、黙って車を走らせた。そして、

「瑞希、俺も、今、すげえ幸せ。今は、生きてるし、瑞希が、隣にいる。それだけで、いいんだよね」

と、つぶやいた。

「うん」

とだけ、私も言っ、黙って車を運転する圭介の横顔を見ていた。

ずっと、圭介の隣で、どんな圭介も見たいよう。圭介を感じて、今を大事に生きていくんだ。

風で、圭介の前髪が揺れた。圭介の匂いがした。目を閉じると、圭介のあったかい空気に包まれて、このうえない最高の幸せを、私は感じていた。

26 希望

家の前まで、圭介は送ってくれた。

「今日は、遅いから帰るね。また、瑞希の家来るから」

「うん。おやすみ。気をつけてね」

「おやすみ。あ！明日会社来る？」

「うん！」

圭介の車が見えなくなるまで、手を振って見送った。それから、玄関の鍵を開けようとすると、中から母がドアを開けた。玄関には、父もいた。

「わ。びっくりした」

「お帰り。今、圭ちゃんが車で送ってくれたの？」

「あ、うん」

「どうだった？」

「まあ、瑞希、リビングに入ってから話そう」

父が先にリビングに入り、母は私が靴を脱ぐのを待って、一緒に入った。リビングでは、修二もいて、修二の足元にクロが丸くなつて寝ていた。

「圭介には、きちんと私の気持ちを話してきたよ」

ソファに腰掛けて、そう言うつと、

「それで？」

母は、隣に立ったまま、聞いてきた。

「まあ、お母さんも座りなさい」

父に促され、母も座った。

「それで……」

なんて言ったらいいものか。

「あんたの気持ちは、どうなの？圭ちゃんと……」

「うん。ずっと、そばにいて、離れる気はないよ」

「そう……」

母が、小さくつぶやいた。

「圭介は、なんて？」

修二が聞いてきた。足元にいるクロの耳が動く。

「圭介も、離れないで、一緒にいてくれる……みたい」

父も、母も、修二も、黙っていた。一緒にいてくれるといっても、ずうっとではない。そんな思いが3人にあつたのかもしれない。重苦しい空気が流れた。

「明日から、会社行くから。もうお風呂入って寝るね」

そう言つと、私は自分の部屋に着替えを取りにいった。

バスタブにつかり、ふうつとため息をつく。両親や修二の重い空気が、辛く感じた。私と圭介だけの問題じゃないんだな。これから、家族にまで心配をかけたり、辛い思いをさせちゃうんだ。そう思つと、胸の奥が苦しくなった。

ふと未来を思い、ものすごい恐怖にとりつかれた。

「圭介が、いなくなっちゃう」

そう思つと、怖くて、怖くて、たまらなくなった。そのとき、どうしたらいいんだろう。どんなに悲しい思いを私はするのだろう。涙が溢れた。怖くて、あたたかいバスタブに入っているのに、がたがた震えた。

ああ、また、未来に思いが飛んでる。今は、圭介いるじゃない。いるじゃない……。そう自分に何度も言い聞かせた。

それから、圭介のことを思い出した。横顔、綺麗な指、声、髪、泣き顔も、笑顔も……。はあ、愛しいな……。

そうだ。全部が愛しい。その思いが私の心の闇を包み込み、徐々に闇を消してくれた。あつたかい圭介への思いだけが、心に残った。

翌日、朝起きて一階に行くと、母が、

「瑞希、今日はあまりおかずがないんだけど、でもこれ、圭ちゃんに持っていつてあげて」

と、お弁当を渡してくれた。

「…ありがとう」

母の思いが嬉しかった。でも…。

「明日からは、私が作るよ」

圭介へのお弁当も、多分数日しか作れないだろう。

ふと、結婚して、ずうっと圭介のお弁当を毎朝作っているところを想像してしまった。圭介が、結婚したら私の料理を毎日食べれると喜んでいたのも、思い出した。目の奥が、ぎゅうって熱くなった。ああ、駄目だ。過去とか、未来とか、思いが飛んでる。

会社に着くと、社長が私を見て、驚いていた。すぐに私のもとにかけよった。

「柴田さん」

すると、社にいたみんながいつせいに私を見て、

「柴田さん、もう体大丈夫なの？」

と、聞いてきた。どうやら、病気で休んでいるということにしてくれたようだ。稲森さんも、隣に来て、

「ちよつと、痩せたんじゃない？風邪？」

と聞いてきた。

「え…。はい。でも、もう大丈夫です。ご心配おかけしました」

ぺこつてお辞儀をすると、みんなが良かった良かったと、ほっとした表情になり、また仕事を始めた。

圭介は、自分のデスクから私を見ていた。社長が、

「柴田さん、お昼一緒に食べれるかな？」

と、小声で聞いてきた。

「あ、はい」

そうだよ。圭介とのこと、きちんと話さなくっちゃ…。

圭介の隣の席に着く。圭介が、にこって笑っておはようって言う。
ああ、それだけで、嬉しい。

「おはよう。あ、これ」

圭介に、こっそりお弁当を渡した。

「今日のは、うちの母の手作り」

「え？まじ？」

圭介は驚いて、それから喜んでいた。

「お母さんさ、俺のこと怒ってないの？」

「？別に。なんで？」

「いや、瑞希のお父さん、かんかんだったし。お母さんもめちゃくちゃ怒ってないかなって」

「ああ、くす…」

「え？何？」

圭介は、私が笑ったのが不思議だったようで、目を丸くした。

「お父さんね。演技だったんだ」

「は？」

圭介は、もつと目を丸くした。

「怒ってないよ。お父さん、あんまり怒らないんだよね。この前も冷静だった」

「うそだ、すごい剣幕だったんだよ。瑞希にも見せたかった。俺、まじでびびって…。いや、まじで、すごい申し訳ないことをしたって思ってた…」

「それでもしないと、圭介が真相を話してくれないだろうって」

「え？」

「ひとはだ、脱いだって言うか…」

「ええ？そうだったんだ」

「うん、ごめんね。圭介には辛い思いをさせたよね」

「いや、そんな。だって、悪いの俺だし…」

「圭介。その自分を責めるのやめてね。圭介は何も悪くないんだから」

そう言うと、圭介は黙ってしまった。それから、
「今日、夜、瑞希んち、行くよ。みんなにきちんと、会わなくっちゃ…」

と、ぼそつてつぶやいた。

昼になって、稲森さんがランチに誘いに来た。

「ごめんなさい。社長が話があるみたいで…」

私はそう言つて断つた。もう、稲森さんがどう思つかとか、疑うかとか、まったくそんなの関係なかった。

社長と、スカイビルの上にある、レストランに行った。晴れていたの、見晴らしが良かった。

横浜ベイブリッジを眺めながら、ああ、ここに圭介ときたいな、って、ぼくって思っていると、

「柴田さん、圭介のことなんだけど」

と、社長がいきなり聞いてきた。

「あ、はい。ご心配おかけして…。その、昨日会って、きちんと話したんです」

「圭介の病気のこととかも、知っているのかな？」

「社長もご存知なんですか？」

「ああ、先輩から聞いたよ」

「そうだったんですか…」

「圭介は、俺が、知っていることを知らない。先輩からも家族しか知っていないことになってるから、他言しないでくれと頼まれたし、圭介の前では、しらを切ってくれとも言われた」

「いつから知ってたんですか？」

「検査入院する前にね。医者から、ガンの疑いがあると言われたと、先輩が教えてくれた」

「……」

そういえば、社長の笑った顔、ひきつってた。

「じゃ、それを知ってて、私がか会社辞めるの止めたんですか？」

「圭介が、自分の病気のこと、別れようと言ったのは、わかっていたよ。でも、俺の中で納得いなくてね。圭介のそばに、柴田さんにはいて欲しかったからな」

「……」

「それで、圭介とは……」

「あ、はい。そばにいてるって決めました」

「そうか……。会社にも出てきてくれて、嬉しいよ。あ、しかし、圭介は来週から入院して会社には出てこられなくなる……」

「はい、知ってます」

「そうか……。圭介がいない間、新しく入ってくる子も決まってるね。」

いや、圭介よりも年上だが、俺の知り合いの息子さんで、転職をしようと考えてたらしくてね」

「はい……」

「あ、圭介が、元気になって戻ってきてても、ちょうどうちの会社は、今年正社員をとらなかつたから、まあ、そのままその子にも、残ってもらうことにはなると思うんだけどね」

社長の、「圭介が元気になって」という言葉に、私は反応してしまった。

ポロ……。突然涙が出て、社長がそれを見て、慌てていた。

「柴田さん？」

「あ、すみません。私……。私、圭介がか会社に来なくなつたら、もう2度と、会社には出てこれないんじゃないかって、そう思ってた……。社長が元気になって、戻ってきたらって言われて、それで……」

「……うん。わかるよ。先輩も、奥さんもみんな、圭介が良くならないうって、思ってるよ」

「……」

涙が止まりそうもなくて、鞆からハンカチを出した。周り人が見たら、不思議に思っただろうな。

「でもね、柴田さん。俺はそうは思っていない」

「え？」

「これ、観たことあるかな？」

「『天国の青い蝶』？」

「観たことない？実は、昔これを観てね、慌てていろんなお店探し回って、買ったんだ。今日、圭介に渡そうと思ってたんだよ。でも、まずは、柴田さんがこれを観てみるっていう方がいいかと思ってね」

「……どんな映画なんですか？」

「脳腫瘍で余命わずかの少年が、大好きな幻と言われる、青い蝶を捕まえに行くという話」

「脳腫瘍……？」

「それで、時期的にも絶対に現れないだろうって思われてた青い蝶を、奇跡的に捕まえることができるんだよ」

「……」

「だけどね、もっとすごい奇跡は、立つこともできなかった少年は、青い蝶を捕まえようとして、自分の足で歩けるようになったり、ジヤングルから帰ってきたら、脳腫瘍が消えていたんだ」

「……え？」

「実話だよ」

「実話なんですか？」

「最後、特典映像がついてる。その少年がもう、青年になって出てくるよ」

「ほ、本人が、ですか？」

「うん。一緒に蝶を採りに行った、昆虫博士もね」

「……。あの……」

「ん？」

「どうして、奇跡が起こったと思いますか？どうやったら、奇跡は起こると思いますか？」

「さあ、どうだろうね。でも、青い蝶が奇跡を起こしたのではなく、少年が奇跡を起こしたんだろうね。他にも、癌が消えてしまったと言うそんな話は、けっこうあるんだよ、それも、余命何ヶ月と言われた人が」

「どうやったら？」

「……。そうだな。そういう話を聞いてて、共通して言えるのは、自分の好きなことをするってことや……」

「はい」

「死ではなく、生を見たってことかな」

「…生を見た？」

「生きるほうを見ていた。死を恐れたり、生をあきらめるのではなくてね」

「……」

私は、渡されたDVDを眺めながら、

「それって、本人がどう思うかですね。周りがいくら生きるほうを選択してって頼んだとしても……。圭介本人が決めることですよね……」

「？」

と、社長に聞いてみた。

「いや、周りが圭介は生きるって思っていたら、圭介もまた、変わってくるんじゃないかな？」

「……」

また、涙がボロって頬を流れた。それを、ハンカチで拭いてから、
「ありがとうございます。今日、帰ったら観ます」

と言うと、社長は微笑みながら、

「うん。柴田さん、みんなで希望を持とうよ。圭介なら、大丈夫。癌にだって打ち勝てる強さがあるって、ね？」

と私を励ましてくれた。

「はい……」

私は、冷めてしまった、コーヒーを飲んで、DVDを大事に鞆にしまった。

そして、前向きに圭介のことを思っている社長に感謝した。こんな話をしてくれなかったら、私は圭介がずっと生きるという、そんな考えも浮かばなかっただろう。

席に戻ると、圭介が、お弁当箱をそつと渡してくれて、

「美味しかった。お母さんにお礼言っておいて」

と、小声で言った。

「うん」

パソコンの画面を見ている圭介の横顔は、とても繊細な、弱いイメージがあつた。でも、それも勝手に私が、そう思い込んでいるだけかもしれない。

圭介は、強い。癌に打ち勝つほどの強さがある。そう思うことにした。

6時を過ぎ、圭介が少し待っててと言うので、書類の整頓をしながら席にいた。

「木曜から、新しい人来るって」

「来週からじゃなくて？」

「うん。2日間、引継ぎをするから」

「そう……」

「俺より、年上だって、えっと、24歳って言ってたかな」

「ふうん」

「どうする？瑞希。すごい瑞希好みのイケメンだったら」

私はまだPCを開いていたので、メールで返事をした。

「私の好みは圭介だからな〜」。

それを、読むと、少しにやけて、

<でも、すごいイケメンなんだよ。めちゃくちゃ、かつこいいやつだったら？

と、送り返してきた。

<圭介も、すごいイケメンだけど。自分で気づいてないの？めちゃくちゃ、かつこいいよ。

「え？まじ？」

メールを開くと同時くらいに、驚いていた。

「まじ」

「それ、あれだよ。恋は盲目ってやつ」

「なんじゃそりゃ」

「ははは」

圭介はしばらくして、仕事の方に切り替えて、キーボードを打ち出した。この人は、本当に自覚がないんだろうか？他の人から見たって、イケメンだと思うけどな。

30分位して、圭介が、

「ごめん、待たせて。もう終わるよ」

と言ったので、ロッカーに行き荷物を持って、廊下で待っていることにした。1分も立たないうちに、鞆を持って圭介も来た。

「家に圭介が行くこと、電話して伝えといたよ」

「あ、うん」

少し、緊張しているみたいだ。

「夕飯作っておいてくれるって」

「なんか、夕飯時におしかけるの、悪かったかな」

「そんなことないよ。全然」

「うん」

そうだ、DVD。社長から借りたのを、圭介と一緒に観ようかな。でも、今日の帰りが遅くなっちゃうかな。

青い蝶を捕まえて奇跡を起こした少年の話は、なんだかどきどき

して、圭介に話せずにいた。きっと、圭介の反応が怖かったのかな。

電車で一緒に、家に帰った。家に着くと、すぐに母とクロが玄関に来た。

「いらっしやい、圭ちゃん」

母は、にこにこ顔だったし、クロはワンワンって大喜びで、圭介に飛びついた。

「クロちゃん、駄目。圭ちゃんのスーツが汚れるでしょ」

母に言われて、クロはすぐに大人しくなった。でも、圭介の手をぺろぺろなめていた。

「クロ、久しぶり！」

圭介が、クロのおなかや首の辺りをなでると、クロはすごく喜んでた。なかなか、クロがなでられると喜ぶポイントを知っているもんだ。

リビングから、父も出てきた。

「やあ、圭介君」

父は、そう穏やかに言ったが、この前のトラウマか、圭介はものすごく緊張して、

「あ、お邪魔します」

と丁寧に、お辞儀をした。

「まあまあ、そこで立ってないで、中に入って」

父に笑顔でそう言われて、圭介は、少しほっとしていた。

ダイニングにはもう、夕飯の準備が整っていた。圭介の上着を預かり、廊下のフックにあるハンガーにかけた。

圭介は、母に促され、私の横の席に座った。それから、とても和やかに、4人で夕飯を食べていると、修二が帰ってきた。玄関にある圭介の靴を見て、

「圭介……？おお！」

と、急いで、ダイニングにかけよった。

「あ、お邪魔してます」

ぺこつて圭介がお辞儀をする、

「何々？他人行儀だね」。腹減った。母さん、俺にも飯！」

と言いながら、修二は洗面所に手を洗いに行った。

そして修二が食卓に来て、圭介と話し出し、一気に食卓は盛り上がった。

食事が終わり、私はコーヒーを淹れた。母は、キッチンで洗い物を始めて、

「圭ちゃん、顔色よくて良かったわ。食欲もあるみたいだし」

と、私に話しかけた。

「あ、お弁当美味しかったって」

「そう、良かった」

母が笑った。母にはまだ、圭介のお母さんが料理の先生をするほどの腕前なのを内緒にしていた。そんなことを言ったら、お弁当も夕飯も作らなかつただろうな、萎縮しちゃって…。

圭介と、父と、修二はリビングのソファに座り、話していた。小声なので、内容があまりわからなかつたが、どうやら圭介が、迷惑をかけてしまったことを謝っているようだ。

コーヒーをお盆にのせ、リビングに運ぶと、父がちょうど笑いながら、

「そんなに、謝らないでいいよ。圭介君。この前もあんなに怒ったけど、あれはお芝居だから」

と、言っていた。

「そうそう、よくこの気の優しい親父が、怒れたって感心したよ、俺」

「あ、それ、瑞希さんから聞きました」

「そうか」

「おじさんって、本当にあまり、怒らないんですか？」

圭介が、質問すると修二が、
「うっ、怒られた記憶があまりないな。ものすごく気が長い人なんだよね」
と、笑った。

コーヒをテーブルに置き、私も圭介の隣に座った。

「あ、圭介、まだ時間あるかな？」

「うん…」

私は鞆から、DVDを取り出した。

「これね、今日社長が貸してくれたの。良かったら一緒に観ない？」

「何？映画？どんな？」

「天国の青い蝶っていう映画なんだけど」

「あ、俺それ、観たことある！」

修二が、大きな声をあげた。

「そうそう、それ！俺もまた、借りてこようって思ってたんだ。よし、圭介、観よう！」

修二は、圭介の背中をぽんってたたいて、

「母さんも観れば？」

と、キッチンにいた母を呼んだ。

修二は、ソファを母に譲り、カーペットの上に座った。その直ぐ横に、クロが来て、ぴったりと修二に寄り添ってねっころがった。

DVDが、始まった。少年が余命少ない脳腫瘍であることは、すぐに映画の中で語られたので、それを観ていた、父、母、圭介は、「え？」っていう表情をした。内容を知っていた私と修二は、ただ黙って観ていた。

後半、どんどん元気な姿になっていく少年。そして結末。映画が終わると、私は泣いていた。母も、涙ぐんでいた。

「あ、これね、特典映像っていうのがあるって、社長が言ってた。この映画のモデルになった少年が出てるんだって」

「モデルって？」

圭介が聞いてきた。

「これね、実話なの」

そう言つと、圭介がまた、驚いていた。

特典映像には、モデルとなつた青年が出ていた。映画が日本で上映されたときに来日をして、その時のインタビューの模様だった。

「こんなにでかくなつてる……」

ぽそつと、圭介が言つた。

「ずっと、元気なんだな」

父も、ぽそつとそう言つた。母は、

「実話だったの？」

とまだ、驚いているようだった。

特典映像を見終えた。当時の本人の映像もあった。弱々しい感じの少年で、細くて小さかったが、昆虫博士と蝶を採っている彼は、嬉しそうだった。

「この青い蝶を捕まえたら、いいのかしらね」

と、母が言いだした。いや、少しずれていると思う。

「違うんじゃない？ 圭介、これ。このDVDも貸すから観てみるよ」

修二は、自分の鞆から1本のDVDを取り出した。

「これさ、柚のなんだけど、柚、こういうの好きでさ。前に柚んちで、観たことがあつて、昨日借りてきてたんだ。」

そのDVDの題名は『ザ・シークレット』だった。私もうわさでは、聞いたことがある。誰だっけ、ああ、籐子さんがこういうの好きだったんだっけ。

「この中にも、乳がんが消えちゃつたっていう人が出てるよ」

「修二、消えちゃうつてどういふことなの？」

母が、いぶかしげに聞いている。

「だから、がん細胞が消えちゃうんだよ。3〜4ヶ月で消えたつて

言つてたよ。本人が出てる。もう、お笑いのビデオばかり観たり、とにかく癌だつてことをなるべく考えずに、楽しく過ごしていたんだつてさ」

「それだけで、消えちゃうの？ほら、何か健康食品だのを飲んだとか、そういうのはないの？」

「ないみたいだよ」

「……」

父と母が、無言で顔を見合わせた。そんな話があるものかという感じだった。

「それ、借りていいんですか？」

圭介が、そう言つと、

「おお、持つてつて！」

と、修二は圭介にDVDを渡した。

「あ、あのね。社長が、けっこう余命何ヶ月でも癌が治つたつていう人いるつて言つてた。だから……」

「うん……」

「圭介が元気になつて、会社に復帰するのも、待つてゐるつて……」

圭介は、目を細めた。笑うわけでもない、泣くわけでもない、どこか困惑している表情だった。治ると言われても、当の本人には、信じられないことかな。

「もう、遅いな。圭介君、電車あるかな？」

時計を見ると、11時近かった。

「あ、まだ全然、余裕であります」

そう言つと、圭介は、自分の鞆を持ち、修二から借りたDVDを入れた。

「これも、持つて行く？」

社長から借りたDVDも、渡そうとすると、

「うん、そつちはいい。もしかしたら今度、借りるかもしれないけど」

と圭介は、言った。

「ご両親にお見せしたら？」

と、父が聞いた。

「うちの両親は観ないと思います。なんか、最近ずっと、そういう話題もさけているっていうか…」

「え？」

「あんまり、考えたくないみたいで、特に母は。今はかえって、そういうの観ると、辛くなるって言つか、とても前向きに思える雰囲気じゃないんです」

「そうか…」

父は、そう言つと黙り込んだ。

「そんな中にいたら、圭ちゃん辛い？」

今度は母が、圭介にそう聞いた。

「いえ、俺もあまり、話題にしたくないから。別に」

圭介は笑つてみせたが、すごく不自然な笑いだつた。

「入院は、来週から？」

「はい」

「じゃあ、それまで、うちにいたら？」

「え？」

母の提案に、圭介は驚いていた。でも、父と、修二は、

「あ、いいかも」

と、うなずいた。

「いや、でも、そんなの迷惑かけっぱなしじゃないっすか？」

圭介が、恐縮した。

「いいんだよ。うちは全然かまわない。2、3日だけでもいい。うん、そうしよう」

父はそう言つて、圭介の肩をぽんぽんとたたいた。

私は、ずっと、黙っていた。母がそんなことを言いだすなんて、思いもしなかった。圭介が私の方を見た。

「あ、兄の部屋があるから、そこに寝泊りしたら？」

私が言つと、やっと、圭介がやわらいだ表情をした。

「決まり、決まり！じゃ、今日から泊まってけば？」

修二が、そう言つと、

「そういうわけにはいかないでしょう。着替えとかもあるし、ねえ」と、母が言つた。

「はい、今日は帰ります。それで、両親に話をして、了解を得たら来ます。すみません。勝手ばかり言つて、すごいわがままで……」

「いいのよ。さ、今日は、気をつけて帰つてね。あ、修二が送つていたら？」

「いいです。仕事で疲れているのに、大丈夫です。俺」

「じゃ、駅まで送るよ」

そう言つと、修二はすぐに車のキーを出した。

「気をつけて」

父と母から言われて、

「おやすみなさい、お邪魔しました」

と圭介は、深々と頭を下げてから、家を出た。

私は、すんごく嬉しかった。一分一秒でも圭介と長くいたかったから。でも、圭介のご両親も同じ思いではないだろうか？少しでも長く、一緒にいたいって思わないのかな。

あ。いけない。また、私は、圭介が治るって思っていない。くるくる首を横にふり、ほっぺを軽たたき、「大丈夫！大丈夫！」と、自分に言い聞かせた。

翌日、出社すると、圭介のデスクの横にでかい荷物があつた。

「おはよう」

挨拶をするや否や、圭介が、

「いきなり、今日から泊まりにいつても、大丈夫かな。もし、無理なら、この荷物は、会社において…」
と言ってきた。

「大丈夫だと思うけど、うちはいつでも。でも、お母さん、なんて？」

「あ、なんか、すんなりOKした」

「そうなの？」

「逆に、ほっとしてたかも」

「え？」

「なんか、ずっと、腫れ物にでも触る感じだったし。俺よりも、おふくろああ見えて、繊細っていうか…。いつも、強引で、強気なんだけだな」

圭介は、お母さんの態度が辛かったのかもな。腫れ物に触る感じより、いつもと同じように接してほしかったのかもしれない。

その日は、定時に圭介も仕事を終えていた。最近、忙しくないのかなとも思ったが、周りの人はみんな、残業をしているので、圭介だけが仕事が少ないようだ。

「最近、定時に帰れるくらい、仕事ないの？」

「あ、うん。もう社長が俺の分は、他の人に回してるから。…俺、社のみんなにも、迷惑かけてて…」

圭介が、そう言いかけたので、圭介の口を私の手で押さえた。

「ストップ、それはなしだよ。迷惑なんてかけてない。わかった？」

「うん…」

今日の昼は、どうしようと、圭介とお弁当を二人で食べた。周りがちらちら見ていたが、関係ないって思えた。

稲森さんも、3時過ぎコーヒーを買いに行くと、やってきて、
「あれ、柴田さんの手作り弁当でしょ。二人付き合ってるの…？」

と聞いてきた。私は即座に、

「うん」

と、答えた。稲森さんは、私があまりにもあつさりそう答えたので、からかいがないと思ったのか、さつさと席に戻っていった。周りなんて関係ない。そんなことを気にして、圭介との時間を無駄にしたくない。

でも、そんな思いが出ると、また私は、いや、圭介とはずっといられる、大丈夫、大丈夫と自分に言い聞かせていた。

昼休みに、家に電話をして、圭介が今日から泊まるということを伝えた。母は、午前中にもう、兄の部屋を綺麗に片付けたらしい。

家に着くと、クロと母が玄関まで、出迎えに来た。そして、圭介の重たい鞆を母が持ち、さつさとリビングに持って行ってしまった。「あ、すみません、それ重いです」

そう圭介が言ったが、母はそんなのおかまいなしだった。

圭介はというと、クロにじゃれつかれて、なかなか歩くこともできないでいた。クロは大喜びだ。昨日に引き続き、今日も圭介がいるんだから。

私だって、大喜びだ。母がこの場にいなかったら、クロをさしおいて、圭介に抱きついていたらかもしれない。抱きついて、離れないな〜、多分。

父が、帰ってきた。父も、最近早め早めに、家に帰るようにしているようだった。修二は、今日、生徒さんと飲んでくるから遅くなると、朝言っていた。

やっとこ、足にまわりつかれながらも、圭介はリビングにクロと入ってきた。

「もう、お夕飯できてるけど、圭ちゃん食べる？それとも、お風呂に入って、さっぱりする方がいいかしらね。今日は蒸し暑かったし

…」

「あ、先にご飯いただきます。もう、腹ペコで…」

「はいはい、待っててね。ご飯よそつてくるから」

母は、嬉しそうだった。基本、母は圭介をすごく気に入っていたから。末っ子の下にまた、弟ができた感じなのだろうか？

圭介が上着を脱いだので、それをハンガーにかけに行くと、

「それ、昨日も思ったんだけどさ」

「え？」

「なんか、瑞希俺の奥さんみたい」

圭介のその言葉にドキッとした。嬉しかった。でも、すぐに心の奥が、ヒュッッツツて冷たくなった。

ああ、いけない。まただ。また、暗い方を考えてる。大丈夫、大丈夫なんだから！

私は、少しでも圭介との未来に不安や、恐怖を感じたとき、大丈夫って自分に言い聞かせていた。大丈夫、私が、圭介は大丈夫って思わなくっちゃって。悪いことなんて、考えちゃ駄目って…。

夕飯を食べ終わると、

「俺、風呂あとでいいですから」

と圭介は、荷物を持ち、2階に上がっていった。私も、着替えをしに、自分の部屋に行った。ジーンズに、オーバーブラウスを着て下におり、母の洗い物の手伝いをした。

「今度、圭ちゃんの好物聞いておかないとね。あ、でもやつぱり、栄養が満点のものがいいわよねえ」

母が、圭介のために、お料理をしてくれているのが、嬉しかった。

しばらく圭介が下に下りてこないの、2階に上がり、ドアをノックした。

「はい」

圭介が中から、返事をした。

「入るよ」

「瑞希？うん」

ドアを開けると、圭介は、荷物を半分くらい部屋に広げたまま、ベッドにうつぶせていた。

「ああ、ごめん、なんか疲れちゃって」

「そうだよな。もう、休んだら？」

「うん…」

圭介は、今度は仰向けになった。

「昨日さ、修にいが貸してくれたDVDあるじゃん」

「うん」

いつの間に、修にいと呼ぶようになったのか…。

「乳がんの人のところだけ、観たんだ、昨日、帰ってから」

「うん」

「瑞希、観たことあるの？」

「ないよ」

「そっか」

「どんなだったの？」

「う〜ん、なんかさ、すんげえ、プラス思考っていうか」

「え？」

「けっこう、きついかも…」

「そうなの？」

「うん…」

圭介は両手で、自分の顔を押さえながら、

「俺、あんなに強くないな〜」

と、小声でつぶやいた。

「じゃ、じゃあさ、私が一緒だったら？」

圭介が寝ている横に座って、そう言っていると、

「一緒に、プラス思考？」

と圭介は、まだ顔を両手で押さえたまま聞いてきた。

「そう、大丈夫って、治る、絶対治るって思ってみたら……。私もそうずっと、思うようにするし、一緒ならさ、頑張れるかもよ」

「……」

両手で顔を押さえているから、圭介の表情がわからない。

「瑞希に、無理させそう」

ぼつりと、圭介はそうつぶやいた。

「無理じゃないよ。全然」

「でも……」

「でも？」

「俺……、自信ないな」

「何の？何の自信？」

「……。癌に打ち勝つ自信……」

そうぼそって言うのと、圭介は、私と反対方向を向いてしまった。

「ごめん、すげえ、マイナス思考で……。だけど、大丈夫、って思えば思うほど、怖さが出てくる。絶対、元気になるって思えば思うほど、もし、死んだら、瑞希をもっと、悲しませるって。元気になるって言うっておきながら、もし、駄目だったら、もっと、瑞希を苦しめるって、そう思うとき、そう思うと俺……」

圭介の声は、だんだんと小さくなって。最後はなんて言っただのかわからなかった。

「……」

圭介の後姿が、やけに遠くに感じた。

「圭介、そんな弱気にならないで。圭介がそんな弱気になったら、私だってどうしていいかわからないよ。こういうのって、本人が生きるって決めなくちゃ。ずっと、私と生きてくれないの？ずっと、一緒にいたいって思わないの？」

圭介は、しばらく黙っていた。圭介のいつものあたたかさが伝わ

ってこなかった。変わりに圭介の回りには、冷たい、暗い空気が流れてた。

「ごめん…。そうだよ。俺が弱気になったら、瑞希もどうしていいか、わかんないよね。ごめん…」

圭介は、こっちを向いて笑いかけ、そう言った。笑顔には、まったく力が入っていないくて、作り笑顔なのはまるわかりだった。その笑顔を見て、私の心が痛んだ。

だけど、私はそのとき気づいていなかった。私が期待すればするほど、圭介を苦しめていたことを…。

27 閉ざされた心

翌朝、早くに起きて、お弁当を作りキッチンにいった。少しすると、母も起きて来て、手伝ってくれた。

「なんだかね。お母さんには、信じられない話だわ…」

突然母が、言いだした。

「何が？」

「がん細胞が消えちゃうだなんて」

「お母さん、やめてよ。周りがそういうふうに疑っていたら、圭介だって前向きに考えられないじゃない！」

私は、母にくっついてかかった。母はすぐ、

「ごめん、瑞希。そうよね。まずは周りが信じないと…」

と、申し訳なさそうに言ったその瞬間、ドスンという、大きな音が2階から聞こえた。

「圭介？」

慌てて、母と圭介の部屋に行った。

「圭介？」

ドアをノックして、呼んでも返事がない。

「どうした？」

修二が、私と母の声で、起きてきた。

「開けるよ、圭介」

ドアを開けると、圭介がベッドの横で、倒れていた。

「圭介！」

修二がかけよった。修二の後ろからついてきていたクロが、ワンワンと吠えた。

「圭ちゃん、どうしたの？」

母もかけよった。

圭介はけいれんをおこしていた。

「……。ど、どうしよう……」

私の足が震えた。どうしたらいいかわからず、頭は真っ白だった。

「お父さん、呼んでくるから！」

母が、一階に急いで行こうと部屋を出た。

「母さん、救急車も！」

救急車？ ああ、そうだ……。そうだ……。そうだ！ 大変なことが起きているのだ。ここで、ぼくって立ちつくしている場合ではない。でも……、足が動かない。

「姉貴！ しつかりしろよ！」

修二に怒鳴られた。やっと足が動き、圭介の部屋にはいった。修二が、圭介に何度も、

「圭介、おい、しつかりしろ！」

と、声をかけたが、圭介のけいれんはおさまらない。

怖い……。

怖い……。

真っ暗な闇に飲み込まれていくようだ。

「圭介君！ 大丈夫か？」

父も、パジャマ姿のまま、2階に走ってきた。一気に階段を上ったので、はあはあと息があらくなっていた。

「お父さん、どうしよう、圭介が……」

顔面蒼白の私を、父は一瞬見たが、すぐ圭介の方を見て、

「圭介君！」

と、大きな声をあげた。

ワンワン！ クロも、部屋の外で吠えている。この緊急事態を察してか、それとも、圭介の名を呼んでいるのか、それとも、私と同じように、怖いのか……。

「圭介！」

「圭介君！」

修二と、父が同時に叫んだ。圭介が正気を取り戻していた。でも、目をあけてはいたが、何が起きたのかもわからない様子で、しばらく天井を見つめていた。

それから、周りを見て、父の顔、修二の顔、そして私の顔を見て、
「……。俺……？」

と、ようやく声を出した。

「ああ、良かった。あ、そうだ。母さん！母さん！」

修二が、一階にいる母を呼びに行った。

「母さん！圭介の意識戻った。もう大丈夫だよ！」

そう言いながら、修二は階段を駆け下りて行った。

父は、大きなため息をしてから、

「圭介君、大丈夫かい？」

と、圭介の体を起こすのを手伝った。私は力が抜けて、そのままへなへたと、座り込んでしまった。

怖かった……。まだ、震えてる。全身ががたと震えてる。冷や

汗も流れていた。

「すみません、俺……」

「いや、いいから、ベッドに横になりなさい」

父に体を支えてもらいながら、圭介は起き上がり、そのままベッドに静かに横になった。

母と修二が部屋にはいつてきた。クロは、静かに部屋の外にいた。

「圭ちゃん、大丈夫？今、救急車も呼ぼうとしたんだけど……。病院とか、行った方がよくない？」

「いえ。すみません、迷惑かけて」

「いいのよ、何言ってるの。それより、病院」

「あ、平気です。家でもけいれん起こしたことあって……。すぐにおさまりました」

ああ、現実をつきつけられる。圭介のこんな姿を見たら、私はもうプラスになんて考えられない。怖くて、悪いことばかりが頭に浮かぶ。

「今日は、休んだ方がいいな。瑞希、会社にあとで、連絡してあげなさい」

父がそう言うのと、部屋を出て行った。

「具合は？どう？」

母が、聞くと、

「大丈夫です…」

と、圭介は弱々しい声で答えた。

「今日は、誰か、一緒にいた方がよくないか？」

修二が心配そうに、圭介に言った。

「まじで、大丈夫です。朝だけですから、こういうの起きるの…」

「じゃあ、静かに横になっててね。時々様子を見に来るから」

「はい」

修二と、母も部屋を出たが、母が振り返り、

「瑞希は？会社休むの？」

と、私に聞いてきた。

「俺、大丈夫だから、瑞希行つてきて。それに午後からなら、俺も出れるかもしれない」

「あら、圭ちゃんは、無理しちゃ駄目よ。一応お母さんの方に、連絡いれるからね」

母はそう言うのと、一階に下りて行った。

私はなんだか、圭介の顔が見れなかった。

「じゃ、私、会社に行くね」

そう言つて、圭介だけ部屋に残して、ドアを閉めた。

ボタン…。ドアの前で、また震えだした。圭介には悟られないようにしていたが、まだ震えはおさまっていなかった。

自分の部屋に入り、ベッドに座り込んだ。圭介が今まで、具合悪

そうにしていたのを何度か見たが、こんなに怖くなったのは初めてだ。

「私……」

両手に、顔をうずめた。母にあんなことを言っておきながら、私だつて怖くて、この現実さえも受け入れられない。圭介のそばにいることすらできない。

何分たっただろう。ようやくわれに返り、時計を見た。

「あ、いけない、会社！」

私は部屋を出て、圭介の寝ている兄の部屋の前まで行ってみたが、中に入る勇気が持てず、そのまま下におりて行った。

「圭ちゃん、どう？」

「あ……。わからないけど、多分寝てると思う」

「そう……。圭ちゃんの家連絡するから、電話番号教えてくれる？」

「うん」

メモに、電話番号を書き、母に渡した。

「圭ちゃん、大丈夫かしらね、時々様子は見に行ってくるけど、あんたも早めに帰ってきてよ」

「うん……」

私は力のない、返事をした。

会社に行くと、もう社長が出てきていたので、圭介の話をするために、会議室に来てもらった。社長の席の周りに、社の人がいたので、聞かれたくはなかったからだ。

「圭介が、今、うちに泊まっているんですが……」

「あ、そうなの？」

「今朝、けいれんを起こして……。それで、お休みをしますって。あ、いえ、午後に出られるかとは、言っていたのですが……」

「ああ……。じゃあ、俺からあとで、圭介の携帯に電話して、休むように言っておくよ」

「はい、すみません」

「柴田さん、大丈夫？」

「はい…」

はいと答えだが、その答えとはうらはらに、私は泣いてしまった。

「すみません、本当は、あまり大丈夫ではありません」

「うん、そういうところを見たら、動揺するだろうな。たぶん俺でも」

「すぐく、怖かったんです。それで、私きちんと圭介なら大丈夫、病気も治るって思えるか、これからも、信じられるか、自信がないんです…」

「弱気になっちゃったかな？」

「わ、私がこんなじゃ駄目だって、わかってます。しっかりしようって頭では思ってます。でも、駄目なんです。怖くて…」

「逃げ出したい？」

「逃げ出すとか、そういうのじゃなくて、ただ…」

「そうだな。でもきつと、1番怖いのは、圭介だろうな」

「はい…」

「柴田さん、今日は早引きしていいよ。午前中に仕事を済ませるだけ済ませて、早めに帰ってあげたら？」

「はい。すみません」

そう言つと、私は、会議室を出た。

表情が暗い私を、心配して稲森さんが席に来たが、何も話したくなかった。

「どうしたの？具合悪いの？」

「……」

もう、ほっておいてほしい。愛想笑いも出なかった。

「ちよっと、調子悪いので、今日は早退します」

私は無愛想にそう言つて、パソコンの画面を見つめ、キーボード

を打ち始めた。

稲森さんは、そのまま、自分の席に戻っていった。申し訳ないと少しだけ思ったが、周りに気を使う余裕など私にはなかった。

午後、2時過ぎ、ようやく仕事がある程度片付いたので、社長に挨拶に行き、会社を出た。圭介は大丈夫だろうか…。何かにせきたてられるような気がして、歩く足がどんどん速くなった。

家について、ドアを開けると、玄関に見慣れない靴があった。

「瑞希？早かったわね。今、圭ちゃんのご両親がみえてるのよ」リビングから、母が出てきた。

「え？」

慌ててリビングに行くと、榎本部長と、圭介のお母さんがいた。二人同時に席を立って、深々と頭を下げた。

「あ。あの？」

「ごめんなさいね、瑞希さん、圭介が迷惑かけて…」

「いいえ、そんな…」

あまりにも、申し訳なさそうにお母さんが言うので、胸が苦しくなった。

「家でもけいれんを起こしたことはあつてね。いや、やはり泊まりに行くといつても、やめさせればよかったな。とんだ迷惑をかけたね、柴田さん」

部長が、また頭を下げた。

「いいえ…。うちに泊まりに来なさいと言ったのはこっちですから」母が、恐縮して言うつと、

「いや、こちらもちよつと、考えが安易だったな。な、圭介」

と、圭介を見ながら、部長が言った。圭介は黙ったまま、うなずいた。

ああ、そんなことを言わないで。いろんな希望が消えていつちや

う。

「ほんとに、すみませんでした。俺のわがままで、とんだご迷惑をおかけしました」

圭介が、母に向かって頭を下げた。

「圭ちゃん、そんな…」

母も、困っていた。

「じゃあ、圭介はこのまま、家に連れて行きますので」

部長は立ちあがり、部屋を出た。

「こちらこそ、本当にすみませんでした」

母が、玄関で部長と、お母さんに深々と頭を下げた。私はどうしていいか、わからなかった。

圭介も、深々と頭を下げると、そのまま私の顔も見ず家を出ていった。

…何も話せなかった。何を言っているのかもわからなかった。

母がリビングのソファに座り込み、はあつたため息をもらした。

そのまま黙って宙を見つめていた。リビングのテーブルの上に、『ザ・シークレット』のDVDが置いてあった。

「これ…」

「ああ、それね。圭ちゃんが修二に返してくれって」

「そう…」

なんだか、DVDとともに、圭介が未来への希望までを捨ててしまったような気がしてならなかった。いや、それは私も一緒だったかもしれない。

私はそのDVDを持って、自分の部屋に行った。パソコンに入れて、自分の部屋で、ぼくんとそれを観だした。

DVDには、いろんな人が出てきて、いろんな話や、エピソードの映像が流れた。

乳がんが治ったという女性も出てきたし、一生寝たきりになるか

もしれなかった男性も、元気な姿になって出てきていた。

彼らが言うには、思っていることが現実になるから、絶対に実現して欲しいことだけを思い、絶対に、叶って欲しくないマイナスのことは思わない、それどころか、そんな思考は頭からすべて追い出したと言っていた。

途中で、私はDVDを消した。それから、ベッドに横になった。

「圭介も、これ、観たんだ……」

ぼつりとつぶやいて、天井をぼつと眺めた。

こんなことができるんだろうか？ いったい、私に、こんなこと……。でも、未来に起きて欲しいことをイメージして、それが叶うとしたら……。

私は、圭介と一緒に結婚しているところを思い描いた。お弁当を作り、一緒に会社に行く。それから、圭介と休みの日は、ドライブに行く。それから、家では二人でゆったりと過ごし、一緒にご飯を食べ、一緒にテレビを観て、一緒に笑って……。そんなありきたりの生活を思い描いた。

と、同時に、湧き上がる悲しい感情。そんな、ありきたりの、平凡などこにでもある、そんな日常が、叶わないなんて……。涙が出た。悲しくて、涙がどんどん出てくる。

「違う、叶うんだ。叶うんだよ。なのに、なんで泣いてるの？ こんな、悲しい思いをしては駄目だ。圭介がいなくなるなんて思ったら駄目だ。それが叶うのは嫌だ、絶対嫌だ」

自分に、何度も言い聞かせた。圭介は治るんだ。ずっとそばにいるんだ。ずっと……。つぶやくたびに、心の奥が痛む。

それを、感じないよう、必死につぶやく。大丈夫、大丈夫だから……。

夜、桐子から電話があった。

「彼とのことを、お母さんに話したら、喜んでくれてね。式の準備

もしましようって。お父さんもリハビリ頑張つて、けっこう体動けるようになってるんだよ。結婚式には出たいからって…。瑞希、聞いてる？」

「うん」

少しだけ、声のトーンを無理してあげた。

「それでさ〜、結婚式はこつちですることになるんだけど、瑞希も圭介さんと来てよね〜。なんて言つて、多分来年になりそうだけだよ〜」

「……」

来年？来年…。

「瑞希？聞こえてる？電話がおかしいのかな？」

「……。ごめん、ちょっと…」

私の声が、泣き声に変わった。桐子は様子が変わることに気づいたようだ。

「どうした？」

来年…。未来のことを言われただけで、きつかった。私たちには来年はないのかもしれないのだ。大声をあげて泣きたかった。でも、ぐっところえた。

桐子が、あまりにも心配するので、私は圭介の病気の話をした。

「え？」

「だけど、私はあきらめてないの。治るって信じてるし」

私は、必死に泣くのをこらえて、桐子に言った。

それから、『天国の青い蝶』の話、『ザ・シークレット』の話をした。そして、私は未来、圭介とずっといるって、そう信じ続けると最後に告げた。

桐子は、それを聞いて、

「そうだね。うん。私も祈っているよ。よくなるって…。うん、大丈夫だよ」

と、励ましてくれた。

「ありがとう…」

桐子に、お礼の言葉を言ったが、むなしさだけが、なぜか私の心に残った。きつと、桐子の言葉が、慰めでしかないことを感じたからだ。100パーセントそう思ってくれていないことが、わかってしまったからだ。

桐子との電話を切り、また、暗く重いため息が出た。

お笑いのビデオしか観なかったとか、絶対に自分が癌だということと思わなかったとか、DVDの中で言っていたが、そんなことができるのだろうか？

今、圭介はどうしているのだろう。圭介は一人、孤独じゃないだろうか？また、落ち込んで暗い未来を考えてたりしないだろうか…。不安がよぎり、携帯を手にすると、圭介に電話した。

呼び出し音が8回、寝ているのかと思い、切ろうとしたとき圭介が出た。

「圭介？寝てた？」

「うん…」

圭介の声は、あまり元気がなかった。

「体の具合は？」

「うん、もう大丈夫だよ」

「そう…」

「…何？」

「あ、うん。別に用事はないんだけど、どうしているかなって思っ
て」

「……。何も変わったことはないよ」

「うん…」

話が、続かなかった。

「あ、そうだ。私もね、『ザ・シークレット』観たの。すごい奇跡

だよね」

「ああ……」

「そ、それでね、私も圭介との未来とか、イメージしまくったり、楽しいことだけを考えていようかなって思ってた……」

「……未来？」

「そう。あ、桐子がね、来年当たり、結婚するんだって。例のコック長さんと」

「そうなんだ、よかったね……」

「うん。静岡で式をあげるから来てねって。それに一緒に行ったりとかさ。それから、えっと、夏のお祭り一緒に行ったり、秋には、紅葉を見に行くのもいいし、冬はね、クリスマスと一緒に過ごして、あ、デイズニールンドでクリスマスっていうのも、いいな……」

「それとか、正月は、初日の出に、初詣でしょ。一緒に二人で旅行にも行きたい。それに……」

結婚して、圭介の子供生んで、3人で公園に行ったり、海に行ったり、いろんなところに遊びに行ったり……っていうのは言えなかった。

もう、精一杯だった。涙が出ていたが、泣いているのを気づかれないようにするので精一杯で……。

「瑞希。俺、入院早まるかも」

「え？」

「明日から、会社も休むよ。笹おじさんには、今日電話した」

「……なんで？」

「うん。あれから、両親と病院に行った。担当医がさ、ベッドも今空いてるし、すぐに入院もできますって……」

「でも……」

「おふくろ、俺がまた、けいれん起こしたりするの、怖いみたい。ほら、入院してたら、すぐ医者に診てもらえるし」

「……………」

私だって、怖かった。お母さんが、怖いのはわかる。でも…。

「ごめん、瑞希。本当にごめん…」

「え？何が？何がごめんなの？」

「瑞希の夢、叶えられないかもしれないから…」

「やめてよ！なんでそんなに弱気になっちゃってるの？なんでそんなに、悪い方ばかり考えるの？そういうの思ってたなら、悪い方が叶っちゃうよ。だから、やめて…。言わないでよ…」

泣いているのを、気づかれたかもしれない。

「……………」 瑞希……

「え？」

「…いや、なんでもない」

「圭介…？何…？」

圭介は、黙り込んでしまった。

「圭介…、何を言いかけたの？」

と聞いても、黙っていた。電話の向こうにいるのに、もう圭介がどこか遠くへ行ってしまったような気がした。怖かった。

また、震えが来た。でも、必死で、震えをおさえた。

「圭介、黙ってないで、なんとか言ってよ…」

「うん…」

圭介がようやく、返事をした。そして、

「もう、切るよ。そろそろ寝たいから」

と、言うのと、そのまま、圭介は電話を切ってしまった。

「あ……………」

ツ…、ツ…という音だけが、むなしく耳に残った。その音とともに、私の心の中の希望がどんどん、消えていくのを感じた。

どうして、こんなことになったのだろう。涙が溢れた。苦しくて、思い切り泣きたかった。

でも、それもできなかった。この、辛いという感情も、悲しいという感情も、すべてを切り捨てたかった。感情なんてなくなってしまうばいいのに……。今すぐ、そんなマイナスの感情がこの世から、消えちゃえばいいのに……。

翌朝、目が覚めて、自分が泣いているのがわかった。私は夢を見た。圭介が笑っていた。笑って横にいて、それだけの夢だった。でも、幸せだった。その幸せな気持ちに包まれ、私は泣いていた。

目が覚めてみたら、本当に涙を流していた。

「圭介……」

泣くのも、悲しいと思うのも、全部を押し殺し、私は着替えた。そして、会社に行く準備をした。

何もかも、考えないようにした。電車でも、何も考えないようにした。何かを考えたら、涙が出そうになった。必死に悲しさを追い払いながら私は、会社に向かった。

会社に着いて、席に座る。圭介の席は見ないようにして、パソコンを開ける。そして、わざと、忙しくした。何も考えないで、仕事だけをしようとした。

9時半が過ぎ、みんなが社にそろうと、社長が自分の席から、みんなに向かい、

「ちよつと、聞いてくれ」

と、声をかけた。

「今日から、圭介がしばらく休むことになった。実は、入院をして治療をするんだが……」

そう社長が話し出すと、みんなざわざわとしだした。

「圭介、どっか悪いの？」

「検査して、なんでもなかったんじゃないの？」

みんなが、思い思いに、隣の人と話し出す。

「たいしたことはないんだ。でも、入院して治療した方が、いいだ

ろうつて医者が言うんで、しばらく入院することになった。それで明日から、新しく圭介の仕事を担当する松永君っていう新人が来るから、みんなよろしく頼んだぞ」

「新人？」

「ああ、正社員として迎える。圭介が来ても、残ってもらうことになると思う。年齢は圭介より上だ。今までもＩＴの会社にいたが、転職を希望していたから、来てもらうことにした。ま、そういうことだ。それじゃ、仕事に戻ってくれ」

みんなは、すぐに仕事に戻らず、少し話をしていた。圭介、ここが悪いんだろうとか、胃潰瘍じゃないのかとか、いつまで、入院するのかとか、新人はどんなやつだろうとか…。

私は、耳をふさいでいたかった。圭介のことを聞きたくなかった。ちよつと名前を聞くだけでも、圭介のことで、頭がいっぱいになり、不安と恐怖で、心を闇にのっとられてしまう。

「大丈夫、圭介なら、大丈夫…」

心の中で、何度もそうつぶやいた。

パソコンの画面に目を向けようとして、ふと、圭介のデスクが目に入ってしまった。圭介の椅子。パソコン。圭介がいつも、動かしていた、マウス…。

圭介の手、圭介の横顔、圭介の声、圭介の笑い声、圭介のかもしれない、出ずあつたかい空気、圭介の…。

駄目だ…。もう駄目だ…。もう、限界だ…！

私は、ガタガタと帰り支度を始めて、社長の席に行き、必死で、泣くのをこらえながら聞いた。

「あの、すみません。早退していいですか？」

「うん、顔色が悪いね。早く帰ったほうがいいな…」

社長が、察してくれて、優しくそう言ってくれた。

私は、急いで鞆を取りに行き、エレベーターも待つていられず、階段で一気に、一階まで下りた。耐えられなかった。圭介がいないことに…。

圭介に会いたくて、圭介をそばで感じていたくて、いてもたってもいられなくなっていた。

走って横浜駅に行き、電車に飛び乗った。電車の中でも、圭介のことしか考えられなかった。

「待つてて、待つてて…」

気ばかりがあせった。

なんで、圭介と離れているのか、なんで、圭介のそばにいようとしていないのか。自分が自分で、わからなかった。

ああ、そうだ。1分1秒でも長く、一緒にいたいと思ってしまおうと、圭介の病気や、圭介のこれから訪れる死を認めてしまうことになるから…。それが嫌で、必死に未来のことをイメージした。

でも、それも辛くて、今度は、圭介のことまで、私の中から追い出していた。

何をしていたんだろう、私は…。圭介のことを感じていたんじゃないかった…。圭介がただ、そばにいるだけで、良かったんじゃないかった？圭介のあの、あたたかい空気が幸せで、それを感じていたら、それでよかったんでしょ？なのに、なんで…。

そうだ、圭介に「今に生きよう」と言ったのは私だ。なのに、ずっと未来に行つてた。叶わないかもしれない、未来に。そして、今を忘れていた。

圭介がうちに、泊まりにきてても、すぐそばにいても、あんなに遠くに感じ、冷たくさえ感じた。でも、私が遠ざかっていたんだ。今、ここにいる圭介から。

電車を降り、タクシーに乗り込み、圭介が前に運転手に説明していた通りの道を行ってもらった。圭介の家まで、すぐに着いた。急

いでお金を払い、タクシーを降りて、チャイムを鳴らした。
出ない…。誰もいないの？

「はい。どちらさまですか？」

お母さんの声がした。ほっとしながら、

「柴田です」

と、答えた。

「瑞希さん？ちょっと待ってて。今行くわね」

お母さんが、玄関を開けた。

「どうしたの？」

「あの、圭介は？」

「いるわよ、自分の部屋に」

「あの、上がっていいですか？」

「どうぞ。圭介の部屋に、行ってみて」

そう言われて、2階に上がり、小さくドアをノックした。

「圭介…」

ドアの前で声をかけたが、返事はなかった。そっとドアを開けた。
圭介はベッドに横になっていた。

「寝てるの？」

小さな声で言って、近寄った。圭介は、小さな寝息をたてながら、
眠っていた。その寝顔を見て、安心した。

圭介だ…。圭介が目の前にいることが、嬉しくなった。

クッションをベッドの横に置き、そこに座り、ずっと私は、圭介
の寝顔を見つめていた。

28 死を受け止めて

圭介の顔をこんなに眺めるのは、久しぶりだ。圭介は寝ているのに、私は圭介のあったかい空気に包まれていた。

相変わらずの白い肌に、綺麗な輪郭。ただ、こうやって圭介がいて、圭介を感じている。それだけで、心が穏やかになっていく。この感覚、忘れていた。

30分くらいたたただろうか、圭介が目を覚ました。目の前に私がいて、かなり驚いて、

「あれ？」

と、辺りを見回した。

「俺の部屋だよね？何で瑞希…？」

「会社、早退しちゃった」

早退というのだろうか、始業とともに抜け出てきたからなく。どうしたの？

「なんか、圭介のこと考えたら、いてもたってもいられなくなって…」

そう言つと、圭介は目を細めた。

「圭介、手…」

布団にはいつている手を、圭介が出した。その手を両手で、ぎゅって握った。あつたかかった。とても…。それから、その手を頬につけた。涙が溢れてきた。

「……。瑞希？泣いてる？」

「うん…。でも悲しくてじゃないよ。なんか、圭介を感じられて、嬉しくって泣いてるの…」

そう言つと、圭介が、もう片方の手で、私の髪の毛をなでた。

「瑞希、ごめん…」

「圭介、謝ってばかり…」

涙が、止まらなくなった。

「ごめん。あ、また言っちゃったね、俺…」
そう言つと、力のない笑顔を見せた。

「具合、悪いの？」

「うん、ちよつと朝、頭痛がひどくて。でも、頭痛は治つたよ。大丈夫」

本当だろうか…。圭介は無理して、強がるところがあるから…。
ああ、そうだ。だから、本当の圭介を見せて欲しかった。弱くてもいいから、強がらないそのまんまの圭介を。そして私は、どんな圭介でも受け止めようって思っていた。どんな圭介も大好きって思っていたのに…。

「圭介、私こそごめんね」

「何が？瑞希が謝ることは、なんにもないよ」

「ううん。私、いっぱい圭介を困らせた。それに、苦しめた…」

「…俺なら、大丈夫だよ。瑞希の方こそ、辛かったんじゃないの？」

「……。圭介…」

我慢の限界だったのか、張り詰めていた糸が切れたのか、私は思い切り声をあげて、泣き出してしまった。

圭介の手を握り締めながら、ずっと、ずっと、私は泣いていた。
そんな私を圭介はただ、黙って頭をなでてくれていた。その手は優しく、ますます涙が出て止まらなくなった。

こんなにも、暖かく優しい圭介を、私はずっと責めていたんだ。
弱気にならないでとか、生きるって思ってたとか。辛いつてことも、苦しいつてことも、受け止めてあげられなかった。

圭介は、言つたじゃないか。自信がないって。病気に打ち勝つ自信がないと…。そうやって、本心を見せてくれていたのに。ちゃんと、心を開いてくれていたのに…。

「ご両親や周りの人に気を使い、泣くこともできずにいた圭介が、

私には圭介の素の姿を見せてくれていたのに…。

「圭介、私、本当はすごく怖い。圭介を失うのも、圭介が死んじやうなんて、怖くて怖くて、考えたくもない。隣にずっといるって、そう信じたかったし、私の隣にいてくれなくなるなんて、絶対に、そんなこと考えたくもなかった」

「うん…」

「必死で、考えないようにしたの。でも、考えちゃうの。考えないようにしても、無意識に考えちゃうの。それが、怖くて…」

「うん、わかるよ…」

「わかる？圭介もそう？」

「うん…」

涙でぐしゃぐしゃの顔をあげて、圭介を見た。圭介も涙を流していた。

「俺、瑞希が、未来をイメージしてるって言うてるのを聞いて、一緒にイメージしたよ。瑞希と行くお祭りも、瑞希と行くデイズニールンドも。だけど、思い描けば、思い描くほど、苦しくなった…。叶えてあげられないことが、悔しかった。悔しくて、悔しくて、なんでそんなことでもしてあげられないのかって。やっぱり、それが全部叶うつて思えないんだ…」

「……」

「俺も、瑞希といたいよ。ずっと、そばにいたいよ。誰にも渡したくないし、瑞希と、家族も持ちたい。結婚して、一緒に暮らして、子供生まれて、家族で毎日、暮らしてる…。そんなこと全部全部、叶えたいよ。でも、できない。それが悔しい…。すげえ、すげえ悔しい。なんでできないんだろうって、何で、俺、そんな病気になったのかって…。何度もうらんで、何回も、自分の人生を憎んだ。とても、プラスになんて考えられない。どうやったって、悔しいだけだ…」

「圭介……」

「だから、未来を思うたびに、苦しくなった。未来の話で瑞希がするたび、苦しかった。ごめん、そんな瑞希のそばにいるのも、辛くなった。だから、早くに入院も決めた。俺、瑞希に何もしてあげられないし、苦しめるだけだし、だから、逃げようと思った……」

圭介が、今度は私の両手に顔をうずめた。

「ごめん、瑞希……。俺、頼りないし……。俺、弱いし……。それに俺、卑怯だ……」

圭介の、声が震えていた。肩も震えていた。声を必死で押し殺して泣いているのがわかった。私は思わず、圭介の手から両手を離し、圭介の肩を抱いた。ぎゅうって力いっぱい。

「泣いていいよ。声上げて泣いてもいいよ。我慢しないで。我慢したりしないで……」

私がそう言うと、圭介は私の胸に顔をうずめて、大きな声をあげて泣き出した。私も、一緒に泣いた。二人で、大声で泣いた。

何も考えず、圭介のことを抱きしめながら、ただ、心の中にいっぱい、いっぱい押し殺してきた感情を二人で、爆発させるかのよう……。

どのくらいの時が立っただろうか。どのくらい、二人で泣いていただろうか。

圭介は、徐々に泣き止んで、私もだんだんと、涙が止まっていた。でも、圭介は私の胸に顔をうずめたままだった。

圭介がしてくれたように、私も圭介の髪をなでた。圭介は、あつたかった。

「瑞希の、心臓の音が聞こえる……」

圭介が、ぼつりと言った。

「瑞希、あつたかいね……」

「圭介もあつたかいよ」

「瑞希、前に言つたよね。今に生きようって。今は、俺、生きてるし、ここにいてるって…」

「うん。」

「でも、やっぱり、未来のこと考えちゃう。そうすると、すげえ、怖くなる…」

「うん、私もわかるよ、それ。時々、恐怖で体が震えるもの」

「瑞希も？」

「うん…」

「……。瑞希と、離れるのが俺、1番辛い…」

「うん…」

「死んだら、どうなるかな。魂つてあるのかな…。もしあつたらさ、体消えても、瑞希のそばにいられるかな…」

「……」

「瑞希のあつたかさとか、感じられるかな…」

「圭介…」

そんなことを言われて、私はまた、泣き出してしまった。

「ごめん、泣かせた？俺…」

「ううん。いい。大丈夫…。圭介が思ってること、話してていいよ。聞いていたいし…」

「うん…。死ぬことは考えないようにしてたけどさ。怖いし、真っ暗闇なのかなとか、無の世界なのかなとか、そういうことを考えちゃうと、すげえ怖いから、考えないようにしてた。でも…」

「でも…？」

「でも、みんないつかは、死ぬんだよね。瑞希だって、いつかはさ、早いか遅いかの差があるだけで…」

「……」

圭介は、私の胸から顔を上げた。それから、ベッドからそっと立

ち上がると、横のテーブルにあったティッシュの箱を取って、鼻をかんだ。

「私にも、ティッシュ…」

と言うと、箱ごと渡してくれた。

「こんなこと前にもあったよね。あ、車の中でか…」

圭介がそう言うのと、ふって笑った。圭介は、涙で目が腫れて、白い綺麗な肌は、真っ赤になっていた。きっと、私の顔もすごいことになっているのかな。

圭介は、ベッドに座ると、じいって私の顔を見た。

「あ、すごいことになってる？私の顔…」

「うん。綺麗だよ」

「嘘だ…」

「まじで、まつげが涙でぬれてて、色っぽい…」

「ええ？」

もう1枚ティッシュを取って、目のあたりを押さえた。

「瑞希は、あんまりお化粧濃くないね」

「あ、うん…」

それから、圭介は私の頬の涙をぬぐいながら、

「瑞希の顔、覚えていたいな。ずっと…」

と、つぶやいた。

「目に焼き付けて、忘れないようにする…」

「……」

「死んでも、覚えておく…」

「圭介…」

死んでもなんて言うて欲しくないって、前なら思ってたかもしれない。でも、今は圭介がそう思うなら、それを受け止めようって思っていた。

「私も、覚えておく。圭介のあったかさも。全部、全部…」

「うん…」

そう言うのと、圭介が今度は私をベッドに座らせて、ぎゅうつて抱きしめてきた。

「覚えててね。そうしたら、瑞希の中でずっと俺、生きていられるから……」

圭介のその言葉に、また涙が出た。私も圭介の背中に両手を回して、ぎゅうつて抱きしめた。力いっぱい。そして、また、泣いていた。

「瑞希、泣き虫になってるね……」

圭介がそう言っで、少し笑った。

「私、本当は泣き虫だもん」

「そうなんだ、知らなかった。また、瑞希のこと知れた……」

「……うん。圭介も、私に、そのまんまの圭介を見せてね」

「……ん？」

「泣いてるところも、弱いところも、どんなところも。素のままの圭介、知っておきたいから」

「うん……」

「私も、泣きたかったら、泣く。我慢しない。苦しかったら苦しいうて言うし、悲しかったら、悲しいうて言う。ちゃんと感情を出して、感じて、圭介にも見せるから……」

「うん……」

「だから、悲しかったら、一緒に泣こうね。苦しかったら、こうやって、抱き合おうね。思い切り、泣いて、思い切り、抱きしめる。」

圭介をいっぱい感じるから、圭介もいっぱい私を感じてね。このままの、私でいるから、このままの私を受け止めてね。圭介のことも全部、受け止めるから……」

私は、そのとき、圭介の死も受け止めるからって、心でつぶやいていた。もう、逃げない。もう、圭介から、逃げない。どんな圭介からも……。

圭介も、「うん、うん」と言っで、泣いていた。また、私たちは

二人で、抱き合って泣いた。

泣くのも落ち着き、もういっぺん、私は、顔を自分のハンカチで拭いてから、

「お母さん、心配してるかもしれないし、下に行くね」

と言った。圭介も、また鼻をかむと、

「俺も行くよ。泣いたら、腹減っちゃった」

と、いつもの笑顔を見せた。

二人して、リビングにおりていくと、お母さんは、ダイニングの椅子から立ち上がった。部屋は薄暗かった。今日は、外はどんよりして、家の中でも電気をつけないと、薄暗い感じだったが、お母さんは、その暗い中、ずっと、ここで座っていたんだろうか…。

もしかしたら、私と圭介の泣き声も、聞こえていたかもしれない。「おふくろ、おなか空いたから、ご飯にしてくれる？」

圭介がそう言うと、

「あ、はい。待っててね」

と、お母さんはキッチンに向かった。

圭介が、リビングの電気をつけた。それから、ソファに座ると、ここ、ここって感じで、圭介の隣をぼんぼんたいた。圭介の隣に、腰をおろした。

二人で、しばらくぼくぼくとしていたが、突然私のお腹がググってなり、

「あ。すげえ音がした」

と、圭介がお腹をおさえて、お笑いをした。

「おふくろ、瑞希にも、なんか作ってあげて」

圭介がキッチンに向かって言うとお母さんが、

「ああ、はい。わかったわ。二人分ね」

と、キッチンから返事をした。

「すみません。私も手伝います…」

そう言って、私が立ちかけると、圭介が私の腕を掴んだ。

「瑞希は、ここにいて…」

「え？」

「瑞希は、俺の横に、ずっといて…」

圭介が、そう言つと、私の腕をぐいってひっぱり、ソファに座らせた。

「うん…」

しばらくすると、キッチンからいい匂いがしてきた。それをかいだからか、また、私のお腹がなってしまった。

「やだ〜」

恥ずかしがつて、お腹をおさえると、

「瑞希の、お腹のなる音聞けた。ラッキー」

と言つて、圭介が笑った。そんなことが、ラッキーなの…？

圭介は、テレビをつけた。私のお腹の音が、響かないようにっていう配慮なのかな？ちようど、ドラマの再放送をしていて、イケメンの俳優が出ていた。

「私、この人、結構好き」

「俺とどっちが、かつこいい？」

「圭介に決まってるじゃん！」

「あはは、やっぱ？聞くだけやぼ？」

圭介は、明るく笑った。圭介のこんな笑顔、いつ以来かな。久しぶりに見た気がする。

「ご飯、できたわよ」

お母さんがダイニングから、私たちを呼んだ。

「いただきます！」

圭介が元気よく手を合わせ、がつがつと食べ始めた。その様子をお母さんが見てて、少し、目頭を押さえた。目が真っ赤だった。今

まで、泣いていたのかもしれない。

「あ、瑞希さんも食べて」

私が、まだお箸も持っていないことに気づき、お母さんがそう言ってくれた。

「はい、いただきます」

実は、圭介の食べっぷりに、私も見とれていたのだ。

「私、ちよっと、買い物に出てもいいかしら。瑞希さん、もう少しいられるわよね？」

そう言つと、エプロンはずして、お母さんはキッチンから出て行ってしまった。

寝室に行くと、お母さんはしばらく出てこなかった。一人で、泣いているのかもしれない。

「あまり、家から出なくなつたんだ。俺がいたら、心配で出られないみたい」

圭介が、ぼつりとそう言った。

「お母さん？」

「うん。親父も早めに帰ってくるようになった。兄貴や、順平は、バイトとか仕事が忙しくて、今までと変わらないけど。でも、なんか、食事してても、ぎこちなくてさ。みんなで気を使ってる」

「そう……」

「おふくろは、たまに寝室で泣いてる。夜中、一人で、お酒飲んでることもある。でも、俺の前じゃ絶対泣かない。泣きそうになると、寝室に行く……」

「じゃあ、お母さんの前では、圭介泣けないよね……」

「親父や、兄弟の前でもね……」

そう言つと、圭介は、味噌汁を飲み干し、ご馳走様と、お箸を置いた。

「ああ、久々に、こんなに食ったかも……」

「大丈夫なの？」

「うん、けっこう気分もいい。やっぱ、瑞希がそばにいと、俺元氣出るのかな。俺のあれだよ。パワーのもとだね」
って、言って圭介は、目を細めて笑った。

寢室からお母さんが出てきて、そのまま和室を通り、玄関に行っ
たようだ。パタンと、ドアがしまり、鍵をかける音が聞こえた。

圭介は、少しほってため息をついた。お母さんに氣を使ってるんだな。なんだか、家族みんなで氣を使いあってるんだな…。

「もうすぐ、入院だし、そうしたら、おふくろも樂になるかな」
「樂に？」

「俺がいると、大変そうだから…」

「そうなのかな。私だったら、そばにいたいって思うけど」

「でも、けっこう、辛かったでしょ？」

「うん。あ、そうか…」

「え？」

「泣きただけ泣いて、わめいたら、すっきりしたかも。今は、ただ圭介と一緒にいたいだけって思える」

「ああ、俺も…。なんか、泣いてすっきりしたかな」

「お母さんも、思い切り泣いたら、樂になるのかもね」

「…どうかな、感情をあまり出さない人だから」

「そうなの？」

「そういうところが、親子で似ちゃった」

「圭介も？ああ、そっか。無理して、明るくしたりしちゃうもんね」

「うん。なんか、明るくしていいとか、元氣でいいとかって思っちゃうんだよね」

「無理しなくていいのに」

「…うん。もう、無理はしないよ。素のままでいるよ…」

圭介の顔は、本当にすっきりして見えた。何か、つき物が取れたかのように、穏やかだった。

圭介のお母さんが戻るまで、圭介と私は、リビングでテレビを観ていた。ドラマは、恋愛もの。可愛いヒロインと、イケメンの相手役。観ながら、時々圭介の顔を見た。

うん、俳優さんよりも、ずつとかつこいい。すらりと伸びた手足も好きだな。それから、あ。パジャマの上着からのぞく鎖骨。色っぽいな。綺麗な指に、綺麗な横顔。ちょっとだけ、とがっている肩。何？」

圭介が、こっちを見た。

「見とれてた？、また」

「ふふ…。自意識過剰だよ。実は、ナルシストなんじゃないの？」

「うそ…。絶対、見とれてたでしょ。だって、俺を見るとき、目がいつつもとろんつてするよ」

「え？まじで？」

「まじ、まじ。目の中にハートまで見えちゃう」

「うそだ…。もう、馬鹿なこと言わないでよ」

でも、そんなくらい、私は圭介が好きだから、目がハートになってもおかしくないかもしれない。

テレビを観ながら、馬鹿笑いを二人でしていると、お母さんが帰ってきた。それでも、圭介は楽しく話をしていて、笑っていた。

「ただいま」

と、お母さんがリビングに来ると、圭介が、

「あ、おかえり」

と、明るく出迎えた。

「ごめんなさいね。瑞希さん、お留守番頼んじゃって」

「いえ、そんな…」

「今、コーヒ―を淹れるわ。豆が切れたから買って来たのよ。豆がらひいて、美味しいのを淹れるから飲んで行つてね」

「はい、ありがとうございます」

お母さんが、キッチンに行き、豆をひきはじめた。辺り一面にコーヒーのいい香りが漂った。

しばらくしてお母さんが、リビングに私の分のコーヒーを持ってきた。一人分だった。

「あ、いただきます」

コーヒーを飲んだ。とても美味しくて、心が、すうつと落ち着いていった。

「圭介のは？」

お母さんが、キッチンにお盆を下げに行っている間に、小声で聞いた。

「うん、なんか飲むと、最近、気持ち悪くなるんだよね。それで、やめてる」

「そうなんだ…」

「あの、瑞希さん…」

お母さんが、リビングに来た。

「この前は圭介が、泊まりに行つて、本当に迷惑をかけて…」

「いえ、そんな…。全然です」

「でも、ご心配かけたんじゃない？」

「はい。あ、いえ…」

しどろもどろになった。なんて答えていいのか。

「あの、お母さん。私、圭介のこと、心配です。でも、心配は勝手にしているだけだから、あまり、気にしないでください」

「え？」

相当、変なことを言ったのか、お母さんの顔が、固まった。

「あ…」

私、変なこと言ったかなって、目で、圭介に聞いてみた。圭介は、大丈夫だよって目で合図をした。

「瑞希さん、あの…。少し話せるかしら。向こうで…」

「はい」

「圭介、ちょっと瑞希さん、借りるわね」

そう言つと、お母さんは、私を和室に案内した。

和室に入ると、お母さんは正座をしたので、私も慌てて、正座をした。

「瑞希さん…」

「はい」

「正直に言つてね。圭介といて、辛くない？」

「はい」

即答をしたが、もういつペン考えてから、

「辛いつて思うこともあります」

と、正直に答えた。

「悲しくない？ 苦しくない？ もし、あまり辛かったら…」

なんとなく言いたいことがわかった。辛かったなら、離れてもいい、そんなことが言いたいんだろう。

「私、圭介から逃げようつてしました。でも…」

「でも…？」

「でも、圭介が生きているのに、会えないことのほうが、辛かったです」

「え？」

「圭介が、一緒にいて、苦しかったり悲しかったりしても、それでも、そばにいらっしゃる方がいいんです」

きつぱりと、そう言つと、お母さんは目頭を押さえた。でも、泣くのを我慢してから、

「圭介は、今日、思い切り笑つてたわね。あなたと一緒にいると、圭介もあんなふうに、笑えるのね」

と下を向いたまま、そう言つた。

「いいえ。この前までは、作り笑いをしていました」

「圭介が？瑞希さんに？」

「はい。無理して笑って、私に気を使って…」

「あなたにも？」

「はい。でも、私がそうさせてました」

「…え？」

「私が、素のままの圭介を受け入れられなかったし、それに、私も素のままの私を見せていませんでした」

「素のままって？」

「泣きたかったら、泣く。悲しかったら悲しいと言う」

「え？」

「我慢したり、感情を押し殺さずに、相手に心を開いて、見せる…」
「……」

「それで、ようやく、圭介の素のままを受け止められました。だから、きつと、あんなふうに笑えたのかも…」

お母さんは、黙ったまま、うつむいていた。

「お母さんも、いいんですよ。きつと。感情を出しても。泣いても、大丈夫です」

「でも、そんなことをしたら、圭介が…」

「気を使って無理してる方が、圭介は、辛いかもしれないですよ。圭介って、自分より、人のこと考えちゃうところあるじゃないですか。そりゃ、悲しんでいるのを見たくないかもしれないけど、でも、悲しいのを、無理して我慢して、影で泣いている方が、きつと辛いですよ」

「圭介、そんなこと言ってた？」

「あ、いえ…。でもそんなふうに、感じました。私…」

「そう…」

「圭介は今、生きています。生身の人間で、笑ったり、泣いたりします。それが、人間です。生きているってことかなって思います。」

だから、生きている圭介を私は、感じたいって思っています。泣いていても、怒っていても、笑っていても、圭介です。どんな彼も、彼ですから……」

「そうね……」

お母さんは、ぼろぼろと涙を流した。

「あの子なのよね。生きている、あの子なのよね……」

口を押さえ、声を殺して泣いている。そんなところが、圭介に似ていると思った。

「私、いっぱい圭介を感じていたいから、ずっと、そばにいたいから、圭介が入院したら、お見舞いに毎日行つて、ずっと病院にいたいんです」

「……」

お母さんが無言のまま、私を見た。

「だから、会社も、辞めようかなって思ってます」

「そう……」

「あ、これは、今さっき、思ったことなんで、圭介にも言っていないですけど……」

「圭介もあなたが、いつもいてくれたら、喜ぶと思うわ」

「はい……」

私は、和室から出て、リビングの圭介のもとへと行った。圭介が、私の顔を見て、少し不安げな顔つきをした。

「今ね、お母さんに頼んできちゃった」

「何を……？」

「圭介が、入院したら、ずっと看病に行くつて。毎日、ずっと……」

「いいつて」

「ほんと?!」

「うん」

圭介が、あまりにも嬉しそうに驚いたので、こっちまで驚いた。

「おふくろ、瑞希に心配かけたり、苦しい思いさせるの、嫌がつて
たから。俺から、離れて欲しいって言ってるのかと思った」

「…うん、そんなこと言われたけど、圭介と離れている方が、辛い
から離れないって言ったよ」

「それで、わかってもらえたの？」

「うん」

にこってほほえむと、圭介も安心した様子で、にこつと、微笑み
返した。

「よかった。じゃ、毎日瑞希の顔見れる。あ、でも、会社…」

「うん、社長には申し訳ないけど、辞めさせてもらう」

「でも、給料とかはいらなくて、いいの？」

「私、実家に住んでるし、今までの働いて貯めたお金、けっこうあ
るから大丈夫だよ」

「そか…。そつか…。じゃ、朝から晩まで、いれる？」

「うん」

「まじで？」

「まじで」

そう言つと、圭介はまた、にこって笑った。

癌の治療と言え、かなり辛いつて聞く。圭介がそれをこれから
受けなければならぬ。そのとき、どれだけ私は、圭介の助けにな
れるのか。

でも…、私はずっと、圭介の隣にいる。それだけは、誓つて言え
る。それだけしかできないけど、でも、それは誰にも負けないぐら
い、圭介を大事に思い、大好きでいるから、自信があった。

29 共に生きる

翌日、退職届けを持って会社に行った。社長が、私を見てすぐにかげよった。それから、二人で会議室に入った。

「すみません。昨日は、早退して…。そのまま、圭介のところに行っていました。それで、圭介に会って、私、決めました」

「それは、退職届け？」

「はい。いきなりですみません。でも、圭介が入院したら、ずっと、看病しに行きたいんです。1分1秒もおしいんです。なるべく、彼のそばから離れたくないんです」

「そうか…。圭介は明日から入院だっけ？」

「はい」

「わかった。今、不況だしね、すぐに派遣の子はみつかるよ。こっちは、大丈夫だから」

「はい。ありがとうございます」

私の届けを受け取り、社長は会議室を出た。

私は、その日1日たまっていた、書類の整頓や、伝表の整理などをした。昼も、お弁当を買い、デスクで食べながら、ずっと、整頓を続けた。

それを見ていた周りの人は、様子が変なことに気づいていたようだが、誰も何も言ってこなかった。

6時過ぎ、すっかり綺麗になった引き出しと、デスクをあとにして、社長に挨拶に行くと、ただ、

「お疲れさん」

とだけ、社長は言った。

それから、ロッカーにあった荷物を、紙袋に全部入れて、私はオフィスを出た。

社長は、私が辞めることを、みんなには言わなかった。今日来て

いた、新人の子にも、あまり私の紹介もしないままだった。

周りが、あれこれ私に聞いたりするのを、避けるためか。圭介のことを説明しなければ、ならないからか。多分、明日の朝当たりに、私が辞めたことを発表するだろう。

「お疲れ様、瑞希」

家に帰ると、お母さんが出迎えてくれて、私の持っていた紙袋を持ってリビングに入っていた。

クロも、尻尾をふって、玄関まで出迎えに来てくれた。クロは、しばらく圭介に会えなくなるのかな……。そんなことを思うと、病院にまで、クロを連れて行きたくなった。

入院して、外出許可は出るのだろうか。ずっと、これから圭介は、四角い病室にいることになるのだろうか。そう思うと、いったい入院することが、いいことのなのか、辛いだけの治療もいいものなのか、疑問に思えた。延命のためって、いったいどのくらい延命できるのだろうか？

夕飯は、父は接待で、修二は同僚と飲みに行くので遅いらしく、母と二人で食べた。食べ始めると、母が話し始めた。

「雄一にね、お父さんから圭ちゃんの話をしたみたいなの」

「え？」

「ほら、昔から雄一、瑞希のこと、あれこれ、心配していたし。こういうこと、何も言わなかったら、あとで、絶対、雄一に怒られそうだから」

「兄さん、なんて…？」

「一回、本社の方に、仕事で来るときがあるから、帰りにでも寄るって言ってたわ」

「本社、東京でしょ。帰りって、大変じゃない？それから、仙台に帰るの？」

「泊まっていったらとは、言ったんだけどね。でも、美樹さんが、

今……」

「うん？」

「妊娠3ヶ月なんですって。つわりがひどいらしいのよ」

「妊娠3ヶ月？二人目？」

「そうなんですって。まったく、もっと早くに報告して欲しいわね。でも、前に妊娠がわかってすぐに、赤ちゃん駄目になったことがあったから、それでみたいね」

「そうか、おめでたなんだ。良かったね。孫が増えるね」

「お父さん、圭ちゃんのことを話したから、雄一言いづらかったみたいよ。あんたからもメールで、おめでとうって送ってあげたら？」

「うん」

母に、そう返事をする、母はすぐに私のほうに向き直り、慌てて付け加えた。

「あ。やつぱり、無理はしないで。送りづらかったらいいのよ。雄一だってわかってくれるわよ」

「大丈夫だよ、お母さん。私、嬉しいよ。命が芽生えて、誕生するって、すばらしいじゃない」

母には、そう言ったが、やはり複雑だった。

圭介はこれから命が消えていく、でも、新たに誕生する命がある。私は、バスタブにつかりながら、そんなことを考えていた。

そして、圭介の赤ちゃんが欲しいな……、そんなことをなんとなく思った。

翌日、圭介と圭介のお母さんと病院に行った。部長はどうしても抜け出せない会議があるとかで、私とお母さんとで、圭介の付き添いをすることにした。

病室は、4人部屋だった。どうやら、同じ部屋には、同じ病気の人が集まっているらしい。残りの3人の人はみんな、帽子をかぶっていた。

圭介も、治療が始まったら、髪の毛抜けちゃうのかな。そうしたら、あの綺麗な黒い髪の毛、もう見れないのかな。触ることも、また、髪を乾かしてあげることもできないのか…。

ああ…、また、落ち込んできた。

当の本人とお母さんは、同室の人たちに一人ずつ、お菓子を配りながら、挨拶をしていた。これから、どのくらいの期間、この人たちと、ここで過ごすことになるのか…。

「お母さんと、お姉さんかい？」

真向かいの、50代くらいの人が、挨拶をするとそう聞いてきた。

「あ、いいえ、母と、彼女です」

圭介が、しらつとそう言つてのけると、病室にいた人たちや、一緒に来ていた看護師さんから、

「ヒュ~~~~」。彼女が、年上女房か~~~~」

と、ひやかされた。

「圭介~~~~…」

少し、困った表情で、圭介に小声で言つと、

「いいじゃん。本当のことだし」

と、これまた、平然と言つてのけた。お母さんも、全然気にしている様子ではなかった。

手続きがあるとかで、お母さんは病室を出た。圭介は、ベッドの回りのカーテンをしいて、パジャマに着替えた。

「いいよ、瑞希」

圭介は、着替えると私に中から声をかけた。その様子を、病室にいる全員が見てにやついていた。

「う、嫌だな~~~~」

そう私は心で思ったが、まあ、そんな他人のことなんて、考えてもあほらしい。私は、圭介といたくて、ここにいるんだから。こくなったら、思い切り、いちゃついてやれ。って、半分開き直った。

カーテンを開けないまま、圭介が私を呼んだので、カーテンの中に、私は入っていった。

圭介はもう、ベッドに横になっていた。なんだか、こうやって、病院のベッドに横になっていると、はつきり言って病人に見える。いや、病人なんだけどさ…。

「あとで、病院内、探検しに行こう」

いたずらっぽい目で、圭介が言った。ああ、圭介は、あまり、入院することに抵抗はないんだな。

「屋上とかあんのかな、よく、ドラマで出てくるじゃん」

「あるよ。屋上。そこにシーツとか、洗濯もんを干してある」

隣のおじさんが、言ってきた。うわ、丸きこえか…。

「誰でも、行っっていいんですか？」

と、圭介が聞くと、

「おお、おお。行っても大丈夫だ」

と、今度は真向かいの人が返事をした。

隣のおじさんは、60代くらい…。斜め前の人は、どうやら、20代か、30代くらいだった。

お隣と、真向かいのおじさんは、陽気な感じの人だ。斜め前の人は、挨拶をしても、むっつりとしていたが…。

お母さんが病室に戻ってきた。

「ちよつと、これからナースステーションと、担当医の竹内先生のところに行ってくるわ」

そう言うつと、また病室を出て行ってしまった。

今日は、ふらふらと、出歩くわけにもいかなそうだった。そこで、圭介は、カーテンを開けて、同じ病室の人たちに話しかけ、それから、わいわいと楽しそうに、盛り上がった。斜め前の人は、カーテンを閉めてしまったが…。

しばらくすると、お母さんが戻ってきた。それから、荷物をいろ

いと、ロッカーにつめ、

「何か、売店で買ってくる?」

と、圭介に聞いた。

「あ、なんか漫画か雑誌買ってきて」

圭介は、まるで高校生のようなことを言った。

「瑞希さん、売店一緒に行かない?」

お母さんに誘われたので、お母さんと一緒に行くことにした。

「みんないい人そうね。でも、今は4人部屋だけど、治療が進むにつれ、部屋も変わるかもしれないみたい」

「そうなんですか…」

「はあ、どうも、病院は苦手。どこそこの薬の匂いばかりで。あ、この奥だわ、売店」

そう言つて、お母さんは売店に入り、適当に何冊か雑誌を買い、他にも、水やお茶のペットボトルを買った。

「瑞希さんも、お茶でいいかしら」

「はい」

売店をあとにして、エレベーターまで、行こうとすると、

「あら、見て、あそこに喫茶店があるわ」

と、ガラス張りの喫茶店をお母さんが指でさした。

「今度、あそこで、お茶でもしましょうね」

「はい。圭介も来られますか?」

「どうかしらね。治療がないときなら来れるかしら」

「…治療、辛いんでしょうか?」

「そうね。わからないけど…。どうかしらね…」

お母さんは、少し、考え事をしていたのか、それとも、ただ、ぼくくっついてしていたのか、心ここにあらずという感じで答えた。

病室の方へ戻ると、笑い声が廊下まで聞こえていた。

中に入ると驚いたことに、斜め前の人までが一緒に笑っていた。

付き添いの人も、笑っていた。ああ、圭介マジックかな。その場を明るくし、すぐにうち解けてしまう。なんだか、圭介が以前の元気な圭介に戻ったような気がした。

私が戻ると、圭介は売店がどこにあるのかとか、そのへんには、何があるのかを聞いてきた。売店の場所と、喫茶店があることを私は教えた。

お母さんは、漫画の雑誌と水を置くと、ペットボトルを開けて、やれやれといすに座り、一口、飲み込んだ。私も、もらったお茶のペットボトルを開けて飲んだ。隣の人が、椅子をどうぞと、一つ貸してくれた。そこに座って、私も一息ついた。

お母さんじゃないけど、病院の匂いはどうも慣れない。変に、緊張する。これから、毎日ここに来るんだな……。そう思いながら圭介の顔を見た。

圭介は、また、隣のおじさんと話し出し、笑っていた。ああ、圭介の笑顔、好きだな。笑った声も、好きだな。あ、今も目がハートになっているかな、ま、いっか……。そんなことを思いながら、その日は過ぎていった。

それから、毎日のように病院に行った。

圭介は食欲もあり明るかったが、治療がある日は、別だった。ずっと、ベッドに横になり、時々、気持ちが悪いと言って、トイレに行っていた。

その間、お母さんが付き添っていたが、お母さんばかりじゃ大変だから、これからは、私も一緒に行こうって思っていた。

二人が、トイレに行っている間、隣と前のおじさんがたが、「辛いんだよ。抗がん剤も、放射線治療もね、なんも食べられなくなる」

と、私に話しかけてきた。二人とも、経験をしているんだもん……。すると、斜め前の人も、

「この辛さが嫌で、受けたくなくなるんだよね。もう……」

と、つぶやいた。この人は、まだ独身だそうで、やはりお母さんが毎日のように来ていた。たまに、妹さんも、お見舞いにやってきた。

病室の人に、差し入れやお花を持ってきて、明るく話しかけてくる、かわいい妹さんだ。年は20代前半といったところか。

初めて、その妹さんが、圭介を見たとき、ちよつと顔が赤くなっていたようにも見えた。それから、お見舞いに来るたび、圭介にもお花を持ってくる。

「そんなに気を使わないでくださいね」

と、お母さんが言っても、

「いえ、いつも兄がお世話になっっているから」

と、笑って答える。圭介も、持ち前の明るさで、話しかけたりする。あの誰とでも仲良くなる、人懐こさで。

圭介の担当の看護師さんも若い。多分、20代前半。圭介の検診のとき、ちよつと他の人とは、扱いが違っていているようにも見える。

一回、廊下ですれ違ったとき、ペコッとお辞儀をされて、

「お姉さんも、毎日大変ですよ。でも、お姉さんが毎日、こつやつてお見舞いに来られて、圭介君は、嬉しそうですね」

と、言ってきた事がある。

「え？」

私は、圭介の彼女だと、そんな噂でも、たっていないの？なんて、思ったりもしたが、

「兄弟仲、本当にいいですよね」

と微笑んで、ナースステーションに入っていた。

あるとき、圭介と、天気が良くて屋上に行ったときに、

「あ、杏ちゃん」

と、圭介が斜め前の人の妹さんが、洗濯物を干しているのに気づき声をかけた。

「あ。こんにちは！いい天気だね」

圭介は、だんだんと、髪が抜け出し、帽子をかぶっていた。

「兄がかぶっているのは、私のお手制なの。夏用のニットで編んだもので…。良かったら圭介君にも作ろうか？」

彼女は、いきなりそう言ってきた。

「へえ、すげえ、そんなことできるんだ」

圭介がそう言つと、杏ちゃんは、

「じゃ、今度来るときまでに作ってくるね」

と笑つて言つて、屋上をあとにした。

「圭介…」

ちよつと、ジェラシーを感じて低い声で私が言つと、

「あれ？俺、今作つてつて頼んだっけ？」

と、圭介はとぼけた。いや、とぼけたのか、わかっていないのか。

それとも鈍いのか。もしや、自分に気があるとか、そういうのわからないのかもな…。

「杏ちゃんつて可愛いし、気が利くよね。あんな子、お嫁さんにしたい…」

「は？瑞希の好み？」

「…って男の人なら、思うかなつて」

というより、ちよつと、圭介の心の声を言つてみたんだけど…。

「ふうん。それ、女性から見たら…じゃないの？」

「え？そうなの？」

「うん。俺、年上が好きだし」

そう言つと、圭介は、物干し竿に干してある、シーツとシーツの間に入つていった。

「ちよつと、ちよつと。圭介、どこ行くの？」

どこへ行くのかとついていくと、圭介は、いきなり私の腕を掴み、引き寄せてキスをしてきた。あまりにも、突然で、呆けていると、
「病室じゃできないんだもん。カーテン閉めてても、隣の親父、聞

き耳、立ててそうじゃね？」

と圭介は、しらっとした顔でそう言った。

まったく…。なんでいつも君は、いきなりなのよ…。そのたび、心臓が止まりそうになるのに…。

「今日は、気分よさそうだね」

シートとシートの間から抜け出し、空を見ている圭介に聞いた。

「うん、なんも無い日だから。あ、血液取ったり、尿取ったりはしたけどさ。見て、この俺の腕。注射の後が、青くなってる。綺麗な俺の腕が…！」

圭介は、病院で明るい。治療で、ぐったりしている日は、さすがに何も話そうともしないが、それ以外の日は、とても明るくて、よくこうやってふざけている。ふいに無理していないか気になった。

「圭介、いつも病院で明るいよね」

「え？そう？それは、瑞希というからじゃない？」

「私と？」

「瑞希帰ったら、俺、すごい静かになるよ。もう、さびしくて、すぐにベッドに潜り込む。で、しくしく泣いてる」

「ええ？また…、嘘ばかり。同室の人たちと、わいわいやってるんでしょ？看護師にも人気あるみたいだし」

私が、笑ってそう言つと、圭介はまじめな顔つきに変わった。

「まじだよ…。同室の人だって、辛そうなときもあるし、カーテン締め切つて、1日、顔も出さないとときもあるし…。家の人に来て、喧嘩してるときもあるし、いろいろだよ」

「そう…」

「特に、夜中は…。なんか、眠れなくなつて、ずっと、瑞希のことを考えてる」

「本当に…？」

「瑞希以外のこと、考えない」

「……」

ちよつと、間をおいてから、

「可愛い、杏ちゃんや、綺麗なナースさんのことも？」

私は、少し茶化すように聞いてみた。

「何それ？ええ？」

圭介は、真剣な顔で怒ったように言ったが、

「あ、そっか……。瑞希、やきもち？あはは。可愛い！」

と、すぐに圭介は笑った。

「う、そうだよ。悪い？だって、なんかみんなと仲いいし、圭介、もててるし」

「彼女いるのに？」

「私、どうやら、お姉さんって思われてる……」

「え？うそ。彼女だって、はじめに紹介したじゃん、俺」

「でも……。看護師さんに、圭介くんのお姉さんって言われてるよ……」

「お姉さんじゃなくて、恋人ですって言えばいいじゃん」

「……」

自分から言えませ〜ん。っていうのは、心の声だ。

「俺、別に、瑞希以外の女性、興味ないよ」

圭介が、ぼつりと言った。それから、ため息をついて、

「外出できないのかな。一泊くらい。そうしたら、瑞希とどっかし
テイホテルでも泊まるのにな」

「は？」

「それで、1日、瑞希とべったりくっついてる」

「……」

「でも、俺、もしかしたら……」

「うん？」

「なんでもない……」

「何？」

「なんでもない」

「何？気になる…」

「その日、狼になっちゃう…」

「はあ？」

圭介は、しばらく黙って、空を見ていた。それから、こっちを向いて、

「なんてね」

って、おどけて見せた。

「……」

圭介と朝まで一緒にいたいって、何度も思ったことがある。それどころか、圭介の子供だって欲しいって思ったことも…。

圭介のDNA、圭介に似た、私と圭介の子。圭介のかたみになっちゃうけど、シングルマザーになるけど、それでも、圭介が生きていて、私と愛し合った形としてこの世に、残るんじゃないかと思うことも…。

圭介には、自分の心を全部見せようって思っているし、私が何を感じて、何を思っているかも話したかった。だから、圭介にそのことを、思い切って話してみた。

「え？子供？」

圭介が、びつくりしていた。

「父親がいない子になるよ…」

「……」

「それに、瑞希一人で、育てることになるよ…。それに…」

圭介は少し、言葉に詰まった。

「ん？」

「俺はその子に会えない…よ…」

少し、さびしそうに圭介が言った。

そうか…。そうだね。私のわがままだ。圭介にとっては返って、辛いことだ。圭介は、そのあと、無口になった。何か考え込んでいるようだった。

梅雨があけた。圭介は少し、元気がなかった。病院内は、エアコンで涼しかったが、そのエアコンが合わないのかもしれない。

兄が出張で東京に来て、その帰りにうちに寄った。一緒に晩御飯を食べながら、子供の写真を見せてくれた。緑ちゃんと言って、兄に似ている。母も、父も、喜んで見ていた。

いいな……。お義姉さんは、好きな人に似た子を産んで、幸せだろうな。

圭介の子。私は、時々、ぼくくってそのことを考えてしまう。いや、圭介は、欲しいようじゃなかった。そうだよ……。いろいろと、悩ませてしまっただろうか？

夕飯が終わると、兄が、私の部屋に来た。

「瑞希、大丈夫か？」

「うん。大丈夫だよ。あ、たまにね、夜、少しさびしくなったり、怖くなったりするけど、でも、毎日圭介のこと、見ていられるし……。幸せだよ」

「そうか、強いな。弱虫で、泣き虫だったのにな」

「えくく？ ひどいな、そうでもないでしょ」

「ははは。それじゃ、俺は帰るわ。電車なくなるといけないし」

「うん。お義姉さんによろしくね」

「うん」

兄は、部屋を出て、下におりて行った。ちょうど帰ってきた修二と少し、話をしていたようだが、そのうち、

「じゃ、また来るから」

とだけ言つて、あっさりと、家を出て行った。

翌朝、圭介から早々と、電話があつた。

「今日、早めに来れる？ おふくろが来る前に。ちょっと相談があるんだ」

相談？なんだろう…。

急いで支度をして、病院に行くと、ベッドに座り込み、まだかまだかっていう顔で、圭介は待っていた。私の顔を見ると、
「瑞希！ちよつと、こっちに来て」

と、病室を出て、廊下の隅にある休憩所に行った。そこにはテレビがあり、よくおじいさんたちがたむろしているが、まだ、朝食の時間なのか誰もいなかった。

圭介は、朝食もすごい速さで食べたようだった。

「あのさ。俺…」

「うん」

小声で、ささやくように圭介が話し出した。

「退院しようかって思ってるんだ」

「え？」

「っていうか、もう治療受けるのやめようかって」

「辛くなったの？」

「違うよ。治療したって、治らないし、延命って言ったって、どれだけ命が延びるかもわからないし、毎日、夜には瑞希帰っちゃうし、だったら、瑞希と暮らした方が、瑞希と一緒にいられる時間取れる」
「暮らす？」

「うん。本当は結婚もしたい。あ。でも、籍は入れないほうがいいかなって思ってるけど…」

あまりにも、急な話で頭が真っ白だったが、私は勝手に、
「籍、入れたい」

と、言っていた。そう言って、自分でも驚いたほどだ。

「え？」

「私…、圭介の奥さんになりたいよ」

「でも、わかってる？未亡人になるんだよ？」

「いいよ。別に…」

「……」

圭介が、少し黙って考え込んだ。

私は、一緒に暮らせるなら、子供も考えられるって思った。そう
だ、だったら、ちゃんと籍を入れたい。圭介の子として、生みたい。
「うん。そうだな……」

圭介は、また考え込み、そして、微笑んで私に言った。

「うちの親にも、瑞希の親にも言わなくっちゃ」

「うん！」

私は元気に、返事をした。嬉しかった。でも、心の奥から不安の
声が聞こえてくる。本当にいいのだろうか…。安易だろうか…。延
命の治療を続けた方が、いいのだろうか…？

だけど、私はずっと疑問に思っていた。本当に圭介は、辛そうだ
なのだ。その辛い日は丸々1日、会話もできない。いや、圭介の存
在を感じられたら幸せだが、だけど、これからも治療を続ける意味
があるのかがわからなかった。

家に電話をして、母と父に来てもらった。というのも、その日は
土曜日で、父も家にいたからだ。圭介も、家に電話して、両親を呼
んだ。

それから、みんなで一階の喫茶店に入り、そこで、圭介は病院を
出て、私と住むことや、治療はもう受けないということを告げた。
相談とか、そんなことでなく、断言していた。

「え？」

みんな、動きが止まっていた。父がようやく、口を開いた。

「圭介君、君、そうは言っても……」

「はい、無理は承知です。また、ご迷惑もかけます。結婚ってこと
になったら、籍も入れることになるし……」

「え？」

結婚の話もすると、また、全員が目丸くした。

「圭介、それは、少し、考え直した方が…」

今度は、榎本部長が、動揺しながら言った。でも、
「いいわ。私は賛成。圭介のしたいようにするのが、1番だと思うわ」

と、圭介のお母さんは、はっきりとそう答えた。

「瑞希は？どうなの？」

母が聞いてきた。

「私も、一緒にいたい。一緒に暮らせたら、ずっと圭介といられる。それに…」

「それに？」

「圭介と、結婚したい」

「…そう」

母は、一回息を吸い込み、

「私も賛成よ。瑞希がそうしたいなら、反対はできないわ」と、きっぱりと言ってくれた。

父親の二人はまだ、納得がいかなかったが、母は、話を進めたかった。

「じゃ、早くに、いろいろ決めないと…。住まいとか、結婚式とか…」

「式は大変だろう？」

慌てて父が、そう言つと、

「せめて、ウエディングドレスは、着せたいわ」と、母が言った。

「あ、俺も見たい」

圭介がその話に、身を乗り出した。

「じゃ、身内だけで、式を挙げましょう。圭介が疲れない程度の、簡単な…。ね？」

圭介のお母さんも、式を挙げることに賛成した。

嬉しい…と同時に、いいのだろうかという不安も出てくる。でも、

圭介の顔を見ると、すごく嬉しそうにしているので、何も言えなかった。

いいんだ。だって、すぐそばにいたいもの。ずっと、丸々1日圭介を感じていたいもの。不安を感じている私自身に、そう心の中で私は言って、安心させた。

4人の意見が一致すると、ナースステーションに行き、竹内先生の予定を聞いた。できるだけ早くに話がしたいと、総勢6人で押しかけ、看護師さんは驚いていた。

「あ。今日の午後の回診のあと少しなら、時間が取れそうです」と、スケジュールを調整してくれた。ありがたい。

「じゃあ、圭介、1度帰って、また来るからな」

そう部長は言つと、圭介のお母さんだけ残し、帰っていった。私の両親も、またね、と圭介に言つて帰っていった。

午後、約束の時間に部長が現れ、お母さんと二人で、竹内先生のところに行った。圭介は病室に残された。そして、20分ほどして、ご両親が病室に来た。

「OKよ」

「え？本当に？」

「ええ」

お母さんが微笑んだ。私は部長から呼ばれて、廊下に出て、一緒に休憩所のベンチに座り話を聞いた。

「圭介の、この前の検査の結果も、教えてもらったんだ…」

「はい…」

「どうやら、転移しているらしい…」

「え…？」

「だから、治療をこれ以上続けても、あまり意味が無いかもしれないと言われて。病院を出て、家に帰ることをお願いしたら、簡単にOKが出たんだよ。余命、3ヶ月とも言われた…」

「……！」

「いや……これは君に、言うかどうか迷った。圭介には、竹内先生から報告があるだろう。でも、やはり、君も知っていたほうがいいと思つてね。3ヶ月、あいつの好きにさせてあげたいが、本当に籍をいれてもいいんだらうか……？」

「……。はい」

涙が出た。圭介と、一緒に冬は迎えられないのだ。

しばらくそのまま、ベンチに座り泣いていた。部長は、そのまま横に黙っていてくれた。

覚悟していたことだ。いつかこういう日が来ることを……。私は、ますます、今を大切にしないとと思った。圭介との時間、圭介との瞬間、今を。

病室に戻ると圭介はいなかった。どうやら、竹内先生に呼ばれたらしい。きっと、転移したこと、余命3ヶ月であることを告げられているのだろう。

お母さんと一緒に、病室で圭介が戻ってくるのを待った。どんなに圭介がっかりしていようと、どんなに悲しがつていようと、また、一緒に泣いたらいい、抱きあつたらいい……そんなことを思いながら私は待つていた。

圭介が戻ってきた。お母さんはほっとして、家のことをしなくちやつて早めに帰つていった。

「屋上行かない？瑞希」

「うん……」

圭介と屋上に行った。夕方だったけど、まだ日が差していた。

「瑞希……」

「ん？」

「なんでもない……」

圭介が何かを言おうとして、やめた。

「何…？」

「俺、あと3ヶ月だつて…」

「……」

竹内先生から聞いてきたんだな…。

「瑞希、聞いた…？」

「うん、お父さんから…」

「そう…」

「圭介、私、圭介との時間大事にしていこうよ」

「うん。俺も…」

「圭介と片時も離れない。ずっと、一緒にいる」

「うん…」

私は、圭介にキスをした。そして、ぎゅって抱きしめた。圭介も私をぎゅって抱きしめた。徐々に太陽が沈んでいく、夕日の中、私たちは抱き合っていた。

数日後、圭介は、退院をした。

うちの実家にすぐのアパートを借りた。家具は、両親がそろえてくれ、次の大安吉日に籍を入れた。私は、榎本瑞希になった。

その日に、身内だけで、レストランの一室を貸切り、ウエディングドレスを着て、結婚式をした。

圭介は、白のタキシードが、すごくすごく似合っていたが、頭には帽子をかぶっていた。結局杏ちゃんには、帽子をいらないと断り、私が編んだ網目のきたない帽子をかぶった。

式の間、私の両親も、圭介の両親も泣いていた。

桐子が、静岡からわざわざ来てくれた。笹塚さんも出席してくれた。兄も、まだ、つわりが少しある義姉も緑ちゃんも出席してくれた。修二の彼女の袖ちゃんも来て、感動して泣いていた。

少ない人数ではあったけど、そこに集まったみんなが、祝福してくれた。

最後に、花束を持って、担当医の竹内さんと、婦長さんも、みんなからのお祝いを持って来てくれた。

式が終わり、新居に二人で入った。いつせいのせで、一緒に玄関をまたいだ。靴を脱いで、部屋に入る。

「これから、二人の生活が始まるね。瑞希」
「うん」

そう言つて、手をつないだ。

圭介の瞳を見ると、私が映っている。私の顔は輝いていた。圭介の顔も、輝いていた。共に生きると決めた。たとえ、3ヶ月でも…。それでも、私は、圭介のお嫁さんだ。

ここで、圭介との生活が始まる。1日を、一瞬を大事に大事にして生きよう。圭介と、圭介の隣で、圭介をいつもいつも全身で感じながら…。圭介の全部を感じながら…。

30 命

8月、暑い夏だった。

圭介とはほとんどを家で過ごしていたが、向こうの家族が遊びに来たり、会社の人も、時々遊びに来てくれた。

驚いたのは、稲森さんが楠木さんと二人で来たことだ。いつのまに仲良くなっていたのだろう。

うちの実家が近かったので、ちよくちよく圭介と遊びに行った。

クロはそのたびに大興奮したが、なぜか、今までのように圭介に抱きつくことは無かった。

そしてよく、私と圭介とクロで、夕方、涼しくなってからお散歩に出た。近くの公園のベンチに座り、圭介と風や緑の匂いを感じた。

圭介と、朝起きると窓を開け、晴れていても、曇っていても雨でも、空を眺めた。入道雲が綺麗だと喜んだり、雨の日は、雨の音を聞いたり…。

特に雨上がりの、木々の葉に残るしずくが圭介は好きだった。

雨の降る前には、

「雨の匂いをするよ。きっと、今日は、雨になるよ」と、圭介は言った。

晴れた日には、窓を開けて、蚊取り線香をたき、風鈴をつるした。風が吹くと、風鈴がチリリンと鳴ってすぐ、風情があった。

実家のウッドデッキで、修二や柚ちゃんも一緒に、バーベキューをして、そのあと、花火をした。

花火のしめくりは、線香花火。とても、はかなげで、綺麗だった。圭介は意外とこういう情緒のある、日本的なものをとて、喜んでいて。

近くであるお祭りにも二人ででかけたが、私が浴衣を着ると、そ

れを見て、圭介はめちやくちゃ喜んでいた。お祭りでは、綿菓子を買ひ、ヨーヨーを釣り、焼きそばを食べ、射的をして、かわいいくまのぬいぐるみをもらひ、心のいくまで楽しんだ。

蝉の声も、二人で聞いた。

「蝉っていかにも、夏って感じだよね」
と、よく圭介が言った。

あまりにもうるさく感じていた蝉の声も、ヒグラシのカナカナカナという声が聞こえてくると、夏の終わりなんだなって、寂しくなった。

そして、夜には、秋の虫の声も聞こえるようになった。

布団を和室に2枚敷き、二人で並んで横になる。リーリーリー…。鈴虫の音がする。横に寝ている圭介の顔を見る。相変わらず、綺麗な圭介の横顔。圭介は、しばらく黙って虫の音を聞き、

「もう、秋だね。昼間はすごく暑いのにね」
と、つぶやいた。

「なんか、季節をこんなに感じたこと、なかったな。ね、暑いけど、確実に空の色が違ってきたと思わない？」

圭介が、聞いてきた。
「うん、違ってきた」

毎日、空を見る。風を感じ、匂いをかぐ。音を聞き、味を楽しむ。それだけの日々。

圭介は見るものを喜び、体中で味わっているかのようだった。あと、数ヶ月しかない命を、この世界を、思う存分に味わっているように見えた。

それは、私も同じだった。圭介という瞬間瞬間がとっても大事で、とっても愛しかった。今という瞬間をぎゅって握り締めて、毎日を生きていた。

9月、残暑は続いたが、徐々に朝晩冷えるようになっていった。台風の来る日は、雨戸を全部閉めても、夜中ガタガタとアパートが揺れて、うるさかった。今まで、台風なんてなければいいと思っていたが、圭介はその大雨の音も風の音も、音楽を聞くかのように楽しんでいた。

そして、いたずらっぽく、私の目を見て、

「瑞希、風の音が怖いから、一緒に布団で寝よう」と、言ってきたりした。

雷の音がする日も、

「瑞希、怖いでしょ？手をつないであげるよ」

と圭介は、そんな可愛いことを言う。

私は、別に怖くもなかったけど、圭介のそんな言葉にあわせて、怖がって見せたりした。

二人の時間は、早いようで、ゆっくりと流れていた。特に夜、電気を消して二人で居ると、前に見たプラネタリアムを思い出し、この宇宙に二人きりしかないんじゃないかって、そんな気もした。

圭介が先に寝ると、私は圭介の寝息を聞き、しばらく圭介の顔を見つめていたし、逆に、私が先に寝る日は、圭介が私の顔をずっと眺めていたようだった。

朝になると、圭介は、頭痛や吐き気があるようだったが、そんなに苦しそうじゃなかった。また、無理をしたり、我慢をしたりしているのかとも思ったが、圭介は、

「瑞希といると、俺、大丈夫みたい」

と、笑って言った。

そんなある日、私はふと、カレンダーを見た。あまり、カレンダーも見ないし、今日が何日で、今日が何曜日かも気にしなかったが、そのときはふと気になった。

「あれ？」

8月のカレンダーを見て、7月も見て……。そんな様子を見た圭介が、不思議そうに、

「どうしたの？」

と、聞いてきた。

「ないんだ……」

「何が？」

「……」

言いづらかった。もし、何かの間違いで、圭介をぬか喜びさせてはまずい。

「あ、ごめん。なんでもない。勘違い……」

私は、そう笑ってしらばっくれた。

その日の夕方、また、クロと散歩に行った。

「ちよつとコンビニで、飲み物買って来るね」

「うん」

圭介と、クロを公園に残し、私は急いで、コンビニの前を素通りして、直ぐ近くにあるドラッグストアに入った。そこで、急いで妊娠検査薬を買った。それから、コンビニで、飲み物と雑誌やお菓子を買い、公園に戻った。

圭介はクロと、ベンチでのんびり空を見ながら、何か話していた。
「お待たせ」

ベンチで、二人でお菓子を食べながらお茶を飲み、ゆっくりとしてから実家に戻った。

私は、母と圭介が話しこんでいる隙を見て、2階のトイレにこっそり行った。そのあとに、自分の部屋に入り、検査薬の結果がわかるのを待った。

どきどきした。数分もしないうちに、結果は現れた。

「陽性だ……」

赤紫のラインがはっきりと、表れていた。

「圭介の赤ちゃん…！」

私はその場で、おなかを押さえて座り込んだ。嬉しくて涙が出た。
「良かった。赤ちゃん、来てくれたんだ…」

私のもとに、赤ちゃんが来てくれた。神様が、遣してくれた。そう
うと思いがなく、涙がポロポロと流れた。

トントントン…。圭介の、階段を上ってくる足音がした。

「瑞希…？」

部屋のドアが開いた。

「どうしたの？なんで2階に来てるの？」

私になかなか、リビングに現れないから、不思議に思ったらしい。

「圭介…」

ポロポロ、涙を流している私を見て、

「え？どうした？」

と、圭介は驚いたが、すぐに私が持っている妊娠検査薬に気がついた。

「何、これ…？」

知らないのか。無理も無い。まだ、22歳の圭介が知るわけも無い
か…。そう、圭介は、8月の誕生日で、22歳になっていた。

「これ、妊娠検査薬。それでね…」

「え？」

妊娠検査薬と聞いただけで、圭介はびっくりしていた。

「この赤紫の線が出たってことは、陽性なの」

「ようせい…って何？」

「妊娠してるってこと」

「……。赤ちゃん…、できたってこと…？」

「うん」

「……」

しばらく圭介は呆けていた。じいって私の顔を見たまま、動かな

かったが、目がみるみるうちに真っ赤になり、圭介は涙を流した。
「まじで?」

「うん…」

「すげえ、すげえ瑞希…」

「うん…」

圭介は優しく、私を抱きしめた。

「瑞希のおなかの中に、俺の赤ちゃんいるんだ…」

「うん」

「すげえ。命が芽生えたってことだよね…」

「うん…!」

圭介は泣いているようだった。

圭介はしばらく黙ったまま、私を抱きしめていた。それから、私の顔を見て、私の目を見つめて、私の頬につたっている涙を拭いてくれて、

「命ってすごいね…」

と、圭介はささやいた。

「すごいと思わない? 瑞希。だって、こんなに人を感動させるんだよ」

「…うん」

拭いたそばからもう、涙がこぼれ落ちた。圭介も、目をうるうるさせながら、

「お母さんにも、報告に行こう」

と、私の手をひいた。

母に告げると、母も涙を流して喜んだ。

夜には、父や、修二にも報告をして、家に帰り、圭介は電話で、ご両親に報告をした。

翌日には、圭介のお母さんが家に来て、おめでとう、おめでとうと、圭介と私を抱きしめながら泣いていた。

その日から、私と圭介は、日記をつけることにした。

圭介は自分が感動した空や木を写真に撮った。私が料理をしているところや、食べているところも写真に撮った。私も圭介を撮った。笑っているところ、寝ているところ、そしてそれをプリントアウトして、毎日の日記にはった。

それは、赤ちゃんに見せるための日記だった。

あなたのお父さんは、毎日何を見て感動し、何を感じて生きていたのか。毎日、どんな表情をし、そして、どんなにあなたという存在、あなたという命を愛していたかを、いつか、赤ちゃんが大きくなり、わかるようになったら、見せてあげたい…。

圭介のビデオも撮った。圭介は私のことも撮った。

「私のことは撮ってもさ〜」

と、ちよつとぼやくと、

「だって、パパがどんなにママを愛してたかが、これ見たらわかるじゃん」

と、圭介は笑って言った。

「赤ちゃんの名前考えなくちゃ。男の子だったらなんて名前がいい？」

ビデオを撮りながら、圭介は聞いてきた。

「う〜〜ん、そうだな〜〜。春に生まれてくるんだよね〜〜」

「うん。春男にする？」

「ええ？単純すぎる〜〜」

「じゃ、春っぽい名前って何？」

「こうさ〜〜、さわやか〜〜な感じよ」

「さわやかって漢字であるよね。他になんて読むっけ？」

「爽そうって読むよ」

「んじゃ、爽太そうたってどう？」

「榎本爽太、いいね〜〜」

「じゃ、女の子だったら？」

「うっっん、圭介が考えてよ」
今度は私がビデオを持ち、圭介を映した。

「女の子ならねっ。春香。春の香りで春香とか、どう？」

「あ、いいね。春の香りかっ」

「榎本春香。あ、いいじゃん！」

圭介が、微笑んだ。最高の笑顔だ。これを見た子供は絶対喜ぶよな。そして私にこう言うんだ。

「ママ、パパはすごくかっこよかったんだね」

そして、私は、嬉しそうに子供に自慢する。

「うん、すごっく、かっこよかったんだよ。ママはいつもパパに、見とれていたんだよ」
って……。

翌年の春……。

…痛い。時計を見る。5分間隔で陣痛が来ている。破水もあった。慌てて実家の母に電話をした。まだ、予定日まで、一週間もあるのに……。

ピンポーン……。母だ。お腹をおさえながら、玄関のドアを開けた。

「瑞希？破水があつたって？」

「そうなの。どうしよう……」

「病院には？」

「電話した。陣痛が、5分間隔になったら来てくださって。もう、5分間隔になってる」

「大変。タクシー呼ばなきゃ！」

慌てて、母がタクシーを呼んだ。タクシーは、5分で来てくれた。
「い、いた……い」

お腹をおさえながら、タクシーに乗り込む。ああ、一昨日、入院

の準備してて良かった。

運転手が動揺して、

「こういうときは、急いだ方がいいですか？ ゆっくり行ったほうがいいですか？」

と、聞いてきた。母が、

「なるべく早く、でも、安全をお願いします」と運転手に、そう言った。

「い、いた〜い」

なんなんだ？ 五分間隔がもっと、短くなっている。

タクシーで5分もかからない病院について、母に抱えられながら、入り口に入る。たくさん妊婦さんがいる待合室を通り、受付に行く。

「電話した、榎本です」

「ああ。陣痛5分間隔になりましたか？」

「いえ、もっと、短くなってきました」

そう私が言っても、受付の人はここに記入してくださいと、入院手続きの書類を悠長に出してきた。いすに座り、書いていても、陣痛の間隔が短くなるばかり…。

看護師さんが来て、

「お母さんは、病室まで案内するので、一緒に荷物を持って来てください」

と、これまた悠長なことを言ってくる。

「え？ 私は？」

「そのあとに來ますから、ここで少し待っていてくださいね」

とんでもない！

「すみません、いてて…。陣痛の間隔がもう、かなり短くって、う、生まれるかも…」

「大丈夫ですよ。初産だし、そんなに早くには生まれませんよ。ま

だまだ、これからが長いんです」

「でも……」

「じゃあ、分娩室で、診察してみましようか？」

看護師さんが、ようやく私の言葉を聞き入れ、分娩室に連れて行ってくれた。そして、私を分娩台に乗るよう促し、私が分娩台に乗ると、

「どうかしらね、何センチくらい開いてきているかしら」

と、看護師さんは、まだまだ余裕でいた。だが、次の瞬間、

「あら！赤ちゃんの頭が見えてる！」

看護師さんは、そう叫んだ。それを聞いた横にいた看護師さんが、慌てて先生を呼びに行き、私はいきなり、出産をそのまますることになった。

母は、部屋に案内されるところだったが、分娩室の前で待たされることになり、とにかく、分娩室の中は、大騒ぎになっていた。

私は、分娩台にあがる前に、服だけは着替えていた。

先生や、助産婦さんがやつとこ、平静さを取り戻し、私に、

「さあ、力んでもいいですよ」

と、言ってくれた。

先生も、助産婦さんも、看護師さんも、定期健診で何度も来ているので、みんな顔見知りだ。

私は、ラマーズ法を受けていたので、隣で、看護師さんが、

「ヒッヒッフ……」

と一緒に、呼吸をしてくれた。それに合わせて、

「ヒッヒッフ……」

と、呼吸をする。

「はい、力んで！」

「う……ん……」

力むが、陣痛がすうって消えていく。

「はい、大丈夫ですよ。次のでまた、頑張りましたよ」

先生が、優しく言ってくれる。すぐまた、陣痛が来る。

「力んで！」

「う~~~~ん！」

「もつと！」

「う~~~~ん！！！」

「はい！力むのやめて！」

ズル……。まさに、「ズルツ」っていう感覚がした。それから、

「おぎゃあ~~~~！おぎゃ~~~~！おぎゃ~~~~！」

という、泣き声……。

ああ、生まれた。それと同時にすごい脱力感……。

「生まれましたよ。元気な男の子ですよ」

「男の子……？爽太だ……」

赤ちゃんは、私のお腹にのせられて、臍の緒を切られていた。

それから、助産婦さんが、抱っこして産湯に入れた。産湯にいれた瞬間、赤ちゃんは泣き止んだ。そして、産着にくるまった赤ちゃんを、私のもとに助産婦さんが連れてきてくれた。

「ほら、お母さんですよ」

赤ちゃんは、目をぱちりと開けていた。

「色白の赤ちゃん……。お父さん似ね。ほら、髪も黒くて、目や鼻も似てない？」

助産婦さんが、赤ちゃんの顔を見ながらそう言った。本当だ。圭介に似ている。圭介に似ている男の子だ。

嬉しくて、涙が出た。よく、生まれてきてくれたね。まだ、小さな手をぎゅって握っている。

ああ、無事に生まれてきてくれたんだ……！嬉しい……！

バタバタバタ！

「こちらですよ、さあ、急いで！」

なんだか、分娩室の外があわただしい様子。

分娩室のドアが開き、息を切らし、ハアハア言っている圭介が入ってきた。

「瑞希、ごめん、遅くなった！」

圭介が、分娩台に近づいてきた。

「あ！ほら、お父さんですよ！」

助産婦さんが抱っこしている、赤ちゃんを圭介に見せた。

「え？」

圭介が、目を真ん丸くした。

「榎本さん、抱っこしてみる？」

「え？もう生まれたの？」

「そうよ、ほら、3400グラムの男の子。」

圭介は、おそろおそろ赤ちゃんを抱いた。赤ちゃんは、圭介の腕の中にすっぽりと入ってしまった。

「小さい…」

「可愛い…」

「こえ〜、抱っこするの…」

いろいろと圭介は言葉を発したが、そのあと赤ちゃんを見ながら、涙をこぼした。

「瑞希に似てる」

「あら、お父さん似じゃない？目元も、鼻も…」

助産婦さんが、赤ちゃんをのぞきこみ、そう言った。

「でも、口元、瑞希だ…」

圭介はそう言うと、私の方に赤ちゃんを抱っこしたまま来て、

「瑞希、ありがとう」

と、小さな声で、ささやいた。

「隣にいてやれなくて、ごめん。立会い出産しようって、ラマーズ

法まで一緒に覚えたのにな」

「うん、予定日より、一週間も早かったんだもん」

「こいつ、早く生まれてきたかったんだな」

そう言つと、圭介は赤ちゃんに、

「この世界が、どんなにすばらしいか、お腹の中で聞いていたから、早く生まれたかったんだよな？」

と、笑いかけた。

病室まで、母と圭介もついてきてくれた。私はふらふらなので、車椅子で看護師さんに押してもらった。病室は、個室。圭介が、奮発して個室を頼んでくれた。

ベッドに横になると、看護師さんは出て行った。

「よくやったわね。お疲れ様、瑞希」

母が、ねぎらいの言葉をかけてくれた。圭介は、ベッドの横のいすに腰掛けると、ずっと私の手をにぎっていた。

しばらくすると、圭介のお母さんも来た。

「おめでとう、瑞希さん」

「あ、おふくろ……」

「榎本さん、来てくれたんですか？」

母が聞くと、圭介のお母さんは、にこつと笑って答えた。

「もちろんよ、本当は生まれる前に来たかったんだけど。赤ちゃん抱っこしたかったわ」

「私もよ。すぐに看護師さんがつれてっちゃって、ちょっと見ただけ。3400グラムの男の子。圭ちゃん似だったわ」

「あ、やっぱ俺似？なんか、サルにしか見えなかったけど……」

「圭介ったら、サルはないでしょう」

圭介のお母さんが少し、あきれてそう言つと、

「でも、可愛かったよ。俺、抱っこさせてもらった」

と、圭介は、嬉しそうに言った。

「すげえ、小さかった。俺、もう父親なんだな……」

「そうよ、しっかりしてよ。あなたまで子供じゃ、瑞希さんが困っちゃうわよ」

「わかってるよ」

あははは……。4人で、そんな会話をしながら、笑いあった。

しばらくして、お母さんたちは、また明日来るわねと、出て行った。

そして、病室に圭介と二人になった。

「仕事は？ 戻らなくていいの？」

「うん、もう少しいるよ。あ、明日土曜だし、みんなして、赤ちゃん見に来るって言うってた」

「本当？」

「うん。それにしても、会社で電話してきてから、すぐに生まれちゃったの？」

「そうだね、破水して、陣痛きてすぐ、圭介に電話したでしょ。それからお母さんに電話して、お母さんが飛んできてくれて、一緒にタクシーに乗って、病院ついて、分娩台上がって、すぐ生まれちゃった。だから楽だったよ」

「超、安産か……。やるな……。さすが俺の赤ちゃんじゃん。瑞希を苦しめることなく、生まれるなんてさ」

「うん」

「でも、生まれる瞬間、見えなかった、俺……」

「だけど、すぐに抱っこできたじゃない？」

「赤ちゃん、今どこ？」

「新生児室みたい」

「そっか。瑞希、疲れたでしょ。少し休みなよ。寝るまでついてあげるから……」

圭介はずっと、手を握っていてくれた。私は圭介の手のぬくもりを感じながら、目を閉じ、そして安心して、すぐに眠りに着いた。

気づくと、圭介はもういなかった。会社に戻ったようだ。

そのあと、看護師さんが来て、新生児室まで連れて行ってくれた。爽太は、元気に顔を真っ赤にして、大泣きしていた。

「おっぱい飲ませてあげてね」

説明を受けながら、爽太におっぱいをあげてみたが、なかなか上手には飲んでくれなかった。

哺乳瓶で、ミルクをあげるのも、看護師さんに教えてもらいながら、やってみた。これには、元気にすいつき、ごくごくとよく飲んでいった。

「大丈夫よ。すぐに、おっぱいも飲んでくれるようになるから」

看護師さんは、そう言って安心させてくれた。

圭介に似ている赤ちゃんを、両腕に抱き、私は幸せをかみしめた。なんだか、圭介というみたいにあったかい、あったかい、空気に包まれた。

翌日、朝から圭介が来て、一緒に新生児室に行った。圭介のご両親も圭介と来てくれた。

「男の子だったら、名前は爽太って圭介と決めてたの」

「爽ちゃん……」

みんなで、新生児室で寝ている爽太に声をかけた。それから、しばらくみんなで爽太を見ていた。

「ああやって、寝てるだけでも、すごい幸せな気持ちにさせてくれるね。すごいな、赤ちゃんって……」

圭介は、爽太を見ながら、そうつぶやいた。

「うん、そうだね……」

私も、爽太を見ながらうなずいた。

「命って、すごいな。っていうかさ、存在がすごい。そこにいるだけで、周りを幸せにするんだから」

「圭介もね……」

「え？」

「圭介だって、そうだよ。ここにこうしているだけで、周りを幸せにしているよ」

私がそう言っていると、隣で圭介のお母さんが、大きくうなずいた。少し涙ぐみながら。

「そっか…。あ、でも、瑞希もだよ。俺、瑞希がここにこうしていてくれるだけで、幸せだから」

圭介と少し見つめあってから、また、新生児室の爽太を見た。他にも赤ちゃんを見に来ている家族がいたが、どの人の顔も、幸せそうだった。

新生児室には、赤ちゃんが7、8人並んでいたが、泣いている赤ちゃん、寝ている赤ちゃん、手を動かしている赤ちゃん…。でも、みんなみんな、そこにそうしているだけで、それだけで、周りを幸せにした。

きっと、みんなそうなんだ。そこに、そうしているだけでもう、最高の存在なんだ。命ってそういうものなんだ。

圭介が、私の手を握ってきた。そして、私にささやいた。

「良かった。瑞希の夢をまた、一つ叶えられたよ」

「うん、ありがとう。圭介…」

それを、横で聞いていた圭介のお母さんは、また涙ぐみ、榎本部長はそんなお母さんの背中を、抱いていた。

圭介は、みんなを、幸せにしているね…。そんなことを、思いながら、私は爽太をずっと見ていた。あくびをする爽太、手を動かす爽太、眉をしかめる爽太。

爽太を見ている圭介も、圭介のご両親も、幸せそうな嬉しそうな顔だった。

31 奇跡

爽太が生まれて4日目、私は爽太と退院した。

圭介の運転する車に乗り、私たちのアパートに帰った。部屋には、ベビーベッドが置いてあり、そこにそうと爽太を寝かせた。

ベビーベッドに寝ている爽太を、見ている圭介に、

「3人の生活が、これから始まるね」

と、私が言つと、

「そうだね」

と圭介は、嬉しそうに爽太の小さな手を握った。

「あ！見て、すっげえ！」

爽太は、圭介の指をぎゅって握っていた。

「けっこう、力あるよ。こんなにちっちゃいのに…」

「うん」

圭介は、嬉しそうだった。それから、しばらく爽太に指を握らせたまま、爽太になにやら、話しかけていた。

そんな圭介を私は見ながら、圭介が起こした奇跡を思い出していた。そう…。それは、奇跡としか言いようがない出来事だった…。

あれは、去年の10月のこと。

いつもは圭介の検診の日にも、結果を聞く日にも、私は病院にっいて行っていたが、赤ちゃんがいるから、風邪なんかうつされたら大変だって、圭介は私を家に残し、一人で病院に行った。

私はつわりもまったくなく、全然大丈夫だったのに、圭介はあれやこれやと、気を使ってくれていた。

一人で、待っているのも、さみしくて、すぐ近くの実家に遊びに行った。

玄関にクロがかけてきたが、抱きついては来なかった。頭がいいなって本当に思う。

「あら、一人？圭ちゃんはどうしたの？」

「一人で、検査の結果を聞きに病院に行ったの。総合病院だから、いろんな菌をもってる人がいるから来るなって言われちゃった」

「そう。でも、お母さんも行かないほうがいいって思うわ」

「うん。家にいても、暇だしさ。ねえ、お料理でもしようか？夜ご飯、圭介と食べていい？圭介にも、実家にいるよってさつき、メールしておいた」

「いいわよ」

夕飯の買い物に、母と一緒にいき、戻ってから二人で、リビングでゆっくりとしていた。

ピンポン、ピンポン、ピンポーン！突然、何度もチャイムが鳴った。それから、玄関をドンドンたたく音。

「瑞希！いる？」

圭介だ。何かと思い、母と慌てて玄関に行き、鍵をガチャって開けると、圭介がすごい勢いで入ってきて、靴をはいたまま家に上がり、私を抱きしめた。

「瑞希、やった！やったよ！」

「え？何？何が？」

私も母も、なんのことだかわからず、戸惑っていた。

「無くなった。がん細胞全部消えてた！」

「……！」

圭介に、抱きしめられたまま、私は全身の力が抜け、立ってられないほどになった。

「本当に？圭ちゃん……」

「本当です！」

圭介が母に向かい、さつき私のことを抱きしめるので、床にほっ

ぽった紙袋を取って、その中から、なにやらガサガサ出し始めた。

だが、私がへなへなと座り込んだので、圭介は慌ててまた、紙袋をほっばらかし、私の体を支えた。その紙袋を母が拾い上げ、中身を出すと、レントゲン写真が出てきた。それから、検査の結果の用紙。

「それ！見てください。っていつても、見てもよくわからないんですけど」

圭介はそう言うのと、私を支えながら、リビングに入ろうとした。

「圭ちゃん、靴は脱いで」

母にそう言われて、圭介は私を支えながら、ぽいっぽいっと靴を玄関に脱ぎ捨てた。

圭介に抱えられて、リビングのソファに行き、腰を下ろした。母もソファに座り、圭介も私の隣に座った。

「竹内先生が、奇跡が起きたよって言うてくれました。また、来月検査はしますが、でも今の段階で、どこにもがん細胞が見当たらなくなっていると、言っていました」

「……」

母と私は、顔を見合わせた。

「転移していた…癌は？」

母が聞くと、圭介は即答した。

「それも、消えてました」

「……」

母とまた、私は目を合わせた。

「竹内先生も婦長も、すごく喜んでくれました。でも、今の医療ではありえないことで、奇跡とか、がん細胞がまったく消えたとか、そういうふうには公には言えない。癌であったことが、誤診だったとしか言えない、とも言っていました」

「……」

夢でも見ているのかと思った。圭介の言っていることが、途中でわからなくなった。顔もぼやけてきた。そして気づいた。ぼろぼろに私は泣いていた。

「ひいっく…」

圭介が、私が泣いているのを見て、また私を抱きしめた。私は、どんどんどん、涙が溢れて、声をあげて泣き出した。母も、泣いていた。

「奇跡ね…。まさに、奇跡ね…。ああ、信じられないけど、本当のことよね…」

「はい…」

母にそう答えながらも、圭介はしばらく私を抱きしめていた。

「これ、この検査の結果を持って、圭ちゃんの家に行つて来たら？」

「はい。じゃ、瑞希は、ここにいて…」

「え？」

「大泣きしてて、大変そうだから。報告したら、直ぐに戻るよ」

そう言うのと、圭介は、すごく軽やかに家を出て行った。

「そういえば、圭介、ここ最近、朝起きても頭痛していなかったし、顔色も良かったし、食欲もあつたし…」

「髪の毛もいつのまにか、黒々と生えちゃったものね…。すごいわね」

母が、涙を拭いて、笑いながら言った。

「さあ！瑞希！今日はお祝いだわ！修二と、お父さんにも電話して、早めに帰ってもらいましょう。お寿司取りましょうね」

母は、そう言うのと、早速まずお寿司屋さんに電話をした。

それから、父や、修二にも連絡した。父は、どうやら、うむとなずいたまま、しばらく黙り込んでいたらしく、修二は、電話の向こうで奇声をあげているのが、受話器から聞こえてきた。

「@* \$-!」

もう、言葉にはなっていなかった。

お料理をしていると、電話が鳴った。圭介のお母さんからだった。「今、圭介が来て！検査の結果を聞いて！それで、今日お祝いをしようかと」

圭介のお母さんは、嬉しさでいっぱいの声で話していた。その声が大きかったので、受話器からもれて聞こえてきた。

「はい、うちでも今、お祝いの用意をしてるんですよ。よかったら、うちにいらっしやいませんか？」

母が、そう提案した。

「うかがいます、うかがいます。じゃ、主人と、圭介と一緒にいきます」

夜、3人で来て、我が家でお祝いをした。圭介もお酒を飲んでいった。みんなで、何度も何度も、乾杯をした。クロも、尻尾を振りまくり、圭介の横で嬉しそうにしていた。

それから、しばらくして笹塚社長のもとに圭介が報告に行くと、すぐにでも会社に戻って来いと社長は言ってくれた。圭介は、仕事にすぐに復帰した。

会社のみんなは、圭介の病気のことを知っていたので、復帰すると、みんな喜んでくれて、やはり会社でもお祝いをしてくれたようだ。

圭介は、すぐにはばりばり働くのも控え、定時にはきちんと帰ってきたが、少しすると、徐々に残業も増えていった。だが、社長の配慮もあり、以前のような状態にはならず、10時頃までには、帰宅できていた。

11月、週末に圭介と紅葉を見に行った。私は、つわりがないとはいえ、遠出はつらいので近くの公園や、森に行っただけだが、それでも、赤や黄色く色づいた木々を眺めながら、二人で感動した。日記はあいかわらず書いていて、紅葉も写真に撮った。

12月、クリスマスにデイズニールランドには行けなかったが、小さめのツリーを買い、飾りつけ、圭介とケーキを食べて、プレゼントを交換し合った。

圭介は、とても可愛いネックレスをプレゼントしてくれた。

「素敵、可愛い！ありがと〜」

早速、ネックレスをして鏡を見た。

「これ、買うの恥ずかしくなかった？」

と聞くと、圭介は全然って笑って答えた。

私は圭介に、とても似合いそうなシャツをプレゼントした。すぐに圭介がそのシャツに着替えると、めちやくちや似合っていて、かつよかった。

「圭介、かつこいいよ〜！」

私が喜んで、そう言うのと、

「瑞希は、俺にべたばれだから、まいっちゃうよな〜」

と、圭介はにやって笑った。そうやって、いつも、茶化したことを言うけど、実は、照れ隠しなんだって事は、もう前から知っていた。圭介の耳は赤くなっていた。

シャンパンを開け、二人で乾杯した。

「二人きりのクリスマスは、今年で最後だね」

「え、なんで？」

圭介が、不思議そうな顔をした。

「だって、来年には、赤ちゃん…」

「あ、そっか。3人になるのか！」

圭介は、思い切り嬉しそうに微笑んだ。

大晦日には、年越しそばを食べながら、紅白歌合戦をこたつにはいつて二人で見た。そのあとの、除夜の鐘の音も聞いた。

年が明けてから、お互いの家に挨拶に行った。みんなで、おとそを飲み、陽気に過ごした。

圭介のお母さんは、

「まさか、こんなお正月が迎えられるなんて…」

と、泣いていた。圭介のお母さんは泣き虫になった。というよりも、とても、感情を表に出す、感情豊かな人になった。

うちの実家に行くと、おなかの大きい、美樹さんも緑ちゃんと来ていた。緑ちゃんはどうかやら、圭介のことがお気に入りらしく、まとわりついていた。

柚ちゃんもお正月の挨拶に来た。なんと、6月に修二と結婚する。私たちを見ていて、結婚がしたくなったようだ。

それから、圭介と近くの神社に初詣に行き、安産のお守りを買った。

2月、静岡で桐子が結婚をした。

私は、大きなおなかで圭介と結婚式に出席をした。桐子は白無垢、だんなさんは羽織袴だった。それを見た圭介は、

「瑞希の白無垢も見たいな〜。もう一回結婚式しない?」

と、冗談を言った。う〜ん、実は私も圭介の羽織袴姿見たいなつて、思っただよね。

桐子は私と圭介がお祝いを言いに行くと、私たちを見て、涙ぐんだ。

「圭介君と二人で、式に来てくれるなんて…。すごく嬉しいよ。ありがとう…」

そして、私と抱き合った。

圭介は、何回か、私の検診についてきた。エコーを見て、赤ちゃんの心臓が動いているのを見たときには、涙ぐみながら、

「すげえ、生きてる、心臓がちゃんと動いてる!」

と、感動していた。

圭介は、検診のたび、喜んだり感動するので、産婦人科の先生や助産婦さん、看護師さんに名前や顔を覚えられていた。そして、あ

の持ち前の人懐こさで、みんなと仲良くなっていた。

3月には、性別がわかるので知りたいですか？と先生から言われたが、二人とも、生まれるまでの楽しみにしていたくて、断った。私は、その頃、貧血だから、注意をしてくださいと言われていて、よく、二人で近くの中華料理屋さんに行き、レバニラを食べていた。ある日、混んでいてカウンターしかあいていないので、大きなおなかで、よっこらしよと座って食べていると、隣に座ったおじさんが、カウンターのの中のお店のおばさんと話しているのが、つい耳に入った。

圭介は、食べるとき無心で食べるので、聞いていたのかわからなかったが、私はお箸を止めて、つい、聞き入ってしまった。

「家にいるとテレビばかりを観ちゃってね……」

と言うおばさんに対して、そのおじさんは、

「僕はね、ラジオをよく聞くんだよ。この前もね、面白い話をしていた」

と、語りだした。

「ある作家さんがゲストで出ててね。あるとき、自分は癌で、余命数ヶ月と告げられて、それから、自分の思いを文章に書き、死を受け止めたらしいんだ。そうしたら、それから世界がまるで、変わってしまったって言うてたよ。見るものが、すべてきらきらして、ああ、空ってこんなに美しかったかなとか、木って、こんなに綺麗だったかなとかね」

「へへへ。もう、あとわずかの命って思ったら、どんなものにも感動するようになったのかしらね」

「そうだね。きつと、そうだ」

「でも、それは作家さんだから。ふつうはなかなか、思えないでしょう」

「うん、いっぱい自分の思いを文章に、書いたんだろうね」

「それで、その人、生きててラジオに出てたんでしょう」

「そうそう、癌が消えちゃって、あるとき病院に行ったら、誤診で死んで。それからずっと、元気らしいよ。」

「へええ。そんなこともあるのね〜」

話を聞きながら、私は去年の夏、圭介と毎日、見るもの見るものに感動していたのを思い出した。

そして、その前に、ああ、そうだ。二人で、死を怖がって、泣いたっけな。それから、自分たちの思いを吐き出したっけ…。そんなことを思い出していた。

中華料理屋を出ると、圭介は、

「さっきの、隣に座ってたおじさんの話、聞いてた？」
と、私に、聞いてきた。

「うん、圭介も聞いてたの？」

「うん…。なんか、その作家の言ってること、わかるなって思ったよ」

「うん。私も。聞いてて、去年のことを思い出した」

「俺たちも、いっぱい泣いたりしたね。感情出してさ」

「うん」

「それから、死ぬってことを受け止めて、毎日を大事に生きはじめて、瑞希と毎日、毎日、感動してた」

「うん…」

「見るもの全部に、感動したよね…」

「ふふ…。今でもでしょ？食べるのも、いつも味わってるよね」

「だって、もったいないじゃん、味あわなくちゃ。今をしっかりと、味あわなくちゃさ」

「うん…」

それから、手をつないで、ぶらぶら歩いた。

「瑞希と会ってから、1年たったね」

「1年しかたつてない？もう何年も前から、ずっと隣にいるみたいだけだな」

「いたのかも」

「え？」

「生まれる前からとか、ずっと…」

「ふふ。そうだね。」

「もう、こうやって一緒になる運命だったんだよ」

「うん」

4月。満開の桜を近くの公園に行き、二人で見た。

圭介はよく、私のおなかに向かって話しかけた。どんなに桜が綺麗なのか、どんなふうに風に吹かれて散っていくのか…。

木に咲いている桜だけでなく、圭介は風で散っていく桜も好きだった。根っこの方に小さな桜の花が咲いているのを見つけて、

「おお、すげえ。こんなところでも、咲いてんじゃん。すげえな〜。上ばかり見てたら、気づけなかったな」

と、そんなことを言っていた。

圭介といると、本当にいろんなものを発見でき、そして、なんにでも感動できた。

時々、公園に行くと、しばらく二人で黙って、風を感じ、匂いをかぎ、空に浮かぶ雲を見た。

木々の間からきらきらと光る木漏れ日や、ちよつとずつ芽吹く枝の若い葉っぱや…。草の間にこっそり生えている、かわいらしい花や、その周りを飛ぶ、小さな虫たちや…。公園で遊ぶ、子供たちの笑い声。

それら、すべてを感じ取り、満喫した。そして、圭介は感じたことを、時々私のおなかに手を当てて、おなかの赤ちゃんに話していた。

「聞こえた？今の風の音。それから、子供たちの笑い声。早く出て

きて、一緒に遊ぼうな…」

そのときの、圭介の顔はこのうえもなく幸せそうだった。会えないかもしれないなかったわが子に会える、そんな喜びをかみしめているように見えた。

圭介の声を聞くたび、おなかの赤ちゃんが反応した。足を動かして、答えているかのようにだった。

「すげえ、今動いたよね！」

足の裏の形がわかるくらいに、おなかの赤ちゃんは元気に動いた。圭介に、見て見てっっておなかを見せると、赤ちゃんの足にさわり、すげえ、すげえって圭介は感動していた。

「生きてるんだよな、すげえな。瑞希のおなかの中でさ。ああ、なんかずるいよな…」

「え？何が？」

「だって、瑞希は今も、赤ちゃんといつも一緒じゃん。いろんなものを一緒に見たり感じたり、それをいっつも一緒にできるんだろ？」

おなかを触って、私もよく話しかけていた。特にお風呂に入るときには、いっぱい話しかけていたので、それを知っている圭介は、やきもちを妬いたのかな？

「もつと、でかい風呂なら、3人一緒に入れるのに！」

「3人？」

「俺と、瑞希とおなかの赤ちゃんと。だって、瑞希お風呂でよく、話してるじゃん、赤ちゃん…」

「生まれたら、いっつもお風呂は圭介に任せるから。そうしたら、赤ちゃんを入れるじゃない。もうちよつとの辛抱だよ」

「ええ？瑞希も一緒に入れる？そんなとき」

「入れないって…。だから、圭介と赤ちゃんで…」

「なんでえ…。あゝあ…」

そう言つと圭介は、ほんの少しふてくされた。

その分、圭介は、寝るときに、いっぱいおなかの子に話しかけていた。早々絵本まで買い込み、絵本まで読んであげるといふ、本当に子煩悩なパパをすでに、發揮していた。

でも、やっぱり圭介も私も、今という時間を楽しんでいた。

そして、5月。

きらきらと木々が芽吹く季節。

爽太が生まれた…。

「ねえ、圭介、私が願っていたこと、次々と叶ってたよ。いつの間にか知らぬ間に…」

「うん」

圭介は、爽太に指を握られたまま、私の話に耳を傾けた。私も、ベビーベッドに寝ている爽太の顔を覗き込んだ。

「ほら、無理やり圭介に治って欲しくて、未来をイメージしたでしょう。あの時、私、圭介と紅葉を見て、クリスマスを過ごして、初詣に行つて、桐子の結婚式に出てつて、イメージしてた…」

「ああ、そんなこと言ってたこともあったね」

「それ、全部叶ってるよね」

「はは、デイズニールランドはまだ行つてないから、今年の冬に爽太も連れて行こうか？」

「爽太連れていくなら、もっとあつたかい時がいいな」

「うん」

圭介は、まだ爽太の顔を愛しそうに見ていた。

「それとね、圭介には言わなかったけど、圭介とこつやって一緒に暮らすのも、圭介のお弁当を毎日作るのも、一緒にご飯食べたり、テレビを観たり、そんなのもイメージしてた」

「ありきたりのことなのにね。それ…」

「うん、でも、私にとっては、すごい夢だったよ」

「うん、俺にとってもそうだったな。思い描くだけでも、辛かったよね」

「うん…」

圭介の肩に頭をくつつけて、続きを話した。

「それから、子供と3人でいるところも、イメージしたことある」「そうなの？」

「うん。3人で、海に行くの」

「ああ、いいね。俺もそれしたいや。あ、そのときには、クロも一緒に」

「うん…」

なんだか不思議だった。今は、そういう未来のことを思っても、当たり前前に叶うような気になっている。だけど、

「でもね、圭介…」

「ん？」

「私ね、未来に、こういうことしたいって思っても、でも、今が1番大事」

「うん」

「こうやって、圭介のあったかい空気を感じているのが、すごく幸せ。今、目の前にいる圭介や、爽太を見ているのが、すごく幸せ。今、目の前にある風景がとっても、とっても愛しいんだ」

「俺も…」

圭介は、そう言うと、私にキスをした。

「ずっと、ずっと、この瞬間を大事にするよ。今に俺たちは生きてるんだもん。ね」

「うん！」

1年後…。

ワンワンって喜びながら、浜辺を走るクロと、圭介。半分びしょぬれだ。それを私は眺めていた。爽太は、さつきから、砂遊びに夢中。

「瑞希、水ちょうだい」

圭介が息を切らして、こっちに来了。クロもハアハアいつてる。

圭介に水のペットボトルを渡して、クロにも、お皿に水を入れてあげた。

圭介がゴクゴクって水を飲んだ。ああ、あいかわらず、水を飲む姿まで、さまになってるよな〜。

そんなことを思いながら、圭介の動くのどぼとけに見とれていた。「ああ、うめえ！」

って、口からこぼれた水を腕で、ぬぐう。そんな姿もかっこいい…。

見とれている私の足元で、砂遊びをしている爽太を、圭介が抱き上げて海のほうに歩いていった。そして、高い高いって、青空高く、ほおってから抱きとめ、

「きゃっきゃ！」

と、喜ぶ爽太のほっぺにキスをした。

「どうだ、爽太、空がすんごく綺麗だろ。それに見てみるよ。海もでっかくって、すんごい綺麗だろ？」

圭介がそう言うのと、爽太はわかつているのか、うんうんとうなずいた。

「爽太、世界っていうのはさ、すばらしいだろ？生まれてきて、良かっただろ？」

「うんうん」

爽太は、圭介に抱っこをされて、嬉しそうだった。爽太は本当に、パパが大好きだ。

クロが、圭介の足元にじゃれついた。爽太は、クロの方を見て、にこにこした。爽太はクロが大好きだ。そして、クロも爽太が大好

きだ。

私も、圭介のとなりにいった。爽太が、私を見て、またニコニコ微笑んだ。そう、爽太は、ママのことも大好きだ。そして、ママも、爽太が大、大、大好きだ。

爽太、君はこうやっていてだけで、みんなを幸せにしてくれるね。爽太を抱っこした圭介と、クロと一緒に大きな海を見ながら、私はつぶやいた。

「圭介、また、一つ夢が叶ってるね」
「うん。叶ってるね」

圭介の肩にもたれて、圭介と、爽太のあったかい空気に包まれる。こうやって、きつとずっと私は、圭介のあったかさを感じていくんだろうな。

そんなことをふと思ったが、すぐに今、目の前の風景を感じ、この瞬間をぎゅうって、私は大事にかみしめた。

エピローグ

ありがとう。圭介。

あなたと出会って、いろんなことがあったけど、

どれもこれも、輝く宝物になった。

今に生きること、この一瞬の輝きを、あなたに教えてもらった。

どんなあなたも、あなたの存在すべてを愛してる。

今、このときを、愛してる。

生まれてきたことにも、生きていることにも、

私が今、ここに存在していることにも、感謝してる。

そして私は、毎日、あなたにこれからも、見とれちゃうんだろう
な。。。。

圭介は、それに気づいて、

「瑞希は、俺にべたばれたから、まいっちゃうよな」

って、そう言って、また、耳を赤くして照れるんだろうな。

ずっつと、ずっつと、愛してるよ。

そして、今、この瞬間も愛してるよ。

くおわりく

エピローグ（後書き）

最後まで読んでいただき、ありがとうございました。

感想をいただけると、嬉しいです。

圭介が主人公のストーリー、「愛する君へ」もよかったら読んでみてください。

読んでくださったみなさまも、今この瞬間、幸せでありますように。
・
・
・

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1092i/>

今 このときを 愛してる

2011年7月30日03時20分発行